

財大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第39集

中之社遺跡他

発掘調査報告書

主要地方道岸和田・牛滝山・貝塚線建設に伴う発掘調査報告書

1999年2月

財団法人 大阪府文化財調査研究センター

(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第39集

中之社遺跡他

発掘調査報告書

主要地方道岸和田・牛滝山・貝塚線建設に伴う発掘調査報告書

1999年2月

財団法人 大阪府文化財調査研究センター

序 文

主要地方道岸和田・牛滝山・貝塚線建設に先だって昭和58年に発掘・分布調査がおこなわれました。その結果、路線には16箇所の遺跡が連続して所在していることが明らかになり、16年にわたって順次発掘調査を行ってきました。これらの調査は、結果として葛城山から流れる牛滝川によって開析された山直谷を縦断して行われることになり、山直谷における開発過程を考える上で非常に興味深い成果が上げられています。

このように1つの谷を谷筋にそって開口部から奥部にかけて連続して調査が行われたことは類例が少なく、特に和泉地域一帯はこのような開析谷が多く存在しており、それらの状況を考える上でも非常に貴重な成果と言えます。

中之社遺跡、宮の後遺跡はこれらの一連の調査の中で、最も谷の奥部に当たります。今回の調査では、平安時代から鎌倉時代の集落が検出されました。

山直谷は平野部に見られる条里地割とは別に、地形に沿った小規模な条里型地割がみられます。谷入口部にあたる三田町から山直中町にかけては山直条里が、積川町から内畑町にかけては積川条里がそれぞれ残存しています。今回の調査地はそれらの地割の変換地点にあたり、条里施行時期について考える上で、興味深い成果がありました。

また、縄文時代後期を中心とした遺構、遺物がみることができ、周辺に縄文時代の集落が存在していることを示唆することができました。

最後になりましたが、本調査を実施するにあたっては大阪府教育委員会、大阪府土木部岸和田土木事務所、地元自治会、地権者の方々をはじめとする関係者各位に多大なご支援とご協力を賜わり深く感謝申し上げますとともに、今後とも当センターへのご支援を賜わるようお願い申し上げます。

平成11年2月

財団法人 大阪府文化財調査研究センター
理事長 坪井清足

例 言

1. 本書は、主要地方道岸和田・牛滝山・貝塚線建設予定地内のうち、岸和田市積川町に所在する中之社遺跡の平成9・10年度の発掘調査報告書である。
2. 調査は、大阪府土木部岸和田土木事務所の委託を受け、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもとに、財団法人大阪府文化財調査研究センターが実施した。
3. 調査は、平成9・10年度に財団法人大阪府文化財調査研究センター南部調査事務所調査第1係が実施し、現地調査期間及び担当者は以下のとおりである。

☆平成9年度 南部調査事務所調査第1係 係長 小林義孝

中之社その1	1997年4月8日～6月30日	調査面積3100m
	技師 田中龍男・若林幸子・島崎久恵・後川恵太郎	
中之社その2	1997年4月21日～11月14日	調査面積5560m
	技師 田中龍男・島崎久恵	

☆平成10年度 南部調査事務所調査第1係 係長 松岡良憲

中之社その3	1998年5月26日～7月24日	調査面積590m
	技師 田中龍男・島崎久恵	

4. 整理事業は、当センター南部調査事務所にて1998（平成10）年8月3日～1999（平成11）年2月26日にすべての業務を完了した。
5. 平成9年度に実施した「中之社その1」は、大阪府教育委員会が1996（平成8）年3月に刊行した「大阪府文化財分布図」によると、宮の後遺跡内に位置しているのが整理作業時点で判明した。今後、近辺の調査で混乱を招かないために本報告書では宮の後遺跡として報告することとした。
6. 調査の実施にあたっては関係諸機関をはじめ、以下の方々から多大なご教示ならびに資料提供などを得、また当センター職員の協力を得た。記して感謝の意を表する。（敬称略・順不同）
近藤利由・虎間英喜・長谷川智子（岸和田市教育委員会）、岸和田市積川町自治会、積川延雄（積川神社宮司）、前田洋子（大阪市立博物館）、大野 薫・尾上 実（大阪府教育委員会）、鋤柄俊夫・駒井正明（当センター職員）、広瀬和雄（奈良女子大学教授）、岡田憲一（奈良大学大学院生）、桑野一幸（柏原市立歴史資料館）、宮後晴壽

7. 現地調査及び報告書作成作業では、平山太郎・樋口順子・地徳由紀恵・中山由佳理・今橋朱美・立石京子の協力を得た。
8. 本書で用いた遺構写真については各調査担当者がおこない、遺物の撮影・焼き付けについては主任技師立花正治・加茂幸彦・久禮孝志が担当した。
9. 本書の執筆・図版作成は、宮の後遺跡を若林が担当し、一部島崎が担当した。また、中之社その2・3は島崎が担当し、一部を田中が補助した。編集は田中・島崎が共同で担当した。
10. 調査・整理作業で収集・作成した資料は、すべて当センターで保管している。広く活用されることを希望する。

凡 例

1. 本書に掲載した地形図・遺構実測図・その他の図に付された方位は、すべて座標北を示している。
2. 現地調査及び本書で使用している地区割り方法は、当センターが国土座標第6系を基準に設置したものである。また、レベル高は東京湾標準水位のT.P.+の数値を使用した。
3. 本書で使用した土壌色の記述は、小川正忠・竹原秀雄『新版標準土色帖第15版』1995年版を使用した。
4. 写真図版の遺物番号は実測図版と同一番号である。

中之社遺跡他発掘調査報告書目次

序文	
例言	
凡例	
目次	
第1章 経緯と方法	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法	2
第2章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 宮の後遺跡	6
第1節 基本層序	6
第2節 調査成果の概要	11
(1) 1区、その2－5区	11
(2) 2区	17
(3) 3区	37
第3節 遺物	39
(1) 包含層出土遺物	39
(2) 石器	39
第4節 まとめ	42
第4章 中之社遺跡	45
第1節 基本層序	45
第2節 調査成果の概要	50
(1) 1区	50
(2) 2区	50
(3) 3区	63
(4) 4区	67
第3節 遺物	79
(1) 包含層出土遺物	79
(2) 銭貨	82
(3) 弥生・縄文土器	83
(4) 石製品・石器	87
第4節 まとめ	101
第5章 まとめ	102
観察表・集計表	111

付章1 積川神社出土遺物について	117
付章2 サヌカイトの分析について	129

挿 図 目 次

図1 調査位置図

図2 地区全体図

図3 周辺遺跡分布図

宮の後遺跡

図4 宮の後遺跡地区割図

図5 土層観察用断面 1、2

図6 土層観察用断面 3、4

図7 1区2層上面遺構配置図

図8 1区・5区・拡張区基盤層上面遺構配置図

図9 土層観察用断面 5

図10 1区ピット出土遺物

図11 1区ピット断面図

図12 溝1遺物出土状況図

図13 溝1断面図

図14 溝1出土遺物(1)

図15 溝1出土遺物(2)

図16 1区溝出土遺物

図17 2区遺構配置図

図18 建物跡1平・断面図

図19 建物跡2平・断面図

図20 建物跡3平・断面図

図21 建物跡4平・断面図

図22 建物跡5平・断面図

図23 建物跡6平・断面図

図24 建物跡7平・断面図

図25 建物跡8平・断面図

図26 建物跡9平・断面図

図27 建物跡出土遺物

図28 2区ピット、土坑平・断面図

図29 2区ピット、土坑出土遺物

図30 建物模式図(1)

図31 建物模式図(2)

図32 2区その他ピット断面図

図33 2区その他ピット出土遺物

図34 2区溝出土遺物

図35 3区遺構配置図

図36 土坑377平・断面図

図37 土坑377出土遺物

図38 土坑427出土遺物

図39 包含層出土遺物

図40 出土石器(1)

図41 出土石器(2)

中之社遺跡

図42 中之社遺跡地区割図

図43 1区土層断面図

図44 2区土層断面図

図45 3区土層断面図

図46 4区土層断面図

図47 1区基盤層上面遺構配置図

図48 2区3層上面遺構配置図

図49 2区4層上面遺構配置図

図50 2区基盤層上面遺構配置図

図51 溝2-1・2-34出土遺物

図52 ピット2-137・土坑2-50・2-55
2-310平・断面図

図53 土坑2-310出土遺物

図54 土坑2-50出土遺物

図55 2区遺構出土遺物

図56 土坑2-224平・断面図、出土遺物

図57 3区4層上面遺構配置図

図58 3区基盤層上面遺構配置図

図59 土坑3-2-372平・断面図、出土遺物

図60 4区3層上面遺構配置図

- 図61 4区4層上面遺構配置図
 図62 4区基盤層上面遺構配置図
 図63 建物跡1平・断面図
 図64 建物跡2平・断面図
 図65 建物跡3、杭列1平・断面図
 図66 建物跡4平・断面図
 図67 建物跡模式図
 図68 ピット4-2-27平・断面図、
 ピット4-1-116立面図
 図69 建物跡、ピット、溝出土遺物
 図70 4区流路出土遺物
 図71 土坑4-2-459、4-2-192
 平・断面図、出土遺物
 図72 土坑4-2-195平・断面図、出土遺物、
 土坑4-2-196断面図
 図73 1区包含層出土遺物
 図74 2区包含層出土遺物
 図75 3区・4区包含層出土遺物
 図76 出土銭貨
 図77 弥生・縄文土器(1)
 図78 縄文土器(1)
 図79 縄文土器(2)
 図80 弥生・縄文土器(2)
 図81 出土石製品 砥石
 図82 出土石器(1) 敲石、石皿
 図83 出土石器(2) 石鏃
 図84 出土石器(3) 石鏃、石錐、彫器
 図85 出土石器(4) 楔形石器、石槍他
 図86 出土石器(5) 石匙、スクレーパー
 図87 出土石器(6) スクレーパー、
 二次加工のある剥片
 図88 出土石器(7) 二次加工のある剥片、
 剥片
 図89 出土石器(8) 剥片、石核
 図90 出土石器(9) 石核
 図91 変遷図
 図92 製品法量分布図・度数グラフ
 図93 剥片、二次加工のある剥片、
 石核法量分布図・度数グラフ

表 目 次

- 表1 出土地別集計表
 表2 種類別集計表
 表3 石鏃計測表
 表4 石錐計測表
 表5 楔形石器計測表
 表6 スクレーパー計測表
 表7 石槍他計測表
 表8 二次加工のある剥片計測表(1)
 表9 二次加工のある剥片計測表(2)
 表10 剥片計測表
 表11 石核計測表
 表12 二次加工のある剥片集計表
 表13 剥片集計表
 表14 石核集計表

付章 挿図目次

- 図1 積川神社出土軒丸瓦(1)
 図2 積川神社出土軒丸瓦(2)
 図3 積川神社出土軒平瓦
 図4 積川神社出土平・鬼瓦
 図5 その他の軒瓦
 図6 積川神社出土土器(1)
 図7 積川神社出土土器(2)

図8 サヌカイト及びサヌカイト様岩石の原産地

表1-1 各サヌカイトの原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値

表1-2 各サヌカイトの原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値

表1-3 原産地不明の組成のいた遺物で作られた遺物群の元素比の平均値と標準偏差値

表2 岩屋原産地からのサヌカイト原石66個の分類結果

表3 和泉・岸和田原産地からのサヌカイト原石72個の分類結果

表4 和歌山市梅原原産地からのサヌカイト原石21個の分類結果

表5 中之社遺跡出土サヌカイト製遺物の元素比分析結果

表6-1 中之社遺跡出土のサヌカイト製遺物の原産地推定結果

表6-2 中之社遺跡出土のサヌカイト製遺物の原産地推定結果

図版目次

図版1	宮の後遺跡	全景	図版22	中之社遺跡	出土遺物(4)
図版2	宮の後遺跡	1区・2区遺構	図版23	中之社遺跡	出土遺物(5)
図版3	宮の後遺跡	2区遺構	図版24	中之社遺跡	出土遺物(6)
図版4	宮の後遺跡	3区遺構			弥生・縄文土器
図版5	中之社遺跡	1区・3区遺構	図版25	中之社遺跡	出土遺物(7) 縄文土器
図版6	中之社遺跡	2区遺構(1)	図版26	中之社遺跡	出土遺物(8)
図版7	中之社遺跡	2区遺構(2)			銭貨・石製品・石器
図版8	中之社遺跡	3区遺構(1)	図版27	中之社遺跡	出土遺物(9) 石器
図版9	中之社遺跡	3区遺構(2)	図版28	中之社遺跡	出土遺物(10) 石器
図版10	中之社遺跡	4区遺構(1)	図版29	中之社遺跡	出土遺物(11) 石器
図版11	中之社遺跡	4区遺構(2)	図版30	中之社遺跡	出土遺物(12) 石器
図版12	中之社遺跡	4区遺構(3)	図版31	中之社遺跡	出土遺物(13) 石器
図版13	宮の後遺跡	出土遺物(1)	図版32	中之社遺跡	出土遺物(14) 石器
図版14	宮の後遺跡	出土遺物(2)	図版33	中之社遺跡	出土遺物(15) 石器
図版15	宮の後遺跡	出土遺物(3)	図版34	中之社遺跡	出土遺物(16) 石器
図版16	宮の後遺跡	出土遺物(4)	図版35	積川神社出土遺物(1)	軒丸瓦
図版17	宮の後遺跡	出土遺物(5)	図版36	積川神社出土遺物(2)	
図版18	宮の後遺跡	出土遺物(6) 石器			軒平瓦・鬼瓦・平瓦・その他の瓦
図版19	中之社遺跡	出土遺物(1)	図版37	積川神社出土遺物(3)	土器
図版20	中之社遺跡	出土遺物(2)	図版38	積川神社出土遺物(4)	土器
図版21	中之社遺跡	出土遺物(3)	図版39	積川神社出土遺物(5)	土器

第1章 経緯と方法

第1節 調査に至る経緯

中之社・宮の後遺跡の両遺跡は大阪府岸和田市積川町に所在している。

昭和58年に主要地方道岸和田・牛滝山・貝塚線（府道磯之上山直線）建設に先だって、計画ルート内の遺跡確認を目的とした分布調査が実施された。分布調査は岸和田市箕土路町より同市積川町までの全長約6 kmで実施され、両遺跡はこの分布調査によって発見された遺跡である。

今回、建設予定地内のうち、大阪外環状線との接続地点にあたる中之社遺跡で工事着工が具体化したため、大阪府教育委員会によって1996（平成8）年11月18日～12月3日にかけて試掘調査が実施された。

試掘調査の結果、道路建設予定地内のほぼ全体で遺物が出土し、一部で遺構が確認された。それを受けて大阪府教育委員会と大阪府土木部が協議し、予定地内を全面発掘調査する事で合意した。発掘調査は大阪府教育委員会の指導のもとに、財団法人大阪府文化財調査研究センターが大阪府土木部の委託を受けて実施することとなった。

本報告書作成段階で、中之社その1として調査が発注された地点は、「大阪府文化財分布図」によると「宮の後遺跡」内に位置することが判明した。調査担当者と協議し、今後の近隣での調査時に混乱を避けるために、本報告書は「中之社遺跡他発掘調査報告書」とし、両遺跡に分けて報告することとした。

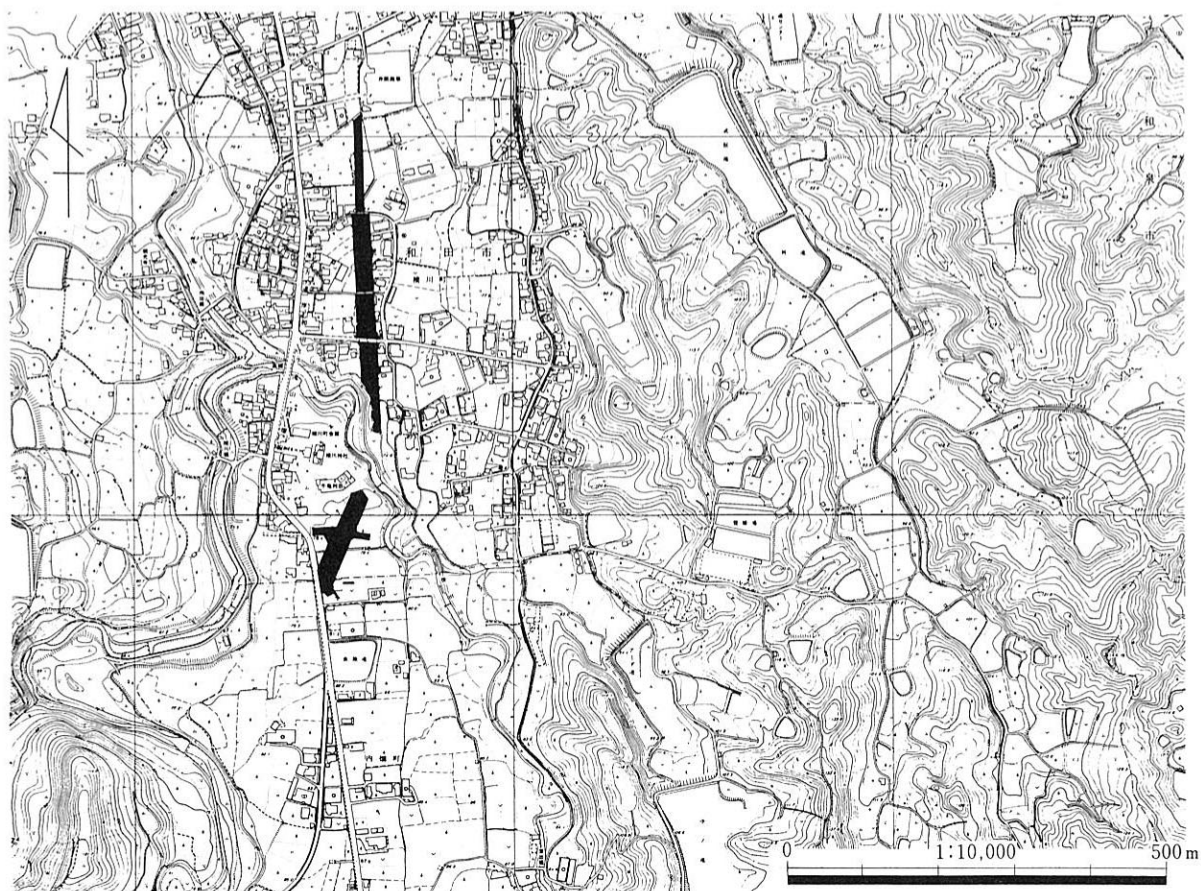


図1 調査位置図

第2節 調査の方法

本書は平成9年度から平成10年度の2カ年にわたり、中之社遺跡（その1）～（その3）として調査を行った報告である。（その1）の調査区は大阪外環状線との接合部にあたる。（その2）の調査区は（その1）の北側を流れる宮川と土井ノ木遺跡の間に位置する。（その3）の調査区は（その2）の調査区内に位置する。（その1）は1～3区、（その2）は1から5区、及び拡張区と調査の便宜上分けている。それぞれの位置は図2を参照されたい。

中之社遺跡（その1）及び、（その2）の5区は第1節で触れたように、宮の後遺跡に含まれるため、その成果は第3章 宮の後遺跡の中で扱う。また、中之社遺跡（その3）の調査については（その2）の3区にまとめて扱うこととした。

調査は現耕作土をバックホーで除去した後、人力掘削によってを行った。

調査区のグリッド配置は第VI座標系をもとに作成された大阪府地域計画図の2500分1を基に設定している。調査区は計画図の「大C-4-15」に含まれる。これらの区画をさらに100m×100mでX軸をAからO、y軸を1から20で表わす。さらにその1区画を10m×10mでx軸をaからj、y軸を1から10で表わす。遺物の取り上げは基本的にこのグリッドを利用して行っている。

検出された遺構の遺構番号は中之社遺跡（その1）（宮の後遺跡）では、遺構の種類にかかわらず、1から通し番号をつけた。中之社遺跡（その2）では各調査区が部分的に並行して行われていたため、調査区ごとに1から通し番号をつけている。したがって、遺構番号の前に調査区の番号をつけて区別した。（調査区の数字-遺構番号）ただし、中之社遺跡（その2）4区は土置き場の都合上2分割して行ったため、それぞれに1から遺構番号がつけられている。それを区別するために、南側を4-1区、北側を4-2区で表わしている。中の社（その3）でも同様に1から通し番号をつけた。（その2）の3区と区別するために本書では、3-2-遺構番号で表記することとする。なお、遺物の登録は（その1）（その2）（その3）でそれぞれ通し番号をつけている。

また、各遺構面の遺構図は主に航空撮影を行い、20分の1、あるいは、50分の1図下を行ったものを基に作成している。

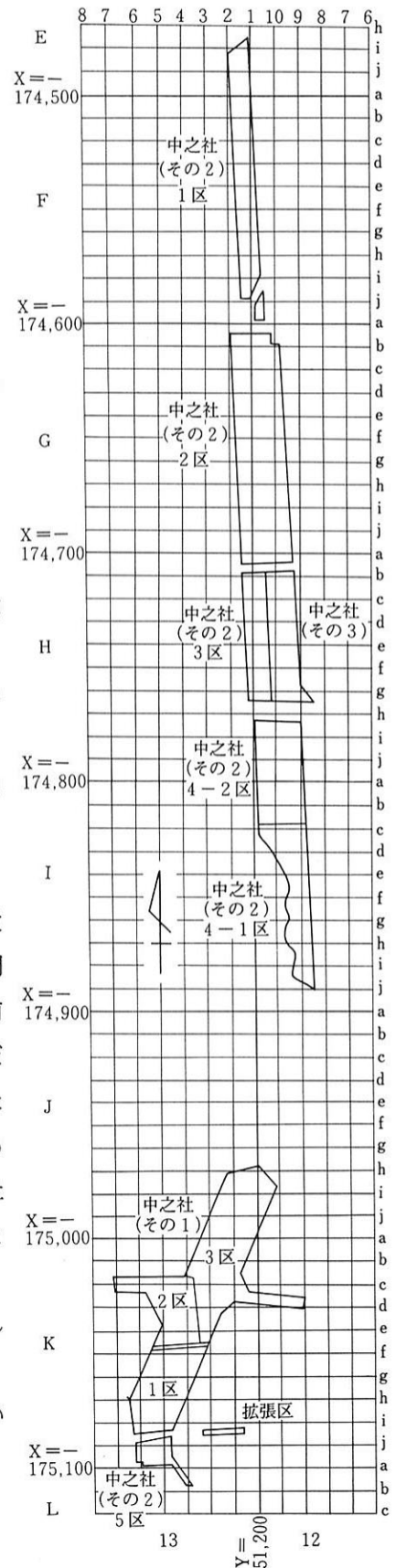


図2 地区全体図

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

宮の後遺跡及び、中之社遺跡は、岸和田市積川町に所在している。和泉地域は南に和泉山脈が連なり、そこから派生する丘陵が発達している。それらの丘陵は山脈から大阪湾に向かって流れる河川及びその支流によって開析され、多くの谷地形を形成している。当遺跡も葛城山を源とする牛滝川によって形成された山直谷の右岸に位置している。調査区は牛滝川とその支流の宮川が合流するところに当たり、宮川を挟んで南側が宮の後遺跡、北側が中之社遺跡である。また段丘上からのびる開析谷が多く見られ、今回の調査でもその痕跡を見ることができた。和泉地域はこのような地形のために開析谷を利用し多くのため池が多くつくられている。積川町でもアミダ池、中ノ池、コイノ池などのため池がみられる。調査区は棚田、みかん畑として利用されていた。

第2節 歴史的環境

山直谷に所在する遺跡は谷を縦断するように調査されており、一連の報告書に詳しい。そこで、ここでは今回の調査で主に関係してくる縄文時代と古代末から中世について記述したい。

岸和田市内の縄文遺跡はその立地から大きく3つに分けられる。^{註1)}1つは砂丘上の遺跡であり、縄文時代中期末、後期～晩期にかけての土器が出土した春木八幡山遺跡^{註2)}が挙げられる。2つには洪積台地や丘陵上に立地するものである。岡山丘陵上の西山遺跡、尾生丘陵上の琴山遺跡などがあげられる。また、河岸段丘上に位置するものも見られる。中之社遺跡もその中にふくめることができよう。山直谷の一連の調査では、山ノ内遺跡^{註3)}、軽部池西遺跡^{註4)}から縄文時代後期を中心にした遺構、遺物が見つっている。軽部池西では流路内より土器が出土している。発掘調査で得られた土器は、ほとんどが流れ込みによるものと考えらる。山ノ内遺跡では特に多数の石器が出土している。土構から石核がまとまって出土しているものもあり、石器の制作を行っていたことが分かる。また、付近にはサヌカイトの原石の散布地として知られるコソ谷がある。しかし、遺構はその密度が低く集落の中心は調査区の東の段丘上、現在の府営田治米団地^{註5)}一带にあると考えられている。その他に上フジ遺跡^{註6)}などでも縄文時代に含まれる遺物が見つっている。3つは標高高くでみられるもので、葛城山頂遺跡で土器片が採集されている。周辺に目を向けると、山直谷の東側に同様に和泉山脈から大阪湾に向かって流れる松尾川が形成した谷地形に万町北遺跡^{註7)}(和泉市)がある。中期末～晩期の土器が出土しており、晩期の甕棺、埋甕が検出されている。槇尾川の支流秩父川流域の横山谷では仏並遺跡^{註8)}で中期末～後期前半の集落の一部が見つっており、早期末～前期初頭の土器も見つっている。その他に山直谷周辺では伯太北遺跡、府中遺跡、和気遺跡、栄の池遺跡などで縄文時代の遺構、遺物がみられる。

古代末から中世にかけては、芝ノ垣外遺跡^{註9)}や山直中遺跡^{註10)}の発掘調査報告書の中で山直谷における遺跡の変遷について詳しく考察されている。それによれば、谷中央部では、8世紀中頃の段階で開発が行われ、10世紀には山直中遺跡、芝ノ垣外遺跡^{註11)}で集落がみられる。しかし、谷開口部では山直北遺跡^{註11)}で大型建物や緑釉香炉を出土しており、この時期の中心は谷開口部にあったと考えられる。11世紀には、芝ノ垣外遺跡^{註11)}でも、3面庇を有する大型の建物がみられ、谷開口部では、三田遺跡^{註11)}で大型の建物を有する集

米田池

11



- | | | | |
|---------------|-----------------|-----------------|-----------|
| 1 中之社遺跡 | 2 宮の後遺跡 | 3 三田遺跡 | 4 上フジ遺跡 |
| 5 二俣池北遺跡 | 6 水込遺跡 | 7 黒石遺跡 | 8 山直中遺跡 |
| 9 芝ノ垣外遺跡 | 10 土井の木遺跡 | 11 久米田池 | 12 岡山狐塚古墳 |
| 13 岡山遺跡 | 14 古銭出土地 | 15 松尾池尻埴輪窯跡 | 16 西山古墳 |
| 17 楠本神社古墳 | 18 高山古墳 | 19 馬塚古墳 | 20 重ノ原遺跡 |
| 21 重ノ原古墳 | 22 黄金塚古墳 | 23 赤山古墳群 | 24 どぞく遺跡 |
| 25 三田墓地 | 26 お立場古墳 | 27 箱谷古墳 | 28 土居城跡 |
| 29 石塚古墳 | 30 稲葉墓地 | 31 稲葉城跡 | 32 具足遺跡 |
| 33 上白原遺跡 | 34 西方寺遺跡 | 35 神於銅鐸出土地 | 36 山直神社本殿 |
| 37 山直墓地 | 38 沢峰遺跡 | 39 和泉丘陵A20 地点遺跡 | 40 三田古墳 |
| 41 和泉丘陵B 2号古墳 | 42 和泉丘陵A15 地点遺跡 | 43 和泉丘陵A54 地点遺跡 | 44 南ノ坊古墳 |
| 45 久井A 3 地点遺跡 | 46 堂ヶ峰廃寺 | 47 神ノ木山遺跡 | 48 伝契沖居住地 |

図3 周辺遺跡分布図

落がみられる。12世紀後半以後、集落は谷開口部ではみられず、谷の中央部に移動するとしている。

また、山直谷右岸には和泉平野部でみられる主条里とは主軸をことにして、狭い谷地形にあわせた地割（山直条里、積川条里）が認められる。^{註13)}山直条里は現在三田町～山直中町まで確認することができ、主軸はN-22°-Wである。これまでの調査で山直条里との関係を示唆するものが検出されている。上フジ遺跡^{註14)}や二俣池北遺跡^{註15)}では地割に平行する溝を検出している。上フジ遺跡の溝は掘削を繰り返しており、時期幅のある遺物が出土している。二俣池北遺跡で検出された溝からは13世紀の遺物が出土している。また、三田遺跡では、11世紀に入って条里と主軸を同じくする建物が現われる。復元された条里の坪境にあたる溝などは確認されていないが、11世紀前半には山直条里の存在が推定することができよう。一方積川条里は今回の調査区を一部含む積川町から内畑にかけて確認することができる。主軸はN-2.5°-Wである。

また、調査区の付近には式内社である積川神社が位置している。さらに谷の奥部には同じく式内社、山直神社があり、転法輪寺跡、大威徳寺などの中世寺院がみられる。

(註)

- 1、『岸和田市史』第1巻 岸和田市史編纂委員会
- 2、『岸和田市春木八幡山遺跡の研究』 岸和田市教育委員会・(財)古代学協会 1965
- 3、『山ノ内遺跡発掘調査報告書』 (財)大阪府埋蔵文化財協会 1988
『山ノ内遺跡B地区・山直北遺跡発掘調査報告書』 (財)大阪府埋蔵文化財協会 1988
- 4、『軽部池西遺跡発掘調査報告書』 (財)大阪府埋蔵文化財協会 1987
- 5、『上フジ遺跡発掘調査報告書』 (財)大阪府埋蔵文化財協会 1988
- 6、『万町北遺跡I』 和泉丘陵内遺跡調査会 1993
- 7、『仏並遺跡発掘調査報告書』 (財)大阪府埋蔵文化財協会 1986
- 8、『芝ノ垣外遺跡II』 (財)大阪府埋蔵文化財協会 1993
- 9、『山直中遺跡II』 (財)大阪府埋蔵文化財協会 1990
- 10、『山ノ内遺跡B地区・山直北遺跡発掘調査報告書』 (財)大阪府埋蔵文化財協会 1988
- 11、『三田遺跡発掘調査報告書』 大阪府教育委員会・(財)大阪府埋蔵文化財協会 1987
- 12、『山直中遺跡発掘調査報告書』 大阪府教育委員会・(財)大阪府埋蔵文化財協会 1988
- 13、『岸和田市史』第2巻 岸和田市史編纂委員会 1987
藤永正明「和泉郡の条里型地割に関する問題点」『大園遺跡発掘調査概要』VII 大阪府教育委員会 1982
- 14、『上フジ遺跡発掘調査報告書』 (財)大阪府埋蔵文化財協会 1988
- 15、『二俣池北遺跡・上フジ遺跡発掘調査報告書』 (財)大阪府埋蔵文化財協会 1989

第3章 宮の後遺跡

第1節 基本層序 (図5、6)

当調査区は、掛田川に向かって落ち込んでいく傾斜地をきりひらいて作った棚田部分に位置している。このような地形変化、ないし土地利用の経緯が基本層序にも反映している。大まかに見ると現代の耕作土と床土—複数の耕作土と床土の互層—基盤層(地山)からなるが、基盤層(地山)と耕作土の間に整地層が堆積する部分も認められた。これらを詳述すると以下のとおりである。

- ・ 1層 現代の耕作土・床土からなる。層厚は約10cm。機械掘削対象層である。
- ・ 2層 耕作土と床土のセットが2～3枚にわたって堆積したもの。層厚は約20cm。各耕作面の時期を決定する遺構は検出されない。近世から中世の土器を含むが磨滅した細片がほとんどである。
- ・ 3層 耕作土・床土と整地層からなる。3区で基盤層上面のレベルが他より低いところで部分的に認められる。層厚は約10cm。2層よりも有機物の混入量が多い。中世の遺物を含む。
- ・ 4層 3区でベース面が溝状の落ちを呈する部分でのみ認められた。遺物をほとんど検出しなかったことから、人為的な造成が始まる以前の自然堆積層である可能性が高い。掛田川に向かって落ち込む傾斜地に形成された開析谷が埋積していく最終段階で谷の末端に残っていた凹地に堆積したものと考えられる。層厚は最大で約20cm。

・ 基盤層(地山)

人為的な土地の改変が行われる以前の段丘堆積層である。1区は黄褐色のシルト層から成るが、2区の西端部と3区では黄褐色のシルト層と暗灰色の礫層が交互に堆積する。礫層は礫の大きさが一定せず、シルト～細砂も混ざり合っていることから、土石流などで急激に押し流されてきたものとみられる。したがって当調査区では、河川の浸食作用を受ける一方で、土石流や地山崩壊土による堆積作用も繰り返し受けたことがうかがえる。中世に開発が本格化した際、平坦地を拓げるために地表面のレベルが高い部分を削平し、その土を低い部分へ盛りつけたと考える。そのためか2区の北半部では踏み込みの痕跡を顕著に認めたが、それ以外の部分では認めなかった。なお当遺跡で検出した主要な遺構はほとんどこの上面で検出した。

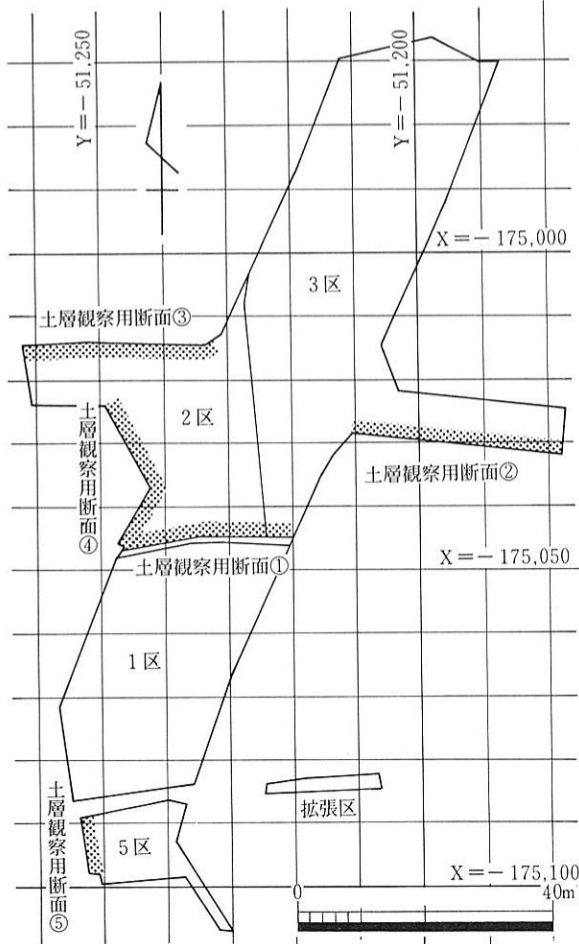


図4 宮の後遺跡地区割図

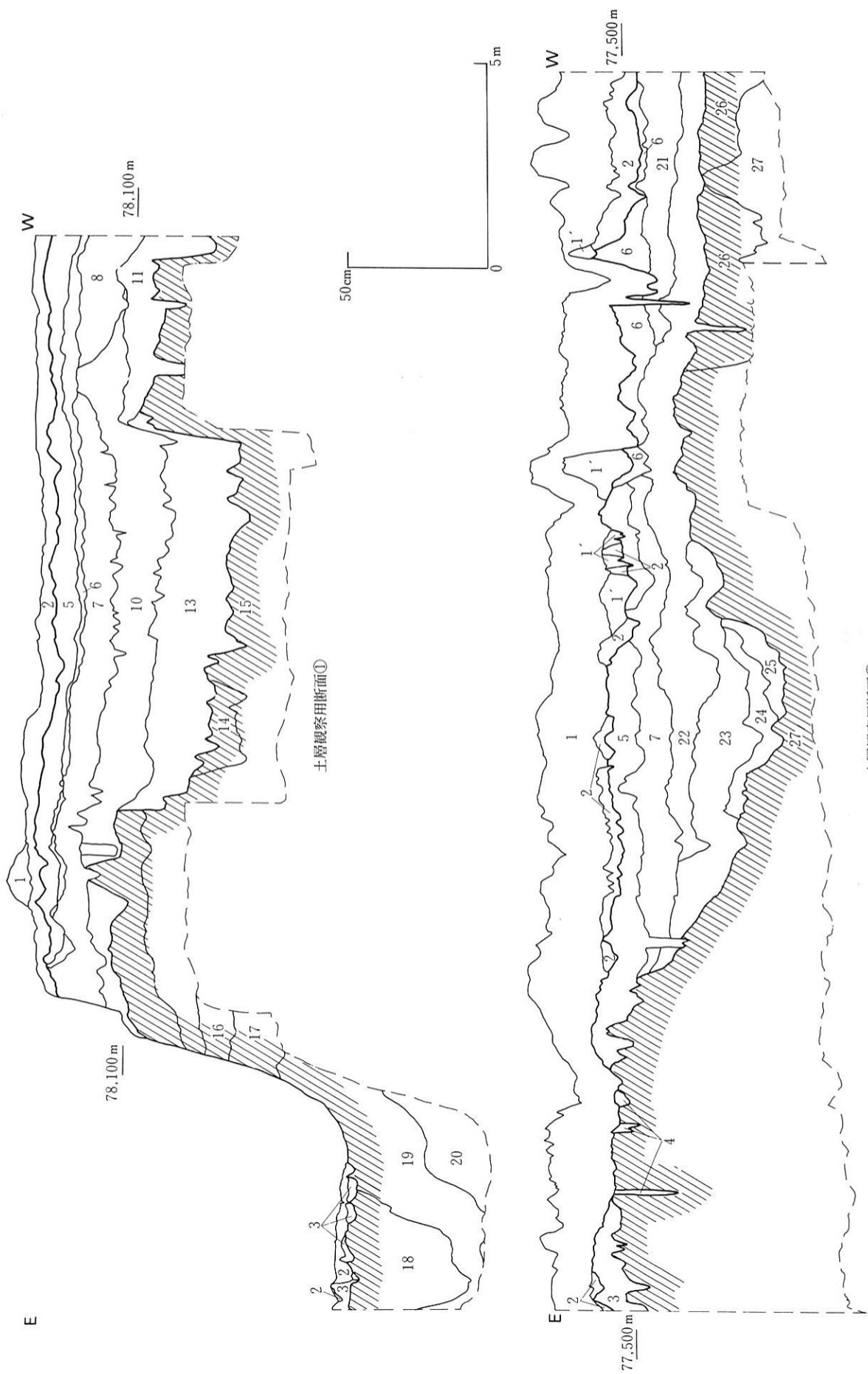


图5 土層観察用断面①、②

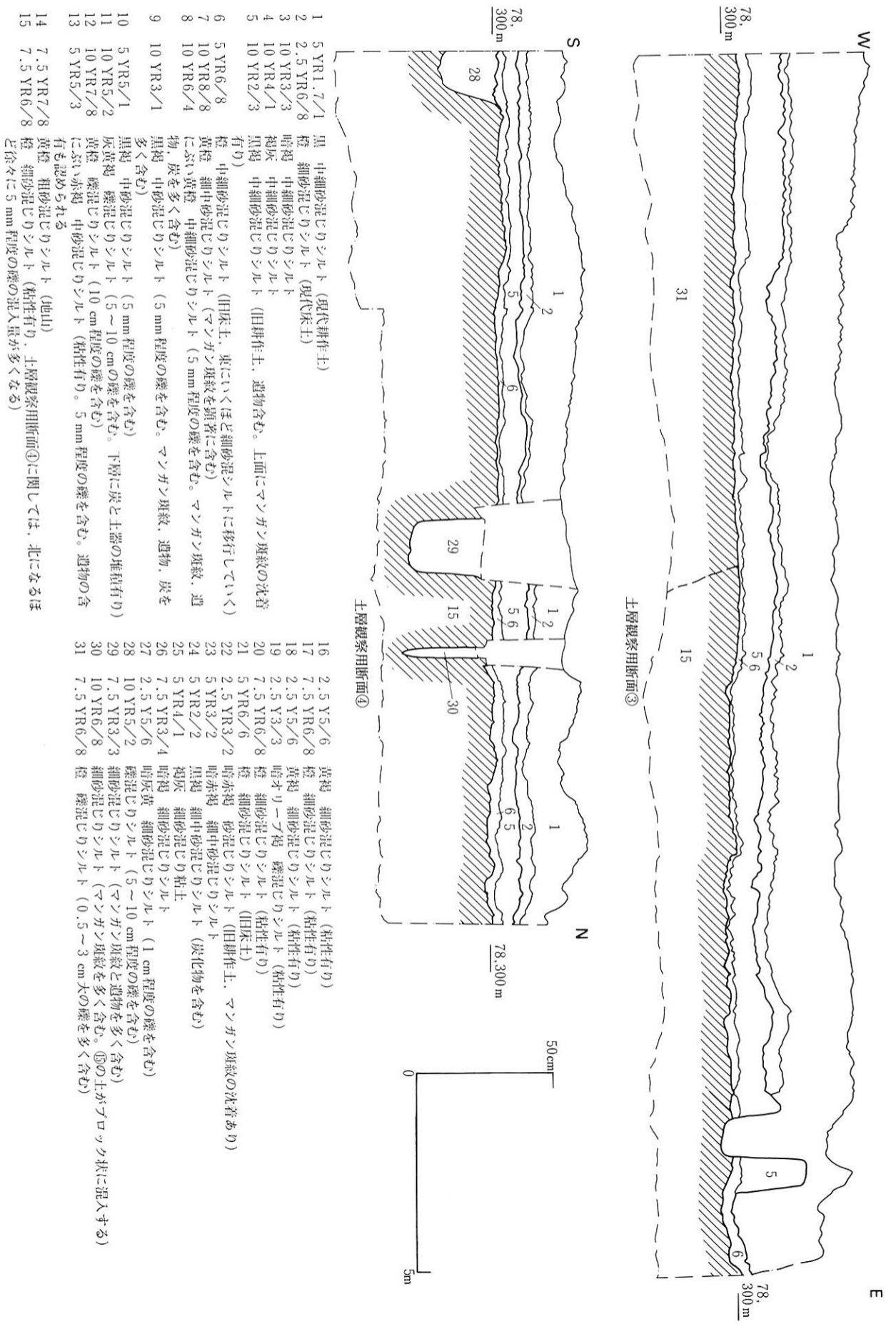


図6 土層観察用断面③、④

- | | |
|---|---|
| <p>1 5 YR1.7/1 黒 中細砂混じりシルト (現代耕作土)</p> <p>2 2.5 YR6/8 橙 細砂混じりシルト (現代耕作土)</p> <p>3 10 YR3/3 暗褐 中細砂混じりシルト</p> <p>4 10 YR4/1 褐灰 中細砂混じりシルト</p> <p>5 10 YR2/3 黒褐 中細砂混じりシルト (旧耕作土、遺物含む。上面にフンガク墳紋の沈着有り)</p> <p>6 5 YR6/8 橙 中細砂混じりシルト (旧床土、東にいくほど細砂混シルトに移行していく)</p> <p>7 10 YR8/8 黒褐 細中砂混じりシルト (フンガク墳紋を顕著に含む)</p> <p>8 10 YR6/4 黄橙 細中砂混じりシルト (5 mm 程度の礫を含む。フンガク墳紋、遺物、炭を多く含む)</p> <p>9 10 YR3/1 黒褐 中砂混じりシルト (5 mm 程度の礫を含む。フンガク墳紋、遺物、炭を多く含む)</p> <p>10 5 YR5/1 多 中砂混じりシルト (5 mm 程度の礫を含む)</p> <p>11 10 YR5/2 灰黄褐 礫混じりシルト (5~10 cm の礫を含む。下層に炭と土器の堆積有り)</p> <p>12 10 YR7/8 黄橙 礫混じりシルト (10 cm 程度の礫を含む)</p> <p>13 5 YR5/3 にぶい赤褐 中砂混じりシルト (粘性有り。5 mm 程度の礫を含む。遺物の含有も認められる)</p> <p>14 7.5 YR7/8 黄橙 粗砂混じりシルト (地山)</p> <p>15 7.5 YR6/8 橙 細砂混じりシルト (粘性有り、土層観察用断面①に関して、北になるほど徐々に5 mm 程度の礫の混入量が多くなる)</p> | <p>16 2.5 Y5/6 黄褐 細砂混じりシルト (粘性有り)</p> <p>17 7.5 YR6/8 橙 細砂混じりシルト (粘性有り)</p> <p>18 2.5 Y5/6 黄褐 細砂混じりシルト (粘性有り)</p> <p>19 2.5 Y3/3 暗オリーブ褐 礫混じりシルト (粘性有り)</p> <p>20 7.5 YR6/8 橙 細砂混じりシルト (粘性有り)</p> <p>21 5 YR6/6 橙 細砂混じりシルト (旧床土)</p> <p>22 2.5 YR3/2 暗赤褐 砂混じりシルト (旧耕作土、フンガク墳紋の沈着あり)</p> <p>23 5 YR3/2 暗赤褐 細中砂混じりシルト</p> <p>24 5 YR2/2 黒褐 細中砂混じりシルト (炭化物を含む)</p> <p>25 5 YR4/1 褐灰 細砂混じり粘土</p> <p>26 7.5 YR3/4 暗褐 細砂混じりシルト</p> <p>27 2.5 Y5/6 暗灰黄 細砂混じりシルト (1 cm 程度の礫を含む)</p> <p>28 10 YR5/2 礫混じりシルト (5~10 cm 程度の礫を含む)</p> <p>29 7.5 YR3/3 細砂混じりシルト (フンガク墳紋と遺物を多く含む)</p> <p>30 10 YR6/8 細砂混じりシルト (フンガク墳紋を多く含む。⑤の土がフロンク状に混入する)</p> <p>31 7.5 YR6/8 橙 礫混じりシルト (0.5~3 cm 程度の礫を多く含む)</p> |
|---|---|

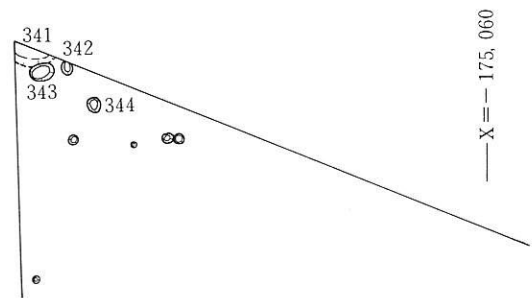


図7 1区2層上面遺構配置図



図8 1区・5区・拡張区基盤層上面遺構配置図

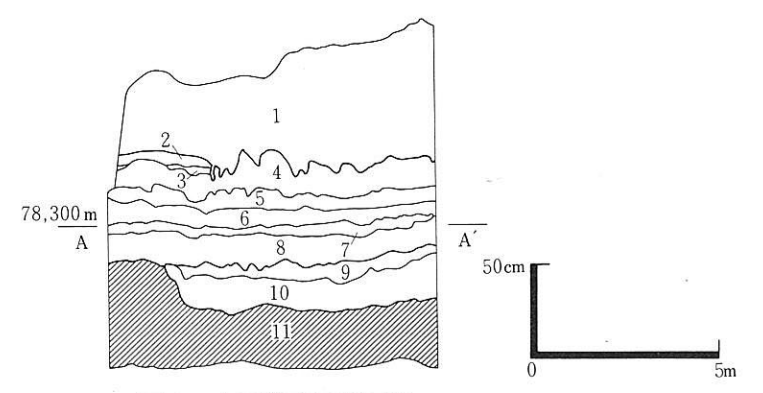
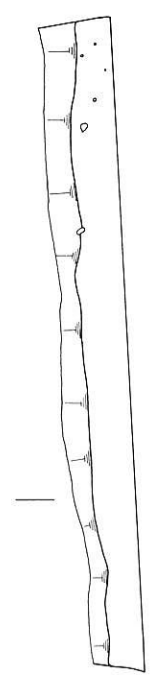
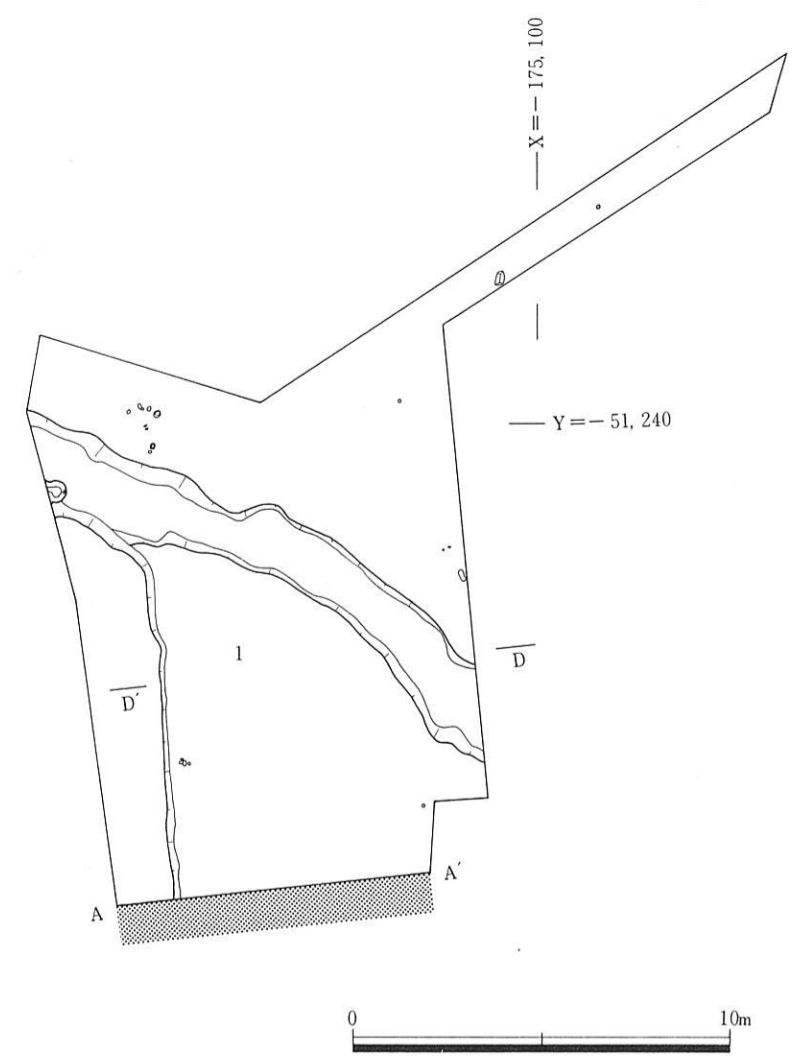


図9 土層観察用断面⑤

- Y=-51,220
- | | | | |
|----|----------|--------|--------------------|
| 1 | 表土 | | |
| 2 | 2.5GY3/1 | 暗オリーブ灰 | シルト混じり細砂(植物遺体との互層) |
| 3 | 5Y6/6 | オリーブ | シルト混じり細砂 |
| 4 | 10Y3/1 | オリーブ黒 | シルト混じり細砂 |
| 5 | 7.5Y6/2 | 灰オリーブ | シルト混じり細砂 |
| 6 | 7.5YR7/8 | 黄橙 | 細砂混じりシルト |
| 7 | 10YR7/8 | 黄橙 | 細砂混じりシルト |
| 8 | 10YR4/1 | 褐灰 | 粗～細砂混じりシルト(砂礫含む) |
| 9 | 10YR5/2 | 灰黄褐 | 砂礫混じりシルト |
| 10 | N4/0 | 灰 | シルト(粘性有り) |
| 11 | 10YR5/2 | 灰黄褐 | シルト(細砂含む)地山 |



第2節 調査成果の概要

当調査区では主に1区・2区で遺構を検出した。それらは牛滝川とその支流にはさまれた段丘上のなかでも、より高所に位置するとみられる。遺構はおおむね10世紀後半から13世紀前半の時期に含まれるが、12世紀中葉の遺構が最も多い。

(1) 1区・その2-5区

大小の溝、ピット、土坑を検出した。南北ないし東西方向を指向し、幅10~30cmできわめて浅い溝を多数検出したが、これらは耕作の際に生じた鋤溝の痕跡と考える。溝1は幅が5m以上で、長期間にわたって掘り直しながら利用されてきたものである。この溝は1区の南端を横切りながら、隣接するその2-5区にも流路が占めるため、両地区の状況を併せてこの節で説明する。

ピットは上段と下段とで若干検出状況が異なる。上段では基盤層の上面でのみピットを検出したのに対し、下段では2層上面と基盤層上面とで検出した。上段で検出したものはいずれも浅く、根石ないし柱痕を確認できるものはなかった。下段では2層上面から焼土坑341と焼土ピットを検出したのに加え、基盤層上面では柱痕や根石が認められるピットを5個検出した。基盤層上面で検出したピットが建物跡の1部であることは明らかだが、水路と調査区境で区切られていて全体の広がりには把握できなかった。

・焼土坑341、焼土ピット342~344 (図10、11)

焼土坑、焼土ピットともに2層上面で検出した。焼土坑341は調査区のコーナーに位置していたため全体の形状は不明である。焼土坑の基底部分のみが残存していたにすぎず、上部構造は後世の削平のため一切不明である。土坑の中心部分はかなりの高温をうけて白っぽく(7.5Y7/3浅黄)焼けしまっている。付近に焼土ピットが近接して存在することから、これらが相互に関連しあっていた可能性は高い。

焼土ピット342~344は、径が約30~50cmで、断面が皿状の浅いピットである。ピット342、343の埋土は5BG2/1、青灰色細粒シルトに赤橙色の焼土塊(径1cm未満)とブロック状の第2層の土が混入する。344は埋土が上下2層に分かれる。上層は2.5Y4/4、細砂混じりシルトで2~3cm大の炭が多く含まれる。下層は2.5Y3/3、細砂混じりシルトで、この層からはほぼ完形の土師小皿が2点出土した。それらは断面の形状が直線的で、底部からの明瞭な立ち上がりは認められない。また口縁部外面を強くヨコナデすることでわずかに屈曲部をつくりだしていることから、12世紀中頃に比定できる。

これらの遺構の具体的な性格は不明であるが、付近の包含層から焼土塊や金属滓が出土していることから、鍛冶関連の遺構と考える。

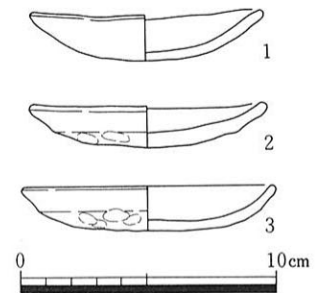
・焼土坑368

上段で検出した。長辺115cm、短辺70cmの方形土坑である。断面形態は皿状で、最深部が10cm弱の極めて浅い土坑である。埋土には炭、焼土が多く含まれていたが、土坑そのものが直接火を受けたような痕跡は認めなかった。埋土中から土師器の細片などをわずかに検出したが、遺構の時期を比定できるものはなかった。

・その他のピット、土坑（図10、11）

1区上段で検出したピット、土坑はいずれも後世の削平が著しいため、基底部がわずかしかなかった。またそれらの位置関係には規則性が認められず、杭列や建物跡を検出することができなかった。埋土から土器の細片を検出したものもあるが、時期を判断できるものはなかった。したがって上段で検出したピットに関しては、個別に詳述することを省きたい。

なお下段の基盤層上面で検出したピットに関しては、柱痕があるものや、根石があるものがあり、建物を構成するピットの一部であると思われる。時期を比例できる遺物はない。



1：ピット4、2～3：ピット344

図10 1区ピット出土遺物

77,900 m

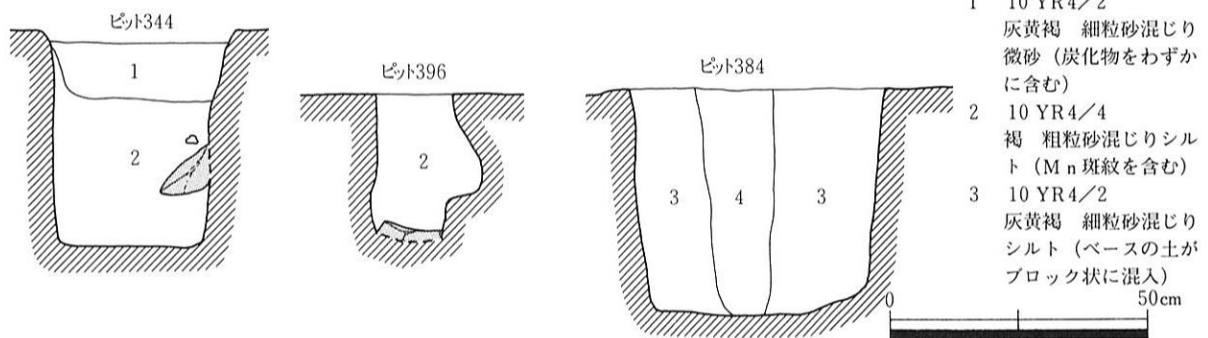


図11 1区ピット断面図

・溝1（図12～15）

1区では溝の北かたはほぼ東西を指向するが、南かたは中程で東西方向から南北方向へと大きく方向を変える。南北方向を指向するかたの続きが5区でみられたことから、方向の異なる2本の溝が、1区で1本に合流すると考える。溝幅は5 mを越えるが、これは数度にわたって埋没と掘削が繰り返された結果であり、各時期の溝幅は2 mをこえないと思われる。溝の埋土からは10世紀中頃から13世紀前葉に時期比定できる土師器や黒色土器、瓦器に加えて、軒丸瓦を検出した。軒丸瓦は巴の隆起は少ないが断面四角形を呈し、巴頭の先端は尖り、尾は長くのびる。このような特徴から12世紀末から13世紀の時期に比例される。外区の珠文は凸帯に刻みをいれることによって表されており、そのため楕円形をなす。そのなかで量的なまとまりを持つのは、11世紀中頃の土師器の皿、12世紀頃に時期比定できるとと思われる土師器の小皿、13世紀前葉の瓦器である。出土遺物に時期幅があること、繰り返し再掘削をうけていることから、この溝は長期間にわたり幹線水路として使用されていた可能性がある。

軒丸瓦は、調査区の南に位置する積川廃寺に関連する可能性もあるが、積川神社解体修理の際に出土した軒丸瓦には同文のものはみられなかった。

・溝361、358、348（図16）

溝361は上段と下段の境界上に位置し、2区の溝26と一連のものであろう。当初はなだらかな斜面の傾斜変換部に沿うような状態で位置し、棚田が整備される段階に溝の片側が削りとられたのだろう。その後、上段のすそに沿うような形で溝358を掘削しなおし、最後に溝348が掘削されたと考える。

まず溝361から出土した遺物を概観する。53は土師器の甕で、口縁付近しか残存しないが、胴部最大

径が器高の中位下部に位置する撫で肩の器形を呈すると思われる。口縁断面は隅丸方形に仕上げられ、頸部から短く直線的に外反する。これらの特徴から53は10世紀中頃のものとする。54は土師質の羽釜で、体部には煤が付着している。口縁部は内傾しており、内面に強いヨコナデを施すため端部がやや突き出した形状になっている。胴部最大径が器高の中位より下に位置しており、12世紀末から13世紀初頭に位置付けられる。56は口縁外面に強いヨコナデを施すため、体部の中位がわずかに屈曲する。またその

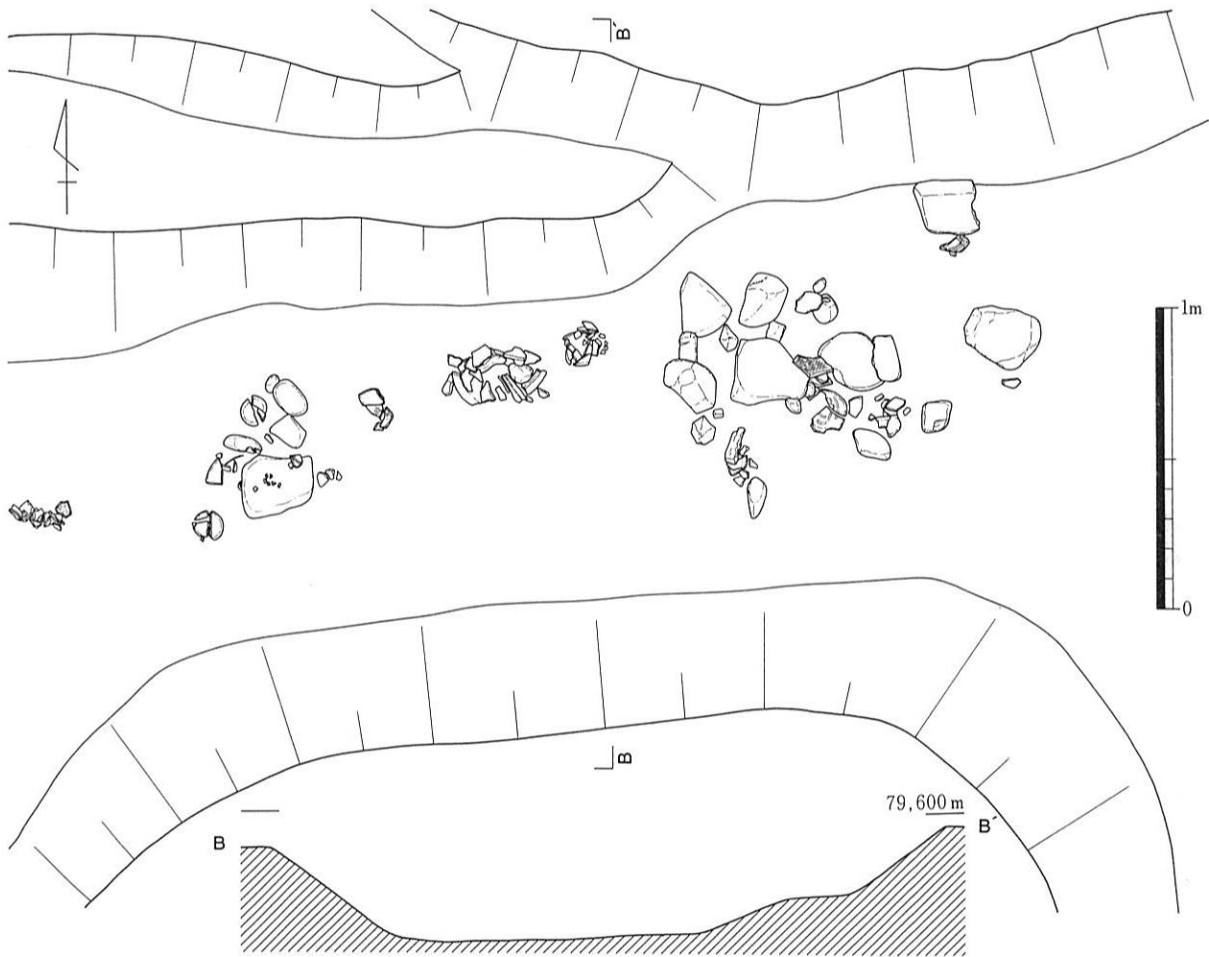


図12 溝1遺物出土状況図

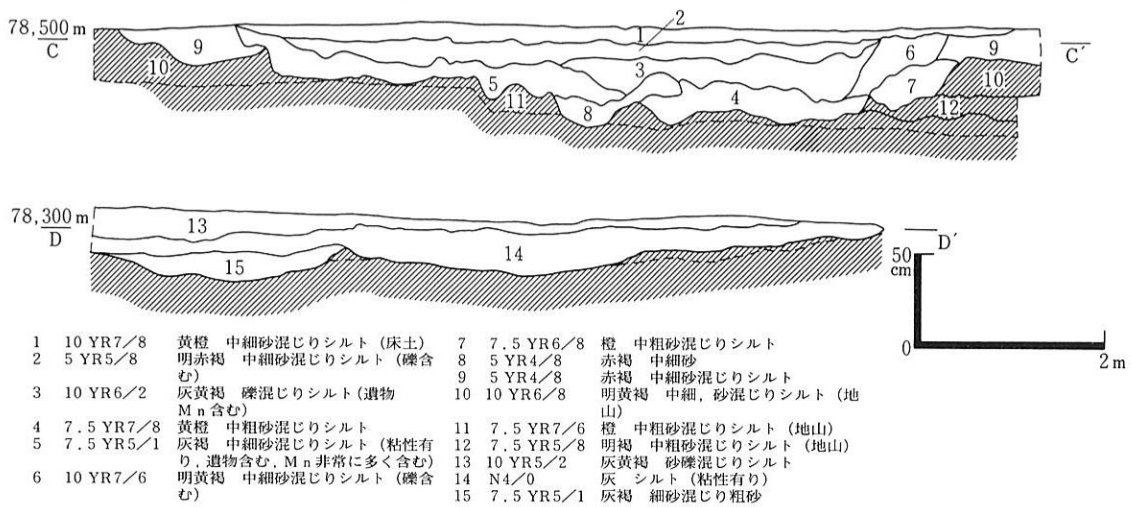


図13 溝1断面図

屈曲部から底部にかけての外面上にはユビオサエが顕著に認められ、12世ないし13世紀初頭に属すると考
 えられる。ここでとりあげたなかで、53は10世紀までさかのぼるものであるが、図化しなかったものも
 含めて概観すると、出土遺物のなかで主体となるのは12世紀ないし13世紀初頭のものである。57は溝
 358の埋土から出土した土師器の甕で、口縁付近しか残存しない。屈曲部は丸みをおび、立ち上がりは
 短くて直線的に外反する。口縁断面は先細りしながら丸くおさめられている。口縁部と頸部の外面につ
 よいヨコナデが施され、その他の部分はヘラケズリの後、かるくナデ調整をしている。内外面からのヘ
 ラケズリのため屈曲部の下で器壁が薄くなっており、その境目には段が生じている。これらの特徴から、
 57の帰属時期は13世紀中頃と考えられる。なお溝348から時期比定が可能な土器は出土しなかった。

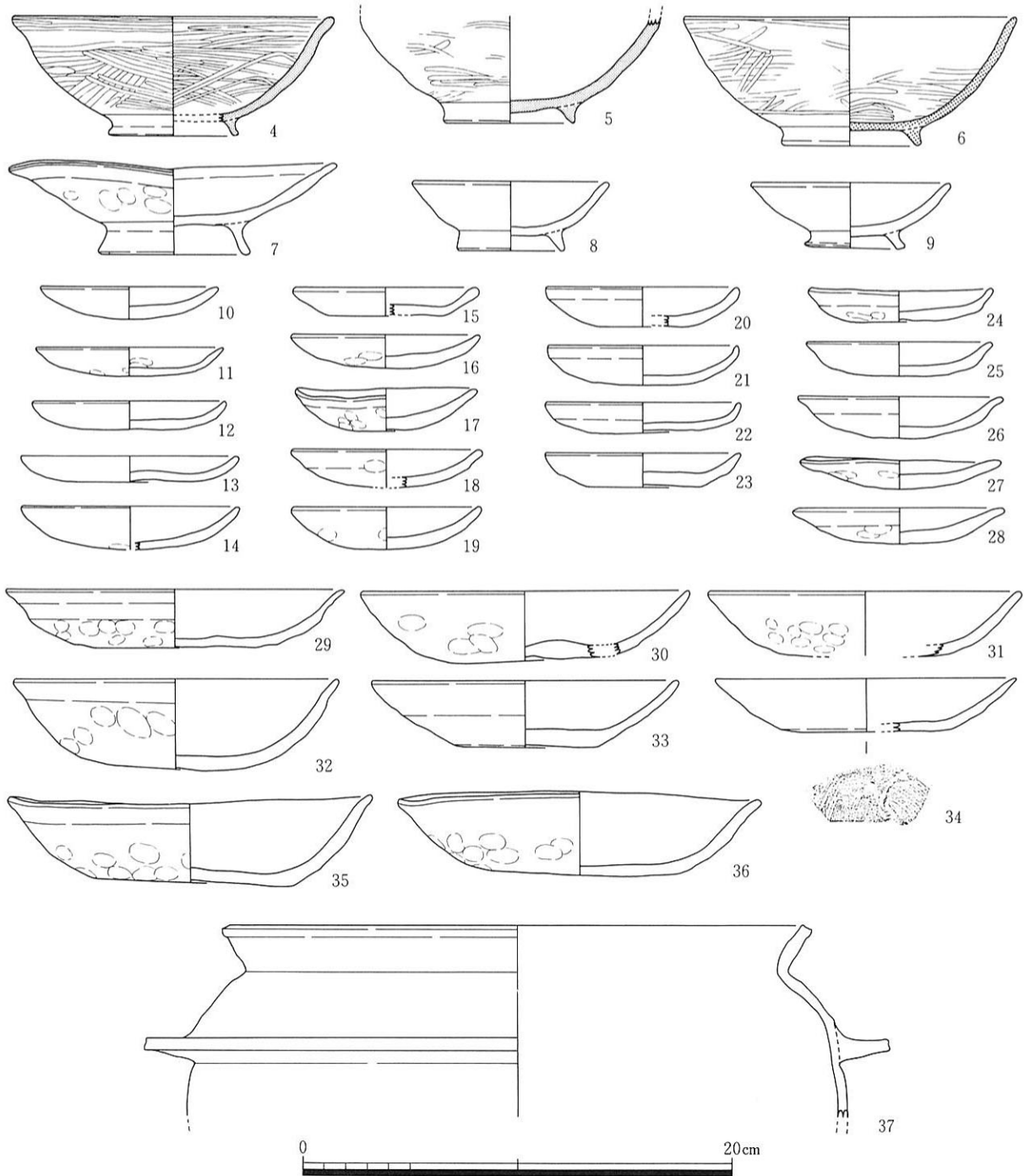


図14 溝1出土遺物(1)

小結

1区は棚田が整備される以前から、現在とあまり変わらないかたちで平坦地が造成されていたと考えられる。それはこの部分の傾斜が比較的ゆるやかだったため、大規模な土の移動が必要なかったからだろう。平坦地は上段、下段とも居住空間として利用されたと考えられる。上段は後世の削平が著しく、建物跡等を検出することはできなかったが、溝1の埋土から多数の日常雑器を検出した。そのなかには10世紀後半の黒色土器や12世紀代の軒丸瓦なども含まれており、この遺構が他の遺構に先行して存在し

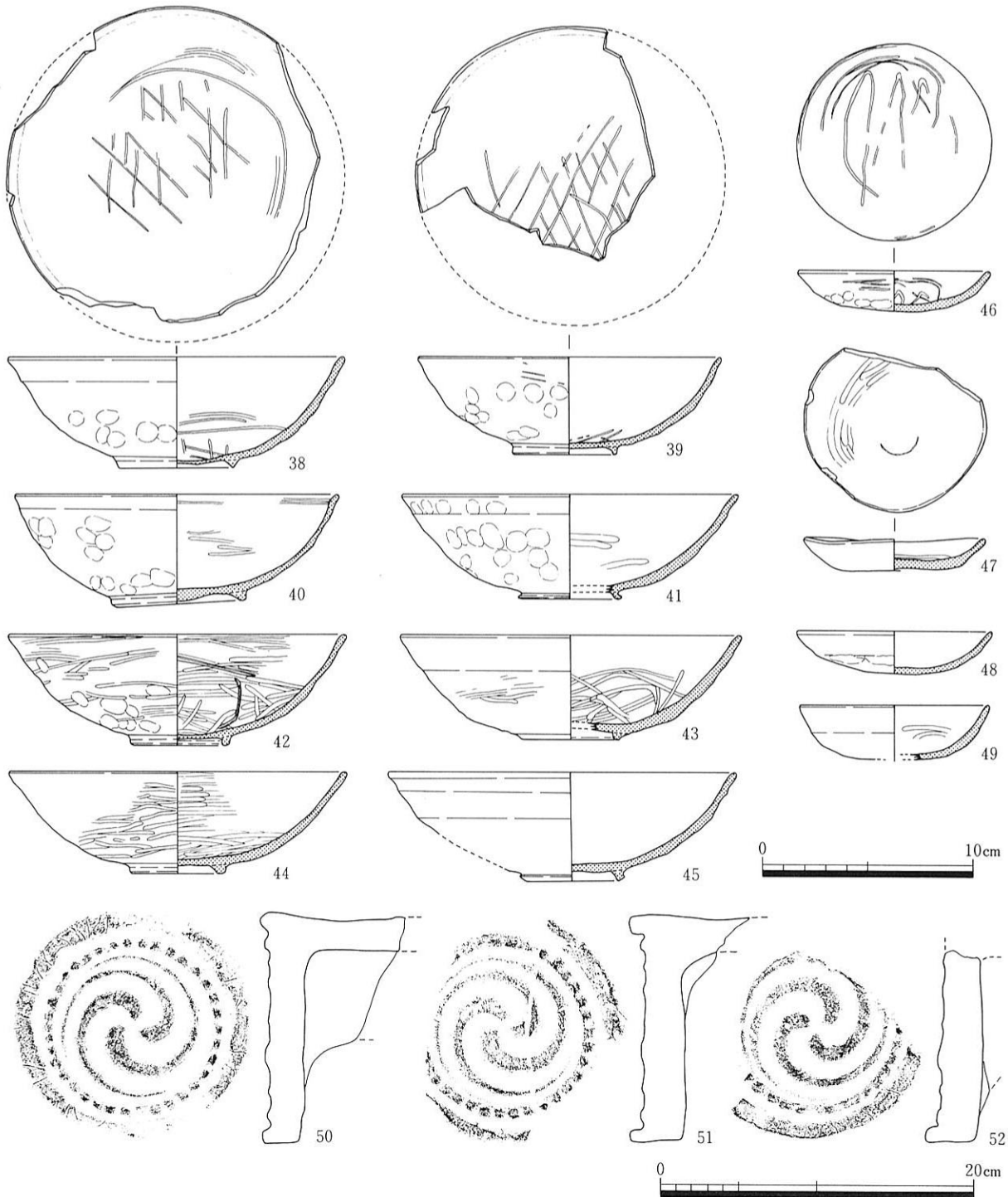


図15 溝1出土遺物(2)

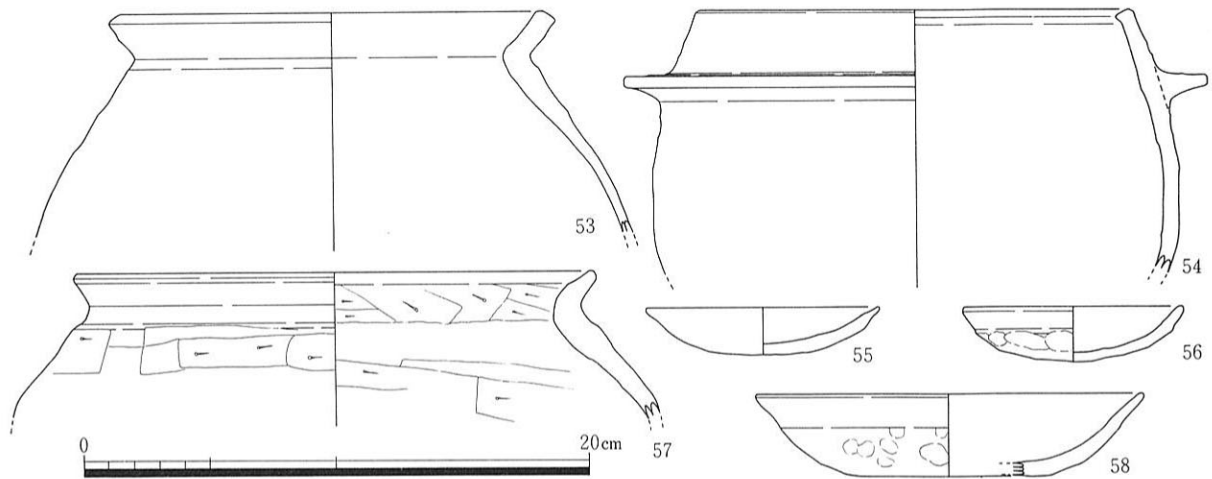


図16 1区溝出土遺物 53~56：溝361、57：溝358、58：溝348

ていたことがわかる。長期にわたって使用されていること、また数度にわたって掘りなおされていることからみて、溝1は調査区周辺が開発され始めた時期から幹線水路として存在していたと考えられる。溝361でも10世紀代の遺物が出土したが、主体となる12~13世紀代の遺物に比べて数はきわめて少ない。この溝1とそれほどかわらない時期から存在し、再掘削を繰り返しながら継続したと考える。詳しくは、次節の溝26、360、365についての所見を参照されたい。

1区下段では基盤層上面で柱穴を数個検出した。3区における柱穴の検出状況と照らし合わせると、調査区の東南に隣接する部分に数棟の建物があつたと推定できる。鍛冶関係の施設が造られたのは、それらが廃棄された後である。後世の削平が著しいのに加え、関連遺構の大部分が調査区外にあたるため、具体的な把握は困難である。

(2) 2区

遺構密度が高く、多数の柱穴を検出した。これらの柱穴から少なくとも9棟の掘立柱建物跡が復元できる。建物跡には柱穴の掘方から10世紀後半から11世紀初頭の黒色土器が出土したもの、12世紀中葉や13世紀代の瓦器碗や土師皿を出土したものがあつた。時期差のあるものが同一の遺構面に混在していること、また柱穴の深さが10cmに満たないものも存在することから、遺構面は後の耕作によってかなり削平されたと考えられる。柱穴のなかには根石の上に口縁部を打ちかいた須恵質の鉢をかぶせたものがあつ

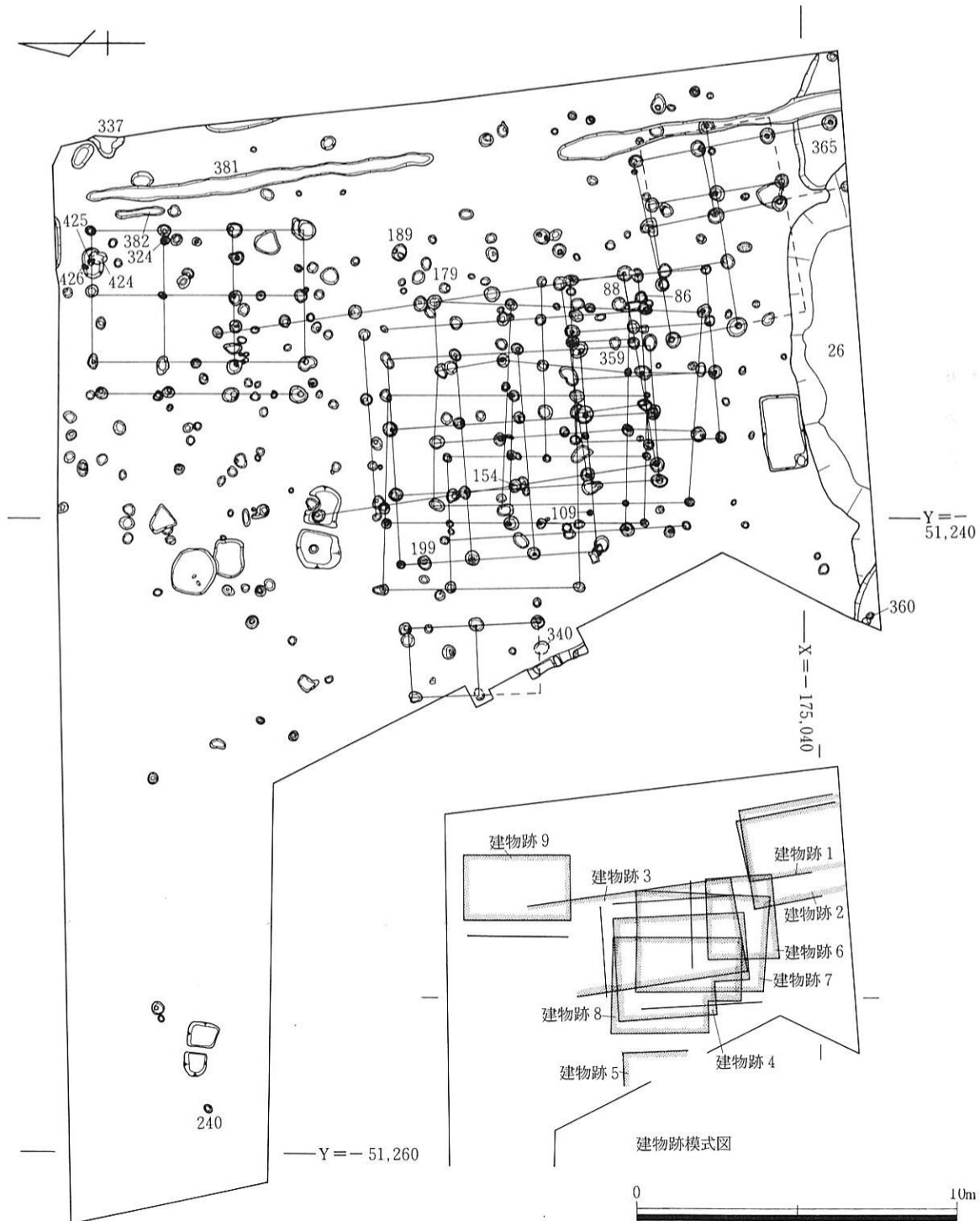


図17 2区遺構配置図

た。これは柱の沈下を防ぐという目的に加えて、地鎮に関わる性格もおびていた可能性がある。その他に瓦器碗や土師器を一括出土した土坑も1基検出した。

・建物跡1 (図18)

2区の南端で検出しているため建物の正確な規模は不明だが、東西2間(399cm)×南北3間(631cm)以上の規模になる。建物の軸の方向は座標北に対して西に11.5度ふる。柱穴は円形で直径40cm前後のものからなる。

建物跡1では時期比定に有効な遺物を検出しなかったが、これを切り込んでいる溝26の出土遺物をてがかりにその時期を推定したい。この溝に関しては、前節と本節でそれぞれ所見を述べているので参照されたい。要約すると溝は10世紀中頃に掘削され、12世紀終末ないし13世紀初頭に埋没しており、その間くりかえし掘削しなおされている。おそらく溝1と同様に、集落の出現段階から継続的に存在したものであろう。建物跡1の存在時期は明らかに溝よりも古いが、建物跡1の廃絶時期と溝の掘削時期との間に、一定の時間幅を設ければならない理由は特にみあたらないので、建物の時期の下限は10世紀半ばに設定できる。

いずれにしても当調査区では10世紀代の遺物ないし遺構が僅少なため、その時期の集落の状況は把握しにくい。集落の中心域が調査区外にあったとしても、遺物の出土量からみてその規模はきわめて小さいものだったと考えられる。つまり建物5は集落の出現段階に存在したもので、それからやや遅れて基幹水路である溝1や溝26が掘削されたのが、その時期の集落の姿だったと考える。

・建物跡2 (図19)

建物跡1同様、調査区の端で検出されているため正確な規模は不明だが、南北2間(415cm)×東西3間(638cm)以上を測る。建物の軸の方向は座標北に対して、西に10度ふる。柱穴は円形で直径40cm前後のものからなる。

建物跡2では時期を判断する遺物は見られなかったが、建物跡1と同様に溝26一連の溝に切られており、建物の時期の下限は10世紀半ばに設定される。建物跡1と建物跡2はほぼ同じ場所に、若干の方位、規模をかえて存在しており、立て替えと見ることができる。しかし、柱穴の切りあいがなく、時期を判断できる遺物がないため、前後関係は分からない。

・建物跡3 (図20、27、28、29)

東西3間(129cm)×南北6間(606cm)の建物である。北側は対応する柱穴を確認することができなかった。建物の軸の方向は座標北に対して西に9度ふる。柱穴は円形で直径40cm前後のものからなる。根石が検出されたピットはピット74、180、303、205である。

ピット180の底部で根石と、ほぼ完形の土師器の皿を検出した。さらに埋土中から土師器の皿が2点と、B類の黒色土器が1点出土した。72は黒色土器の小型の碗である。平底に断面逆台形の高台を外側に張り出してとりつけたもので、体部は内湾ぎみにたちあがる。内外面ともていねいなミガキが施されて光沢をおびる。土師器の皿はいずれも丸底ぎみで、底部外面にユビオサエの痕跡が認められ、口縁部をヨコナデしている。黒色土器の形体から見て、遺構は11世紀後葉に属するものと考えられる。これらの遺物がもともと根石の周辺に置かれたものであれば、それは地鎮行為に伴うものだった可能性がある。

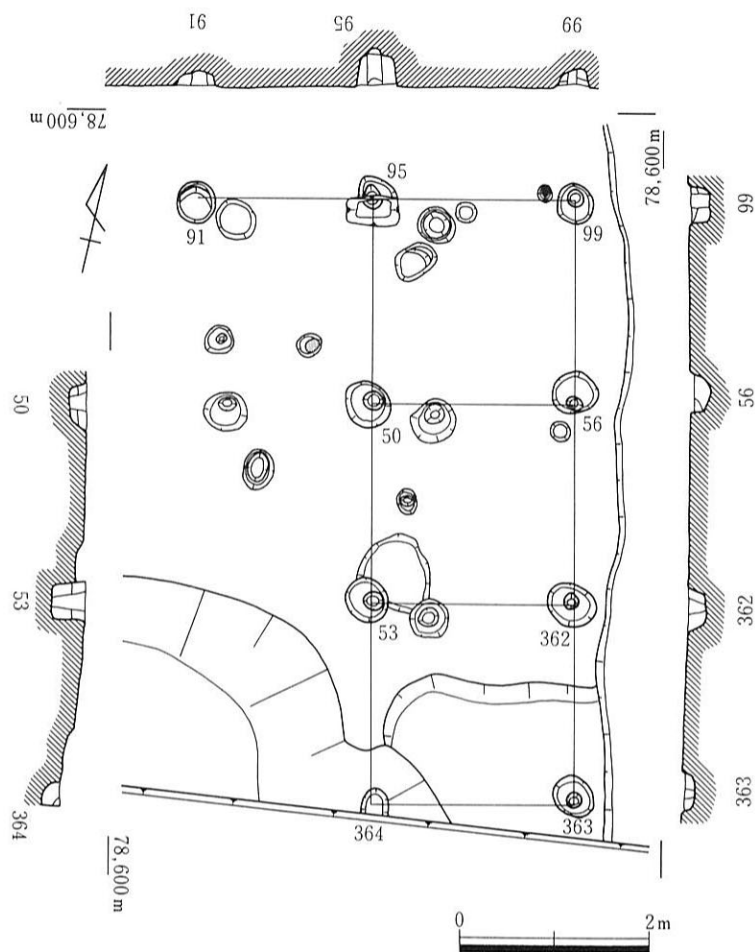


図18 建物跡1平・断面図

ピット205からは瓦器皿が、ピット224からは黒色土器A類の皿が出土した。瓦器皿（60）は底部はやや上げ底ぎみで、体部へとたちあがる屈曲部はそれほど明瞭でなく、丸みをおびている。口縁端部は上方へ向けて丸くおさめられている。器壁が風化しており内外面とも調整は不明である。黒色土器（61）はやや外反ぎみに上方にのび、底部には回転系切りの痕跡を呈する。ピット155をきりこむピット154からは瓦器碗が出土した。瓦器碗（109）は体部が内湾しながら立ち上がり、口縁部付近でわずかに外側に張り出す。また高台はわずかに外側に張り出し、先端がとがる断面三角形のものであることから12世紀代に属する可能性が高い。

・建物跡4（図21、27、28、29）

東西3間（645m）×南北4間（823m）である。建物の東側には庇がとりつく。建物の軸の方向は座標北に対して、西に4.5度振る。柱穴は円形で直径30cm～40cm前後のものが多い。根石が検出されたピットはピット64、66、72、80、108、114、120、159、163、206である。東側の庇ではピット84、412で根石が確認された。南側の梁行の中央（ピット72）と東側の軒行の中央（ピット167）、そして南東隅（ピット80）の柱穴から1点ずつ土師小皿が出土している。ピット72では土師皿はピットの底部付近で口縁をほぼ水平にして出土している。62、63は口縁部外面に強いヨコナデを施すため、体部の中位でやや屈曲し、体部下半と底部にユビオサエの痕跡が認められる。これらの特徴から12～13世紀代の遺物と考える。64は平らな底部から体部が、やや内湾しながらゆるく立ち上がる。底部にはわずかにユビオサエが残り、口縁

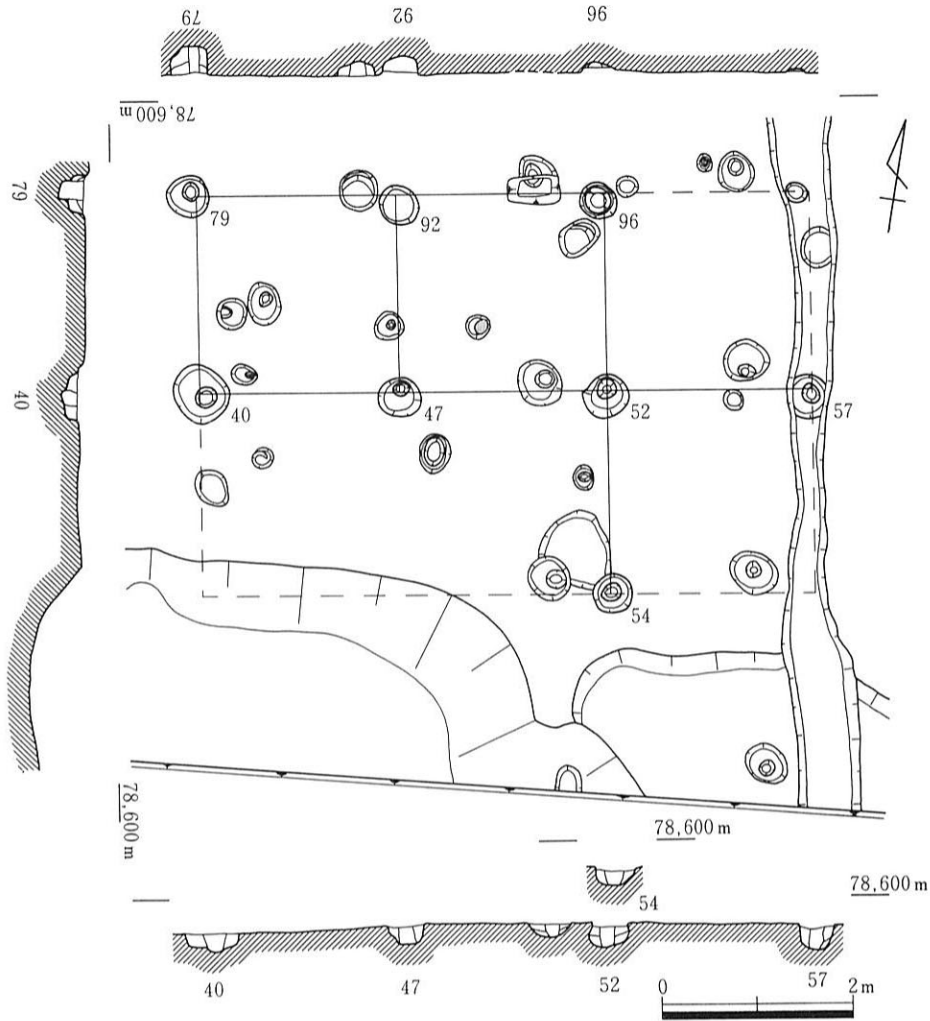


図19 建物跡2平・断面図

部外面に強いヨコナデが施されている。調整方法や形態的な特徴は62とほぼ一致すると考える。ピット120は直径が約52cm、深さ約28cmの円形のピットである。底の部分に根石を置き、その上に体部上半を打ち欠いた須恵質の鉢を、伏せた状態でかぶせている。これは東播系の土器で、直径12cmをはかる底部から体部にかけての立ち上がりはゆるやかで直線的である。口縁部が失われているため、時期を判断するのは難しい。

また建物4の北側に建物跡に平行するピット列がある。庇と言うより目隠しの塀のようなものであろう。3間(575cm)をはかり、ピット223から根石が検出された。

・建物跡5 (図22,27)

建物跡が調査区外にまたがっているため、全体の規模は不明だが、南北2間(419cm)×東西1間(223cm)以上の建物である。建物の軸の方向は座標東に対して西に3度ふる。前述した建物4に南北幅や軸の方向が似ており、東西方向に細長い建物跡になる可能性がある。柱穴は円形で直径30~40cm前後のものからなる。東側の梁行中央の柱穴147から土師小皿が1点出土している。これはやや上げ底ぎみの平たい底部から体部が直線的に外方にたちあがるもので、口縁断面は先細りしながら丸くおさまられている。12世紀中頃から14世紀後半に含まれる遺物であるが、細かな時期比定は難しい。ピット147・194からは根石を検出した。前者はほぼ原位置をたもった状態で検出したが、後者は移動している。

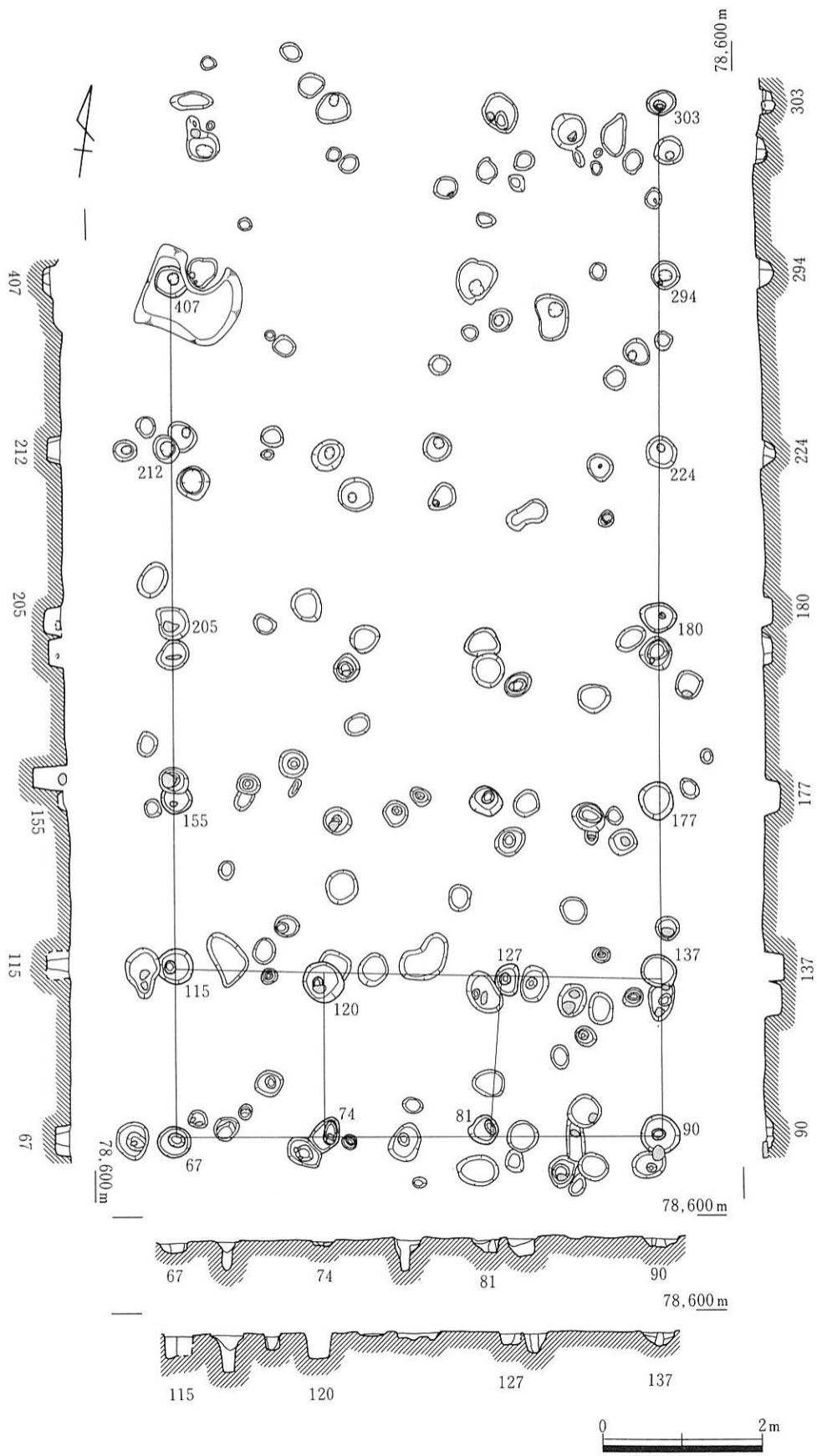


图20 建物跡3平・断面図

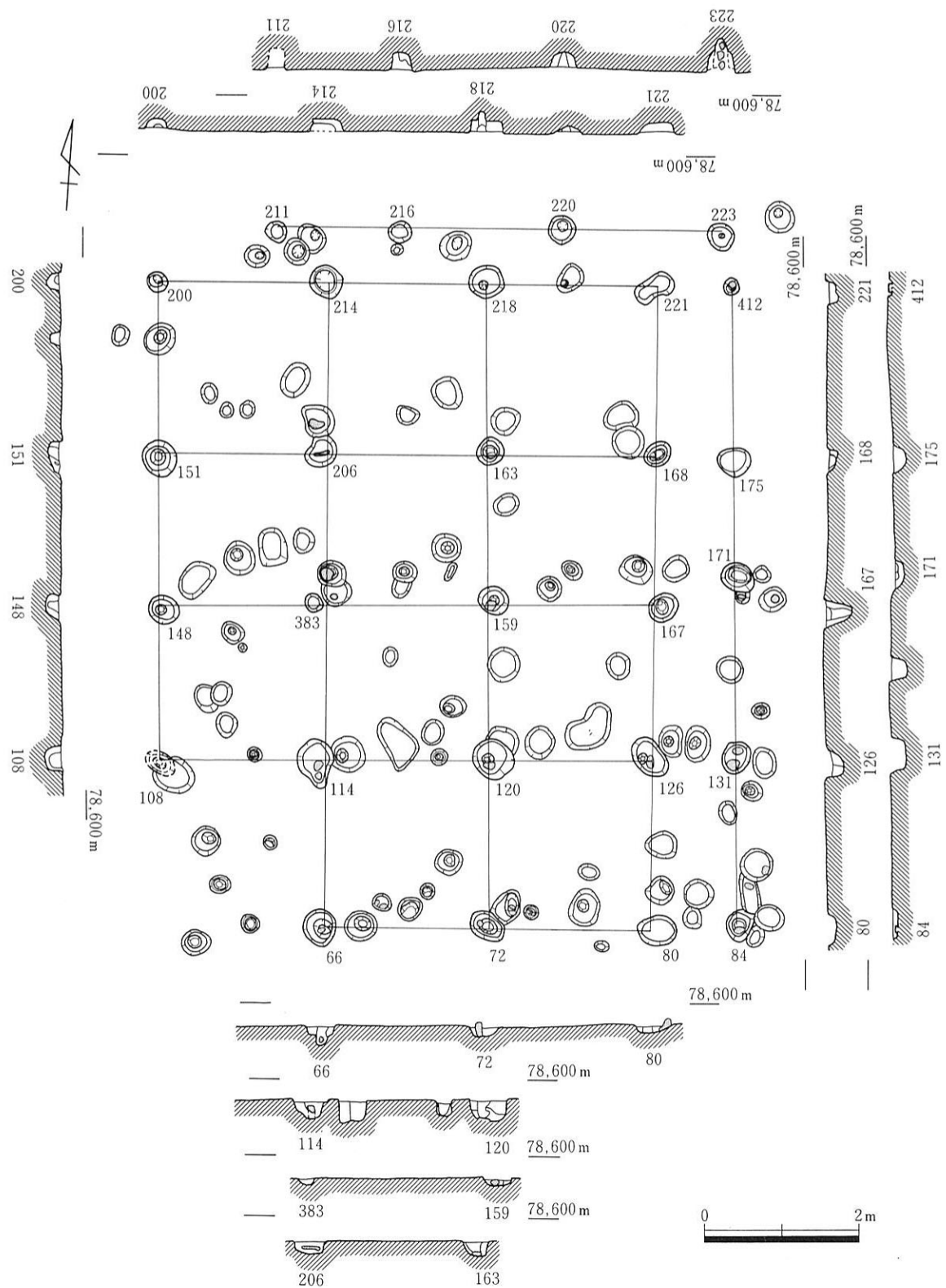


图21 建物跡 4 平・断面图

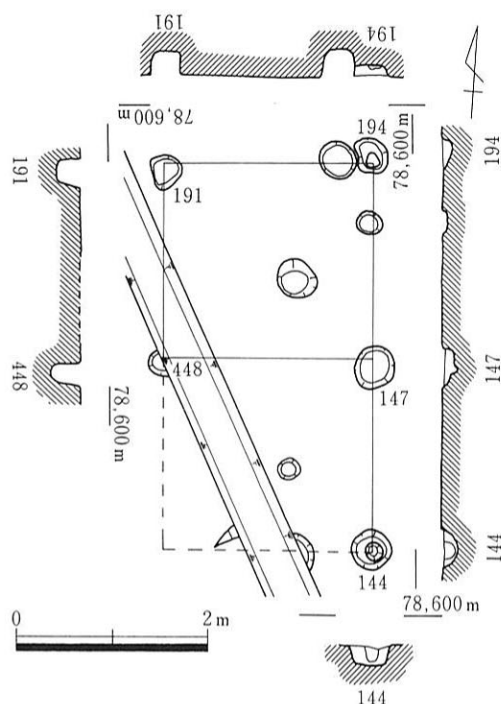


図22 建物跡5平・断面図

174,414では根石が検出された。庇ではピット62から根石が検出されている。ピット45からA類の黒色土器が1点出土した。これは平底ぎみの底部から丸みを帯びて体部がちあがり、口縁部でさらに内湾する形状である。口縁端部は先細りぎみに丸くおさめる。ミガキは内面でわずかに認めたが、外面は磨滅のため観察できなかった。瓦器の初期段階の形態と類似することから、時期は11世紀初頭から前半に位置付けられる。ピット204から土師器の小皿が出土した。ピット414は直径40cm、深さ12cmでほぼ円形のピットである。埋土から完形に近い黒色土器B類皿、土師器の小皿が出土した。器種にあまりヴァリエーションがないこと、いくつかは壁にもたせかけるような状態で出土していることから、地鎮遺構の可能性はある。93は黒色土器B類の皿である。平底で体部から口縁端部にかけて外反しながら立ち上がる。器壁の風化が著しく内外面ともに調整は不明瞭である。

・建物跡8 (図25,27)

東西3間(610m)×南北4間(418m)である。建物の軸の方向は座標北に対して西に1度ふる。柱穴は円形で直径20cm～30cm前後の円形のものが多い。ピット68から根石が検出された。東側の軒行のピット116から土師器の小皿が1点出土しており、建物の時期は12～13世紀代と位置付けられる。

・建物跡9 (図26,27)

東西2間(418cm)×南北3間(680cm)で、西側の軒行に庇がとりつく。建物の軸の方向は座標北に対して東に0.5度ふる。柱穴は円形で直径30～40cm前後のものからなる。根石を検出したピット295、311、332のなかで、原位置をたもった状態で出土したのはピット295と332である。庇ではピット286から根石が検出されている。外側の軒行に位置するピット304・324から土器が出土している。

ピット304から出土した瓦器は口縁部をやや外反ぎみに丸くおさめており、高台は断面が逆台形のもの外反ぎみにとりつけている。内面のミガキは口縁に対して平行ではなく、明瞭な分割性もたない。

・建物6 (図23)

南北2間(457cm)×東西3間(540cm)の建物である。建物の軸の方向は座標北に対して西に91～95度ふる。柱穴は直径30cm前後の円形である。ピット32、89から根石を検出した。柱穴からは図化できるような遺物は出土していないが、黒色土器B類の碗、瓦器碗、土師皿等が細片で含まれている。北側には建物に平行して柱穴が並ぶが、建物と柱間隔が合わず長さも長いので建物に付随する目隠しの塀のようなものであろう。杭列は4間(710cm)を測る。

・建物7 (図24,27,28,29)

東西3間(643cm)×南北4間(848cm)の建物である。建物の軸は座標北に対して西に0.5度～東に1.5度ふる。建物の西側には庇がとりつく。柱穴は20cm～40cmの円形を呈する。建物の柱間は一定ではない。ピット38、87、

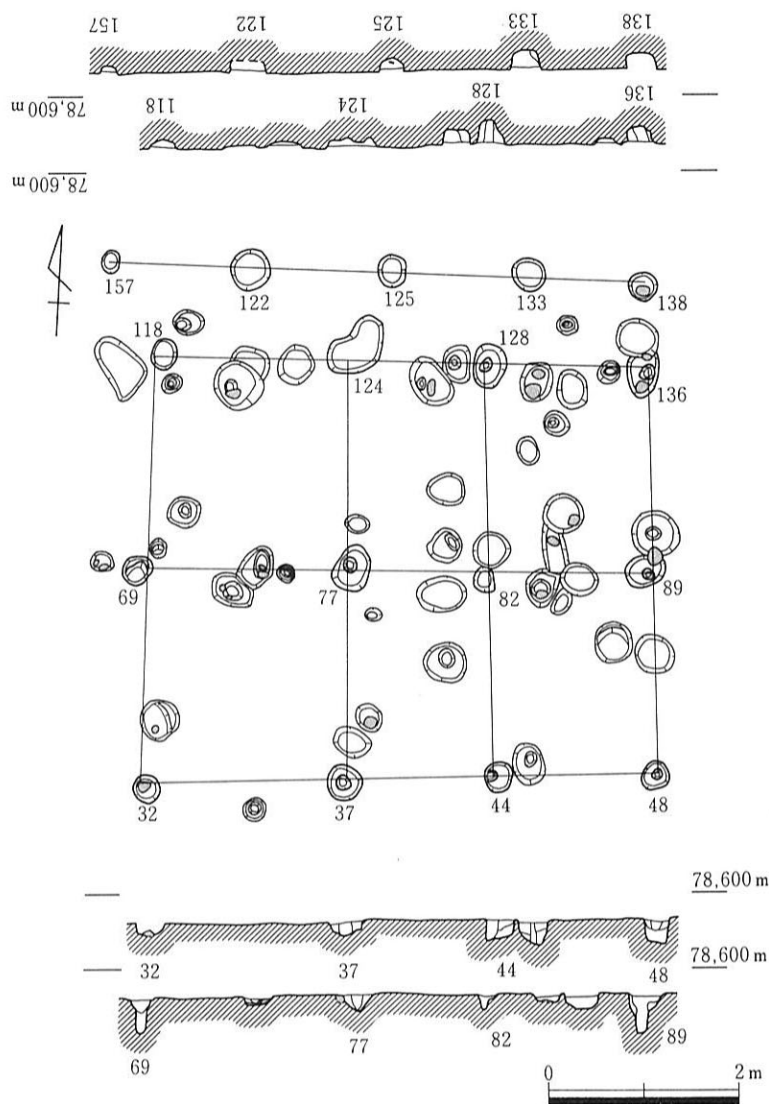


図23 建物跡6平・断面図

見込み部分にらせん状ミガキが認められた。外面にもほぼ全面にミガキが施されていたが指押さえの凹凸が著しく、凹部にはミガキがおよばない。324から出土した土師器の皿は、口縁部に強いヨコナデを施しているため、器高の中位で内外面ともに外方にむけてわずかに屈曲する。その屈曲部から直線的に口縁端部にむかってのび、先端はまるくおさめる。底部外面にわずかに指押さえの凹凸が認められる。これらの特徴から建物跡4の柱穴から出土した遺物は12世紀前葉に位置付けられる。

・土坑189 (図28、29)

直径52cm、深さ28cmでほぼ円形の土坑である。埋土から黒色土器の碗、陶磁器の皿、土師器の皿や甕・塀がまとまって出土した。土器の出土状況からみて、土坑が半ばまで埋まった段階で混入したものと、おおかた埋まってわずかな窪みを残すのみになった段階で混入したものがある。

黒色土器はいずれも内面に密度の高いミガキを認めたが、外面は磨滅がすすんでいるため図化できなかった。76は平底ぎみの小型品で、底部外面中央に突起を持ち、口縁部内面に沈線を1条めぐらせている。器壁が薄く焼成も良好で、シャープな印象をうける。77も平底で、断面が逆台形の高台を有する。体部は直線的に外反して立ち上がり、口縁部でさらに外反させている。78・79はそれに比べると底部・

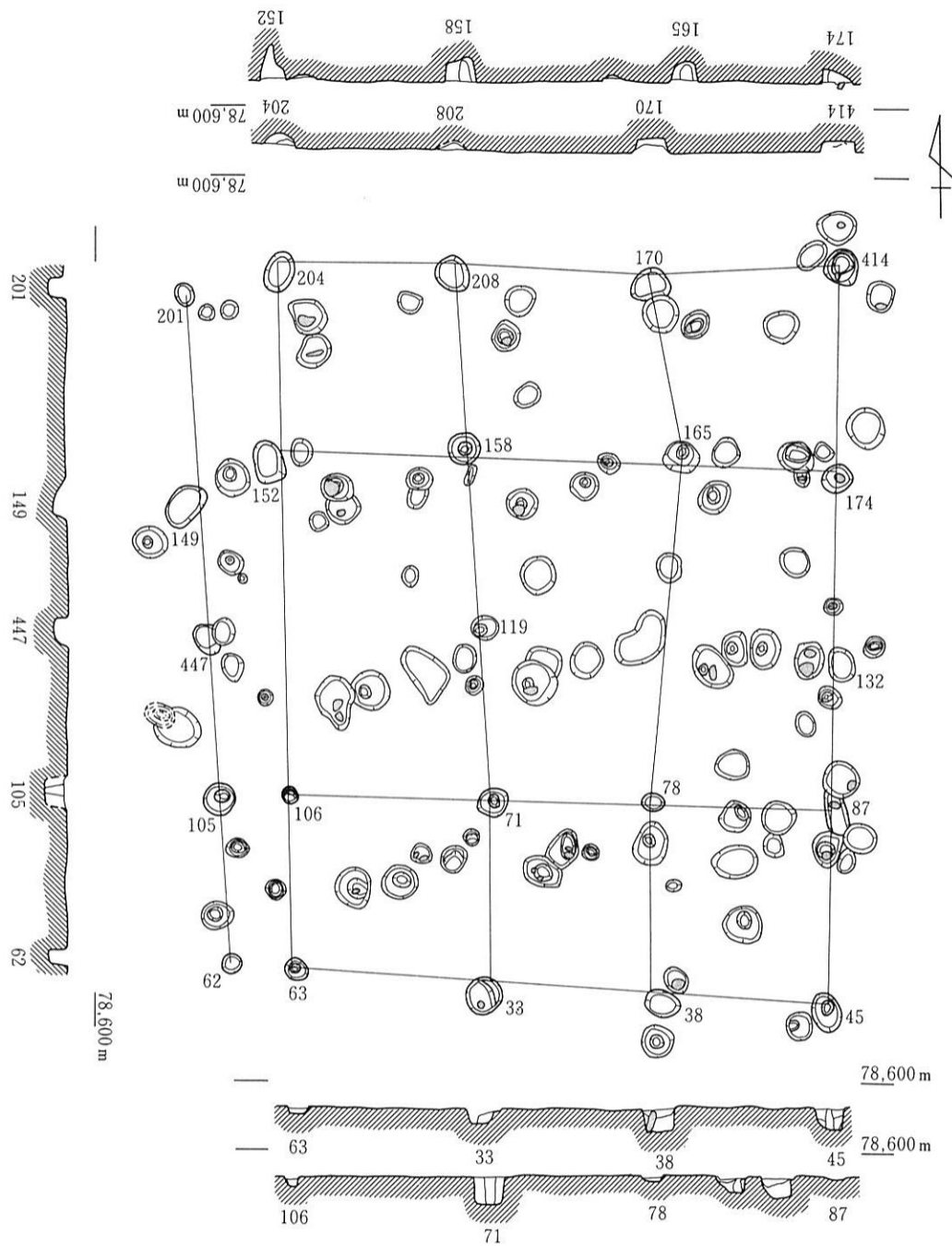


図24 建物跡7平・断面図

体部ともに丸みをおび、断面逆三角形の高台が外反気味にとりつけられ、11世紀代の瓦器と極めて近い形態のものである。

90は体部が丸みをおびて立ち上がり、明確な屈曲部を境に外反して口縁端部にいたる。内外面とも底部から体部にかけてユビオサエが顕著に認められ、口縁部は手びねりで作りだされているため波うっている。口縁部の厚さも一定せず、平面形態はきれいな円形をえがかない。口縁端部はわずかに上方にむかって丸みをもつ。底部中央にはちょうど親指くらいの大きさで押し上げられた部分があり、その横に直径6mmの穿孔がある。全体に手の字状口縁の皿の体部だけを大きく引き延ばしたような形状である。手の字状口縁の土師器の皿も出土しているが、口縁端部は上方へつまみあげられているだけで、特に厚

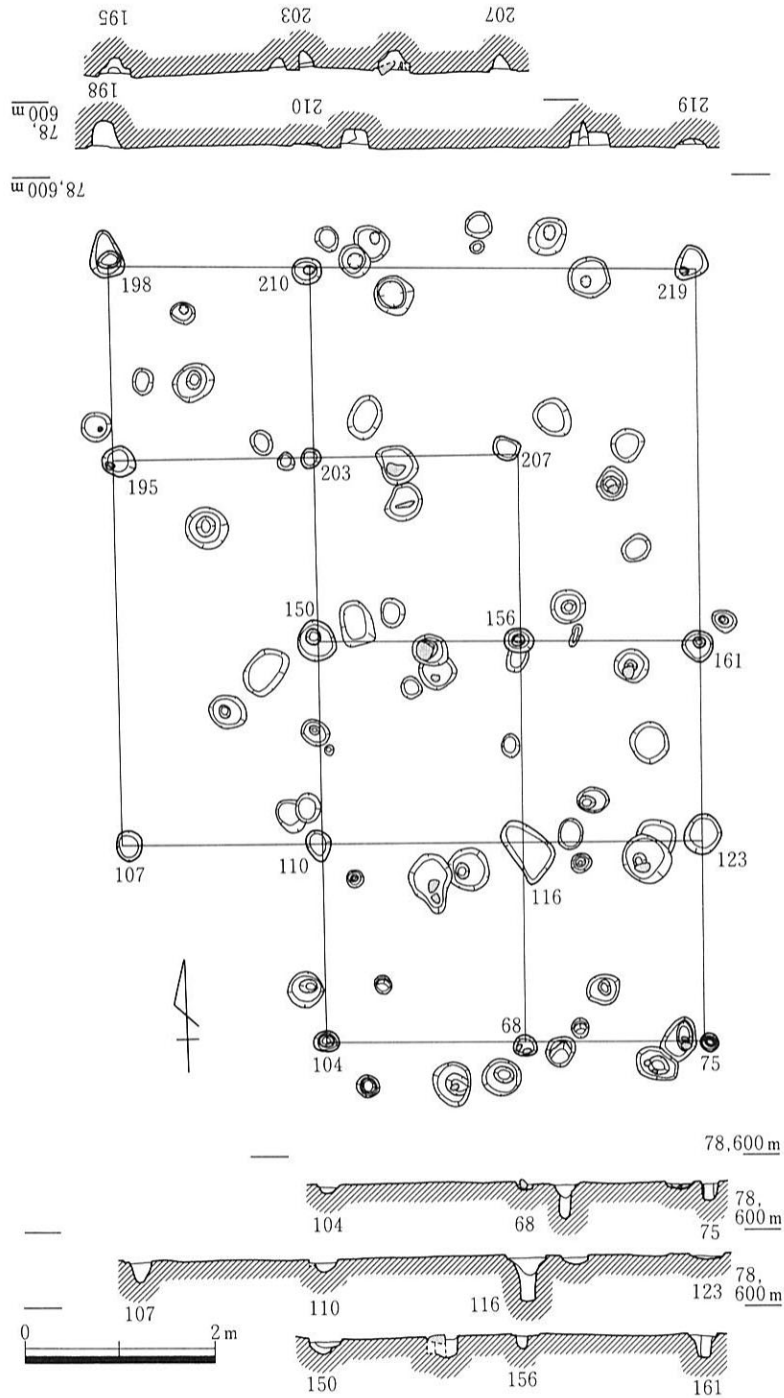


図25 建物跡 8 平・断面図

みが増すわけではない。92の土師器の鍋は半球形の体部と直線的に外反する口縁部からなり、口縁端部は上方につまみあげている。体部外面はナデで仕上げているため、粘土紐の単位が観察できるが、内面はケズリ調整ののちナデ調整を施している。これらの遺物は11世紀中頃から11世紀末葉に帰属すると考えられる。

出土遺物に完形品が多く含まれること、ピットの縁にもたせかけるような状態で土師器の皿が3枚重なって出土したこと、土師器の皿に穿孔があったことからみて、地鎮遺構の可能性はある。ただ地鎮遺構には遺物の種類が皿や碗に限られる傾向があるのに対し、ここでは色々な種類のものが出土していること、またピットの底部に正置した状態で出土した土器が認められなかったことから、これらが廃棄さ

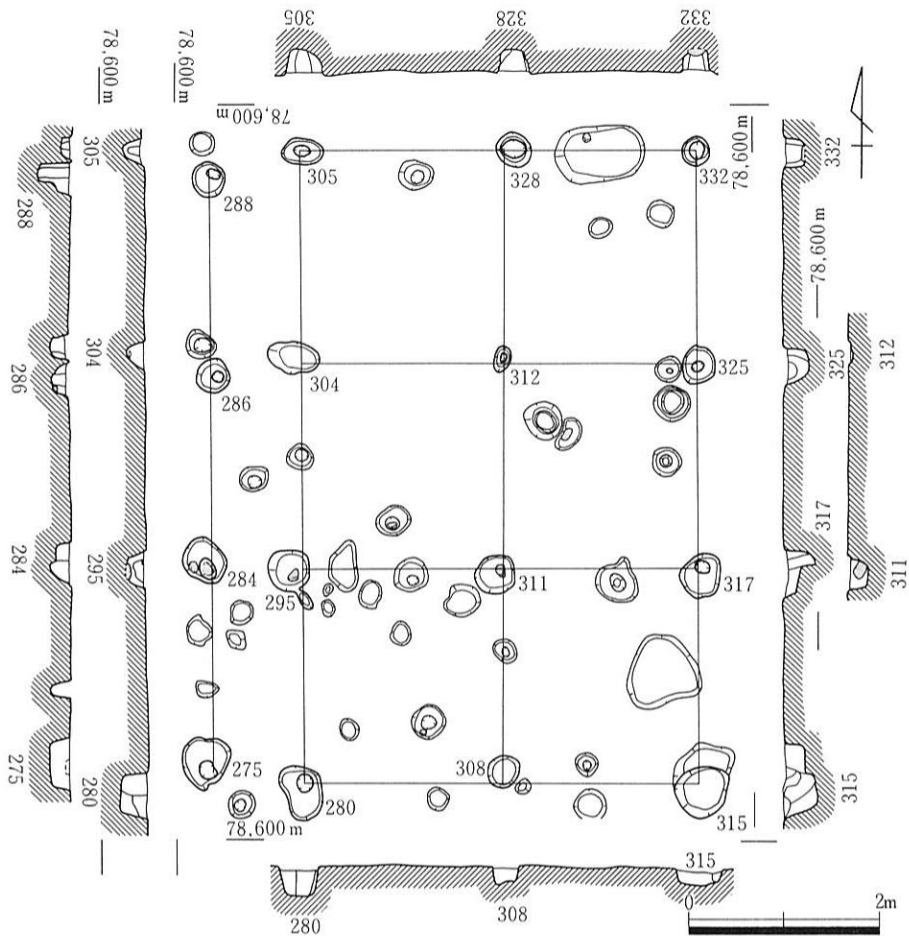
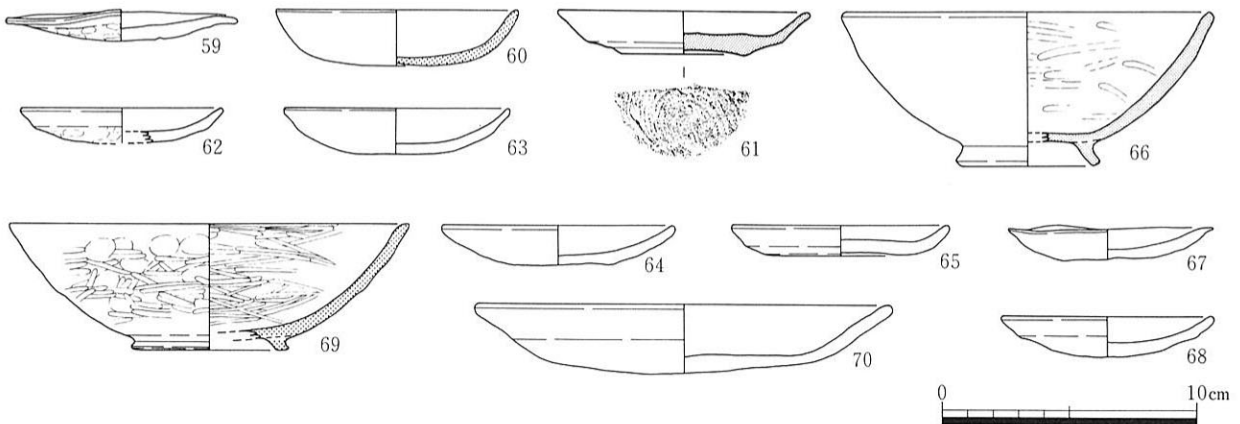


図26 建物跡9平・断面図



建物跡3 (59:ピット294、60:ピット205、61:ピット224) 建物跡4 (62:ピット167、63:ピット72、64:ピット80)
 建物跡5 (65:ピット147) 建物跡7 (66:ピット45、67:ピット204) 建物跡8 (68:ピット116)
 建物跡9 (69:ピット304、70:ピット324・325)

図27 建物跡出土遺物

れたものである可能性も否定できない。

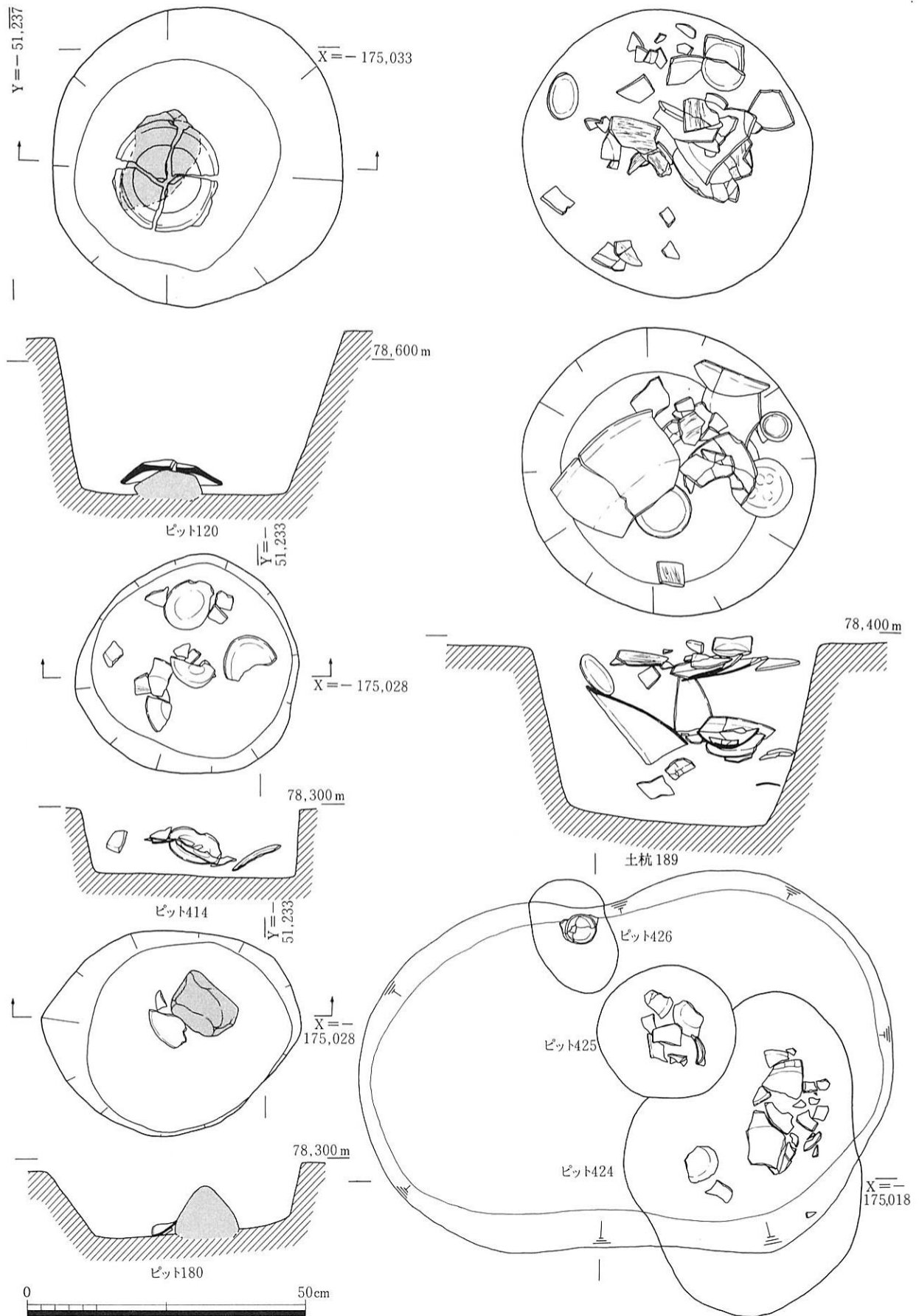
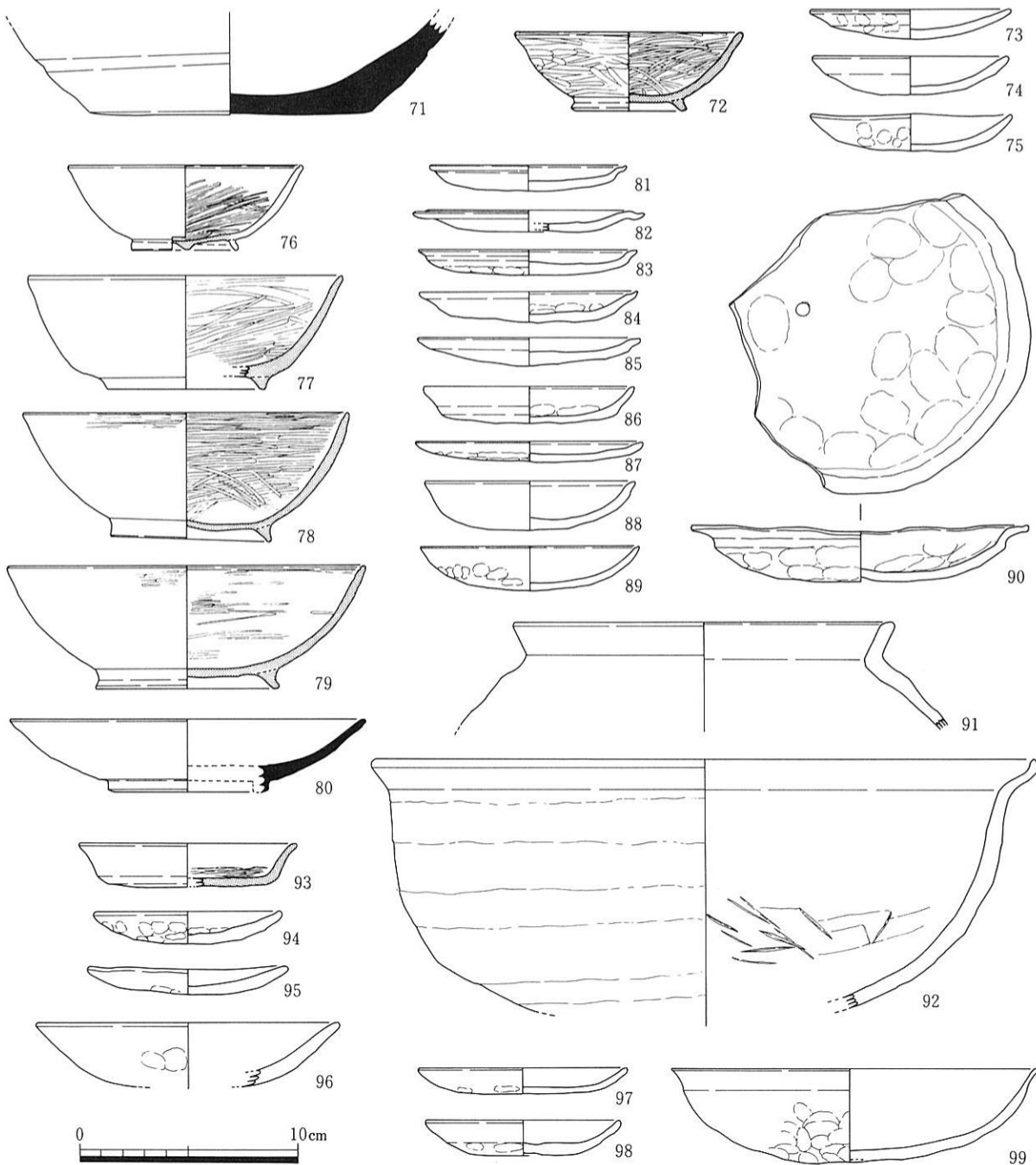


図28 2区ピット、土坑平・断面図

• ピット424～426 (図28, 29)

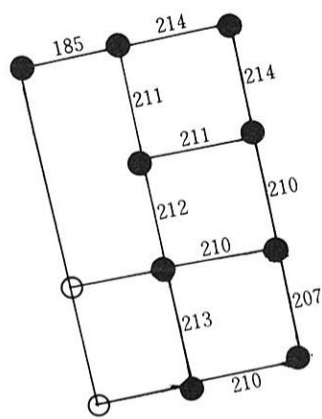
ピット424は長径60cm、短径42cmの不整円形である。土師器、瓦器の破片が多数含まれていた。ピット425は明らかにピット424より後に掘りこまれたもので、直径25cmの円形のピットである。この埋土からも土師器・瓦器などが出土した。これらの遺構から出土した土師器の皿のうち、小型のものは時期比定の手掛かりとしにくいいため、まず99に注目したい。これは体部が半球形にちかいやや深めの皿で、口縁部はつよいヨコナデを施すことにより、かるく外反させている。底部から体部にかけてはユビオサエの痕跡が顕著に認められ、12世紀前葉に位置づけられるものである。

ピット426は長径22cm、短径15cmの楕円形のピットである。埋土から瓦器碗が1点出土した。これは

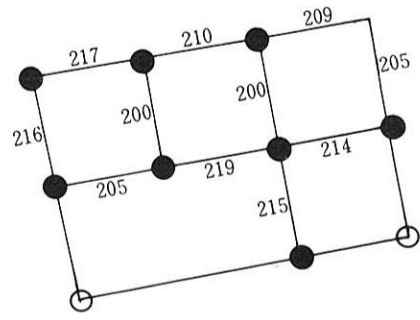


71 : ピット121、72～75 : ピット180、76～92 : 土坑189、93～96 : ピット414、97、99ピット424、98 : ピット425

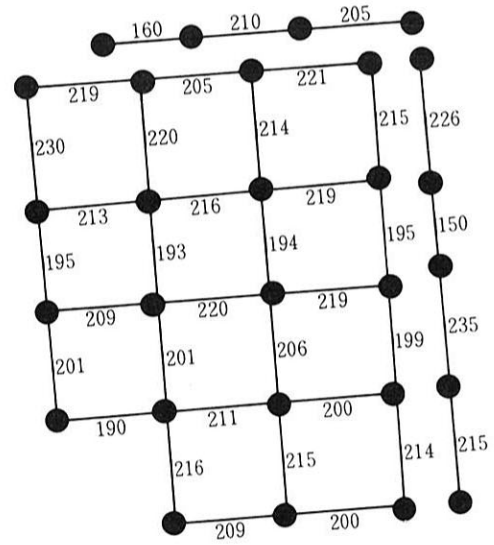
図29 2区ピット、土坑出土遺物



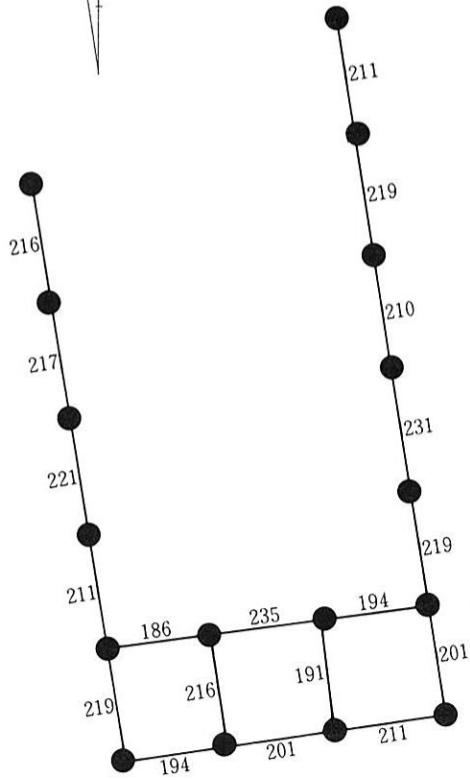
建筑物迹 1



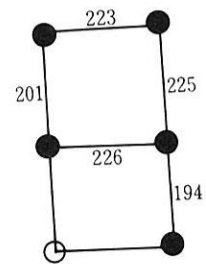
建筑物迹 2



建筑物迹 4

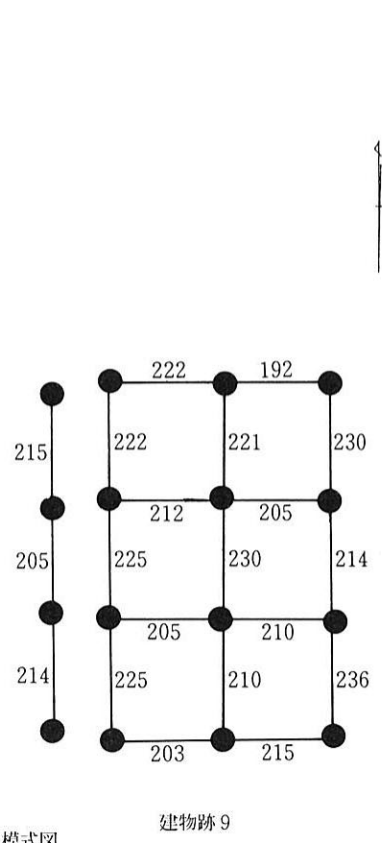
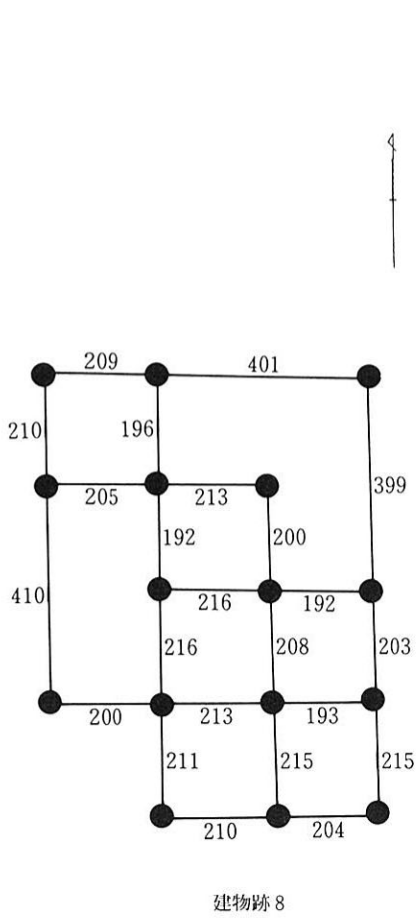
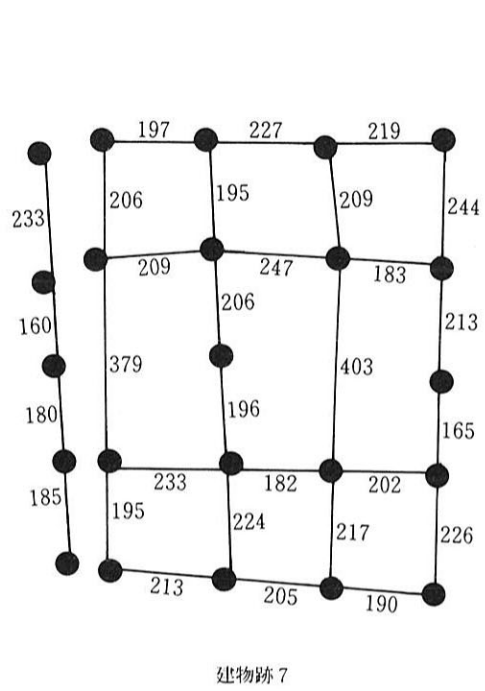
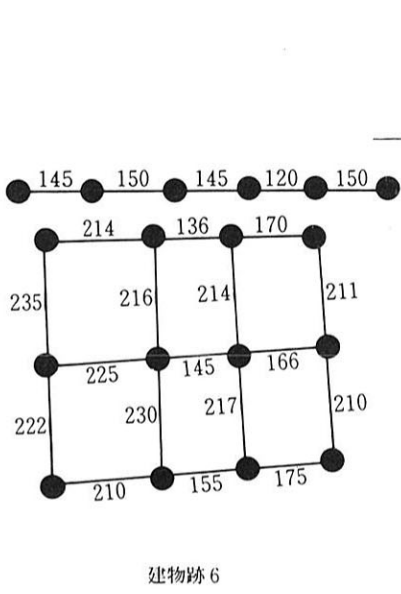


建筑物迹 3



建筑物迹 5

图30 建物模式图 (1)



建物柱間隔模式図
 数字は現存するピットの柱痕の中心距離を表す。単位は cm。
 20 分 1 の空測図、及び 50 分 の 1 の平板測量図を基に作成した。
 ● は柱穴が確認されたもの。
 ○ は攪乱その他の遺構等により検出できなかった可能性があるもの。

図31 建物模式図 (2)

体部の大半が失われており正確な時期比定はできないが、比較的しっかりした形状の高台がやや外側に張り出してとりつけられていることから、12世紀半ばを大きくくだる時期のものではないと考える。

・その他のピット (図32,33)

前述したピット以外で時期判別が可能な土器を出土したものの平面図・断面図を掲載する。

前述した遺構の出土遺物を概観すると、11世紀後半と12世紀中葉、13世紀前葉の時期にピークが認められる。図31で掲載している遺物も、そのなかのいずれかの時期に該当するものと思われる。

出土品のなかに土師器の小皿が比較的まとまった数で認められる。これらのうち、ピットの底部にす

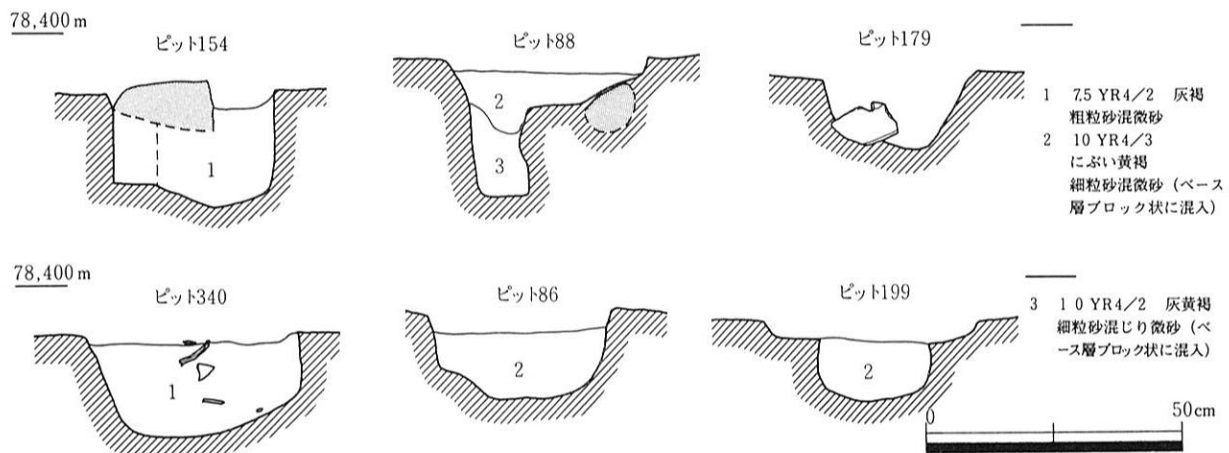
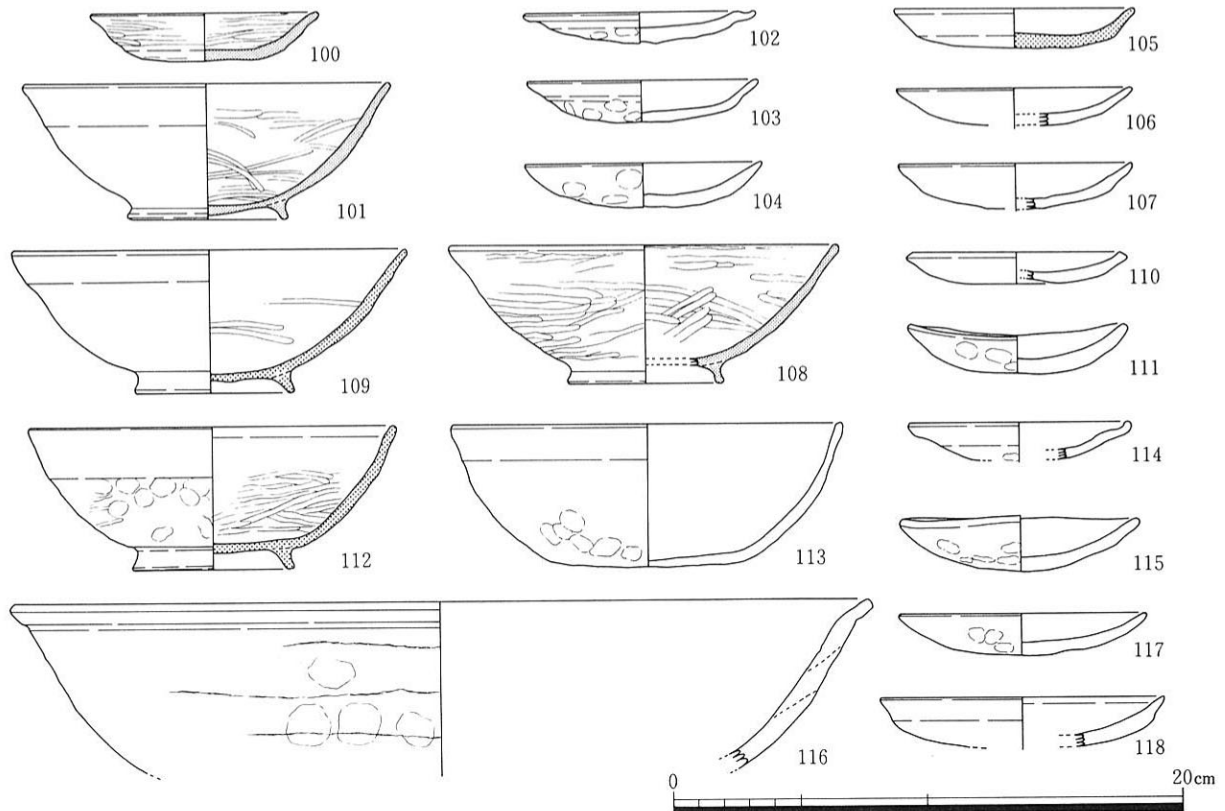


図32 2区その他ピット断面図



100~104: ピット240、105: ピット359、106~108: ピット340、109: ピット154、110: ピット109、111: ピット428、
112: ピット337、113: ピット88、114: ピット333、115: ピット、116: ピット179、117: ピット86、118: ピット199

図33 2区その他ピット出土遺物

えられた状態で出土したものはなかったが、建物跡4のピット72で見られたように底部ちかくで口縁をほぼ水平にした状態で出土した例から土師器小皿の中には、柱の沈下を防ぐ目的で意図的に置かれたものも含まれていると考える。

・ピット240 (図33)

調査区西端部で検出した直径20cm、深さ15cmの円形のピットである。埋土から土師器小皿、瓦器小皿、黒色土器等が出土した。黒色土器は内面にわずかにミガキを認めたが、外面の調整方法は器壁の磨滅がすすんでおり不明である。高台は断面が二等辺三角形にちかい形状で、やや外側に張り出している。手の字状口縁の土師器小皿は底部から体部にかけての立ち上がりの屈曲がわずかになり、口縁短部の立ち上がりもわずかになっている。これらの遺物の特徴からこの遺構の時期は、12世紀後葉に位置付けられる。

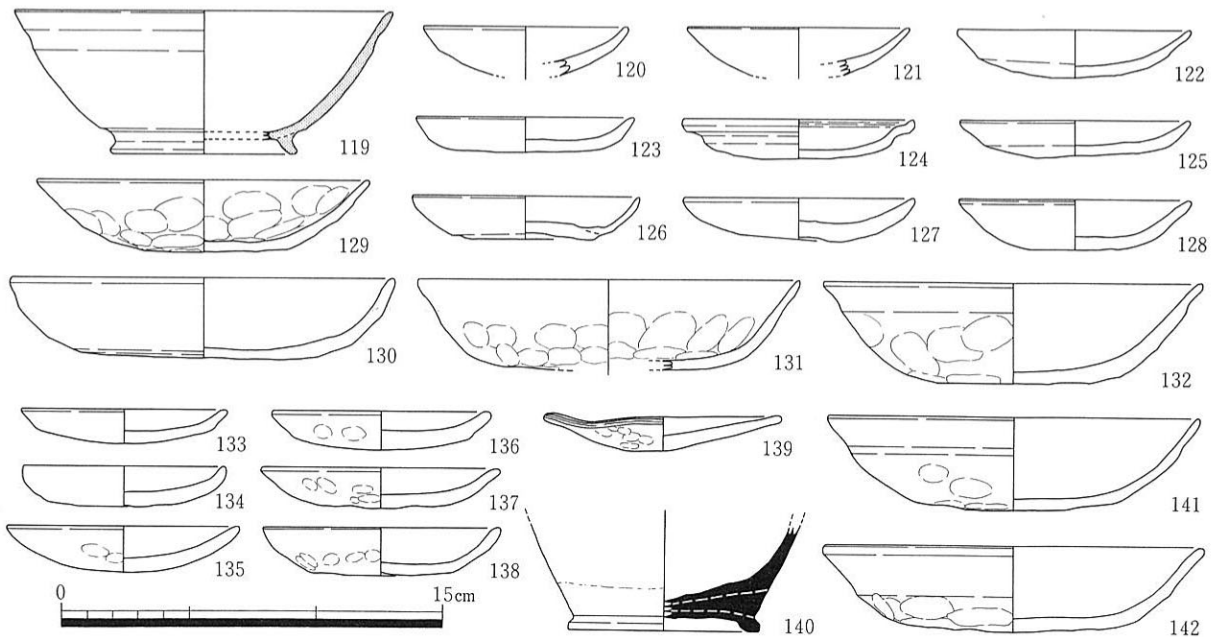
・溝381、382 (図34)

2区で検出した溝はいずれもほぼ南北方向である。381は幅50cm、深さ5cmを測り、382は幅20cm、深さ10cmの浅いものである。集落に属する区画溝であろうか。

142は溝382から出土したもので、口縁外面に強いヨコナデを施すため、体部中位でわずかに屈曲する。またその屈曲部から底部にかけての外面にはユビオサエが残存する。これらの特徴から12世紀ないし13世紀に属すると考える。

・溝26、溝360、溝365 (図34)

これらの溝は2区の南端ではほぼ東西方向に検出したが、現代の水路に切られているため幅は不明である。深さは最も深いところで約50cmである。溝をほりあげた後に溝底の斜変換点をたどって3つのパーツに分けているが、土層観察用断面図にみられる遺構の縦断面からもわかるように、もとは同一の溝で



119~132 : 溝360、133~141 : 溝26、142 : 溝382

図34 2区溝出土遺物

ある。数度にわたって掘りなおされ、溝幅や流れの方向が時期によってすこしづつ異なる遺構を、調査の段階で同時にほりあげてしまっているため、平面的に表現されている切り合い関係にはほとんど意味がない。溝の埋土には流水堆積の特徴が認められないことから、溝内の水は淀みがちだったと思われる。また土器の出土量が多く、2区で特にまとまって出土していることから、それらは居住区から廃棄された可能性がある。これら2点を考え合わせると、水路というよりはむしろ居住区を区画しつつ、排水をうながす溝だったと考える。

140は須恵器の壺の底部で、他の遺物に先行する時期のものである。全体の形状がわからないので時期比定はできないが、少なくとも10世紀台までさかのぼりうると考える。141は土師器の皿で、底部から体部にかけてはユビオサエの凹凸が認められる。口縁部には強い横なでが施され、外面がわずかに屈曲することから12世紀中頃のものと考えられる。他の遺物は土師器の小皿で12世紀中頃から14世紀後半までのいずれかの時期のものだが、細かい時期比定は困難である。119の黒色土器は平底ぎみの底部に、断面逆台形の高台を外反させてとりつけているもので、体部は直線的に立ち上がる。外面の口縁部を強くヨコナデしているため、わずかな屈曲が生じている。129の杯は平底から直線的に体部が立ち上がるもので、内外面とも底部から体部にかけてユビオサエの痕跡が顕著である。124は手の字状口縁の土師皿で、平底から体部が上方に立ち上がる。これらの遺物は形体的な特徴からみて、11世紀中頃に比定できる。これら11世紀代の遺物は、溝360部分の埋土（図5 11層）からまとまって出土した。

この溝は前節でもふれたように溝361と同一視できるので、後者の出土遺物とあわせて概観すると、溝の出現時期は10世紀中頃までさかのぼりうる。それ以降は繰り返し掘りなおされながら、13世紀前葉に埋没したと考えられる。この継続時期は集落の継続時期にほぼ対応するものである。

小結

2区では多数のピットのなかから、9棟の建物跡を復元した。ここではそれらの前後関係を検討する。建物跡のなかで、最も古い時期までさかのぼるのは、10世紀中頃の遺物を検出した溝（26、360、365）にきられている建物跡1、建物跡2である。建物跡1、2は立て替えの関係にあると考えられるが、その前後関係は不明である。その次に古いのは、溝（26、360、365）にほぼ平行するような位置を占める建物跡7で、柱穴から出土した黒色土器A類の碗から11世紀初頭の時期を与えられる。建物跡3は黒色土器B類の小型の碗から11世紀中頃の時期が当てられる。次に建物跡9柱穴からは12世紀前葉の遺物が出土しており、建物跡7に次ぐ時期が考えられる。建物跡4からは12世紀後葉の遺物が検出されており、これに次ぐ時期が当てられる。また、建物跡5は柱穴から出土した遺物に関しては細かな時期比定ができないが、建物跡4と建物の方向軸がほぼ一致していること、12世紀代の遺物を出土していることから、両者は同時期に併存していた可能性が高いと考える。また、建物跡8は出土遺物から時期を想定するのは困難ではあるが、建物跡9の底の延長上に建物跡8の東側が位置しており、建物跡の軸の方向も同一であるので建物跡9と同様12世紀前葉に比例できる。建物跡6については時期の特定は困難ではあるが建物跡3～5、7、8と同時に存在しないこと、また、破片ではあるが黒色土器のB類、および瓦器碗が出土していることから、建物跡7から9の間に存在していたと考えられる。

以上のことからこれらの遺構は、10世紀中頃から13世紀前葉までの間で大まかに7区分することができる。ただ上記の建物ないし杭列の復原案に属さない柱穴も多数あることから、実際にはさらに複数の建物跡や、その前後の時期に位置づけられる遺構があったと考える。

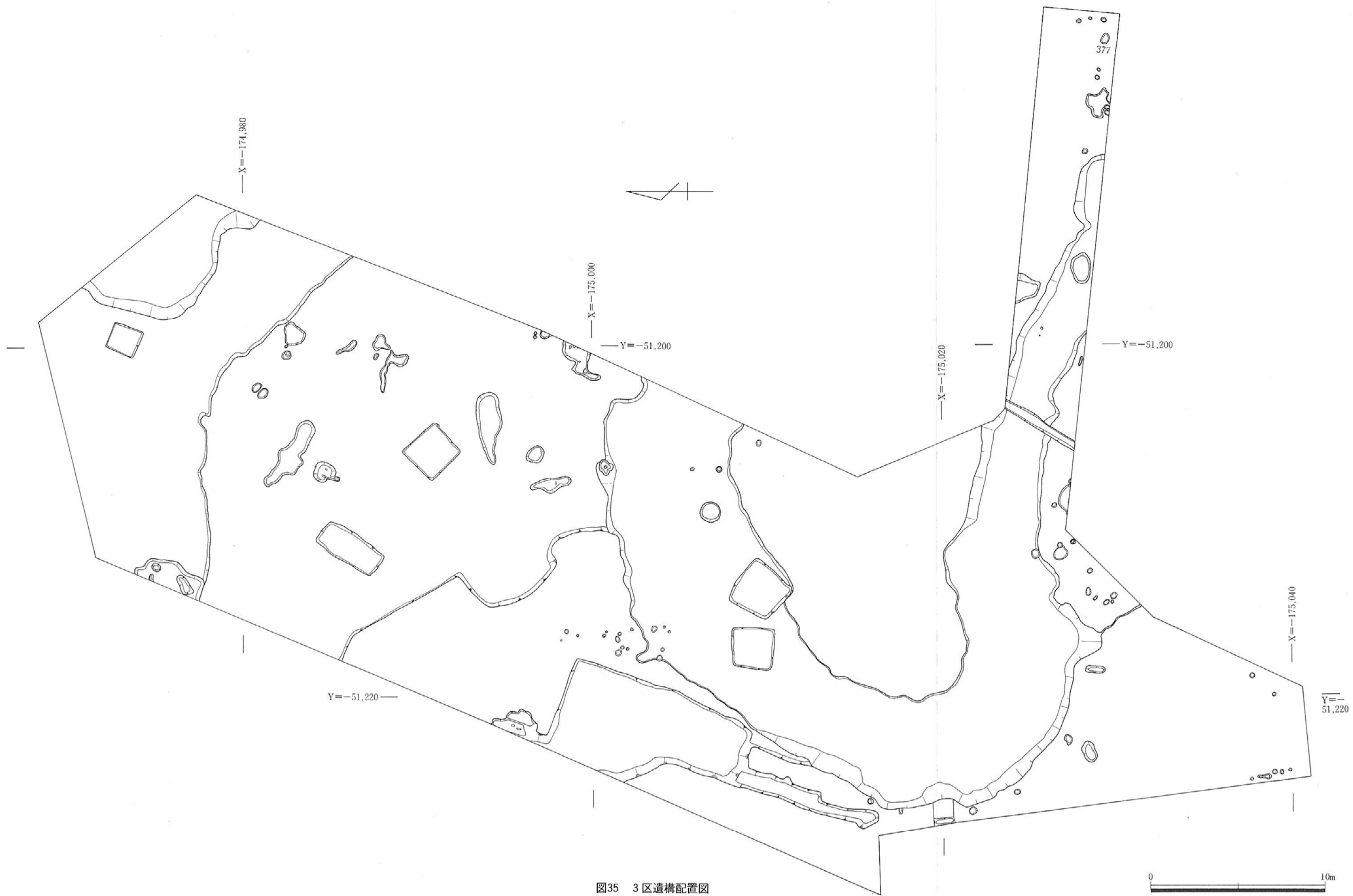


图35 3区遺構配置図

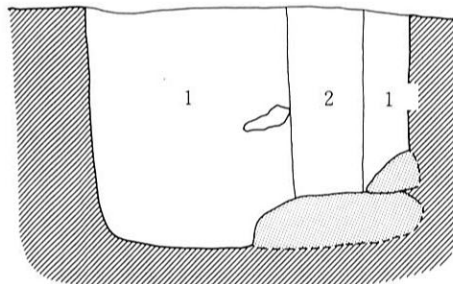
(3) 3区

調査区の東端で柱穴を数個検出したが、その他には注目すべき遺構を認めなかった。ここで検出した柱穴はごく一部に過ぎず、建物の本体はその南側にひろがっていたものとする。

調査区の北端部と東端部で谷側の斜面に盛土をほどこし、平坦面を拡張したことがわかった。東端部で検出した柱穴は盛土の上面から掘り込まれているため、盛土はそれ（13世紀前葉）以前にされたことがわかる。一方、北端部の盛土からは磁器片が出土しており、それより新しい時期のものである。



77.500 m



- ① 10 YR4/4 褐色 粗粒砂混シルト (Mn 含む)
- ② 10 YR4/2 灰黄褐色 細粒砂混シルト
(ベースの土がブロック状に混入する)

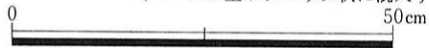


図36 土坑377平・断面図

・ピット337 (図36,37)

ピットの下部で原位置をたもった根石を検出し、さらにその下から13世紀後半の瓦器碗を1点検出した。瓦器碗は口縁部を下にして伏せた状態でおかれていた。これは明らかに根石を据える前に埋設されたものであることから、地鎮に関わる行為に伴って埋設されたと考える。

出土した瓦器碗は平底から体部が内湾しながら立ち上がり、断面逆三台形の高台を有する。内面にはしっかりとミガキがかけられているが、外面は体部にユビオサエによる凹凸があり、凹部にはミガキがおよんでいない。このような土器の特徴から、12世紀初頭ないし前葉に位置づけられる。

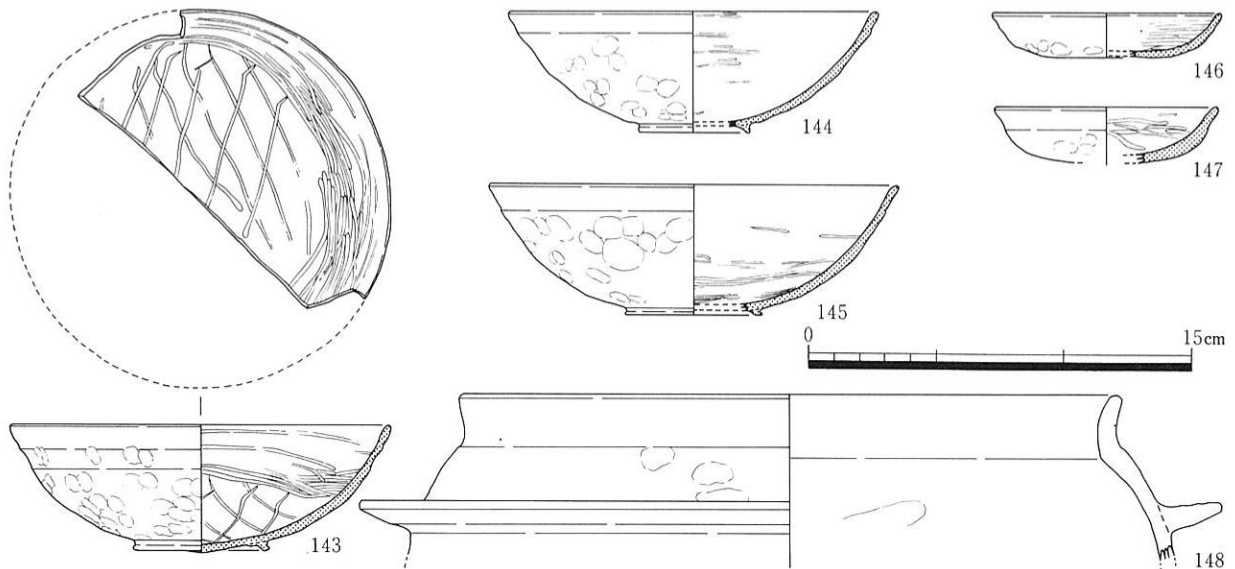


図37 土坑377出土遺物

・土坑427 (図38)

基盤層(地山)上面から掘り込まれた土坑があったと考えられるが、土器が出土した時にはすでに周辺の地山を10cmほど削り取ってしまっていたため、その形態や大きさは不明である。また遺構の位置する棚田の裾部は造成の際に地山を少なくとも40cmは削りこんでおり、その段階でも土坑の上部は削平されていたと考える。したがって検出した遺物は、土坑の底部近くに含まれていた遺物と考えられる。

出土した遺物はすべて土師器の小皿である。うち(150)は外面の口縁直下から体部上半にかけての部分に強いヨコナデがみとめられる。

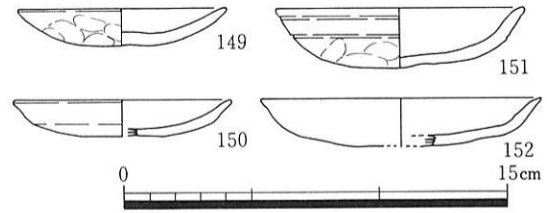
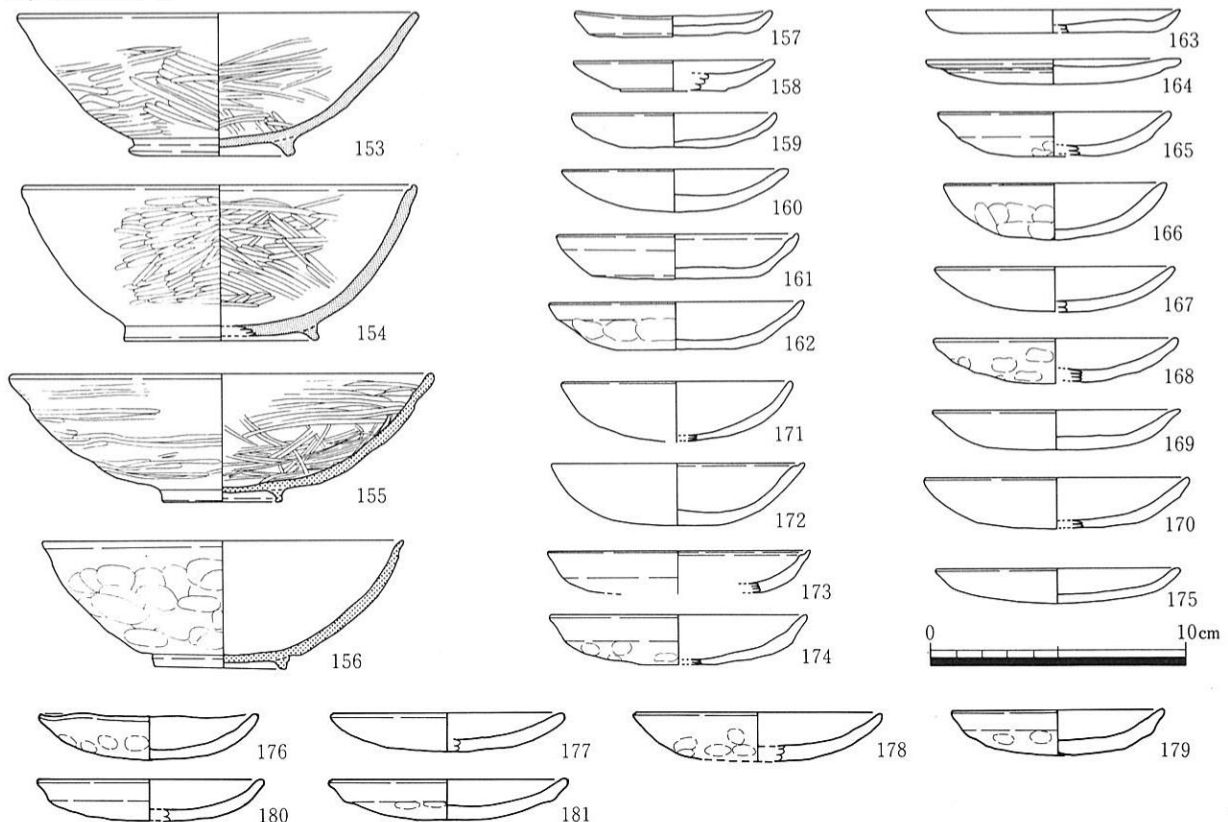


図38 土坑427出土遺物

小結

3区では東端部でわずかに柱穴を検出したにすぎない。これは1区下段で検出された柱穴と関連する建物群に伴うものであろう。2区に隣接する部分では棚田の造成に伴い地山が40cm近く削りこまれているため、削平されたものもあったと考える。

柱穴は平坦面を拡張するために行われた盛土の上面でも検出されている。したがって13世紀前半にはすでに現在の地形にちかい形状まで造成がすすんでいた可能性もある。空間的に限られた条件のもとで居住域を充実させるため、斜面に盛土をして平坦面を拡張したと考えられるが、これに関しては第4項で後述したい。



153~162: 2層、163~170: 3層、171~174: 4層、175溝側、176~181: 3層(5区)

図39 包含層出土遺物

第3節 遺物

(1) 包含層出土遺物

153、154は黒色土器B類碗である。154は内外面ともにヘラミガキを施す。口縁端部内側には沈線をもつ。155、156は瓦器碗である。155体部外面は口縁部付近を広く横ナデし段をもつ。ヘラミガキは見られるものの、疎であり指押さえの痕跡が残る。156は器壁の磨耗が著しく、内外面ともに調整は不明瞭である。口縁部外面はヨコナデを施す。157から176は土師皿である。土師皿は非常に多くのヴァリエーションをもつものが出土している。157、163は非常に平らな底部をなし、短かく口縁部が屈曲する。158は底部に回転糸切りの痕跡を残すものである。胎土は非常に精緻であり、淡黄褐色を呈する。164は手の字状の口縁を呈するものである。161、172、173は平らな底部から上外方にのびる口縁をもち、口縁端部内側には沈線をもつ。160、169は同様に平らな底部から上外方にのびる口縁をもつが口縁端部は面をもつ。159、166、167、168、171はやや丸い底部から緩やかに屈曲しやや内碗気味の口縁部をもつ。162、165、170、174は平らな底部から緩やかに屈曲する。体部下半は指押さえ、上方はヨコナデを呈し明瞭な稜をもつ。口縁端部は外反する。170はやや丸い底部に短い口縁が上外方にのびる。

176から181は5区の包含層から出土した土師皿である。176から178はやや丸い底部から緩やかに屈曲しやや内碗気味の口縁部をもつ。179から181は平らな底部から緩やかに屈曲する。体部下半は指押さえ、上方はヨコナデを呈する。

(2) 石器

今回出土した石器のうち大半は素材剥片が占める。いずれの石器も包含層ないし溝1の埋土に含まれており、帰属時期を明確にできるものはない。1区、2区では2層および3層の上部から縄文土器の細片がわずかに出土していることから、石器に関してもその時期までさかのぼるものが含まれる可能性がある。

183と184は接合資料で、いずれも側溝掘削時に検出した。検出時の状況から地山上層に含まれていたと考えられる。こぶし大のサヌカイト亜角礫を石核として使用した結果、生じたものと考えられる。打面調整を行った形跡はみられず、礫面に直接打撃を加えながら、大きさや形状がふぞろいな剥片をとっていたようである。最終的に184のa面に加えられた打撃により、石核の厚さを半分削ぐような形で184の剥片が生じ、183が残核として放棄されたとみられる。(182は183と184の接合状態)

185・186はいずれも、直接礫面に打撃を加えてわりとった剥片で、調整剥離は行われていない。これらもほとんど打面調整をしないサヌカイトの亜角礫から生じたものと考えられる。187は、b面に平坦な主要剥離面が大きく残っていることから、もとはさらに大きな剥片だったものを、石核に転用した可能性がある。ただ縁辺部の剥離痕はいずれも折れ、もしくは階段状剥離からなり、有効な素材剥片をとることができたとは考えにくい。したがって、有効な素材剥片をとることができなくなった状態で廃棄された石核、もしくは何らかの石器を制作する途上で廃棄されたものと考えられる。

188は平面形体が隅丸方形で、そのうちの一边に片面だけ調整剥離を施して、刃部をつくりだしている。刃部をのぞく2辺には礫面が残る。189は帰属時期を断定することはできないが、他の石器ほど風

化が進んでいないこと、縄文時代に該当する器種がみあたらないことから、弥生時代中期以降に確立する「石槍」とみて差し支えないだろう。b面の中央に大きく主要剥離面が残ることから、横長剥片の形状を生かし、成形のための手間を極力はぶきながら製作されたものであることがわかる。190は切っ先と片方の逆刺の先端部が欠損している。風化が著しく、全体に磨滅している。基部のえぐりは比較的深い。逆刺は丸みをおびる。縄文時代に多くみられる形態の石鏃である。191は先端部がわずかに欠損するのに加え、片方の逆刺が根元から欠損する。両面とも明瞭な鑄はとおらない。基部のえぐりは比較的深く、逆刺は鋭くてシャープな印象を受ける。縄文時代から弥生時代前期までの時期に多く見られる石鏃である。193は石匙である。打面は自然面である。刃部は背面からのみ調整剥離を行っている。

192、194～196は5区出土のものである。192は石鏃である。全体に非常に風化している。縁辺部にやや大きく調整を加えているが全体に及んでおらず、未製品の可能性もある。194はスクレーパーである。両面から連続した調整剥離を行っている。195、196は石槍未製品である。195は片面に自然面を残している。片方の側縁は片面から大きく剥離作業を行い成形している。196は片方の側面は両面から非常に細かく連続した調整剥離を行っており、もう一辺は両面から大きく剥離作業を行って成形しているが、中央部分の高まりをとりぞくくことができなかつたようである。あるいはスクレーパーの可能性もある。

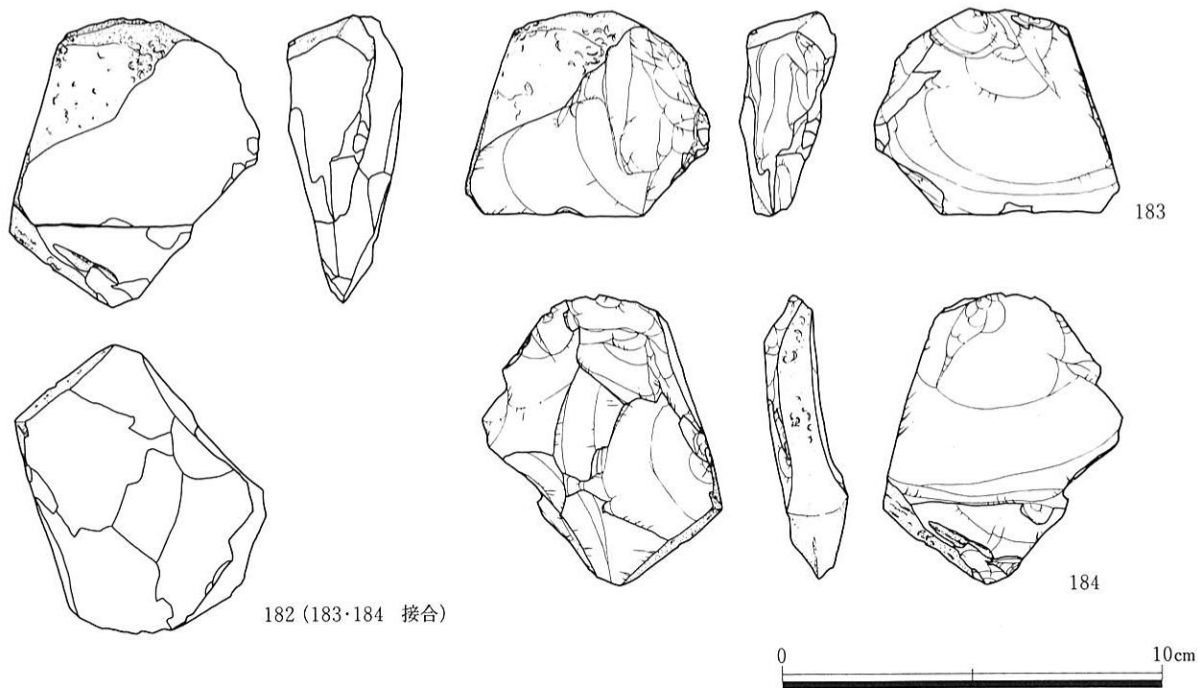


図40 出土石器(1)

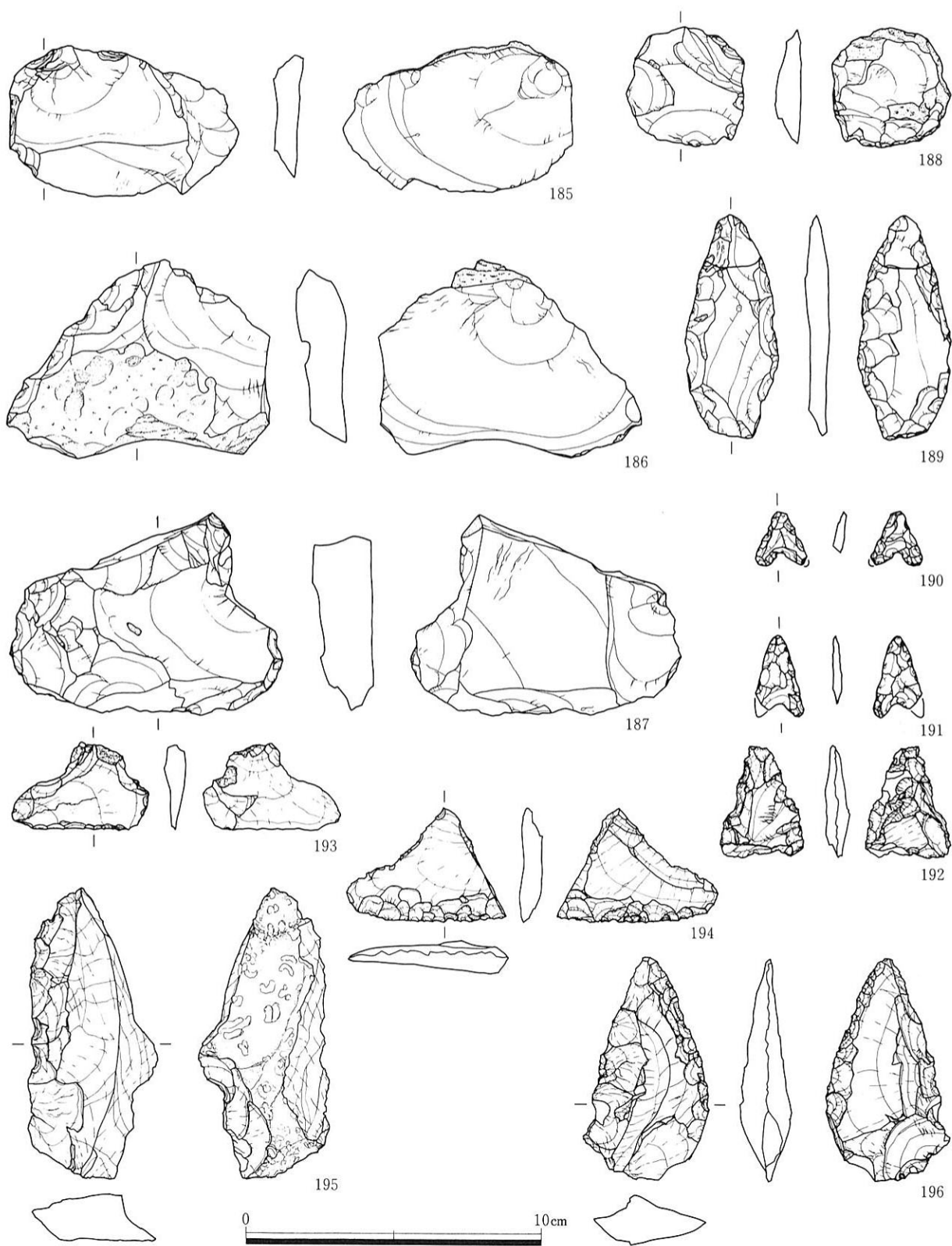


图41 出土石器 (2)

第4節 まとめ

山直谷における土地利用の変遷のなかで、宮の後遺跡がどのように位置づけられるかを、時間的・空間的な視座から検討したい。ただしこの記述の大半は、発掘調査がすでに行われている、宮の後遺跡から北の地域を対象としている。

山直谷はサヌカイトを採取できるコソ谷に近いことから、縄文時代には打製石器の製作址が散見される。おそらく打製石器の製作にかかわる人々のキャンプサイトが点在していたと思われる。当遺跡で検出したサヌカイトの接合資料も縄文時代までさかのぼる可能性があるが、包含層資料のため断定はできない。弥生時代になると沖積平野では、水田開発にともなう人口増加がおり、遺跡数が急増する。しかし水利施設の開発に技術をようする段丘上や谷地形にまで水田が拡大するまでにはまだ時間が必要だったようである。弥生時代後期になると山之内・山直北遺跡などで集落を認めることができるが、それほど大規模なものではなかったようだ。おそらく水がかりの良い場所を選んで、部分的に谷水田を開発したのだろう。古墳時代前期になると三田遺跡のような集落遺跡が出現するとともに、近くでは摩湯山古墳が築かれる。したがってこの時期になると山直谷の開口部に地域の核となる集落が出現したことがわかる。このような動きに合わせて、山直谷でも遺跡数が増加する。7世紀代には水込遺跡で墨書土器・硯等の遺物、掘立柱建物のような遺構や遺物を検出している。これが律令期における、山直谷の中心地だったと考えられる。8～9世紀に山直谷で集落遺跡が増加するのは、律令制に伴って口分田が開発されたことによると考える。

山直北遺跡や三田遺跡では8世紀から11世紀までの間、官衙的要素を帯びた遺物を出土する。これらの遺跡から古代末における、在地豪族の居館跡とその縁辺部に点在する小村落の様子を知ることができる。ただこれらは山直谷の開口部の北側にひろがる扇状地上に存在する。そのため一度は山直谷の奥部まで進んだ開発の波が、この時期また谷の入口までおしもどされてしまったような印象を受ける。実際に山直谷では、10世紀から13世紀までの時期に集落遺跡がほとんど認められなくなる。

このような現象は山直谷に限ってみられるのではなく、律令制の衰退期には各地でみられたようである。黒田日出男氏は10世紀後半になると、荒野という言葉が資料上に豊富に見いだされるようになることにふれ、それが「『私領』『所領』『領主』『領掌』『領地』など『領』の用語が10世紀以降に急速にふえてくるのと軌を一にした現象である」ことを指摘している。さらに黒田氏は、荒野が必ずしも未墾地ではないこと、それが中世的開発の対象となったこと、荒野と認定されることで所領寄進が正当化されたことをのべている。

古代から中世にかけての再編期は、まさに山直谷の空白期間に重なると言える。それはかつて耕された土地が無人化し、自然にかえりつつあった時期と重なるだろう。おそらく山直谷のように、丘陵地に櫛の目のように谷あい水田が入り込んでいるような場所では、完備された水利施設をもたなければ、多少の降雨量の変化にも大きな影響を受けたであろう。このため公地公民の制度がくずれていくなかにあっては、比較的早い段階に耕地が放棄されていったのではないだろうか。

その中であって唯一、宮の後遺跡では10世紀後半に集落が形成されはじめる。この時期における集落の成立要因は何だったのだろうか。古代末から中世初頭の段階では、寺社や権門貴族のもつ不輸租田が荘園保有の根拠となっていく。当遺跡では式内社である積川神社とのかかわりから、租税の一部を免除されるような既得権をもった人々によって、集落が営まれた可能性は考えられないだろうか。積川神社

の成立時期に関しては、詳しいことはわかっていない。ただ積川神社のすぐ北側にある牛滝川とその支流の合流地点は、ふるくから信仰の対象となっていたようである。古くは聖武天皇の時代に雨乞いの儀式が執り行われたことが、日本記略に記されている。

宮の後遺跡の集落は10世紀に形勢されはじめたが、それが本格化したのは12世紀半ばに入ってからのことである。これはちょうど積川神社が、養和元年（1181）に「今熊野社領諸国莊園28ヶ所の一つとして寄進され、（後白河）院の熊野信仰を支える末社莊園の役割を担うようになった」（岸和田市史第6巻）時期と連動する。『大阪府史跡名勝天然記念物』には「白河上皇、熊野行幸のとき、八木村大字額原に於て、本社を○拜あらせられ、芝草を積みて、舞台となし、舞学を奏せしめ給ひし時、上皇傍の鳥居に掲げる扁額の筆跡の拙きをみそなはせられ、親ら筆を執りて『正一位 積川大神』の八字を大書して、之に代えさせ給ひしという」という記述がみえる。またその時の額と伝えられるものが今日まで残されており、両者の関係がうかがえる。つまり後白河上皇の熊野行幸をきっかけとして、積川神社は中央とのつながりを強化したのである。

12世紀半ばに積川神社が中央とつながりを深めた背景として、莊園開発とその経営にかかわる問題を考慮しなければならない。石部正志氏によると初期莊園の段階では、寺社や王臣家から派遣された莊官が莊園内の館（莊家）で事務処理にあたったが、その際にも古くからの共同体首長の系譜を引く在地の有力者の仲立ちが必要とされた。これを山直谷にあてはめて考えると、積川神社が都の神祇官につらなることで、中央と在地をつなぐパイプ役を果たしたとみることもできるのではないだろうか。

次に2区における建物跡群に目を転じてみよう。各建物跡群と杭列の前後関係に関しては第2項でまとめたので、ここでは谷全体の景観からそれらをとらえなおしたい。この調査区で検出した建物跡には大きく分けて2種類の方向性が認められる。一つはほぼ南北方向を示すもの、あと一つは座標北に対して9度～11度西にふるものである。これらの方向にはある程度の斉一性が認められるので、建物は計画的に建てられたと考えられる。それではなぜ方向軸に2種類あるのだろうか。これに関しては2つの可能性を考える。

一つは地形から建物の方向軸が決められた可能性である。宮の後遺跡が位置する段丘は牛滝川にそって南北方向に細長くのびるため、それに平行して建物を建てればある程度南北方向を指向したものになるだろう。二つめは周辺の条里地割りの方向性からの影響である。

山直谷では谷の北半と南半とで条里の方向が異なる。前者は座標北に対して約20～30度西にふるのに対し、後者はほぼ座標の南北方向に沿うものである。現在の地図をみても、前者は三田から稲葉にかけて明確に認められるのにたいし、後者は内畑地区で明確に残っている。このような差異は、地形的な制約から生じた可能性が高いと考える。積川はそれらの条里が接する部分に位置する。どちらかと言えば南北方向の条里地割りが優勢とも言えるが、どちらとも言えない部分もある。したがってこの地域では条理地割の方向性が一定せず、時期により変化した可能性は充分ある。座標北に対して9～11度西にふる建物軸が、かならずしも山直谷北半の条理と一致するわけではないが、建物の方向軸が一定しない理由として、この地域が異なった方向の条理地割の接する部分であることがあげられる。

宮の後遺跡では13世紀前葉にもう一つのピークが認められる。13世紀になると当遺跡のみならず、谷の北半部でも集落数が急増する。したがって山直地区において丘陵開発が本格化したのはこの時期と考えられる。さらに当遺跡では13世紀になると、平坦地を拡張するために地盤の高い所を削平し、その土を斜面に盛りつけるという方法で造成が行われた。調査区東端で検出した地鎮行為を伴う柱穴は、この

盛土の上面で検出したものである。建物をたてるスペースを確保するにあたり、わざわざそのようなことをしているのはなぜだろうか。おそらく空間を南に拡大できないような、何らかの制約をうけていた可能性がある。しかしそれはかならずしも外的な制約ではなく、内的な規制だった可能性もある。つまり積川神社との関係でみると、宗教的な意味合いの強い土地に対するテリトリーの誇示にちかいものだった可能性も指摘できる。

宮の後遺跡は13世紀中頃に遺構ないし遺物がとだえる。山直谷の再開発のピークがむしろ13世紀後葉にみられることと比較すると、これはむしろ対照的な現象である。宮の後遺跡で集落が断絶ないし移動したあとは、平坦地を拡張しながら棚田が造成された。それ以降は同様の作業を繰り返しながら、現在にいたるまでもっぱら耕地として利用されたようである。棚田の造成を契機に、集落は丘陵上に移動していったのであろうか。

第4章 中之社遺跡

第1節 基本層序

調査区は北から1～4区と位置している。(図42) 基盤層は様々な様相をみせており一定ではない。周囲の河川や段丘上からの水の流入が繰り返されて、浸食、堆積をしていたことが分かる。しかし、近現代においては、耕作地として利用されており、一定した堆積が見られる。

- ・ 1層 現代の耕作土・床土からなる。層厚約20cmを測る。現代はこの辺りは棚田として利用されている。
- ・ 2層 砂礫混じりシルトを主体とする耕作土と床土のセット数枚からなる。現在の棚田に対応する形で堆積している。近世～中世の遺物を含む。層厚は約10cm～40cmを呈する。
- ・ 3層 細砂～礫混じりシルトを主体とする。水の作用により、一時期に堆積したと考えられる。4区南側では整地層が残る。中世の遺物を含む。層厚は約10cm～約30cmを測る。
- ・ 4層 2区南側及び3区、4区北側で確認することができた。細砂混じりシルトを主体とする。層厚10cm～40cmを測る。4層はさらに細分することができ、下層を4b層とした。(その3)では4b層を更に細分し、下層を4c層とした。これら4層は調査区を北西方向に横断する谷状の落ち込みに堆積したものと考えられる。4層内からは縄文時代中期後葉～弥生時代の遺物を出土している。
- ・ 基盤層 自然堆積層である。主に黄褐色のシルト層、礫層、青灰色のシルトからなる。1区では南側に基盤となる礫層があり、北側では、シルトが主体となる。2区では、北側は礫層、南側はシルト層からなる。3区では黄褐色のシルト層が主体となるが、南側では砂礫が多く混じる。4区では北側は砂礫混じりシルト、中央はシルト、南側は礫層となっている。牛滝川と宮川がもたらした土砂は非常に複雑な堆積を見せており、当調査区においては一様ではない。

また調査区は南から北に向かって緩やかな傾斜をもつ。基盤層上面は調査区の北側T.P.+75.500mと南側T.P.+70.400mを測り、比高差は約5mに及ぶ。

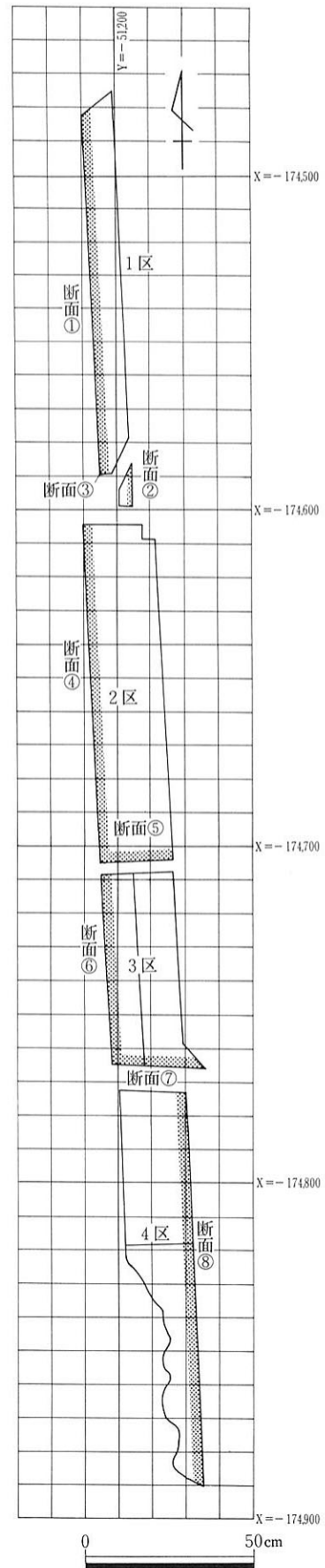


図42 中之社遺跡地区割図

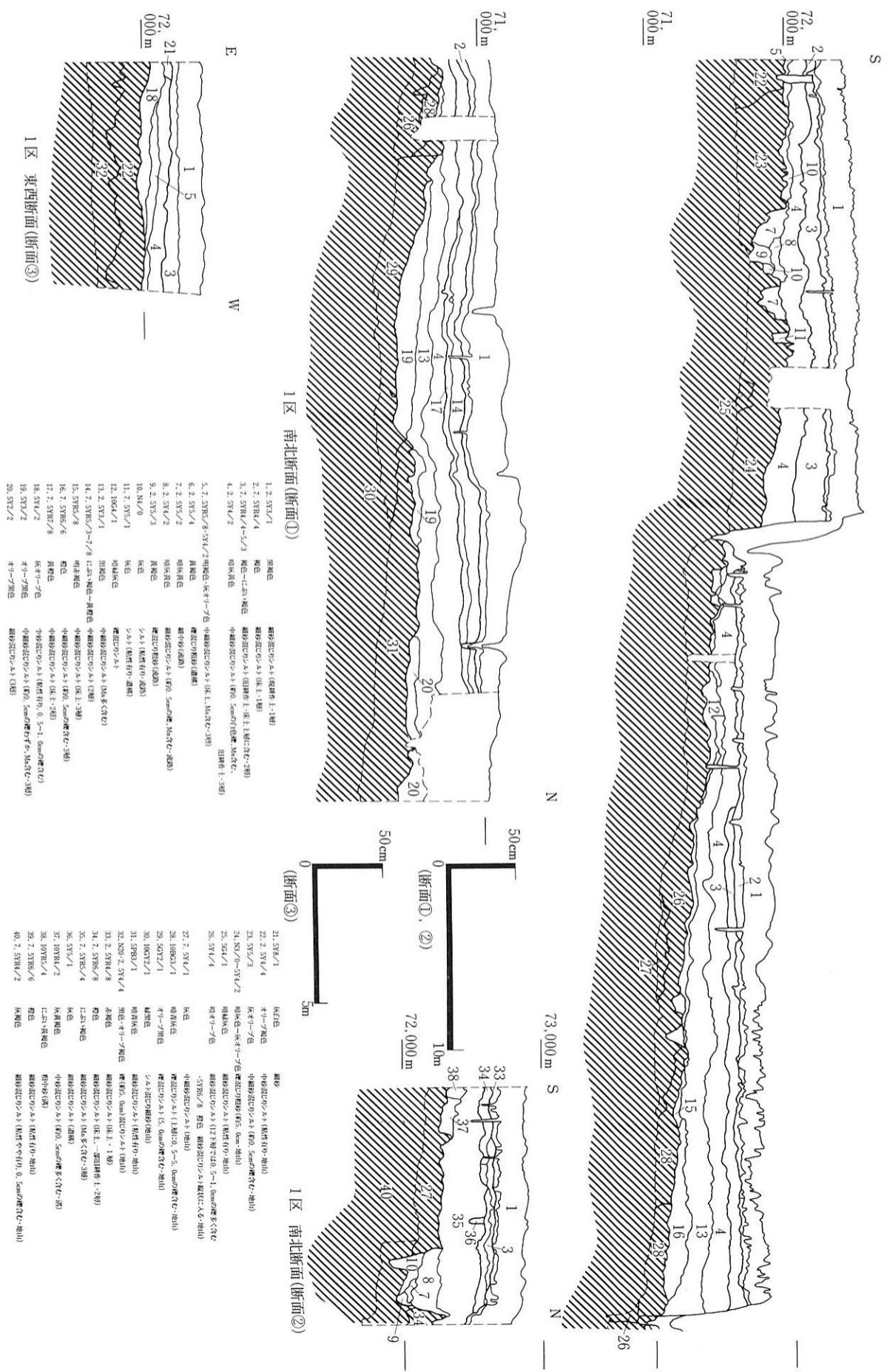


図43 1区土層断面図

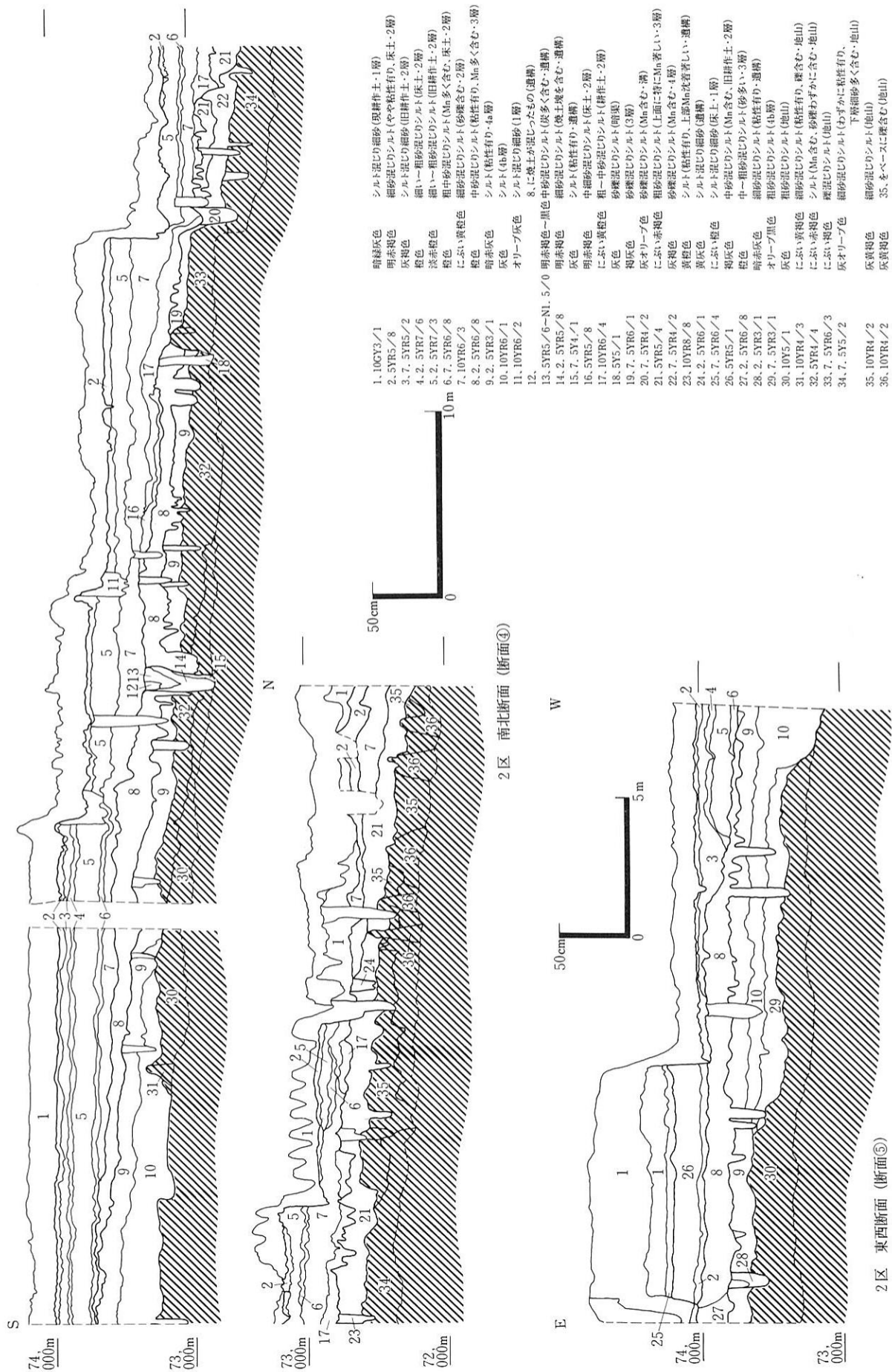
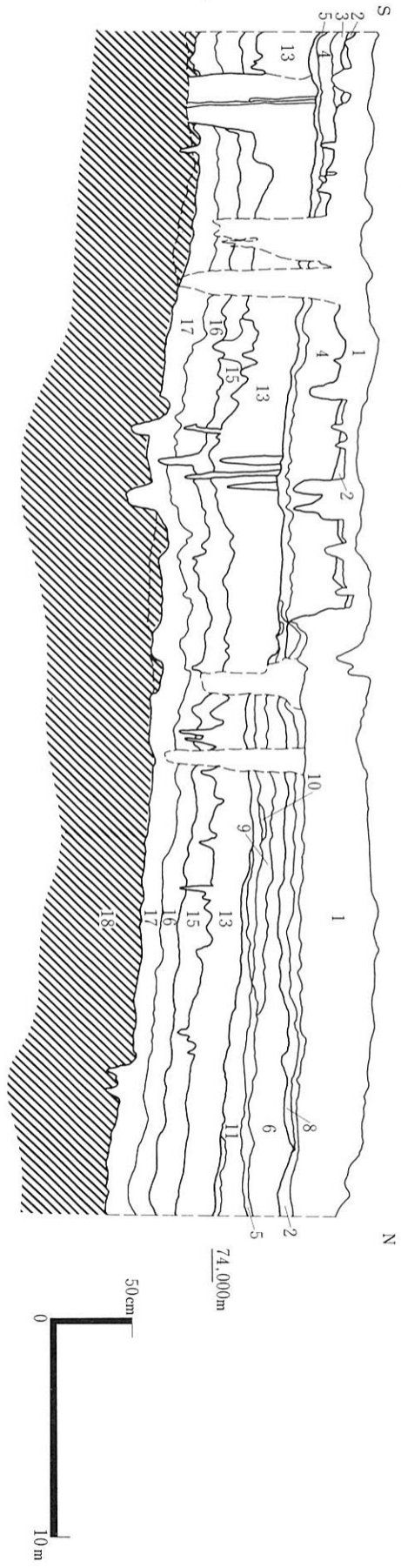
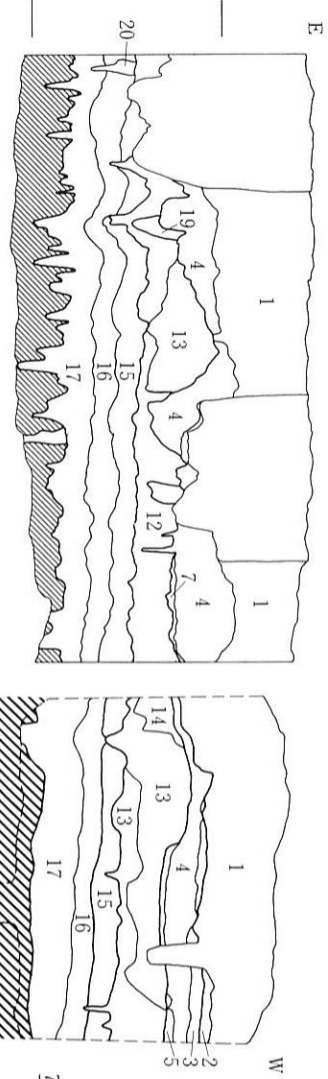


図44 2区土層断面図



3区 南北断面 (断面⑥)

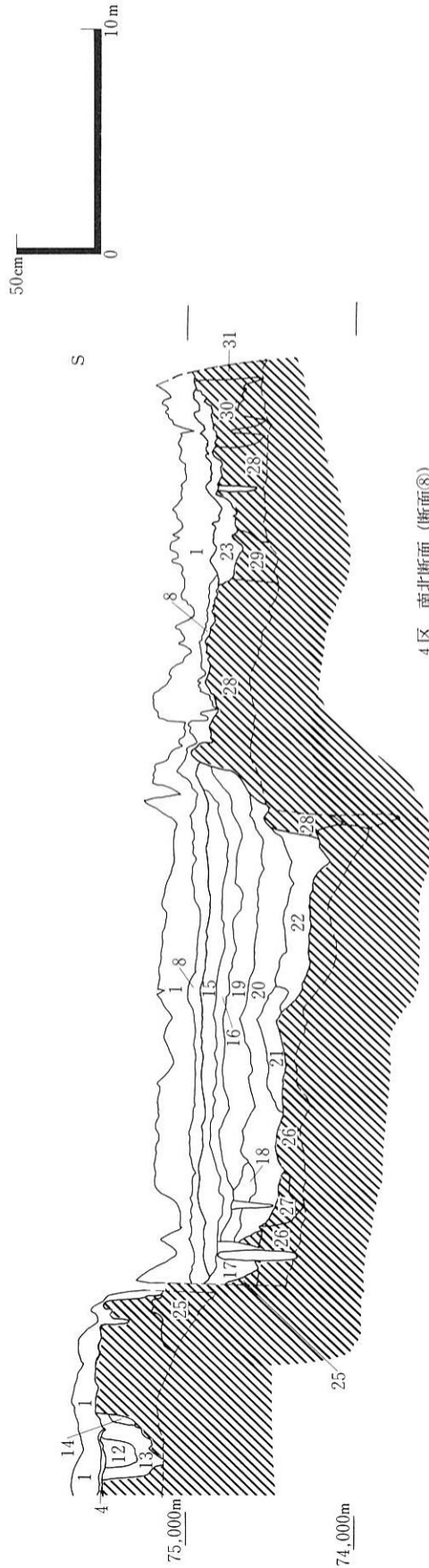
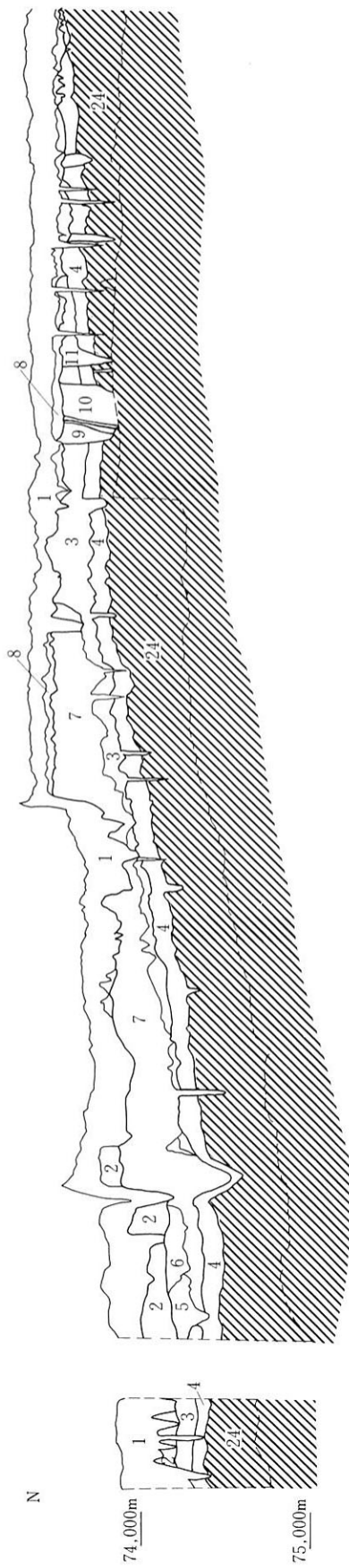


3区 東西断面 (断面⑦)



- | | | |
|---------------|--------|---------------------------------|
| 1. 5YR6/1 | 褐灰色 | シルト混じり細砂 (現耕作土・1層・カララン) |
| 2. 2. 5YR6/8 | 橙色 | シルト混じり細砂 (床土・1層) |
| 3. 2. 5YR6/8 | 橙色 | シルト混じり細砂 (床土+耕作土・2層) |
| 4. 5YR7/4 | にぶい橙色 | 砂礫混じり細砂 (2層) |
| 5. 2. 5YR7/8 | 橙色 | シルト混じり細砂 (旧耕作土・2層) |
| 6. 2. 5YR8/6 | 黄色 | シルト混じり細砂 (旧耕作土・2層) |
| 7. 5YR7/8 | 橙色 | 砂礫混じり細砂 (2層) |
| 8. 5YR7/6 | 橙色 | シルト混じり細砂 (床土・1層) |
| 9. 10YR7/4 | にぶい黄褐色 | シルト混じり細砂 (2層) |
| 10. 5YR7/8 | 橙色 | シルト混じり細砂 (床土・2層) |
| 11. 5YR7/2 | 明褐色 | シルト混じり細砂 (旧耕作土・2層) |
| 12. 10YR7/6 | 明黄褐色 | 粗〜細砂混じりシルト (3層) |
| 13. 10YR7/6 | 明黄褐色 | 礫〜粗砂混じりシルト (3層) |
| 14. 10YR4/1 | 褐色 | 粗砂 (礫多く含む・3層) |
| 15. 10YR3/3 | 暗褐色 | 細砂混じりシルト (しまる、粘性有り、Mn、砂礫含む・4a層) |
| 16. 10YR5/6 | 黄褐色 | 細砂混じりシルト (粘性有り・砂礫含む・4b層) |
| 17. 10YR4/4 | 褐色 | 細砂混じりシルト (地山) |
| 18. 2. 5Y6/8 | 明黄褐色 | 細砂混じりシルト (炭多く含む・連構) |
| 19. 7. 5YR5/3 | にぶい褐色 | 細砂混じりシルト (炭多く含む・連構) |
| 20. 10YR6/4 | にぶい黄褐色 | 細砂混じりシルト (連構) |

図45 3区土層断面図



4区 南北断面 (断面⑧)

1. 5YR3/1	暗褐色	粗-粗砂混じりシルト(硬結粘土・1層)	11. 7. 5YR3/2-3/1	暗褐色	粗砂(上部は中砂)(Mn含む・遺構)	21. 7. 5YR3/4	暗褐色	細砂混じりシルト(遺物, Mn非常に多く含む・遺跡)
2. 10YR5/2	灰黄褐色	細中砂(2層)	12. 10YR7/6	明黄褐色	細-粗砂混じりシルト(3.に非常に風る)	22. 5YR5/2	灰褐色	細砂混じりシルト(上部にMnの沈着有り・遺跡)
3. 10YR6/6	明黄褐色	粗-粗砂混じりシルト(1層)	13. 10YR7/6	明黄褐色	細-粗砂混じりシルト(3.に非常に風る, 砂多い)	23. 5YR3/2	暗赤褐色	細-中砂混じりシルト(2層)
4. 10YR3/3	暗褐色	細砂混じりシルト(1層)	14. 10YR4/2	灰黄褐色	細砂混じりシルト(4.に非常に風る, 粘性有り)	24. 10YR6/8	明黄褐色	細砂混じりシルト(1層)
5. 10YR7/6	明黄褐色	砂様混じり細砂	15. 2. 5Y6/2	灰黄色	細中砂混じりシルト(砂様わずかに含む, 田舎粘土・2層)	25. 7. 5YR4/4	褐色	細-粗砂混じりシルト(シルトをブロック状に含む粘性の強い部分有り・地山)
6. 10YR6/8	明黄褐色	中粗砂混じりシルト	16. 7. 5YR6/8	藍色	細中砂混じりシルト(砂様わずかに含む, 灰土・2層)	26. 7. 5YR7/2	明褐色	シルト混じり細砂(一部層粗砂・地山)
7. 10YR7/6	明黄褐色	粗-粗砂混じりシルト(部分的に礫を非常に多く含む, Mn含む)	17. 2. 5Y5/2	明灰黄色	シルト混じり中細砂	27. 5YR5/2	灰褐色	シルト混じり中細砂(Mn, 砂様含む・地山)
8. 7. 5YR7/8	黄褐色	粗-粗砂混じりシルト(灰土・1層)	18. 5Y5/2	灰オリーブ色	細砂混じりシルト(多くはMn, Mn, 砂様多く含む, やや粘性有り)	28. 5YR5/8-5/6	明赤褐色	シルト混じり細砂(地山)
9. 10YR7/8	黄褐色	粗砂混じりシルト-粗砂混じりシルト(3.と基本的には同じであるが5.0cm未満の石, 砂様を多く含む)	19. 7. 5YR5/2	灰褐色	粗-粗砂混じりシルト(Mn, 砂様下に含む・遺跡)	29. 5Y4/2	灰オリーブ色	シルト混じり細砂(地山)
10. 10YR7/8	黄褐色	粗中砂混じりシルト(砂様Mn多く含む, 砂多い)	20. 7. 5YR5/3	にんじり褐色	粗-粗砂混じりシルト(Mn, 砂様, 灰含む・遺跡)	30. 2. 5Y4/2	暗灰黄色	細砂混じりシルト(礫含む・地山)
						31. 2. 5Y8/6	黄色	細-粗砂混じりシルト(礫含む・地山)

図46 4区土層断面図

第2節 調査成果の概要

(1) 1区

1区は他の調査区に比べても複雑な堆積状態が見られた。基本的には耕作土と床土の互層が見られ、それを除去すると基盤層にいたる。基盤層は北側ではシルトの堆積が見られたが、南側では砂礫層が基盤層となる。

3層上面

耕作に伴う溝が検出された。

基盤層上面

流路、ピット、土坑を検出した。遺構は、遺物をほとんど含まず、時期の特定はできない。包含層中から、石鏃、土師器、須恵器、瓦器、銭が出土している。

(2) 2区

3層上面

耕作に伴う溝、杭列、溝、ピット、土坑、井戸を検出した。主な遺構は調査区の南東側に集中している。これは、調査区の南東側は2区の中で一番高い棚田であり3層上面の遺構が削掘されることが少なかった結果と考えられる。調査区の北側及び南西側は耕作に伴う溝、ピットが検出された。

・溝2-1 (図51)

調査区の南東で検出された。幅25cm、深さ7cmを測る。南北に15mはしり、西側にL字状に曲がり6.5m確認することができる。溝の中からは瓦器碗及び瓦器皿が出土した。これらの遺物は間隔をもって並んでいる状態であった。溝はかなり削平を受けており、検出時にはすでに瓦器碗等が露出している状況であった。

出土遺物(図51) 197~205である。198は瓦器皿である。磨滅しているが見込みには平行線状の暗紋を施す。それ以外は瓦器碗である。瓦器碗はは全体に磨滅が著しく、磨きや見込みの暗文など確認できないものが多かった。外面には指頭圧痕が多く残り、ヘラミガキはほとんど確認できない。口縁部外面はナデを施す。内面はわずかに磨きを確認できるものがあり、202、203では見込み部分に格子状の暗文を施している。直径約15cm、器高約5cm、底径4.5cm前後を測る。197、201はやや直径が小さい。高台は低く断面三角形、あるいは断面台形を呈する。

・溝2-34 (図51)

幅25cm、深さ4cmを測る。東西に5m確認された。溝2-2と直行する地点では瓦器碗が4個体並んで検出されている。外側の2つは底部を上、内側の2つは口縁部を上に出された。

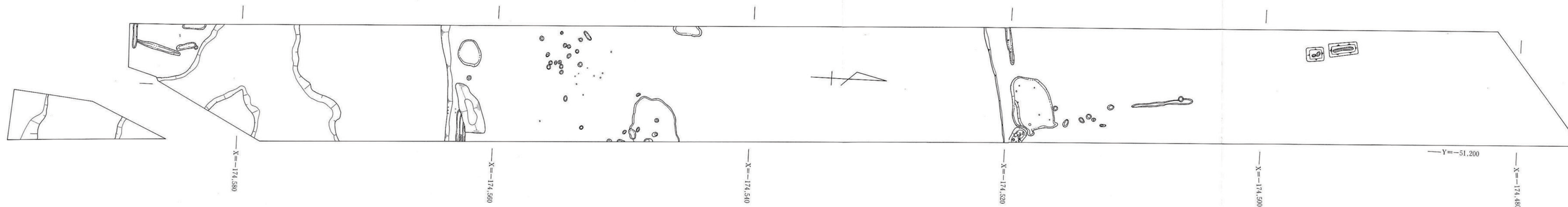


图47 1区基盘层上面遗构配置图



图48 2区3层上面遗构配置图

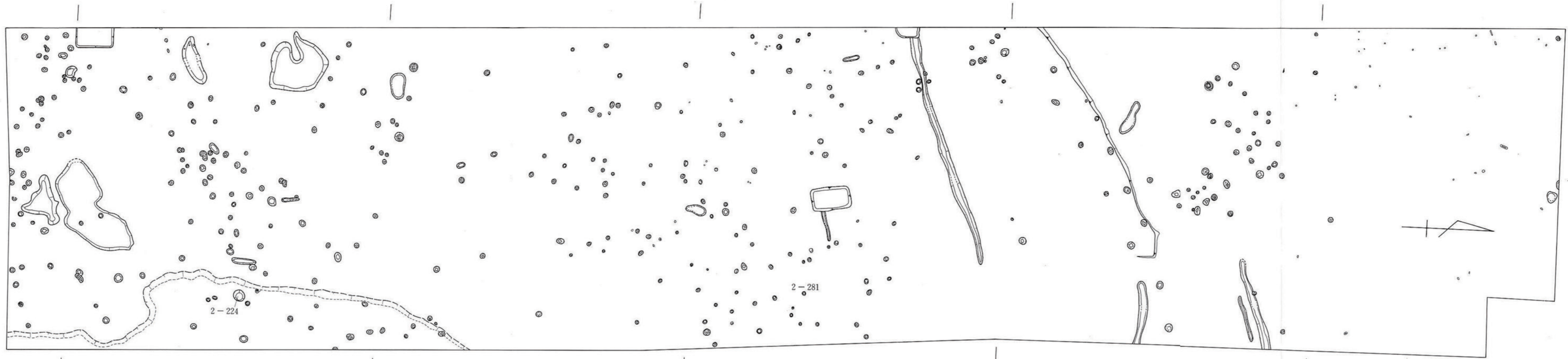


图49 2区4层上面遺構配置図

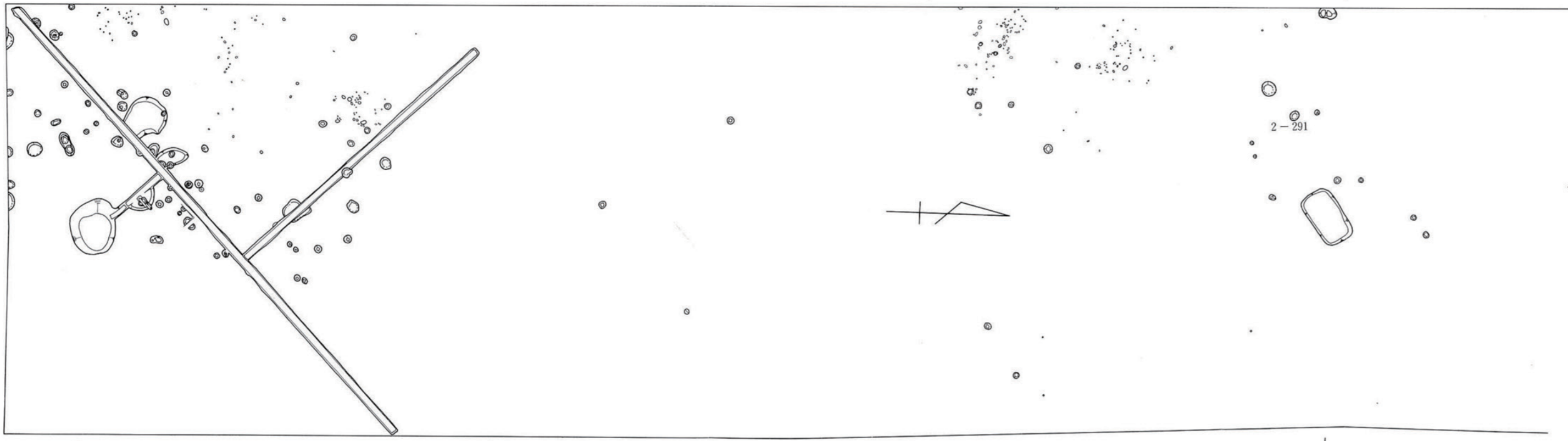


图50 2区基盤層上面遺構配置図



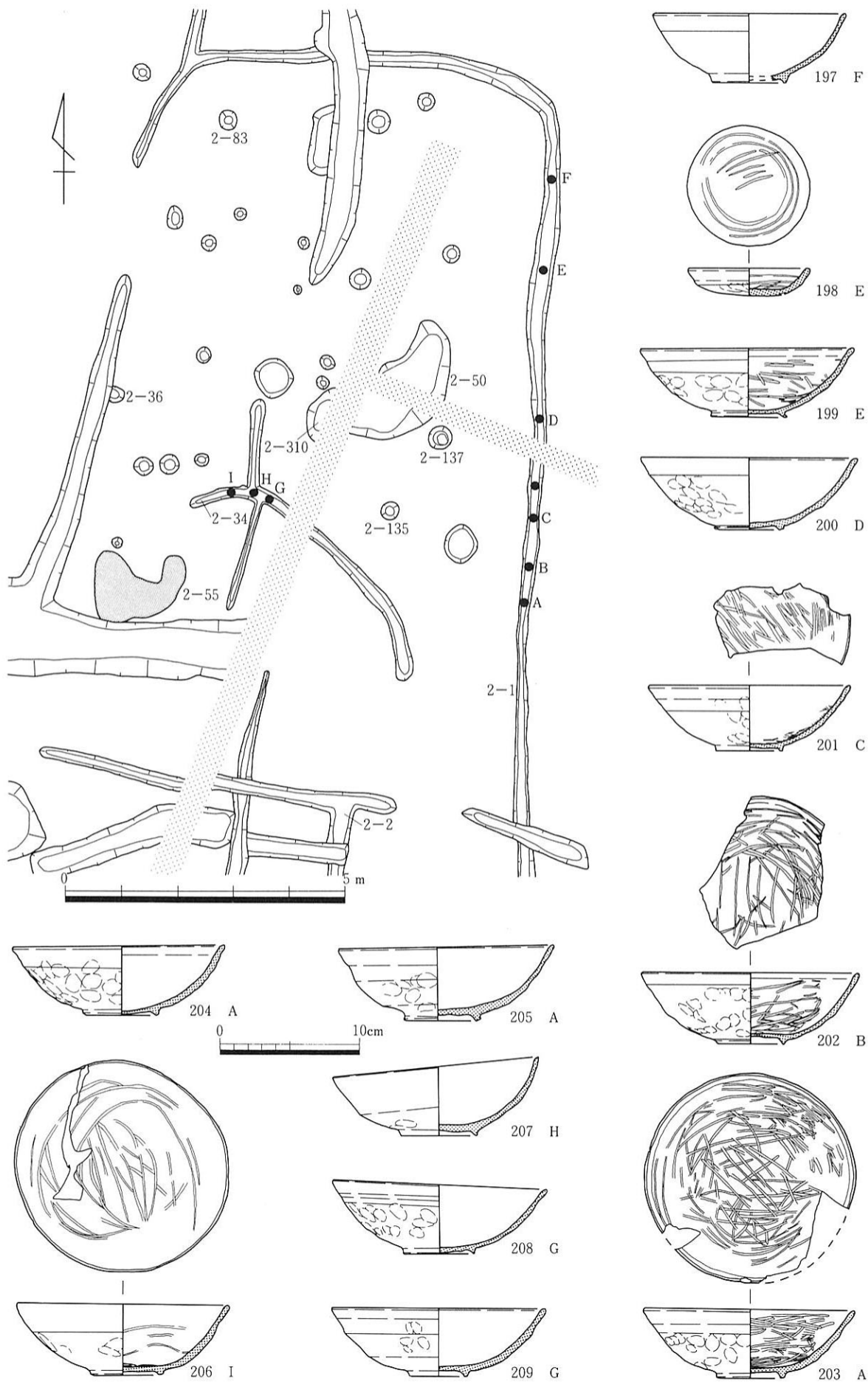


图51 沟 2-1 · 2-34 出土遗物

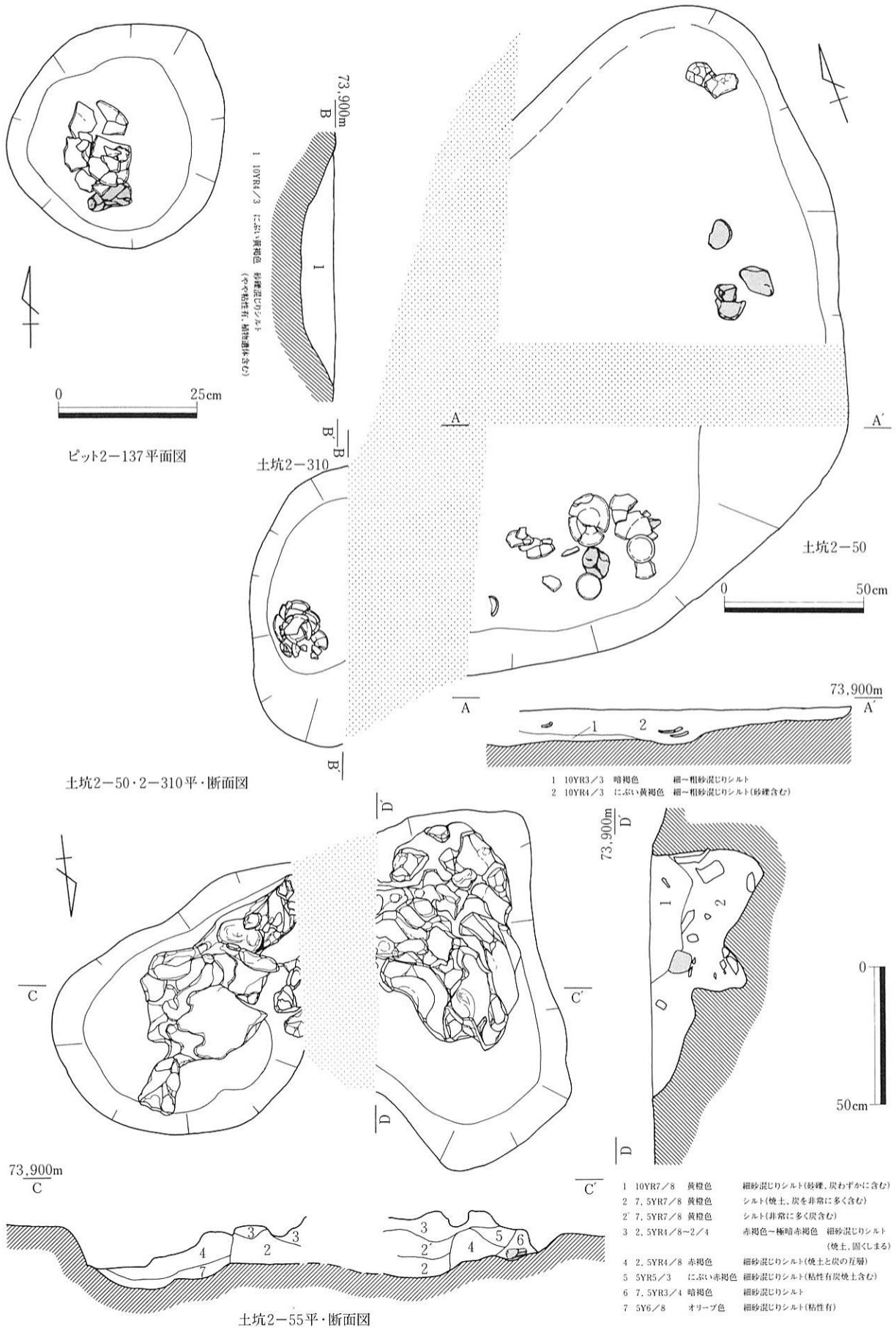


図52 ピット2-137・土坑2-50・2-55・2-310平・断面図

出土遺物（図51） 206～209は瓦器碗である。溝2-1で出土した瓦器碗と同様の特徴を呈する。

・土坑2-310（図52）

溝2-1と溝2-34で囲まれた内側に位置する。現代の攪乱により、東端は明らかではないが直径100cm、深さ12cmを測る。土師皿が12個体重なった状態で出土した。土師皿はほとんど完形に復元することができる。

出土遺物（図53） 210～221は口径約9cm、器高1.7cm前後を測る。口縁は正円ではなく、非常にゆがみが大きく、楕円に近いものもある。口縁部は内外ともにヨコナデを施し、体部外面下半から底部外面は指頭圧痕が残る。底部内面はナデを施す。体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸く納める。221は1点だけ口径15.4cm、器高3.3cmを測り大きい。体部外面は段を持ち、口縁部から体部上半にかけてヨコナデを施す。体部下半には指頭圧痕が認められる。

・土坑2-50（図54）

土坑2-50と同様に、溝2-1と溝2-34で囲まれた内側に位置する。近世の攪乱で東端は確認できず、土坑50との新旧関係も明らかではない。土坑は不定形であり、長径245cm、短径130cm、深さ13cmを測る。埋土からは多くの遺物が出土した。遺物は特に南側に集中している。

出土遺物（図54） 222～229は土師皿である。222は口縁部の立ち上がりは低く、上外方にのびる。223～225はやや丸みを帯びた底部を呈し、わずかに内湾しながら上外方にのびる。226～229は口縁部の立ち上がりは低く、口縁端部はわずかに外方につまみ出す。229は内側に沈線状に凹む。230～232は瓦器皿である。230、231は内外面ともに非常に密にヘラミガキを施す。口縁端部は面を持つ。232は器壁の磨滅が著しく調整等確認することはできなかった。

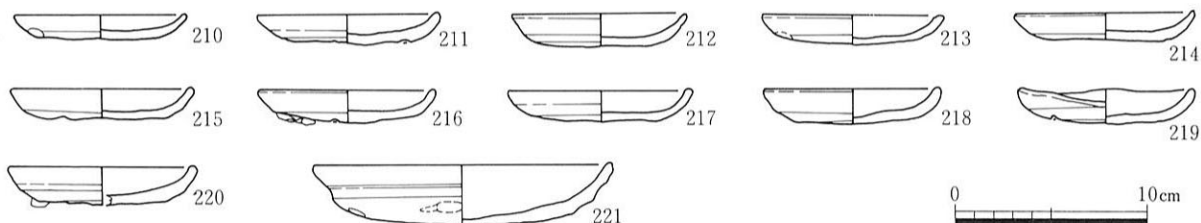


図53 土坑2-310出土遺物

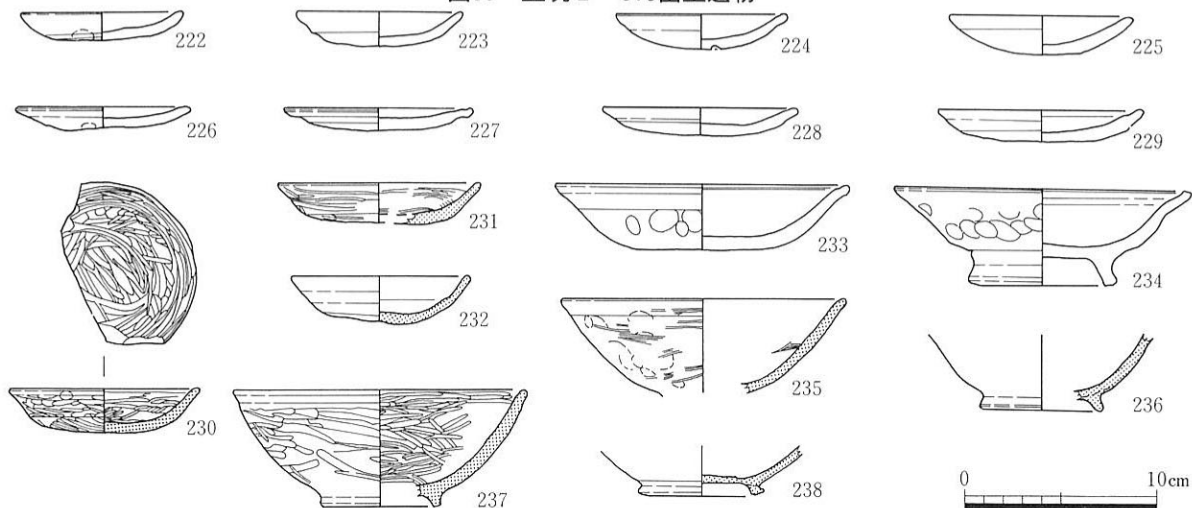


図54 土坑2-50出土遺物

233～234は土師器杯である。233は直径15.1cm、器高3.5cmを測る。口縁部は開き端部は丸く肥厚する。外面は指頭圧痕が残り口縁部外面はナデを施す。234は断面長方形のわずかにハの字に開く高台がつく。直径15cm、器高5.1cm、底径6.6cmを測る。体部は緩やかに内湾して、口縁部は上外方に開き、先端は強くなでる。端部は面を持つ。外面は指頭圧痕が残る。235～238は瓦器碗である。237は、内外面に太いヘラミガキを密に施し、口縁外面は狭いナデを施す。高台は断面台形を呈する。口径15.4cm、器高6.2cm、底径5.7cmを測る。

・焼土坑55 (図52)

溝2-34の南側に位置する。くの字状の平面形態をしめす。長径190cm、短径130cmを測る。上面は焼土が固くしまり、輪郭部分には非常に炭を多く含む。下面は炭、焼土を多く含む、シルトを主体とした埋土である。遺構は非常に不定形に掘込まれている。かまどのような施設を考えたい。

・ピット2-137 (図52)

土坑50の南側に位置する。直径40cm、深さ5cmを呈する。ピットからは黒色土器B類碗が出土した。

出土遺物 (図55) 240は口径15.6cm、器高5.6cm、底径6cmを測る。内外面とも磨滅が著しく調整は不明瞭であるが、体部外面には指頭圧痕が確認できる。高台は断面長方形でハの字状に開く。

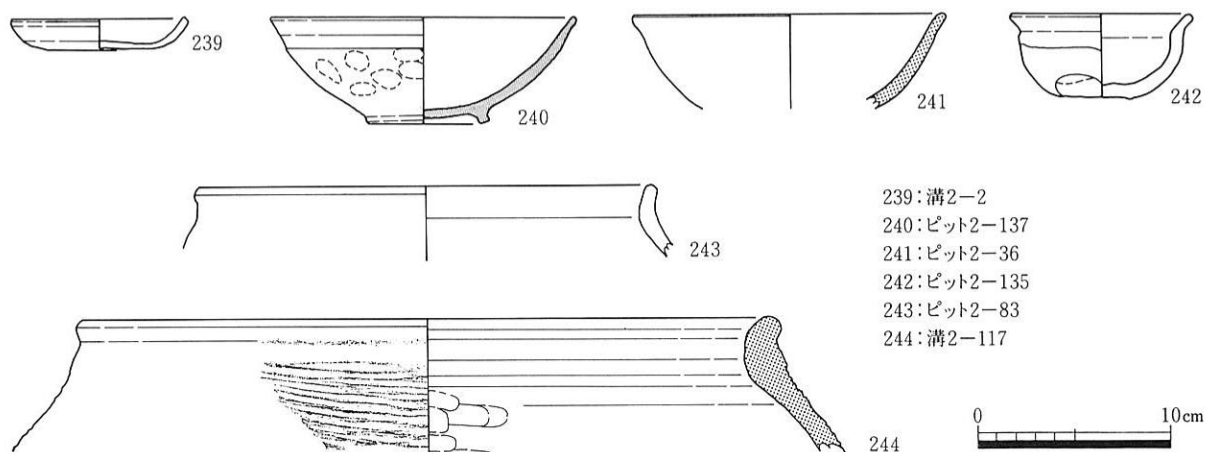
・ピット2-135

ピット2-137の南側付近に位置する。直径30cm、深さ20cmを測る。

出土遺物 (図55) 242は土師器の鉢である。脚部は欠損しているが、3足であったことがその痕跡から分かる。底部は平らで底部外面には煤が付着している。体部は粘土紐の継ぎ目の痕跡が見られる。

・その他の遺構から出土した土器 (図55)

239は土師皿である。非常に器壁が薄い。底部はやや中へこみを呈する。241は瓦器碗である。外面下半はケズリが見られ、その後、ヘラミガキを施す。口縁部外面はナデ。内面は調整不明瞭だが、ヘラミ



239:溝2-2
240:ピット2-137
241:ピット2-36
242:ピット2-135
243:ピット2-83
244:溝2-117

図55 2区遺構出土遺物

ガキを施している。243は土師器甕。244は瓦質甕である。体部外面にタタキを施す。

3層上面では、多くの鋤溝、耕作に伴うと考えられるピット等の他に南東側において区画溝と考えられる溝や土坑を検出した。先にふれたように南東側は調査区の中でも1段高い棚田であるため、遺存したと考えられる。これらの遺構は、ほぼ完形に復元できる土師皿が一括出土する土坑や、やはり完形に近い形に復元できる瓦器を並んだ状態で出土する溝など、地鎮等の祭祀色の濃いものといえる。また、溝2-1、溝2-34に囲まれた内側には多くのピットを見ることができたが、建物跡等を復元することはできなかった。

区画溝は出土した瓦器碗から13世紀初等の時期を考えることができる。土坑2-310から出土した土師皿もほぼその年代にあたるであろう。また、土坑2-50、及びピット2-137は出土した土器よりこれよりも古い時期を与えることができる。12世紀前葉の時期を考えたい。

4層上面

4層は調査区の北半分での堆積が確認された。南半分は4層に対応する層の堆積は見られず3層掘削後、基盤層に至る。多数のピット群が検出されたが、ピットからは遺物の出土はほとんどなかった。また、建物跡等を復元することはできなかった。南西-北東方向、あるいはそれに直行する方向を意識しているように考えられ、耕作に伴う杭列といった性格が考えられる。また、人頭大の石が数カ所で検出された。しかし、これらの石は規則性のある並びを呈するものではない。この他に土坑が検出された。

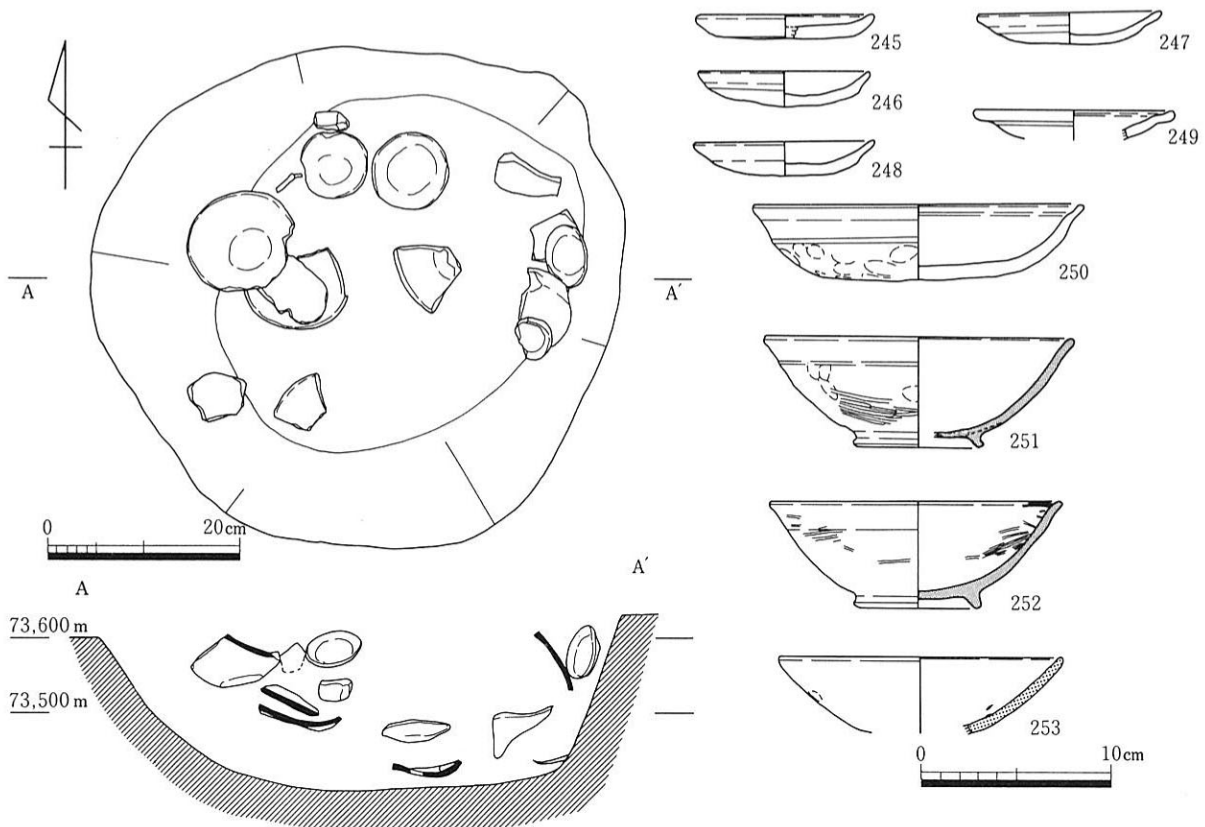


図56 土坑2-224平・断面図、出土遺物

・土坑 2-224 (図56)

直径70cm、深さ23cmを測る。平面円形の土坑である。土師皿、黒色土器B類碗、及び鉄製品が出土した。

出土遺物(図56) 246~249は土師皿である。246は口縁部の立ち上がりは非常に低く、上外方にのびる。器壁は非常に厚い。247、248は口縁部の立ち上がりは低く、口縁端部はわずかに外方につまみ出す。249は口縁部を外反させ、その端部を丸く収める。250は土師器杯である。口径17.2cm、底径11.2cm、器高4cmを測る。体部はやや内湾して立ち上がり、口縁部は外反して開く。口縁端部は肥厚し丸く収める。底部から体部外面にかけては指頭圧痕が残る。251、252は黒色土器B類碗である。内外面共に磨滅が著しいが、幅の狭いヘラミガキを施す。口縁部外面にヨコナデを施し、口縁部は外反する。252は高台はしっかりしており、断面台形を呈する。253は瓦器碗である。やはり磨滅が著しく内外面とも調整は不明瞭であるが外面は凹凸が見られない。口縁部は内湾し、端部はややとがり気味である。

251、252の黒色土器はその器形は初期の瓦器碗に近く、器壁の磨滅が著しいことから、瓦器碗との区別がつきにくいものであった。また、253の瓦器碗と共伴していることから、遺構は11世紀中頃から12世紀初頭と考えたい。

基盤層上面

調査区南側において、北西に向かう谷の北側の肩を検出した。その堆積層(4層)から縄文土器が出土した。土器は非常に磨滅しており、ほとんどが細片であった。4層を掘削した後、ピットを検出したが、遺物は含まず、また建物等を復元することはできなかった。

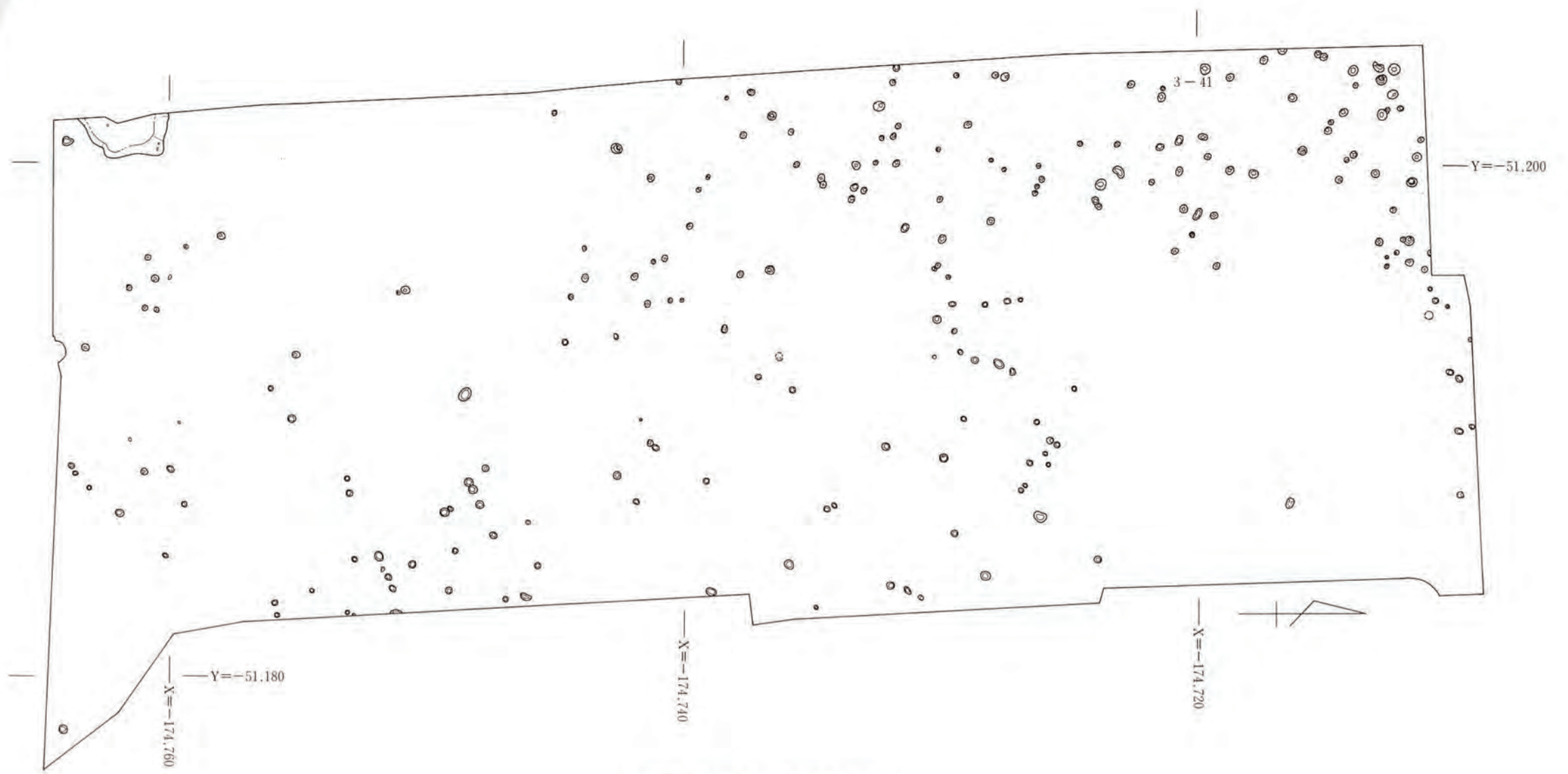


图57 3区4層上面遺構配置図

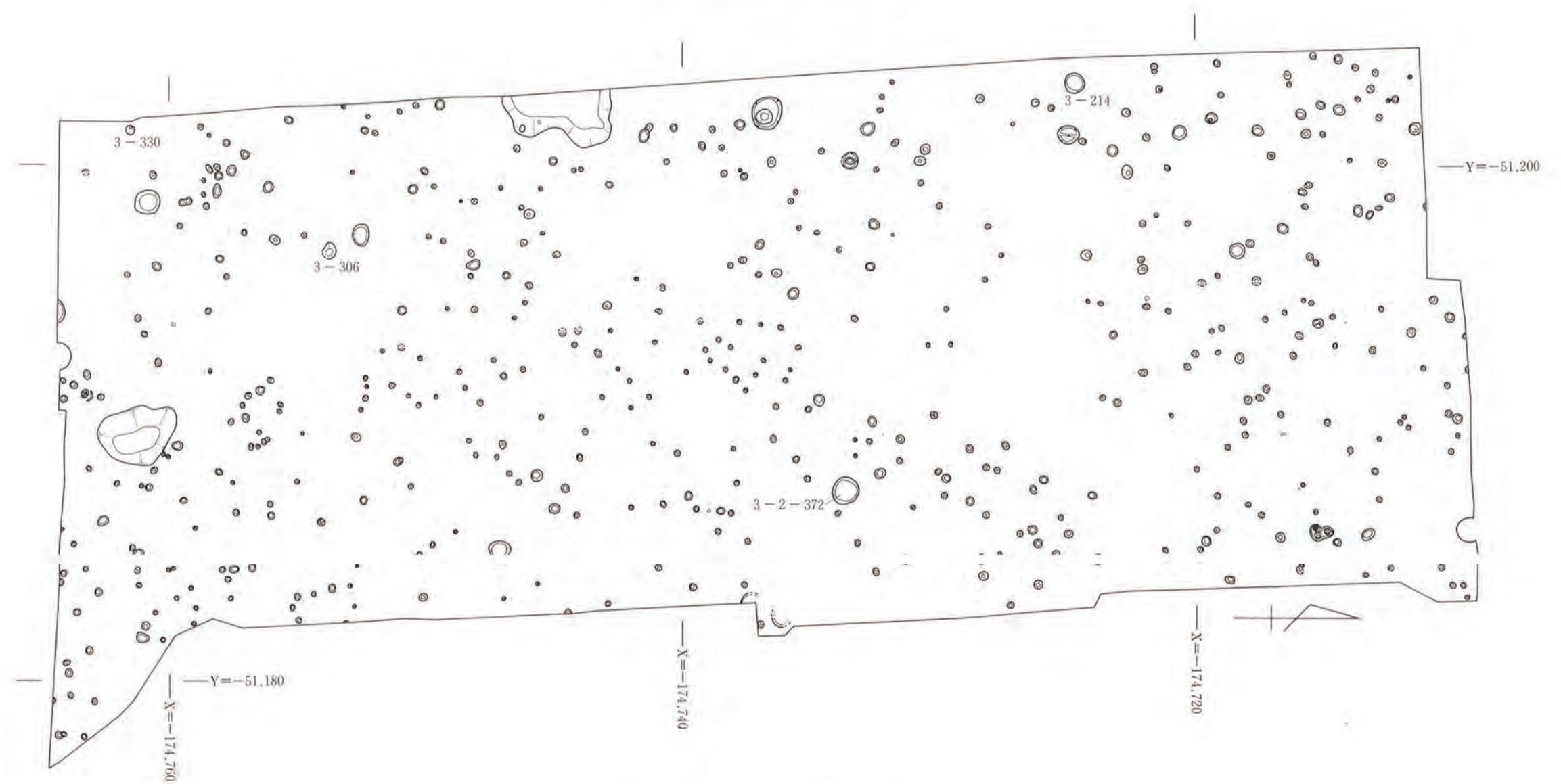


图58 3区基盤層上面遺構配置図



(3区)

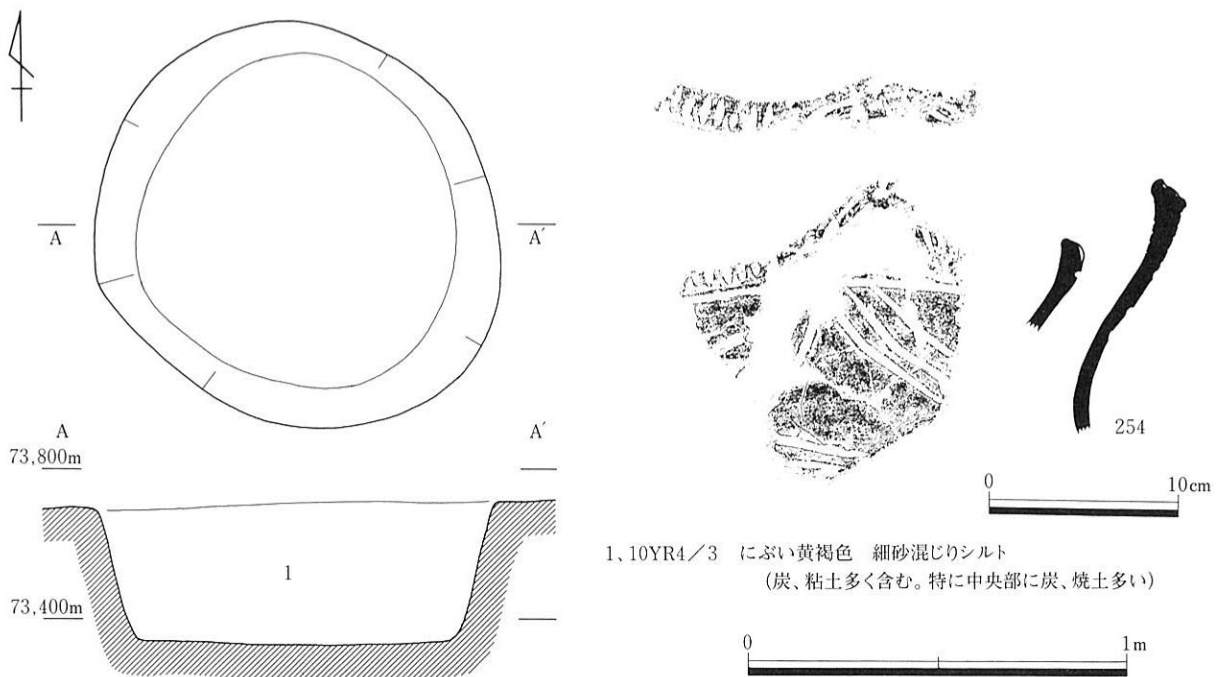
3層上面

耕作に伴う溝等を検出。

4層上面

多数のピットを検出した。ピットの埋土はほぼその上層の3層に対応するものである。3層は調査区の中で混入する砂礫の大きさ、量が部分的に違っており、3区は特に礫、粗砂を多く含む部分と、細砂を含む部分が明確に見られた。それに対応してピットの埋土も部分的に違いを見せている。2区同様、ピット内からの遺物の出土はなく、時期を特定することはできなかった。また建物跡を復元するような並びは見られなかった。その規則性はあまり明瞭ではないが、2区同様に南西-北東方向、あるいはそれに直行する方向を意識しているようであり、耕作に伴う杭列といった性格が考えられる。

3区は調査区の中でも3層の堆積が厚いが遺物の出土は非常に少なかった。



1、10YR4/3 にふい黄褐色 細砂混じりシルト
(炭、粘土多く含む。特に中央部に炭、焼土多い)

図59 土坑 3-2-372平・断面図、出土遺物

基盤層上面

多数のピット、土坑を検出した。ピット内からは遺物はほとんど見られなかったが、埋土によって大きく3種類に分類することができる。暗茶褐色シルトのものは深いものが多く、また、斜めに落ち込むピットもあった。そのことから、建物等の存在も考えられたが確認することはできなかった。また3区は4層の堆積が一番厚い。また、3層と同様に砂礫を多く含む部分が存在し、基盤層のピットの埋土はほぼ、上層の4層に対応するものといえる。

・土坑3-2-372 (図59)

調査区の中央部で検出された。直径105cm、深さ90cmの円形の土坑である。埋土には炭、焼土を多く含む。土坑の肩から、縄文土器が出土した。

出土遺物(図59) 254は波状口縁深鉢の口縁部である。頸部から口縁部にかけて緩く内湾し、口縁端部で逆「く」の字状に肥厚する。口縁部端面にはキザミメを、波頂部には刺突文を施す。口縁に平行して沈線が一条めぐり、3本の沈線で文様が構成されている。土器は後期、福田K II式～北白川上層の移行期の特徴を持つ。その他にも図化できなかったが縄文土器片が出土した。

その他、基盤層上面では不定形な土坑が検出されているが、その輪郭は非常に不鮮明である。また、土坑の埋土もU字状の堆積が見られたり、3層、4層がずり落ちたような様相が見られ、人工的な遺構とみるよりはむしろ、いわゆる風倒木痕といえる。

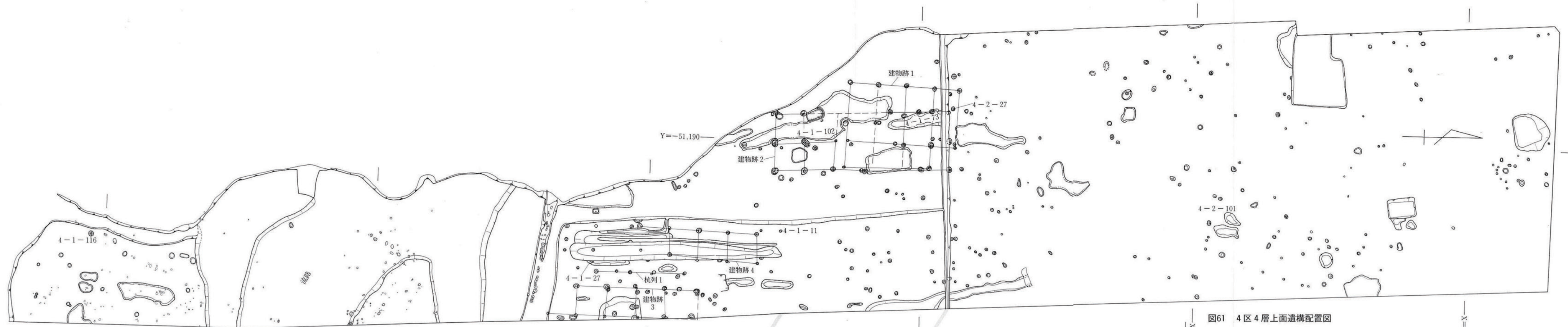


图61 4区4層上面遺構配置図

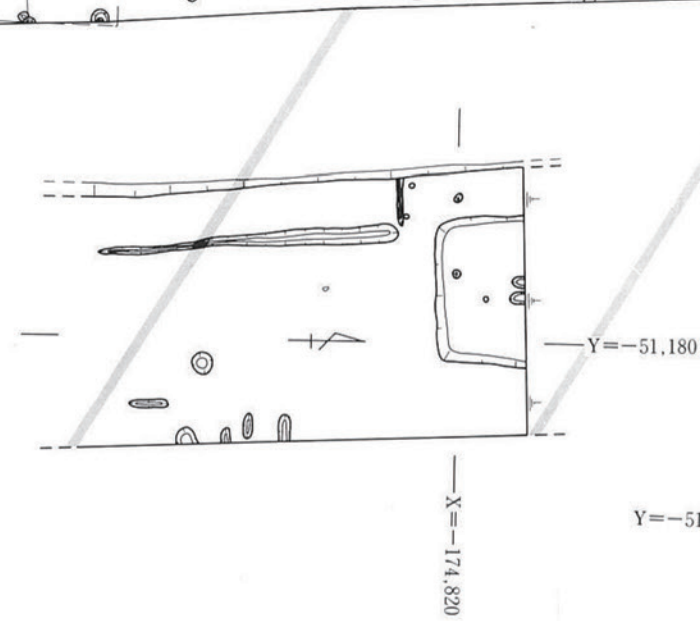


图60 4区3層上面遺構配置図

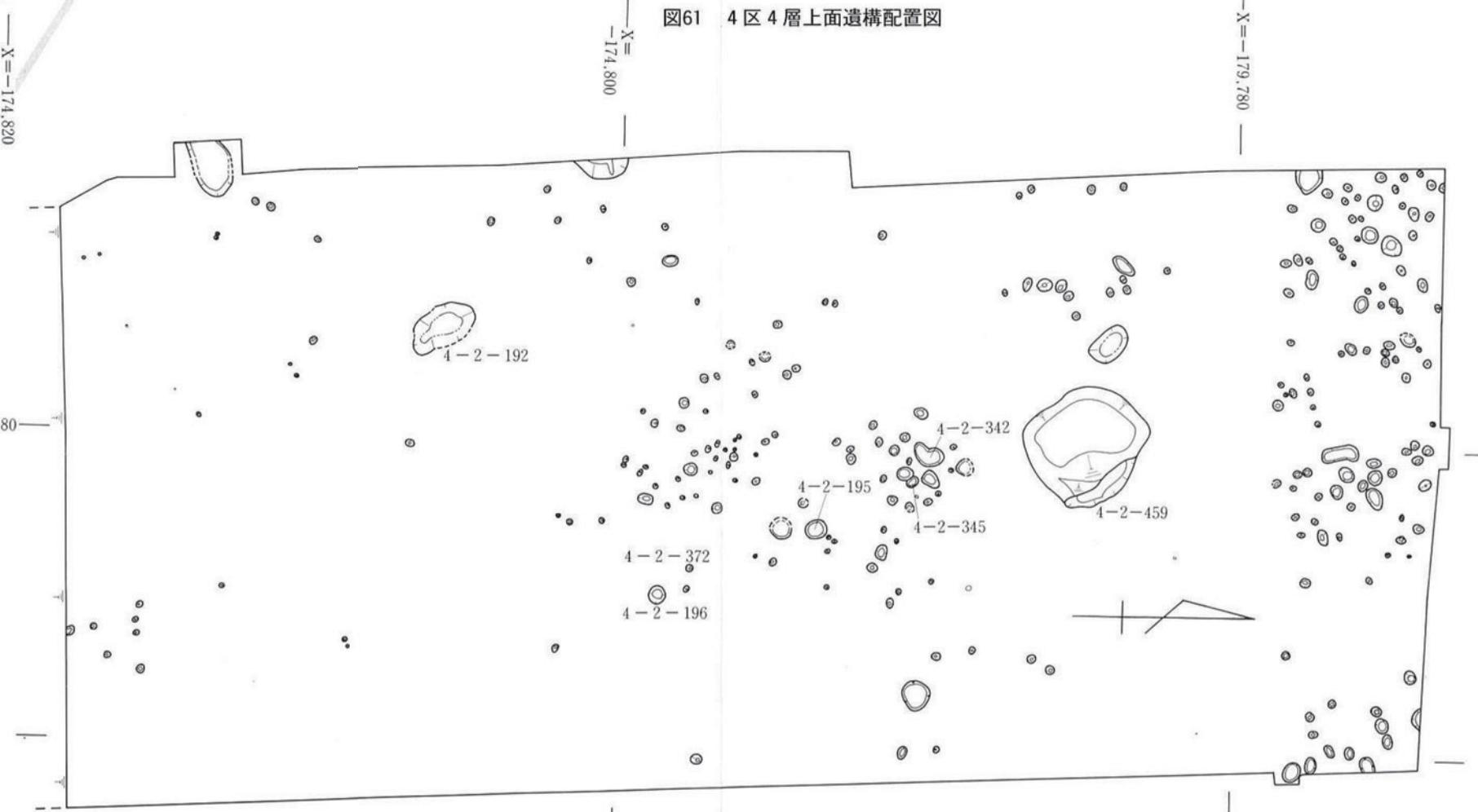


图62 4区基盤層上面遺構配置図



(4区)

4区北側は特に近世の攪乱が著しかった。

3層上面

耕作に伴う溝、ピット等が検出された。整地層としての3層が存在するのは、南側のみで、北側は削平されている。

4層上面

調査区中央においてピットが多数検出された。掘立柱建物が4棟、柵列が1本復元できる。調査区の西側は柵田が一段低くなっているために4層が削平され、遺構は基盤層上面での検出となった。また、南側は基盤層が高く3層、4層が存在しない。また、基盤層は礫層となっており、川に向かって盛土を行っている。調査区南側では東西方向にはしる流路がある。また、調査区北側では、2区、3区と同様に南西-北東方向、あるいはそれに直行する方向を意識したピット群を検出した。ピットは遺物を含まない。やはり耕作に伴う杭列と考えられる。

・建物跡1 (図63)

4区の中央に位置する。ピットは溝状の攪乱によりすべて検出されてはいないが4間×3間の掘立柱建物である。建物の軸は東に4度振る。建物が復元される部分は一段低い柵田となっており、4層がほとんど削平されている。そのため、ピットは非常に浅い。ピットは深さ約20cmを測るが、浅いものでは10cmを測る。ピット4-2-33、4-1-115、4-1-80には根石が残る。時期を明確にする遺物はほとんど出土していない。

出土遺物(図69) 255、257は土師皿である。257は2段ナデを施す。256は瓦器皿である。非常に磨滅が著しく調整は不明瞭である。口縁部は強くナデを施し、やや外反する。

・建物跡2 (図64)

建物跡1と重複して存在する。2間×6間の南北に長い掘立柱建物である。あるいは2棟(2間×2間1棟と3間×2間1棟)の建物の可能性もある。建物の軸は西に4度振る。建物跡1と同様に上面は削平されており、ピットは非常に浅い。深さ15cm前後のものが多く、深いものでも20cmを測る。ピット4-1-99、4-1-100、4-1-118、4-1-88、4-1-120は根石が残る。

出土遺物(図64) 258は土師皿である。口縁部は短く内湾して立ち上がり、全体に丸みを帯びる。259、260は瓦器碗である。259は内外面とも調整は不明瞭ではあるが口縁部外面は幅の狭いヨコナデ、体部外面には指頭圧痕が残る。260は内面は幅の狭いヘラミガキを、外面のヘラミガキは粗く、指頭圧痕が確認できる。口縁部外面は狭いヨコナデを施す。

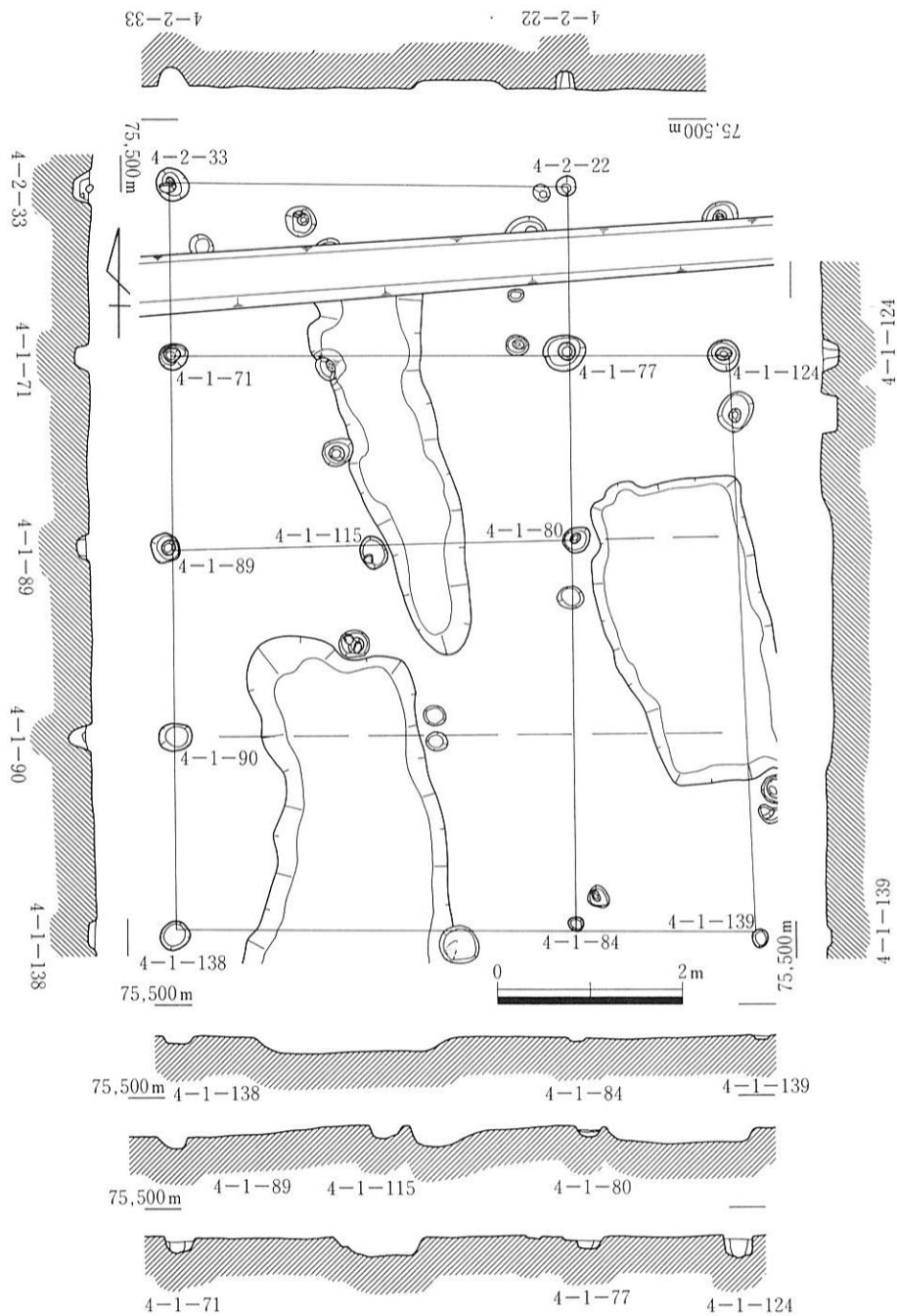


図63 建物跡1平・断面図

・建物跡3（図65）

建物跡3は建物跡1、2の東側の棚田の一段高いところに位置している。この部分は本来周辺に比べて高かったものと思われ、南にいくに従って、3層、4層は薄い堆積となっている。従って、ピットは4層上面、及び基盤層上面で検出された状態である。建物は4間×1間が確認されているが、更に調査区外に東側にのびる可能性があり、さらには南にのびる可能性もある。西側は後の溝に攪乱されているために確認できなかった。ピットは深さ20~30cmを測る。建物の軸はほぼ北である。ピット4-1-51、4-1-62、4-1-46、4-1-44は根石が見られる。ピット4-1-55からは黒色土器が出土。

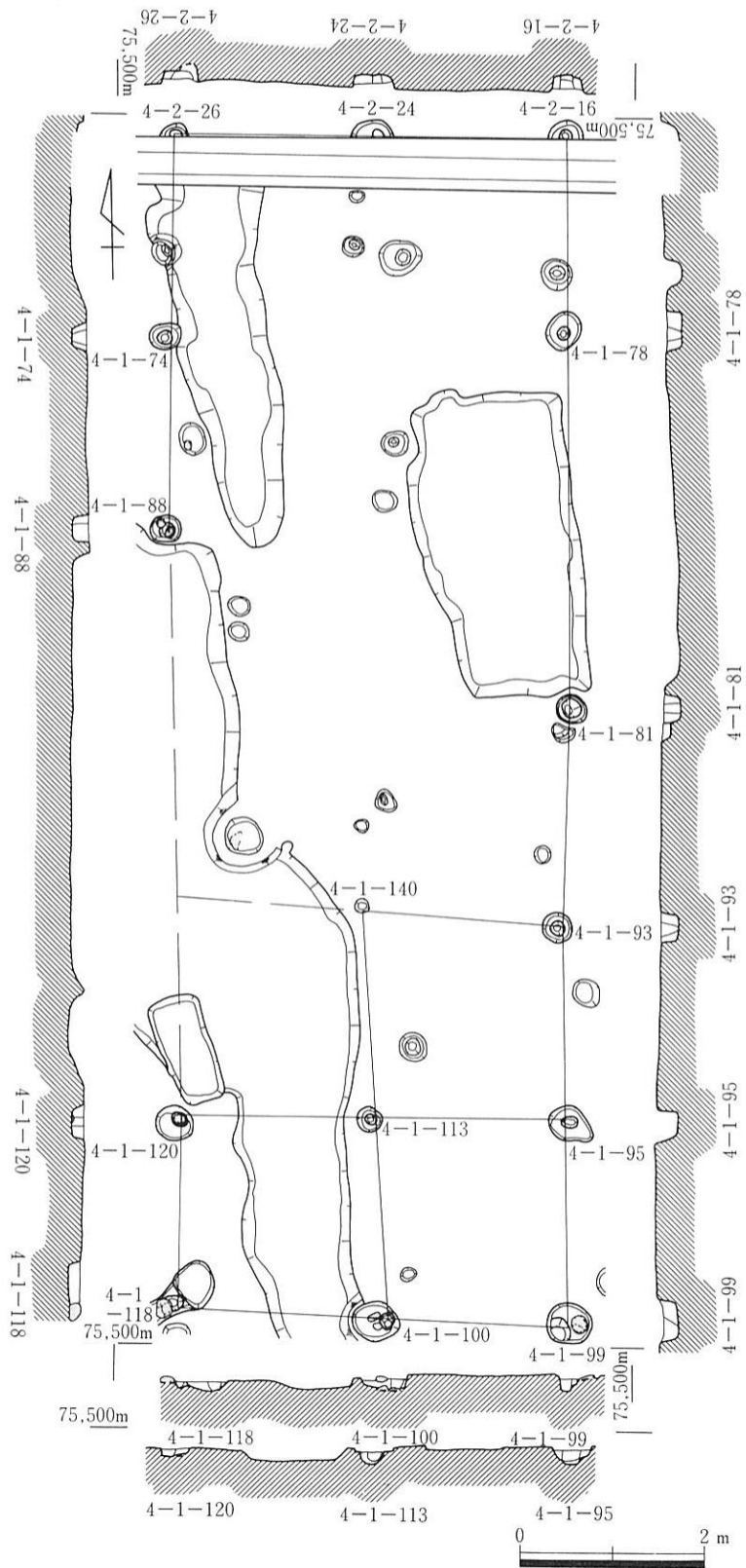


图64 建物跡 2 平・断面図

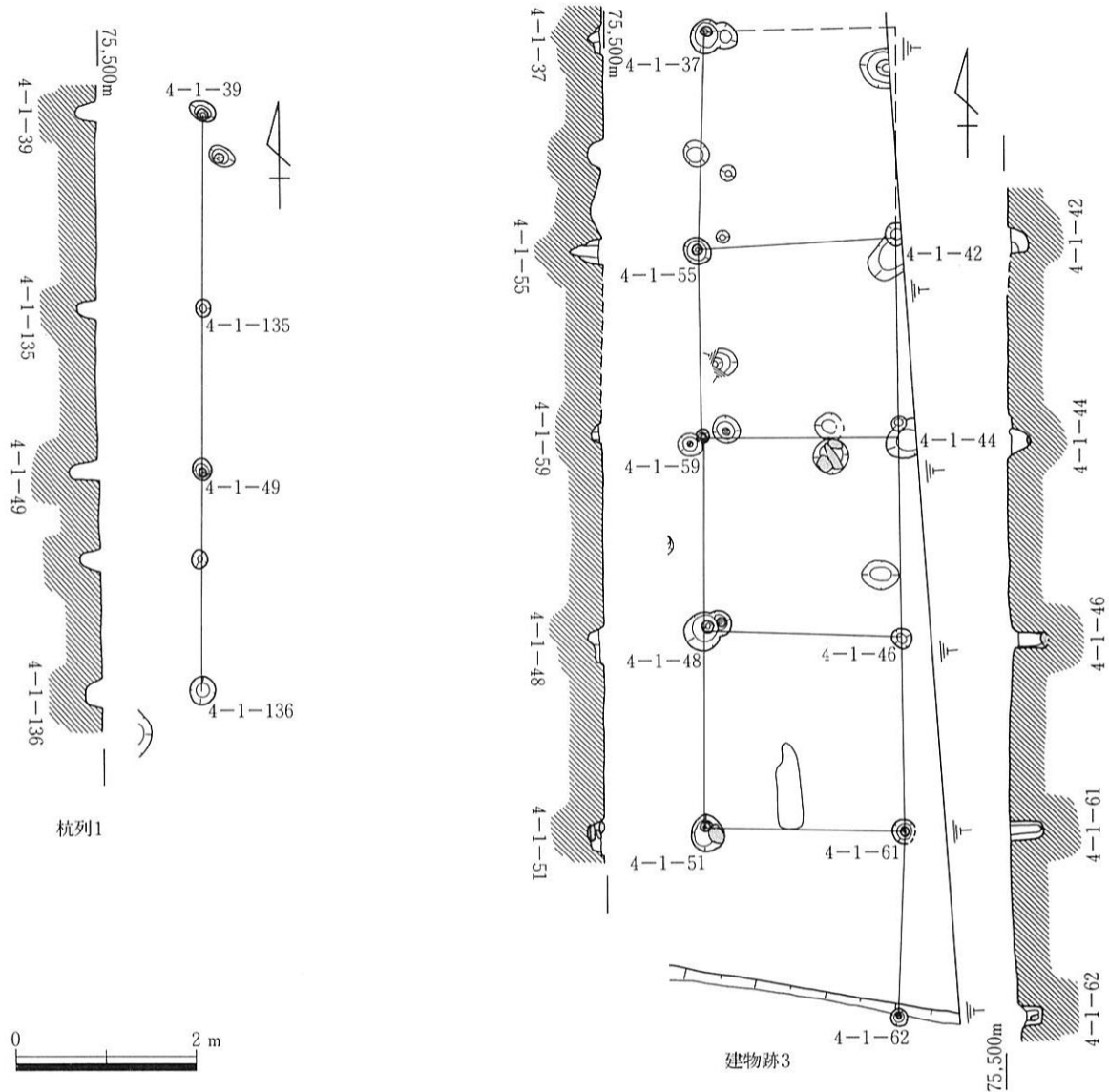


図65 建物跡3、杭列1平・断面図

出土遺物（図64） 262は黒色土器皿である。平らな底部から明瞭に境をもって上外方に立ち上がる。内外面、底部外面に至るまで非常に密にヘラミガキを施す。

・杭列1（図65）

杭列は建物跡3の西側に平行しており、建物跡3に付属する可能性がある。ピットは深さ20～30cmを測る。ピットから遺物は出土していない。

・建物跡4（図66）

建物跡3の西側に位置する。西側は一段低い棚田であり、確認されているピットも浅いために西にのびる可能性もあるが確認できなかった。確認できる範囲で1間×3間の掘立柱建物である。ピットは深さ20cm前後を測る。西側のピットは溝に切られているために、わずかに確認できたのみである。建物の軸はほぼ北を向く。ピット4-1-128は根石が確認された。

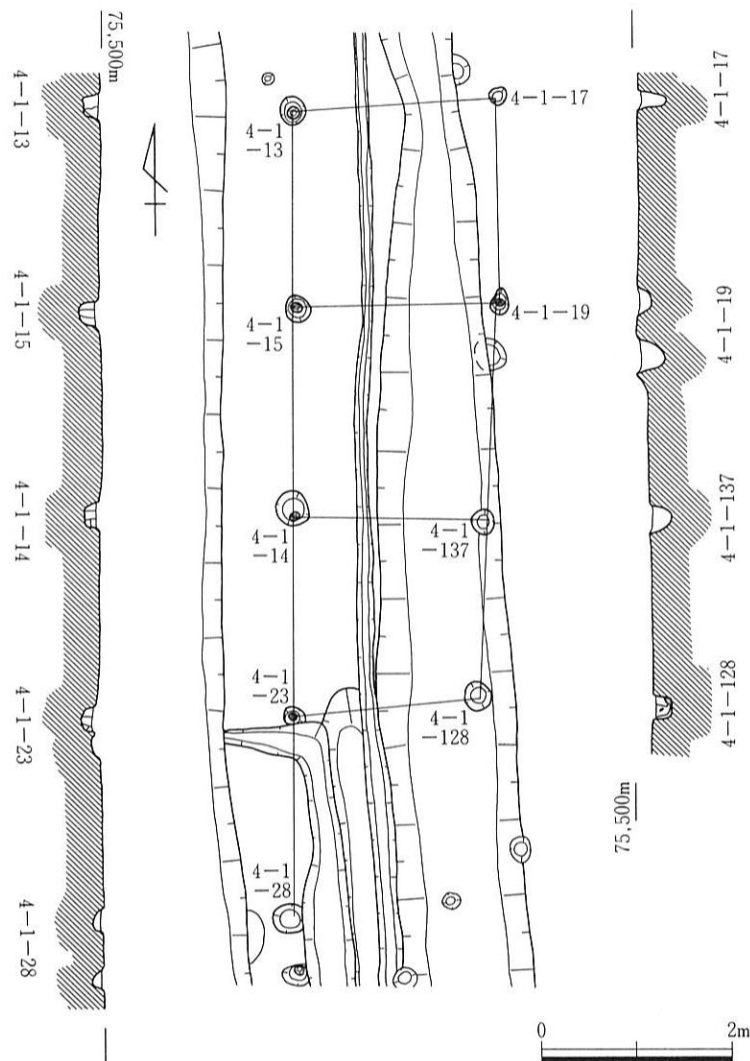


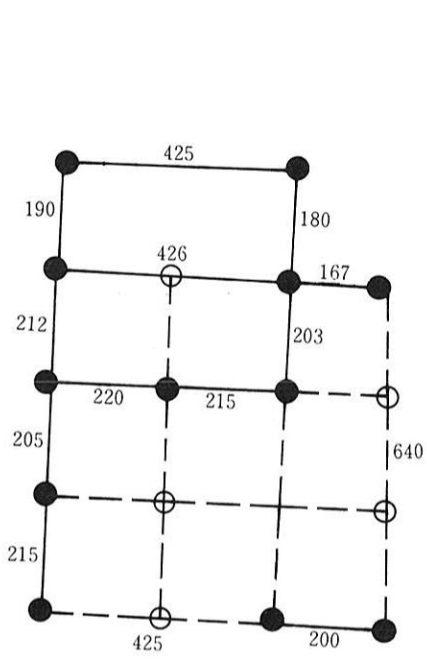
図66 建物跡4平・断面図

出土遺物（図64） 263～267は土師皿である。263は平らな底部に上外方に体部が立ち上がる。266、267は平らな底部で266はやや内湾気味に体部が上外方にのびる。264、265は平らな底部で口縁部の立ち上がりは低く、口縁部はつまみあげ端部は丸く肥厚する。268、269は瓦器皿である。269は幅の狭いヘラミガキを内外面ともに密に施す。270～272は瓦器碗である。270は内外面ともに密にヘラミガキを施す。器壁は非常に厚く、体部から口縁にかけて内湾している。271は底部である。調整は不明であるが断面三角形の高台がハの字状につく。

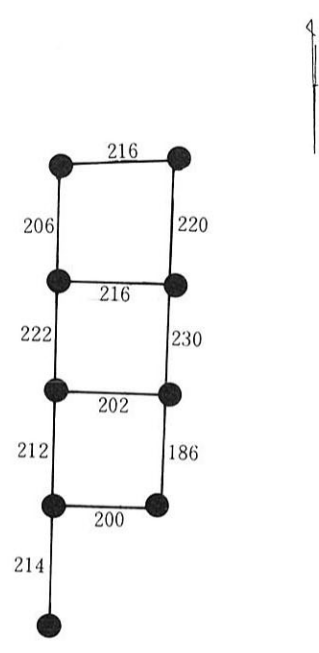
・ピット4-2-27（図68）

建物跡1、2の北側で検出された。直径33cm、深さ20cmを測る。

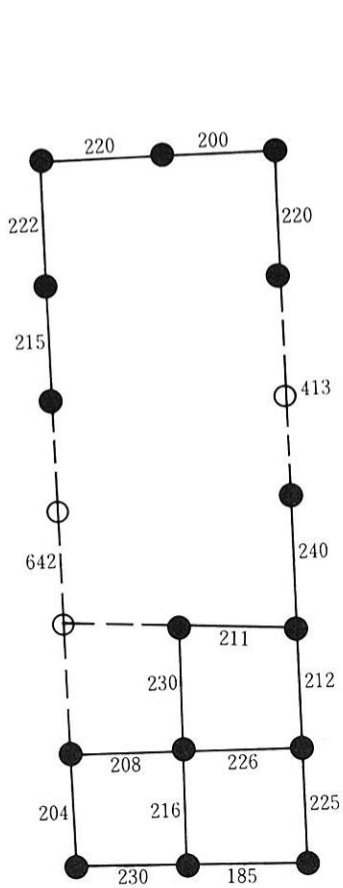
出土遺物（図69） 273、274は瓦器碗である。273は格子状の暗文が見られる。体部は内湾し、口縁部は外反する。口縁部外面は強いヨコナデのため、凹線状を呈している。274は口径16cm、器高5.2cm、底径5.4cmを測る。内面にはヘラミガキを施し、見込みは平行線の暗文を施す。外面のヘラミガキは粗く指頭圧痕が明瞭である。高台は低く、やや丸みを帯びた断面三角形を呈する。



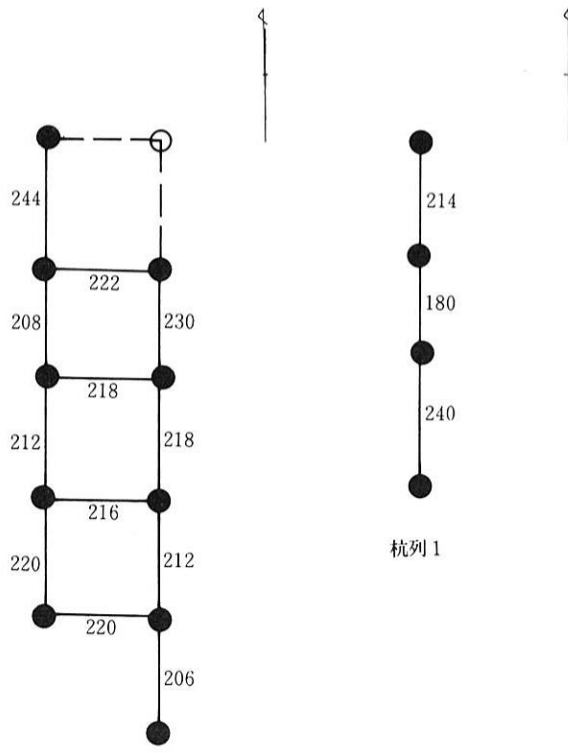
建物跡 1



建物跡 4



建物跡 2



建物跡 3

杭列 1

建物柱間隔模式図

数字は現存するピットの柱痕の心中心距離を表す。単位はcm。
 20分1の空測図、及び50分の1の平板測量図を基に作成した。
 ●は柱穴が確認されたもの。
 ○は攪乱その他の遺構等により検出できなかった可能性があるもの。

図67 建物跡模式図

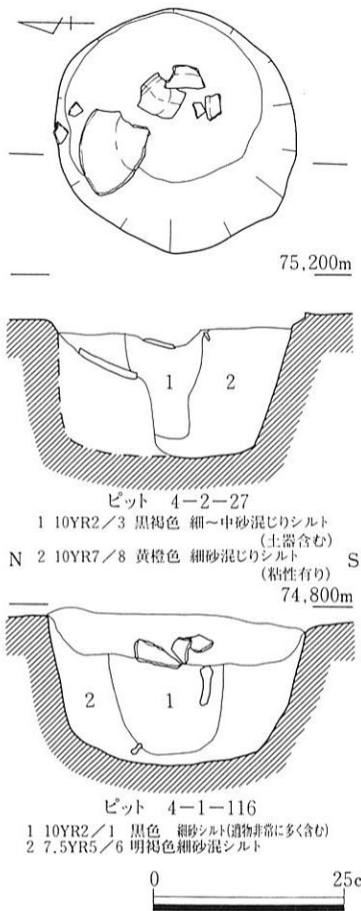


図68 ピット4-2-27平・断面図、ピット4-1-116立面図

・ピット4-116 (図68)

調査区の南西に位置する。南側は3、4層に対応する層が堆積せずすぐに基盤層に至る。また基盤層は積川に向かって大きく削られており、そこに盛土を行っている。ピットはその際で検出された。ピットは直径34cm、深さ20cmを測る。柱根部分から遺物が集中して検出された。

出土遺物(図69) 土師皿や瓦器皿の他に、須恵器系甕の体部の破片が出土した。275～277は土師器皿である。275、276は平らな底部で口縁部の立ち上がりは低く、口縁部はつまみあげ端部は丸く肥厚する。277は内面にハケメを施している。278は瓦器碗である。内外面ともに磨滅が著しく、調整不明瞭である。

・ピット4-1-27

直径20cm、深さ9cmを測る。調査区を東西に走る溝にきられており、溝を掘削後わずかに検出することができた。ピットからは土師質の鉢が出土した。

出土遺物(図69) 278は口縁部は強くなでて外反させる。口縁部内面、及び端部に面を持つ。口径26.6cmを測る。胎土は粗い。体部外面には粘土紐の痕跡が残り、内面は丁寧にナデを施す。

・溝4-1-102

建物1、2をきる溝である。幅3m、残存長12mを測る。北側の不定形な遺構も、この溝の一部分である可能性が高い。

出土遺物(図68) 280は羽釜口縁である。体部内面はナデ、外面には指頭圧痕が残る。口縁部がくの字に屈曲し、端部は丸く収める。

・流路

幅14～18m、深さ0.45mを測る。調査区を東西に横断するように走り、北側には建物群が集中している。残存長11.5mを呈する。流路は3層に細分することが可能である。上層は細～中砂混じりシルトで灰褐色を呈する。中層は細～粗砂混じりシルトでにぶい褐色を呈する。また下層は細砂混じりシルトで灰褐色を呈する。特に中層はマンガンを多く含み、上層、下層との境には沈着が見られる。中層、下層から主に遺物が出土した。特に中層に対応する暗褐色土からは多くの遺物が出土した。

出土遺物(図70) 土師皿、瓦器碗、羽釜、須恵器、白磁、ふいごの羽口等が出土した。

281～283は土師皿である。282は体部はほとんど立ち上がりを持たない。口縁付近の一部に煤が付着している。284は瓦器皿である。平らな底部から口縁部は短く外反気味に立ち上がる。内外面ともにヘラミガキは行っていない。

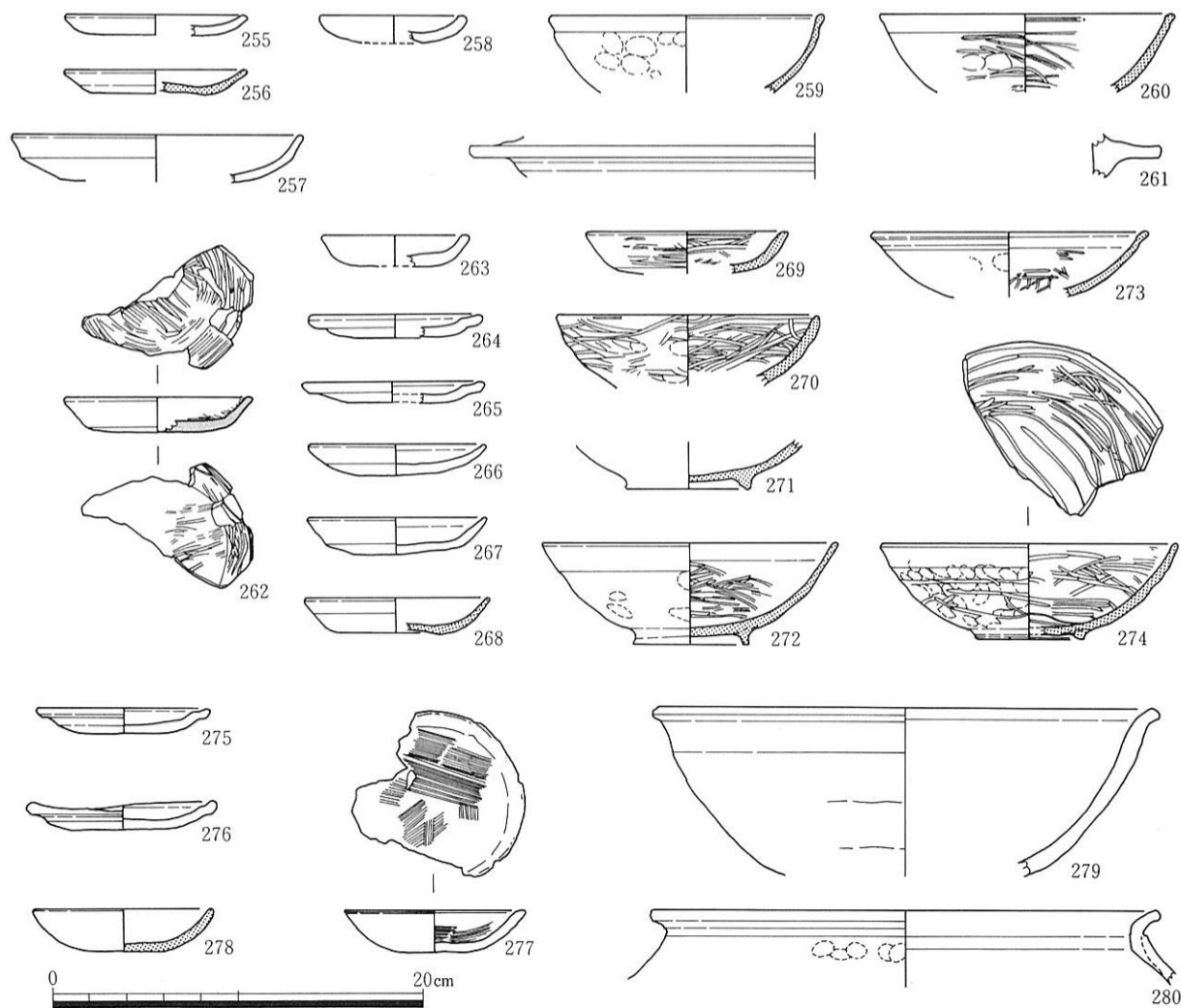
285は土師器杯である。体部外面には指頭圧痕、口縁部にはナデを施す。286は土師器杯の高台部分である。やや外反した高台を貼りつける。

287、288は瓦器碗である。287は溝の最下層で出土した。直径14.7cm、器高5.8cm、底径6cmを測る。内外面ともに丁寧にヘラミガキを施す。内面のヘラミガキは不明瞭ではあるが分割性を残す。器壁は厚く直線的に外方にのび口縁部外面はナデを施す。高台はしっかりしており断面台形を呈する。288は同様に瓦器碗である。器高15.1cm、器高6.2cm、底径6.2cmを測る。内外面ともに幅の狭いヘラミガキを密に施す。見込みは平行線状に密にヘラミガキを施す。高台は細く、わずかにハの字に開く。

289は土師器の鉢である。内外面ともにヘラミガキを施している。

290~292は須恵器である。290は鉢の口縁である。やや内湾した体部から口縁部は大きく開き、口縁端部は内側につまむ。291は甕の口縁である。口縁端部は上方につまみあげる。自然釉の付着が見られる。292は壺の底部である。外面に自然釉の付着が見られる。

293~297は土師器の羽釜、あるいは甕の口縁部である。293は体部内面をケズリを施す。口縁端部はわずかに肥厚し丸く収める。294は体部内面には指頭圧痕が残る。体部内面は不明瞭ではあるがケズリを施す。口縁端部には面を持つ。295は体部外面は指頭圧痕が残る。体部内面にはケズリを施す。口縁端部は丸く収める。胎土は非常に粗い。体部内面に煤が付着する。296は口縁部は外側に短く折り曲げ



建物跡1 (255、256：4-1-124、257：ピット4-1-90)、建物跡2 (258、259：ピット4-2-16、260：ピット4-1-100、261：ピット4-1-99)、建物跡3 (262：ピット4-1-55)、建物跡4 (263~271：ピット4-1-13、272：ピット4-1-17)、273、274：ピット4-2-27、275：ピット4-1-11、276~278：ピット4-1-116、ピット4-1-27、280：溝4-1-102

図69 建物跡、ピット、溝出土遺物

る。0.4cmの小石を含む。297は土師質の羽釜である。外面には煤が付着している。口縁端部は内傾する面をもつ。

また、磁器類が多く出土した。298～302は白磁碗である。298は口縁部は玉縁状で断面三角形を呈する。胎土はやや粗く、釉は黄味を帯びる。内面の底部との境には圈線がめぐる。299は断面台形の幅広で高い高台を有する。300は幅広で低い削りだし高台を呈する。301は高くて幅狭の高い断面台形の高台を有する。302は301と同様の特徴をもつ高台である。体部は故意的に打ちかかれたような様相を呈する。303はふいごの羽口である。

流路から出土した遺物は287の瓦器碗12世紀初頭の時期が与えられ、12世紀代の遺物が多いが須恵器は10世紀頃に還る可能性がある。また284の瓦器皿、296の羽釜は13世紀に含まれるものであろう。その他白磁が多く出土していることが指摘できる。

4区の中でも基盤層が高くフラットな面で建物跡が検出された。これらの建物跡の変遷を考えると、建物跡1、2は重複するため、同時に存在することは不可能である。建物跡2はピットから出土している瓦器碗の年代から12世紀後半の時期を考えることができる。建物跡1は出土遺物から年代を当てはめ

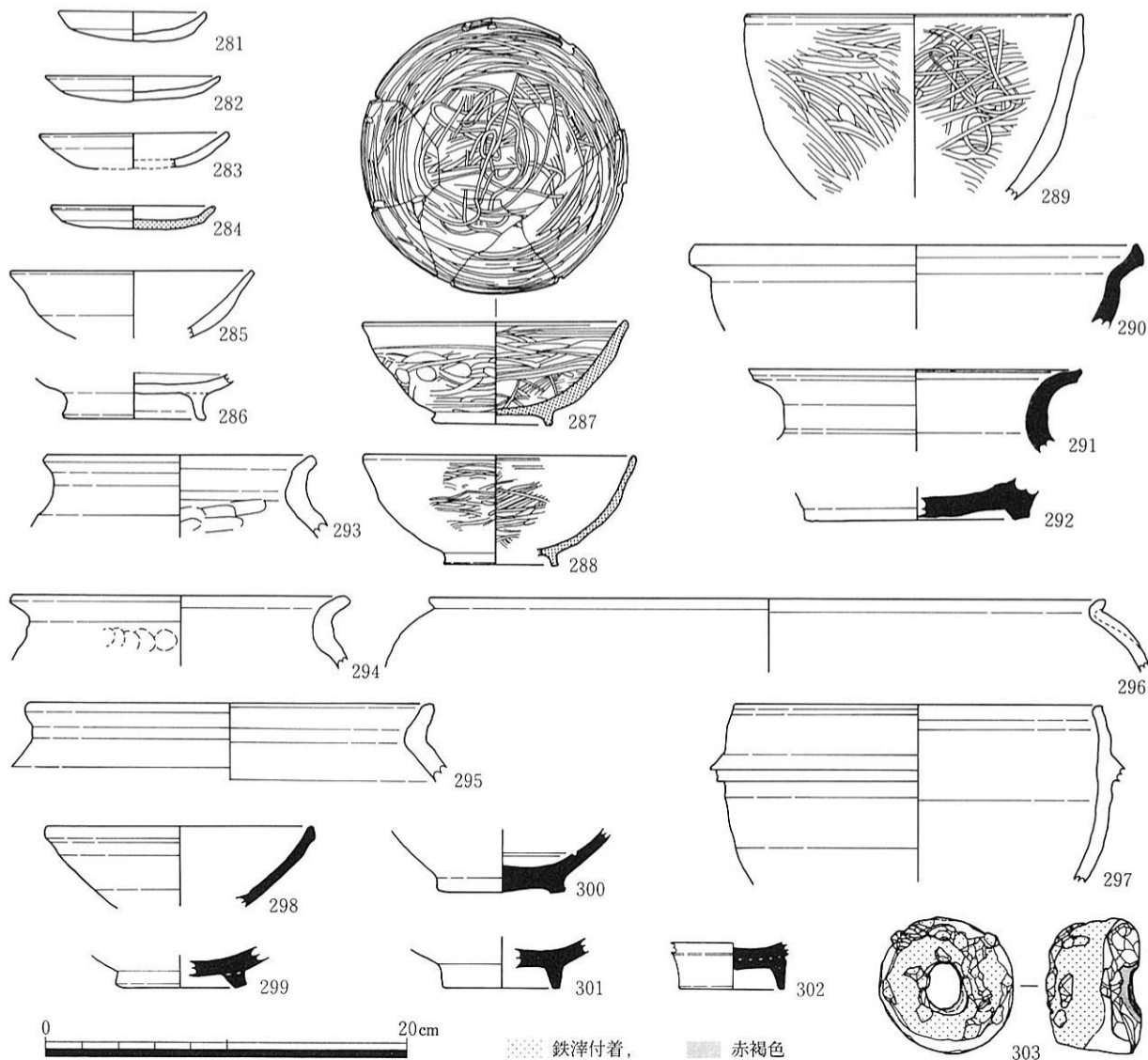


図70 4区流路出土遺物

ることは困難ではあるが、瓦器皿より、12世紀後半以降のものと考えたい。建物跡3はピットから出土している黒色土器の皿より、11世紀の年代が与えられる。建物跡4は出土した瓦器碗より12世紀前半の時期を当てはめることができよう。また、これらの建物跡、柵列はその軸はやや東西にふるものの方位とほぼ等しくする。ピットからは瓦器碗、土師皿、黒色土器などが出土しており、特に建物跡4のピット4-1-13からは多くの土器がまとまって出土しており、地鎮等の祭祀が考えられる。

ピットは建物跡に復元できなかった物もあるが、根石があるもの、柱痕が明瞭に確認できるものがあり、さらに建物があったことも想定できる。また、建物群は調査区の東側に更に広がる可能性がある。

調査区の南側で南北にはしる流路からは12世紀代の遺物を中心に多くの遺物が出土した。建物の時期とほぼ対応するものであり、この流路が建物群の幹線水路であったと考えられる。

また、調査区の南端で、遺物を多く含んだピット4-1-116を検出したが、周辺には同じ様なピットは見られず、建物跡の復元はできなかった。しかし、盛土付近でこのような遺構が検出されたことは、更に居住域を広げる行為が行われていたといえる。

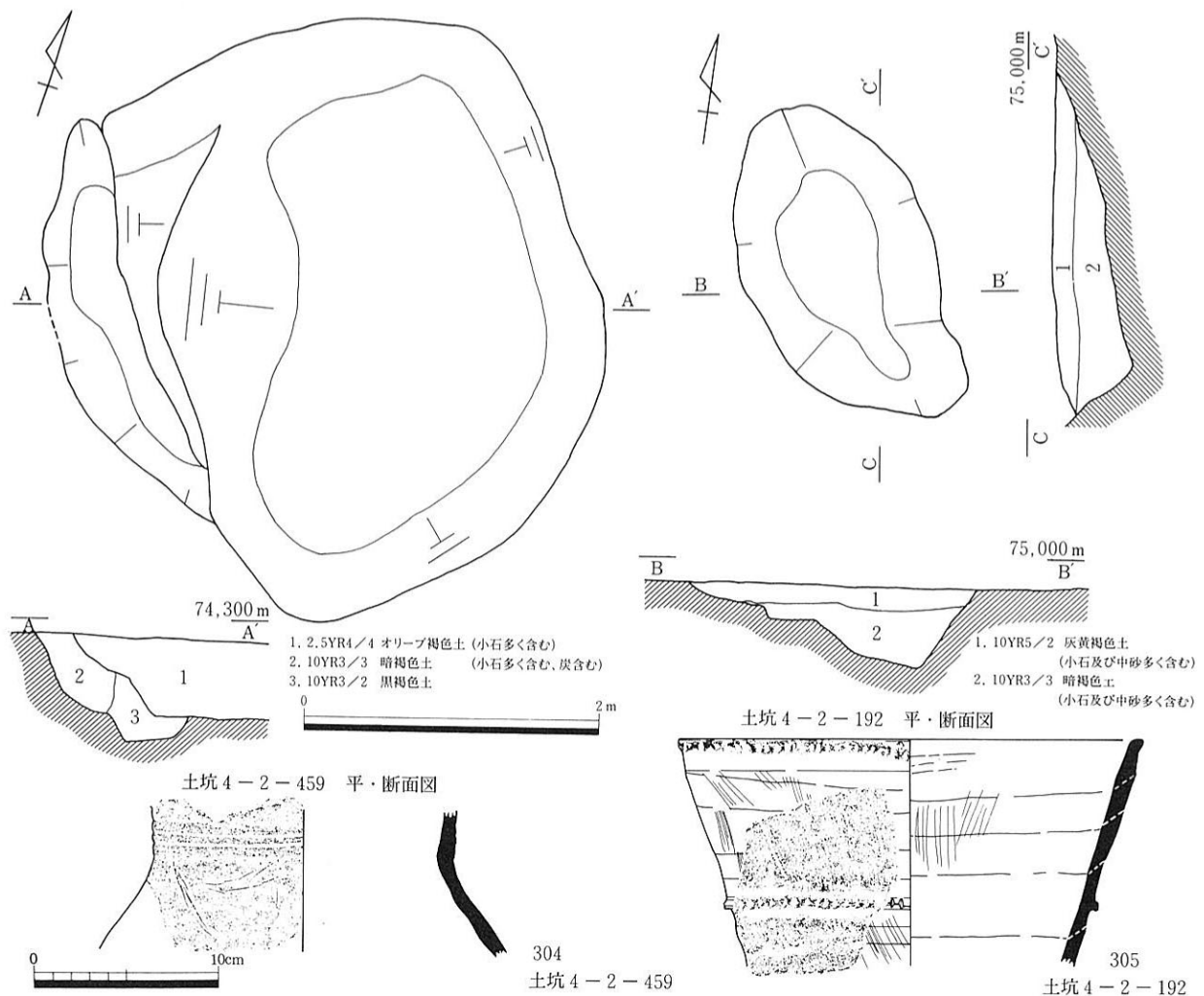


図71 土坑4-2-459、4-2-192平・断面図、出土遺物

基盤層上面

調査区中央で土坑が検出された。また、北側では2区、3区と同様にピットが検出されたがやはり遺物を含むものはほとんどなく、輪郭のはっきりしないものが多い。

・土坑4-2-459 (図71)

調査区の北側で検出された。上面の素掘井戸に西肩をきられている。残存長2.5m、残存幅1mの不定形土坑である。東肩は2段に落ちている。土坑の最上部から弥生土器が出土した。

出土遺物 (図71) 304土器は頸部にゆるく削り出した凸帯を持つ物で、2条のヘラ書き沈線が見られた。胎土にはやや大きい小石を含んでいる。弥生時代前期の時期を与える。

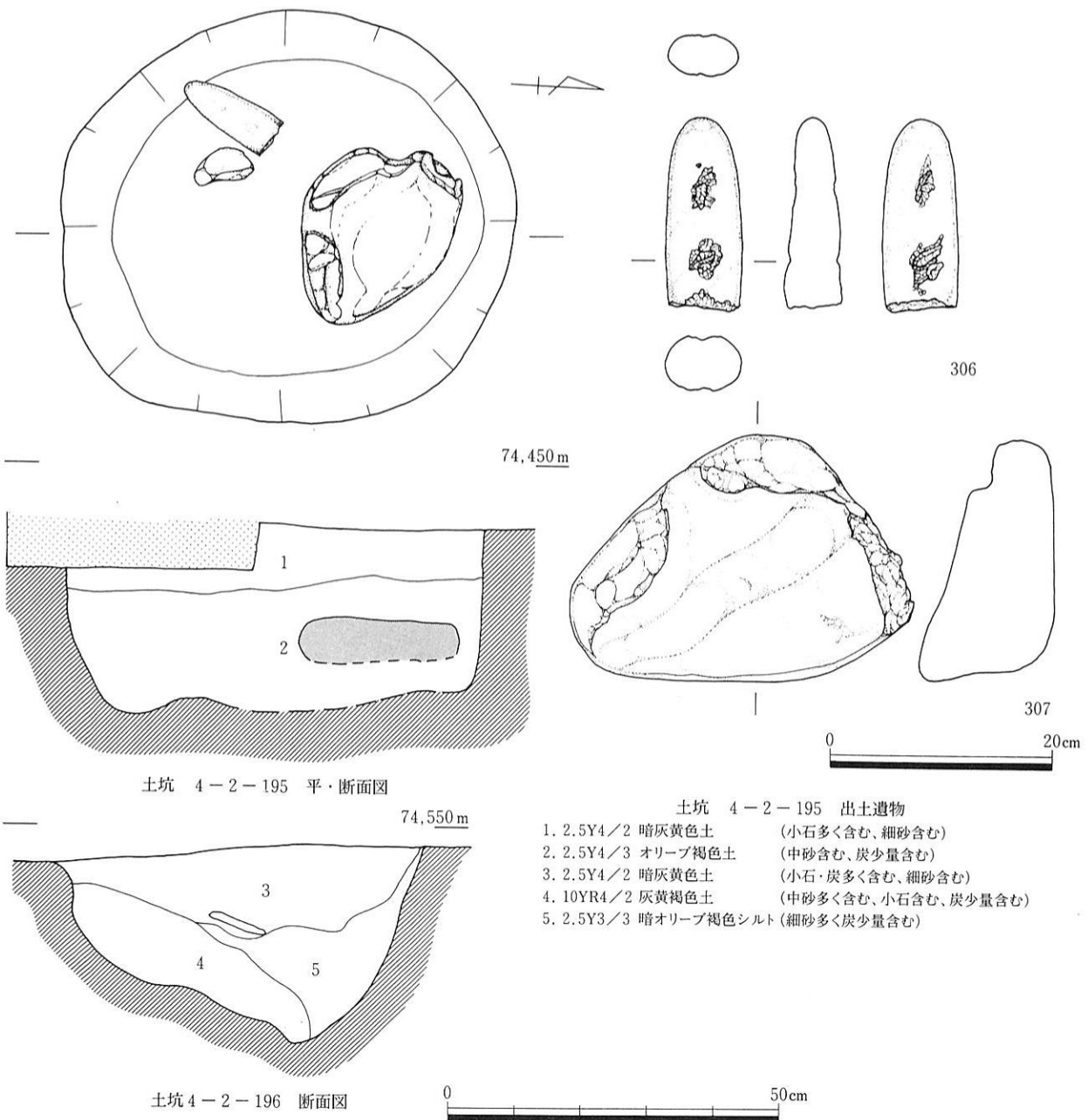


図72 土坑4-2-195平・断面図、出土遺物、土坑4-2-196断面図

・土坑4-2-192 (図71)

長軸2.3m、短軸1.9mの不定形土坑である。中からは、サヌカイト、縄文土器が出土している。

出土遺物 (図71) 305は口縁端部及び、頸部と体部の境に刻み目凸帯を持つ。胎土は密で茶褐色を呈する。復元口径25cmを測る。凸帯は口縁端部及び体部の2段に見られ、器形は口縁がまっすぐに開いてのびる。長原式深鉢A3類である。内外面に粗いハケメを施す。粘土紐の継ぎ目が明瞭に残る。縄文時代晩期の時期を与える。

・土坑4-2-195 (図72)

直径60cm、深さ25cmを測る。土坑の埋土は、2層に分層でき、上層は暗灰黄色土、下層はオリーブ褐色土の堆積になる。中からは、石皿、敲石と考えられる棒状の石製品、サヌカイト、土器片が出土している。

出土遺物 (図71) 306は敲石である。断面楕円形を呈し、わずかに曲線を描く。残存長17.45cm、長径6.9cm、短径4.9cmを測る。敲打痕が両面ともに2カ所見られる。材質は砂岩である。307は石皿である。最大長31.4cm、最大幅22cm、厚さ12cmを測る。表面は緩やかなカーブを持ち、裏面は平らである。

・土坑4-2-196 (図72)

調査区の北側、土坑195南側で検出した。直径、深さを測る。土坑からは縄文土器片が出土しているが図化することはできなかった。

これらの土坑を検出したのは、4層の堆積が見られる際の部分である。また、土坑4-5-195付近で幅10~15cmほどのサヌカイトの石核がかたまって4個体出土した。その他、4層内からは縄文土器、石器が非常に多く検出されている。多数検出されたピットは2~3区と同様の状況を呈する。

第3節 遺物

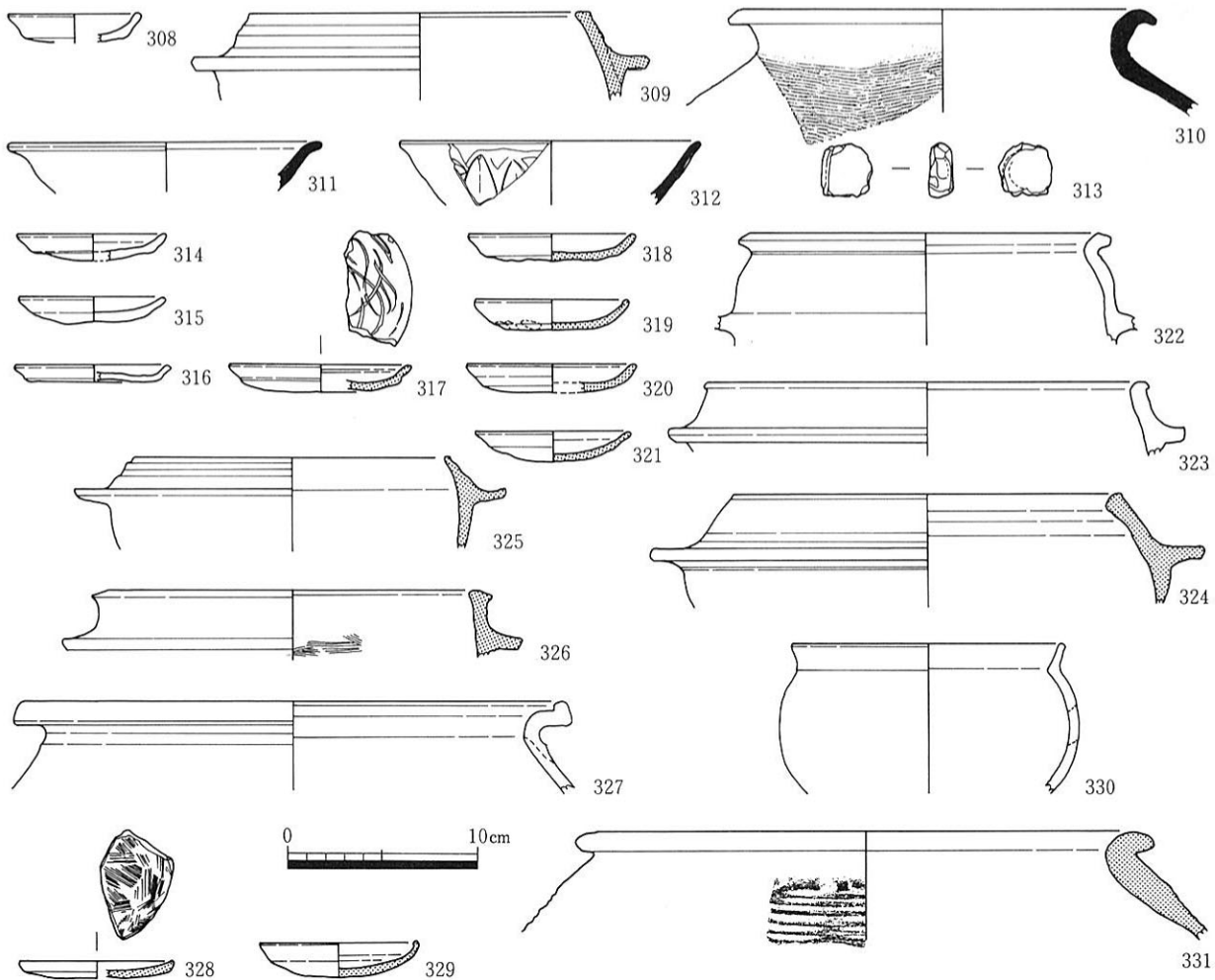
(1) 包含層出土遺物

308～331は1区包含層出土遺物である。308は土師皿である。平らな底部から口縁は上外方にまっすぐ開く。309は瓦質の羽釜である。口縁部は内湾し、口縁外面に凹線を2条施す。310は須恵器の甕である。体部には非常に密な叩きを施す。内面はナデを施す。311、312は、青磁碗である。311は口縁部を大きく外側に外反させる。312は外面に蓮弁文が施されている。連弁は非常に稜が明瞭である。313は瓦質の円盤状をしたものである。

314～316は土師皿である。314、315は、口縁部はわずかに外反し、体部に段を持つ。316は底部は平らな底部から上外方に短い口縁が立ち上がる。

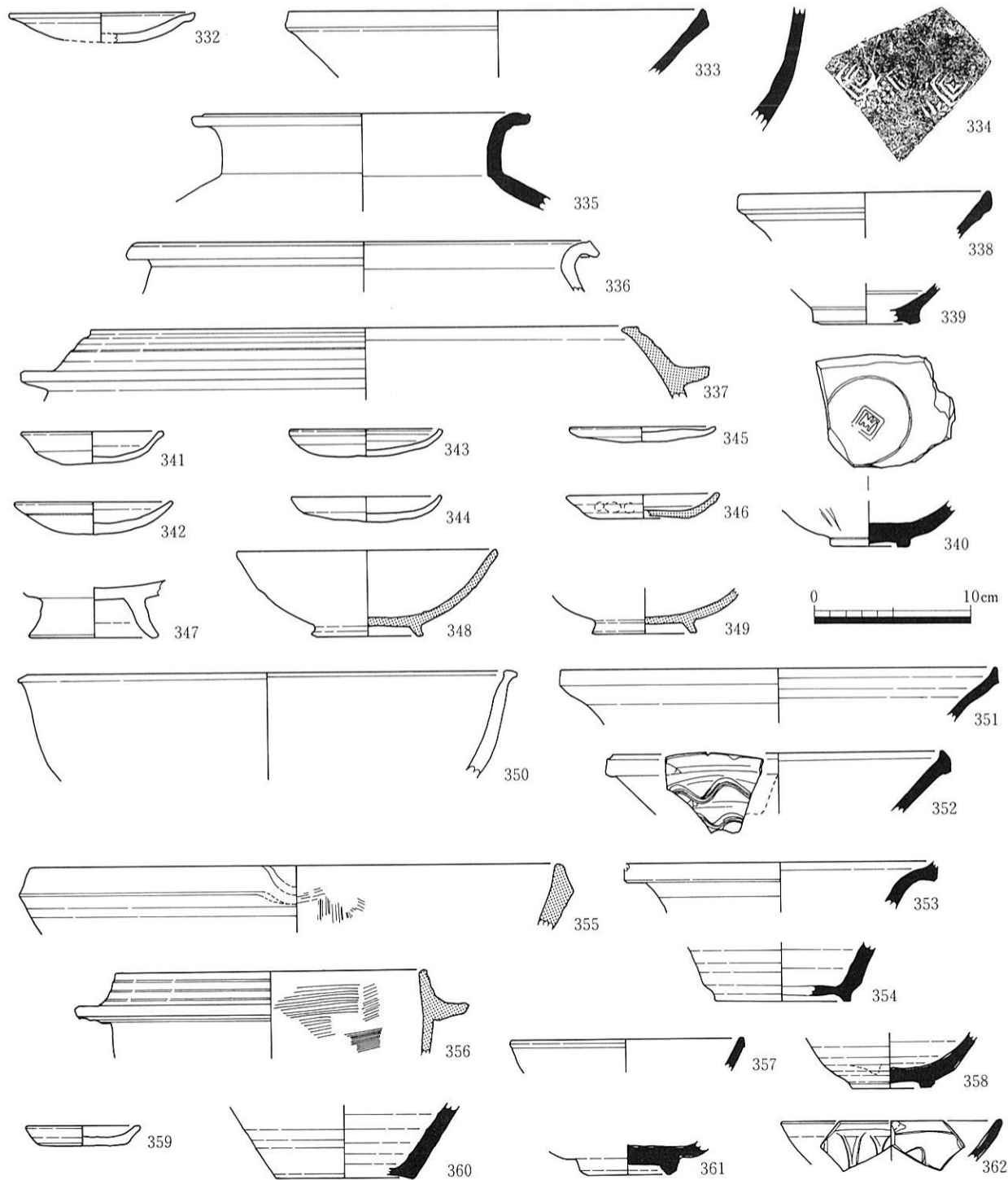
317～321は瓦器皿である。317は口縁部が大きく外反し、体部には段を持つ。見込み部分に連結状の暗文を施す。319は口縁部がやや内湾する。318、320は口縁部は外反し体部との境は段を持つ。321は口縁部は強い横ナデを施し、外反し、体部は段を持つ。口縁端部は丸く収める。底部はやや丸い。

322～327は羽釜である。322、327は土師質である。322は口縁部を外側に短く屈曲させる。口縁端部はやや尖る。323はわずかに口縁端部を外側に折り曲げる。325は口縁部は内湾し、外面に2条の凹線を施す。326は口縁は直線的にのび、口縁端部は面を持つ。体部内面にはハケメを施す。327は口縁部を大



308～313：2層、314～327：3層、328～331：側溝
 図73 1区包含層出土遺物

きく屈曲させた後、端部を上方につまむ。紀伊産の特色を持つ。324~326は瓦質である。324は焼成が不良である。328、329は瓦器皿である。328は器高が非常に低く、口縁端部はつまみ上げる。内面非常に細かいハケメを施している。330は土師器の甕である内外面とも、磨滅のため調整不明。丸い体部から短い口縁が上外方に開く。331は瓦質の甕である。体部外面には太い平行叩きを施す。体部内面はわずかにハケメの痕跡が確認できる。



332~340 : 2層 (334 : 2~3層)、341・345・347・348・355~358 : 3層上面、
342・343・344・346・349~354 : 3層、359~362 : 側溝他

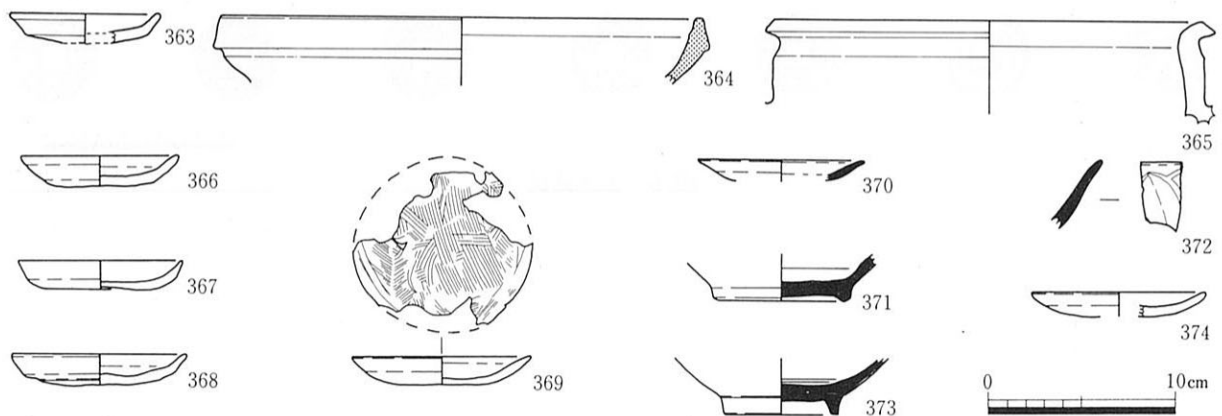
図74 2区包含層出土遺物

332～362は2区包含層出土遺物である。332は土師皿である。口縁部は外側につまみ出し、体部との境に段を持つ。口縁内側は沈線状を呈する。333は須恵器鉢口縁である。口縁部は断面三角形を呈し、口縁端部でわずかに内湾する。334は甕の体部である。外面は押印文を施し、部分的になで消す。内面はなでてすり消す。335は常滑の甕の口縁である。口縁端部は破損している。338、339は白磁碗である。338は口縁部である。玉縁状の口縁部で断面三角形を呈する。339は底部である。内面には圈線がめぐる。340は青磁碗の底部である。見込みに「玉」の陽刻が見られる。

341～344は土師皿である。341、342はやや丸みを持った底部から口縁部は上外方に立ち上がる。体部との境には段を持つ。342は口縁部は強いヨコナデを施し、内面は凹線状に凹む。343、344は平らな底部から短く上外方に立ち上がる。343は口縁端部は内湾する。345は口縁部はほとんど立ち上がりを持たず、わずかに口縁部をつまみ上げる。

346は瓦器皿である。内外面ともヘラミガキを行わない。見込みの暗文も確認できない。内面体部と底部の境で、ヘラミガキが一条見られる。347は土師器の高台付坏の高台である。焼成は非常に良好である。348、349は瓦器碗である。348は内外面ともに非常に磨滅しているため、調整不明。口径16.7cm、底径は6.4cm、器高5.6cmを測る。高台は断面台形を呈する。349は底部である。見込み部分には密にミガキを施している。焼成は不良で外面の調整は不明瞭である。高台は高くしっかりしており、端部は丸く仕上げる。350は土師器の鉢である。胎土は粗い。口縁端部は面を持ち、外面につまみ出す。

351、353、354は須恵器である。351は鉢の口縁部である。焼成はやや不良である。口縁部は内湾し、断面三角形を呈する。352は口縁部である。口縁端部は内側につまむ。非常に緩い波状文を施す。354は壺底部である。外面はケズリ内面はナデを施す。断面台形の高台を張り付ける。高台の端部はやや丸まっている。外面、底部内面に自然釉の付着が見られる。353は壺口縁部である。端部は欠損している。内面には釉の付着が見られる。非常に胎土が緻密であり、灰釉陶器と考えられる。355は瓦質の挿り鉢である。口縁は片口を呈する。おろし目の原体幅は不明。356は瓦質の羽釜である。口縁部はやや内湾し、外面には凹線を2条施す。内面はハケメを施す。357は白磁碗である。口縁部は玉縁状を呈している。器壁は非常に薄い。358は陶器である。359は土師皿である。平らな底部に短い口縁部が上外方に立ち上がる。360は底部である。外面はケズリ内面はナデを施す。361は青磁碗の高台部分である。362は青磁碗である。外面には蓮弁文、内面には圈線がめぐり文様を刻む。



363～365：2層（3区）、366～369：2層上面（4区）、370～372：2層（4区）、373：4層上面（4区）、374：側溝（4区）

図75 3区・4区包含層出土遺物

363～365は3区包含層出土遺物である。363は土師器の皿である。平らな底部から明瞭に屈曲して上外方に口縁部は立ち上がる。364は瓦質の播り鉢である。口縁部は断面三角形を呈する。365は土師質の羽釜である。口縁部はくの字に短く外反する。

366～374は4区包含層出土遺物である。366～369は土師皿である。367はやや上げ底気味で、口縁部は短く立ち上がる。368は底部と体部の境に段を持つ。369は平らな底部から口縁部が上外方に立ち上がる。内面にハケメを施す。370は白磁小皿である。口縁部は緩やかに外反し、いわゆる口禿である。371、373は白磁碗である。371は低く幅広の削り出し高台を呈する。底径は大きく、7.2cmを測る。373は断面台形の高い削り出し高台を呈する。釉はやや黄味を帯びる。底部内面と体部の境には沈線がめぐる。見込み部分は釉の付着が見られない部分がある。372は青磁碗である。外面には連弁文を施す。374は土師皿である。やや丸みを帯びた底部から口縁部はわずかに上外方に立ち上がる。

(2) 銭

銭は1区及び2区から合計9点出土した。そのうち、図化できたのは7点である。

375	開元通宝	1区	3層出土
376	開通宝	2区	4層上面出土
377	祥符通宝	1区	3層出土
378	皇宋通宝	1区	3層出土
379	皇宋通宝	1区	3層出土
380	至和通宝	1区	3層出土
381	元符通宝	1区	3層出土

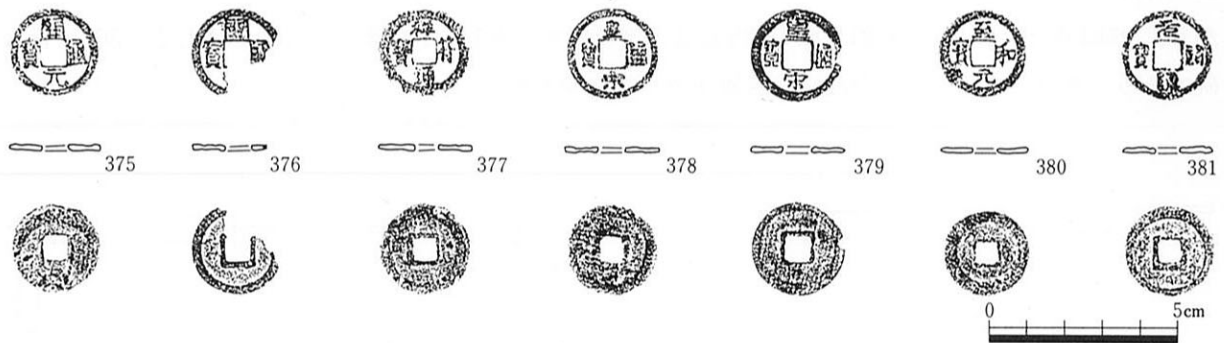


図76 出土銭貨

(3) 弥生・縄文土器

中之社遺跡では細片ではあるが弥生土器、縄文土器が出土した。その多くは遺構に伴うものではなく谷状の落ちの埋土と考えられる4層から出土しており、流れこみの遺物と考えられる。また、ピット状の遺構から出土している場合も、非常に細片で表面が磨滅しており遺構そのものの時期を表すとは言いにくい。そこでここでは、そのような出土状況のものも併せて記述する。なお、明確な遺構に伴うと考えられるものは、第4章第2節で述べているので参照されたい。

382は弥生時代前期の壺である。383は底部である。382と同一個体の可能性が高い。384は粗製の鉢である。口径は推定27cmを測る。口縁端部は先端をやや尖り気味に仕上げる。時期は不明である。

385は縄文晩期の鉢である。狭い凸帯を張り付けている。凸帯には刻みはみられない。色調は暗褐色を呈する。

386～414は縄文時代後期の鉢である。386、387は外面に凹線を施す。器壁は非常に薄い。387の凹線は押し引き状に施されている。388、389は口縁部内面に沈線を施す。388は口縁部は肥厚し、端部は外側に面を持つ。内面の沈線の上部には刻みを施す。389は磨滅が著しく不明瞭ではあるが口縁部内面には太い沈線が施され、その上部には刻みを施す。口縁端部は面を持つ。390も内面に沈線を施すが部位は明らかではない。391、392は水平にめぐる沈線で区画されたなかに刻みを施すものである。391は口縁部付近の屈曲部分である。393は非常に磨滅している。394～407は沈線で区画された縄文帯が水平に施されるものである。394～400は口縁である。394、395は口縁部に段を持たない。394は口縁端部は明瞭な面を持たず、丸く収まる。沈線の上部から口縁端部にかけて縄文が施されている。395は2条の沈線が見られる。口縁端部はやや磨滅しているが面を持つ。内面は非常に磨滅している。396～400は口縁部に段を持つ。396は沈線が3条確認できる。端部にはわずかに面を持つ。397は沈線が3条確認できる。口縁端部には面をもつ。398は口縁部はやや内湾気味に「く」の字に屈曲する。口縁端部は面を持つ。399は内外面ともに非常に磨滅しており、調整等は不明である。400は399と同様の特徴を呈する。401～403は体部片である。401は胴部と頸部のくびれ部にあたる。沈線が2条確認できる。402は沈線が2条、403は沈線が3条確認できた。内外面ともに非常に磨滅しているが縄文が確認できる。404は口縁部付近の段を持つ部分と考えられる。沈線が2条確認でき、沈線には刺突が見られる。405～407は体部片である。幅の広い縄文帯が施されている。407は内外面とも磨滅が著しいが外面にはやや太い沈線と縄文を施す。408は外面に2条の沈線を施し、その交点に刺突を施す。409は外面に沈線内刺突文を施す。410は口縁部である。口縁端部は面を持つ。「6」字状沈線文を施し非常に丁寧になでている。沈線上部から口端端部にかけて縄文を施す。内面には沈線が1条確認できる。411は外面に結節縄文を施している。411～414は外面に縄文が施されている。

これらの特徴から、388～393は元住吉山II式、394～395は元住吉山I式に比定される。397～400は394～395より古い形態を持ち、一乗寺K式に比定される。401～407は一乗寺K式～元住吉山I式に比定される。また、408～411は一乗寺K式に比定される。

415は波状口縁深鉢である。口縁は内湾し、端部はやや肥厚し、まるく収める。縦位蛇行沈線の周囲を弧状に囲むように沈線を施し更に多条平行沈線を施す。沈線はそれぞれ、末端に刺突を施す。北白川上層式3期に比定される。416は口縁部であり、端部が肥厚している。器面は非常に磨滅しており、器壁は非常に薄い。417は深鉢口縁の筒状部である。沈線と縄文を施している。中津式に比定される。今

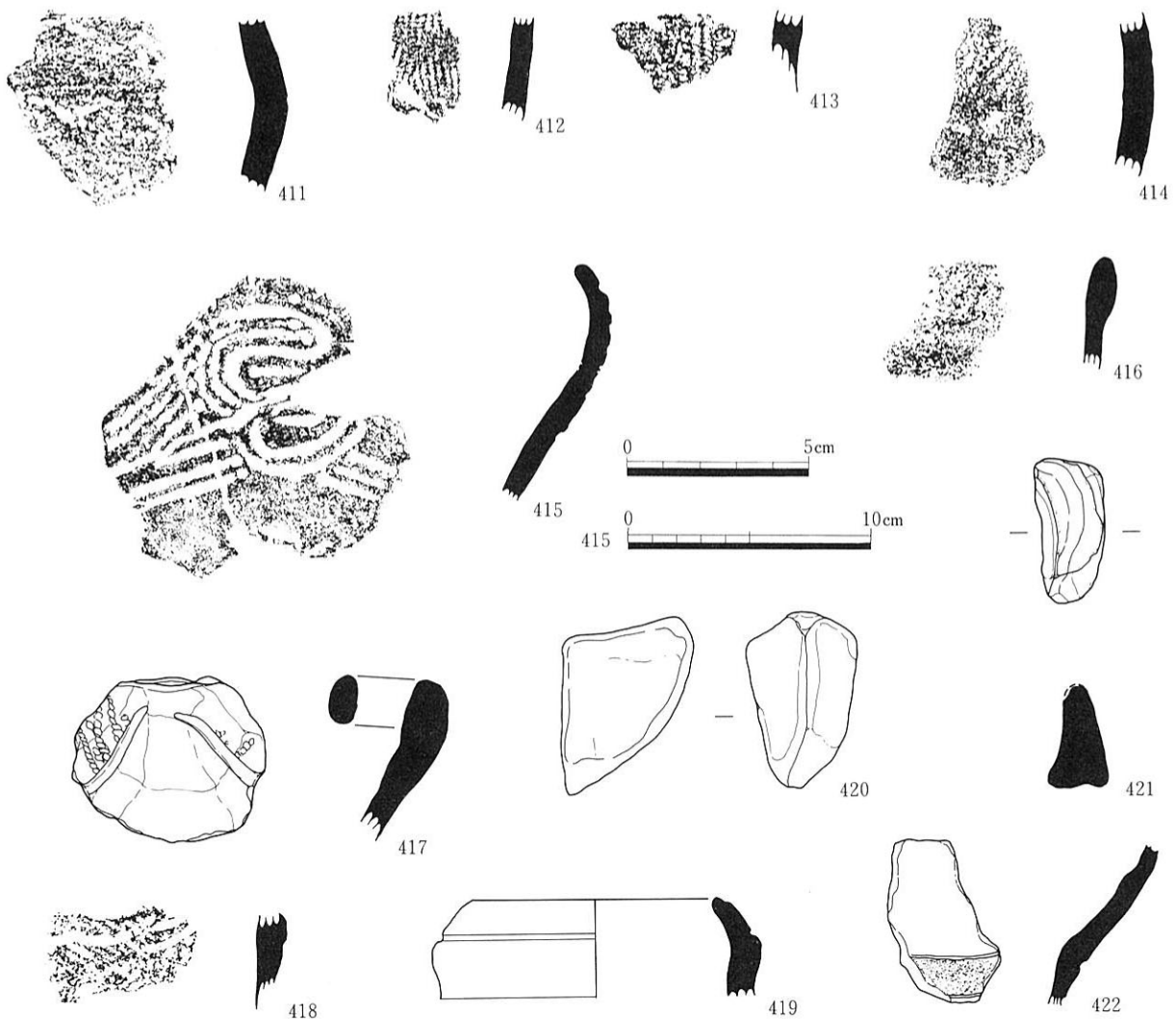


382~396・398~405・407~410：4層、397：ピット4-2-372、406：基盤層上層

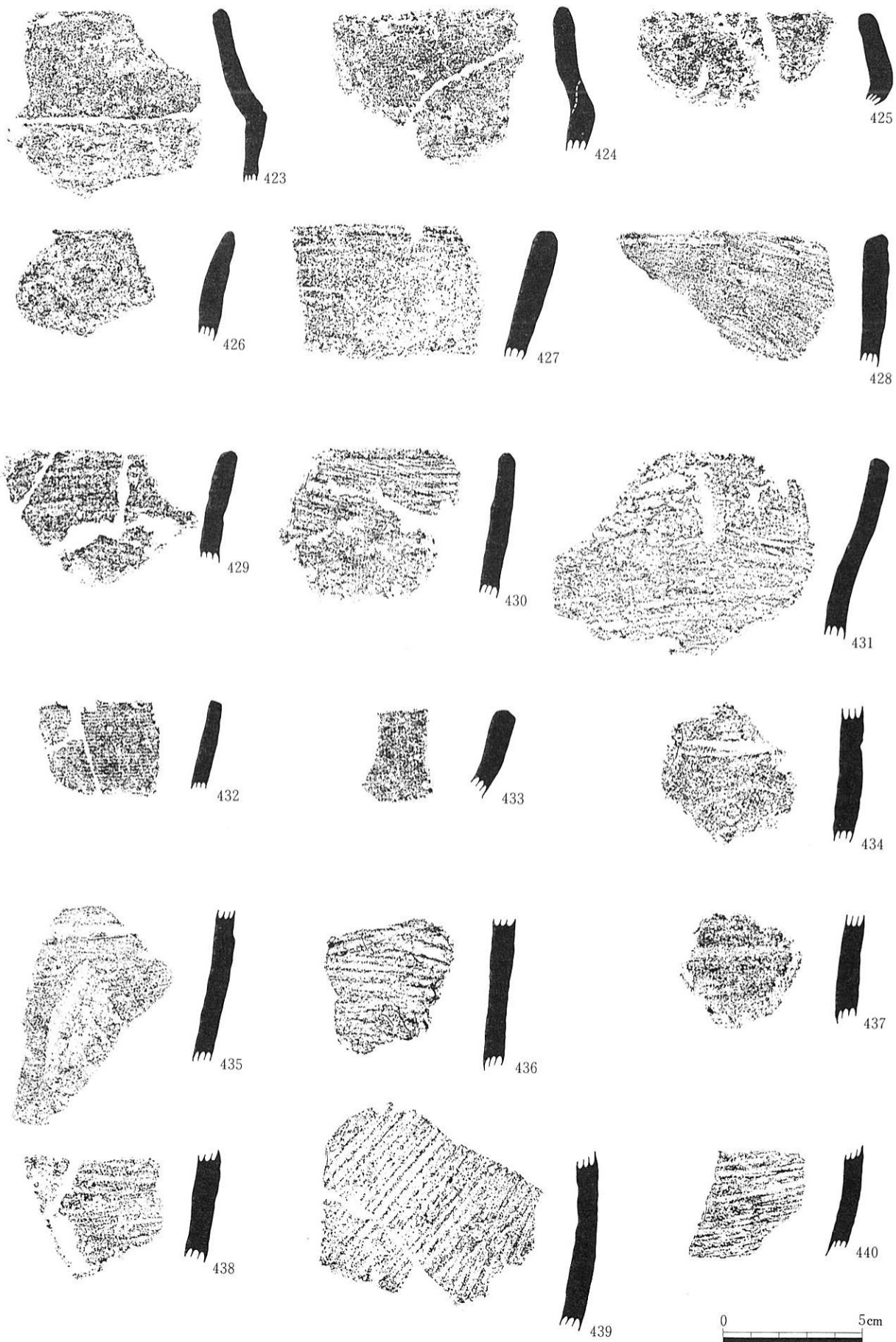
図77 弥生・縄文土器（1）

回出土した遺物の中で、中津式まで溯ると分かるものはこの1点のみである。418～422は注口土器である。418は体部片である。縄文地に弧状沈線を施している。419は段を持つ口縁部である。内面は丁寧にミガキが施されている。口径は6.4cmを測る。420、421は突起である。422は注ぎ口である。体部との境界部分に沈線及び縄文が施される。

423～440は無文の土器片である。423～433は口縁部である。423、424は「く」の字に屈曲し、口縁部は外反してのびる。423は外面は調整不明。内面は条痕を施す。口縁端部は面を施す。424は内外面に条痕を施す。口縁端部は面を持たず、丸く収める。425はくの字に屈曲し、口縁部はやや内湾し短い。器壁が磨滅しており調整は不明瞭であるが、内外面ともにわずかに条痕が見られる。口縁端部は面を持つ。426はわずかに外反する口縁で口縁端部は尖り気味である。427は内外面に条痕が残る。口縁端部は丸く収める。429は外面に条痕が内面は磨滅が著しく不明。口縁端部は明瞭な面を持たず、丸く収める。430は内外面ともに条痕を持つ。口縁部端面は内外面に面を持ちそのため口唇部は尖る。431は内外面に条痕を施す。432、433は内外面ともに非常に丁寧に調整しており、口縁端部には面を持つ。433はやや内湾し、口縁端部は内外面から面を持ちそのため尖り気味に仕上がる。434は内外面ともに条痕がわずかに確認できる。435は体部破片であるが段を持つ。内外面ともに条痕を施す。436は外面に非常に明瞭な



411・412・414～422：4層、413：基盤層上面
 図78 縄文土器（1）



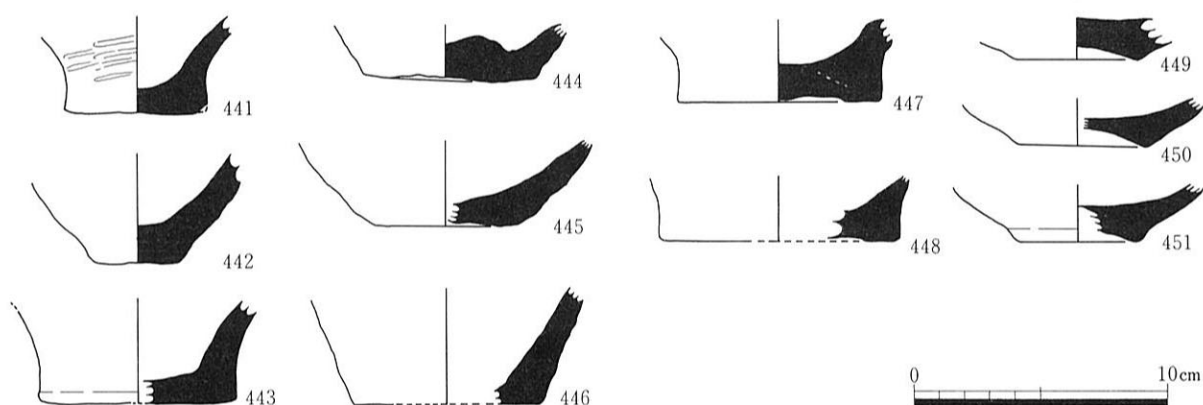
423~430, 435, 440 : 4層、434 : 土坑 3-262、436 : ピット 4-2-342、437 : ピット 3-306、438 : ピット 3-330、
439 : 土坑 4-2-459

図79 縄文土器 (2)

条痕が見られる。437は外面に条痕が見られる。438外面に条痕が残る。内面は丁寧にナデを施す。439は内外面に条痕が見られる。440は内外面ともに条痕を施す。

441～451は底部である。441は弥生時代後期の甕の底部であり、外面にはタタキが施されている。442は小さな底部でやや膨らみながら体部が立ち上がる。443～444は平底を呈する。447、448は充填している。449～451は中へこみを呈する底部である。

弥生時代後期、前期、及び縄文時代後、晩期の土器が出土した。しかし弥生時代、縄文時代晩期の遺物と分かるものは非常に少なく、多くは縄文時代後期に含まれるものであった。また、その中でも、時期を特定できるものでは、一乗寺K式から元住吉山I式にかけてのものが多い。



441：側溝、442：2層、443、446～448：3層、444、445、449～451：4層

図80 弥生・縄文土器（2）

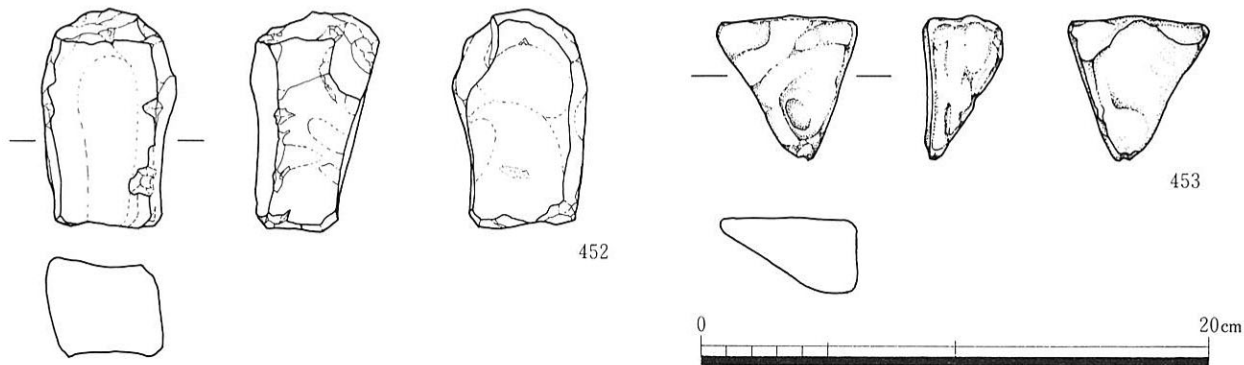
（4）石製品

・砥石

452、453は砥石である。452は残存長8.7cm、残存幅4.3cm、厚さ3.4cmを測る。表裏目、側面ともに使用されており、非常に磨滅している。特に表面は緩やかなカーブを持つ。453は残存長5.7cm、残存幅5.4cm、厚さ3cmを測る。表面及び側面に使用の痕跡が見られる。ともに中世に属するものと考えられる。

石器には敲石、石皿、サヌカイトの打製石器等が出土している。

・敲石・石皿



452：3層上面（2区）、453：4層（4区）

図81 出土石製品 砥石

454～458は敲石である。454、455は表裏面ともに長楕円形の敲打痕が見られる。456は表面には長楕円形の敲打痕が見られる。裏面は凹レンズ状に緩やかに凹みが見られ、中央部分は磨滅している。側面は敲打痕が見られる。焼成を受けており、表面は橙黄色、裏面は黒褐色を呈する。457は非常に整った平面楕円形を呈する。長径約12cm、短径約10cm、厚さ3.8cmを測る。焼成を受けており一部赤褐色を呈している。表裏面ともに、長楕円形の敲打痕を持つ。458は表面中央に敲打痕が見られる。石皿の用途と兼用していた可能性が考えられる。459、460は石皿である。459裏面は非常に平らであり、表面は非常に滑らかである。460は長径31.6cm、短径24cm、厚さ8.5cmを測り平面は隅丸の三角形を呈する。窪みは非常に大きく、表裏面ともに見られる。

・打製石器

打製石器は製品、未製品、石核、剝片、チップがコンテナにして2箱出土している。すべてサヌカイト製である。チップ（ここでは2×2cm以下の剝片をチップとした）以外の石器について計測を行った。出土点数699点、重量7205.81gを測る。詳細は表1、表2に挙げたとおりである。石器は各種製品の他に、石核、剝片等も一定量出土している。これらの石器の出土状況は、縄文土器、弥生土器が主に出土した4層内から出土したものと、それより上層で出土したものがある。1区、及び2区北側では4層に対応する層がないが、基盤層の上層である3層で全体の17%の石器が出土している。縄文土器、弥生土器がほとんど4層、基盤層上面から出土していることを考えると、流入したものだけではなく、人々のこの場所での活動に伴って出土したものが含まれていると考えられる。このことを裏づけるものとして4区からまとまって出土した石核がある。その他にも未製品や良好な剝片、石核、チップの出土など石器製作を想定できる遺物が一定量出土している。

このことをまとめると

- 1、巻き込み等により上層から出土したもの。
- 2、土器同様に流入したと考えられるもの。
- 3、石器製作等この場所での活動に伴うもの。

この場合、2と3については、2～4区についてはともに4層内の遺物であるために区別することはできない。また、1区、2区北側では3の可能性が高いといえる。次に遺物の時期であるが、製品の形態から弥生時代に所属すると思われるものもあるが、石器自体からその時期を推し量るのは非常に困難であり、縄文時代後期を中心にして土器が出土していることから、この時期に所属するものが大部分を占めると考えられる。また、旧石器時代に属するような製品は確認することができなかった。以下主なものを図化した。また、図化しなかったが写真を掲載したものもここでまとめて述べる。

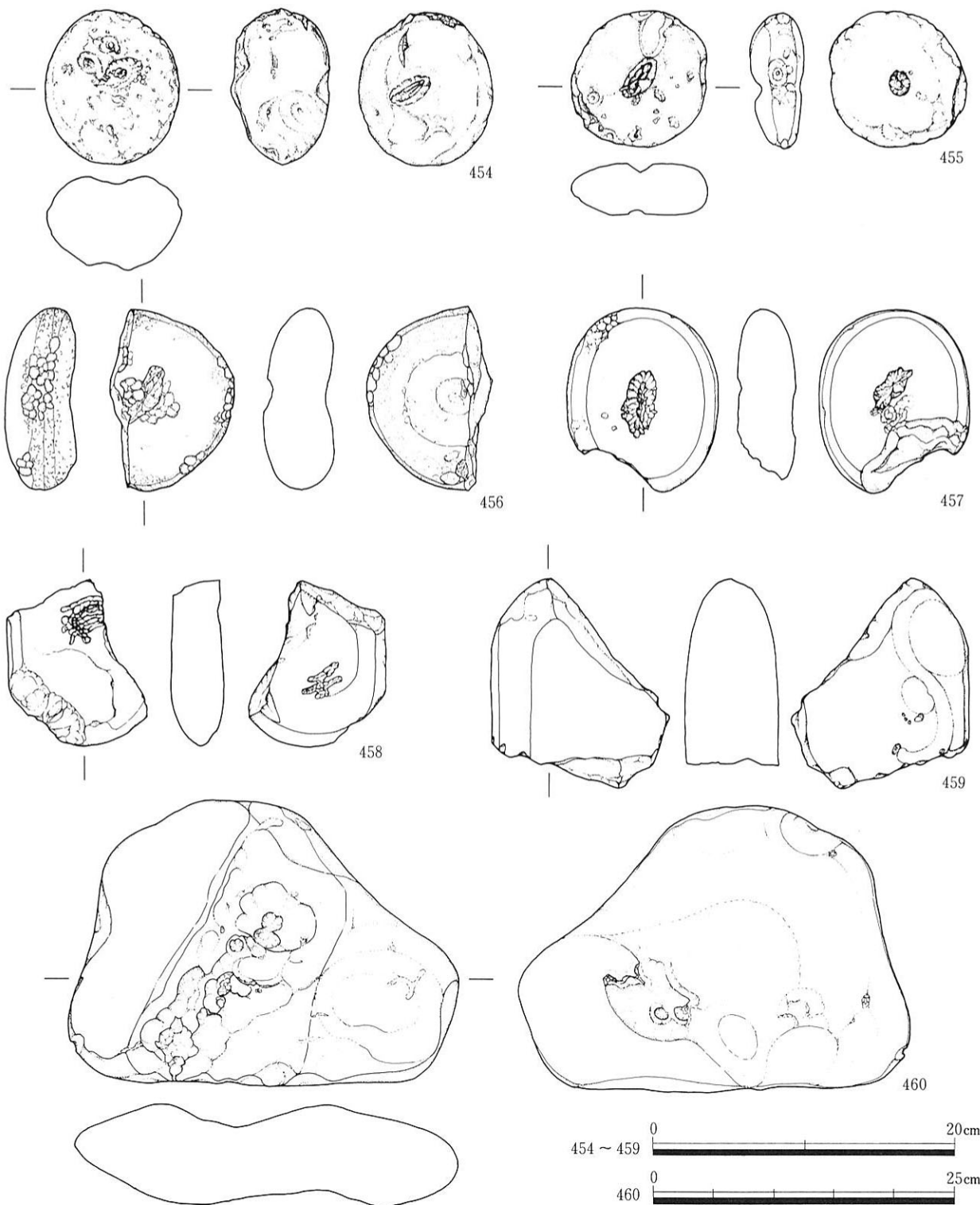
製品、未製品としては、石鏃、石錐、楔型石器、スクレーパー、石槍がある。

461～497は石鏃である。石鏃にはさまざまな形態のものがみられるが、有茎鏃はみられず、無茎鏃の中でも、凹基式のものが多数を占め、平基式、あるいは基部が丸みを帯びるものが若干みられた。

461～482、493、494は凹基式である。全体の形態は様々であり、特に分類は行わなかったが概観すると、刃部は467、475のように側縁が直線的なもの、464、476のように側縁が内湾するもの、478のように外湾するもの、470、481、493のように側縁が先端近くで屈曲し多角形を呈するもの、482のように側縁に段をもつものが見られる。また、抉りも461のように身の長さに対して深いものから、471のように非常に浅いものまで見られる。大きさも462の小型のものから493の大型のものまであり、全体が472のように正三角形のものから、477のように身の長さに対して幅の狭い二等辺三角形を呈するものが

ある。478は側縁は両側から丁寧に加工されているが、先端はこぶ状で鋭利ではない。483、484は平基式である。483は先端のバルブを除去できておらず、制作の段階で放棄された可能性もある。485は基部に丸みを帯びるものである。中央部分の厚みがあり、あるいは製品として機能しなかったことも考えられる。

486～492は全体的に調整が粗雑であり形が整っていないものである。未製品の可能性もあるが、側



453～456：4層（2区）、457：側溝（3区）、458：土坑3-2-372、459：土坑3-2-138、360：4C層上面（3区）

図82 出土石器（1） 敲石、石皿

縁を調整して、先端部を意識してつくられていることから、製品と考えたい。ここに掲載しなかった中にも486のように側縁部に微細な剝離面をもつものが見られたが、製品か剥片かの判別が難しい。

石鏃は主要剝離面を大きく残しているもの、全体に加工が及ぶため、主要剝離面が確認できなかったものがあった。また、先端部や足を欠損しているものが多く見られた。

498～502は石鏃である。498、499はつまみ状の頭部を有し、鏃部の長いものである。498は頭部が小さいが、欠損しているのではなく、頭部上端は自然面である。500、502は剥片の先端を加工し鏃部としたものである。鏃部は短い。500は自然面が残っている。501は石核の欠損部分の形状を利用し、鏃部としたものである。

503は彫器と考えていたが、上下がややつぶれたような様相を示すこと、右側縁が縦方向の裁断面を持つことから、楔形石器の欠損品の可能性が高い。

504～511は楔形石器である。相対する2辺、あるいは上下、左右4辺に階段状の剝離痕や、つぶれ状の剝離痕を有するものである。また、縦方向（遺物の天地は加撃が主に加わったと考えられる辺を上下とした）に裁断面をもつものも多い。その結果生じる511のような欠損品も多く出土している。全体の形状が丸みをもつもの（504～506）、横長（507、508）、縦長（509、510）の長方形を呈するものがある。504は上端につぶれ状の痕跡をもち、下端はわずかに剝離している。505は上下に階段状の剝離がみられ、左側面は裁断面を有している。506は上下につぶれ状の剝離痕がみられる。左右側縁は裁断面を有している。507は上下につぶれ状の剝離痕をもち、左右には微細な加工を施す。508は全体に風化している。上端はつぶれており、下端は階段状の剝離痕を有している。509は上下につぶれ状の痕跡をもつ。510は上下につぶれ状の剝離痕がみられる。508～510は左右の側縁には加工は見られない。

512は石槍の未製品と考えられる。全体に風化しているが一方の側縁には両面から加工を施す。背面には自然面が残る。打点は欠損しており、不明であるが、側縁の剝離面が折れ面に切られているため製作途中で折損した可能性が高い。

513～515は大きさ、形状に共通点がある二次加工を有するものである。いずれも側縁に調整を加え、先端を尖らしており、基部の途中で折損している。折損部分が側縁の剝離痕をきることから、使用による折損の可能性が高い。楔のような使用が考えられるが、513は内湾した刃部をもつスクレーパーの可能性が高い。514は右側面は他に比べて風化が進んでいる。

516～528はスクレーパーである。不定形刃器との境界は不明瞭ではあるが、急角度のある程度連続した加工が認められるものをスクレーパーとした。517は背面は自然面で、打点は欠損している。刃部は両側から連続した加工を行っている。刃部の剝離面が折面にきられており、使用の際に折損したものと考えられる。518は主に背面を加工し刃部としている。打点は欠損しているが刃部はその欠損面にきられていないことから、打点の欠損している剥片を利用していると考えられる。519は背面も一枚の剝離面からなる。打面は自然面である。下端を両面から交互に加工しているが、あまり鋭利ではない。520は背面も一枚の剝離面からなっており、打点は欠損している。側面に一部自然面が残存している。下端に両面からやや大きい加工を行っている。523は上端を背面側に刃つぶしを行い、そのため打点は欠損している。刃部は両面から連続した加工を施す。524は下端及び両側縁に加工が及んでいる。特に下端は両面から加工を行い刃部を作り出す。打面は自然面である。525は右側縁を両面から加工し刃部を作り出す。左側縁は主に背面に刃つぶしの加工を行う。526は打点は自然面、背面、側面も自然面を有しており、原礫から大きく剝離された剥片を利用している。主に主要剝離面下端を加工し刃部を作り出す。

527は石材中の石のため、剥片をとる加撃の際に途中で折損している。背面は一枚の剥離面からなる。528は石核を利用したものである。片面には自然面が残存している。下端に両面から加工を加え刃部を作り出す。

529～544は二次加工のある剥片である。刃部を有するいわゆる不定形刃器といわれるものと、何らかの調整剥離は意図しているが刃部を作り出すものではないものがある。

529～533、537、538、543は刃部を有さないものである。529は剥離面が磨かれており、その部分には擦痕が多くみられ、下端には剥離痕がみられる。530は両面から丁寧な加工を行っており、製品の欠損品の可能性が考えられる。531は側縁に微細な剥離痕が見られる。532は側縁両面に加工がみられるがさほど鋭利ではなく、刃部を有するものではない。533は打面、背面は自然面である。537は打面は自然面である。一方の側縁に背面側に階段状の剥離痕を有する。楔形石器とも考えられるが対する辺にはそのような痕跡が見られず、階段状の剥離痕も片面のみであるため二次加工のある剥片のなかに含めた。538は両側縁に微細な加工を施す。543は側縁に大きな加工を施し、全体の形を整えているようであるが、細部の調整剥離はみられない。

534～536、539～542、544は刃部を有するものである。534は背面も一枚の剥離面からなる。535は下端片面に微細な加工を加える。536は背面は自然面からなる。主要剥離面側縁に加工を施し刃部とする。539は側縁に両面から加工を施し刃部としている。背面も一枚の剥離面からなる。540は主要剥離面下端に微細な加工を加え刃部としている。541は下端、両側縁に加工を加え、ヘラ状に形を整えている。全体の形を整えていることから不定形刃器とするよりは、定型化した製品として分類すべきかもしれない。542は背面には風化面が残り、側縁は両面から微細な加工を施し、刃部を作り出す。544は側縁に両面から加工を施す。背面も一枚の剥離面からなる。

これらの不定形刃器やスクレーパーは528以外は剥片を素材としているがその剥片を大きく整えることはなく、側縁に調整剥離を施すことによって刃部を作り出している。つまり剥片自体の形を生かして製品としており、518のような打点の欠損しているような小さな剥片も利用している点は注目できよう。

545～552は剥片である。545、546は薄く、小さな剥片であり、石鏃を制作する際に有効な剥片と考えられる。545は打面は自然面である。546は打点は線状で不明。背面も一枚の剥離である。547は縦長の剥片である。打点は線状であり不明瞭ではあるが剥離面と思われる。背面の剥離面は、主要剥離面に比べて風化が進んでおり、剥片、あるいは石核を二次利用したものと考えられる。548～552は横長の剥片である。548は背面、側面、打面ともに自然面である。549は打面は自然面で側面にも自然面が残る。主要剥離面は背面に平行して剥離される。550は背面は自然面で、腹面には主要剥離面以外に風化面が残る。また、自然面、風化面とも非常にローリングを受けており、古い段階の剥片を二次利用したものである。551は打点は自然面であり、主要剥離面は背面に直行して剥離される。552は背面は大きく1枚の剥離面からなり、主要剥離面はそれに直行して剥離されている。打面は自然面である。ここで取り上げた剥片は背面の剥離面があまり多くなく、あるいは自然面で適当な大きさ、厚さを呈しており製品をつくる上で有効な素材となる剥片である。

553～561は石核である。553は片面には自然面が残存している。縁辺部の剥離痕は小さく、石核を最終調整してスクレーパーのような製品を意図している可能性がある。554は側面からではなく、表面から剥離しているため紡錘状になっている。他は側面から剥離を行っており、やや大型の剥離面を有している。次の剥片を取りにくい形状になっている。556は風化面を有している。多くはその平坦な風化面

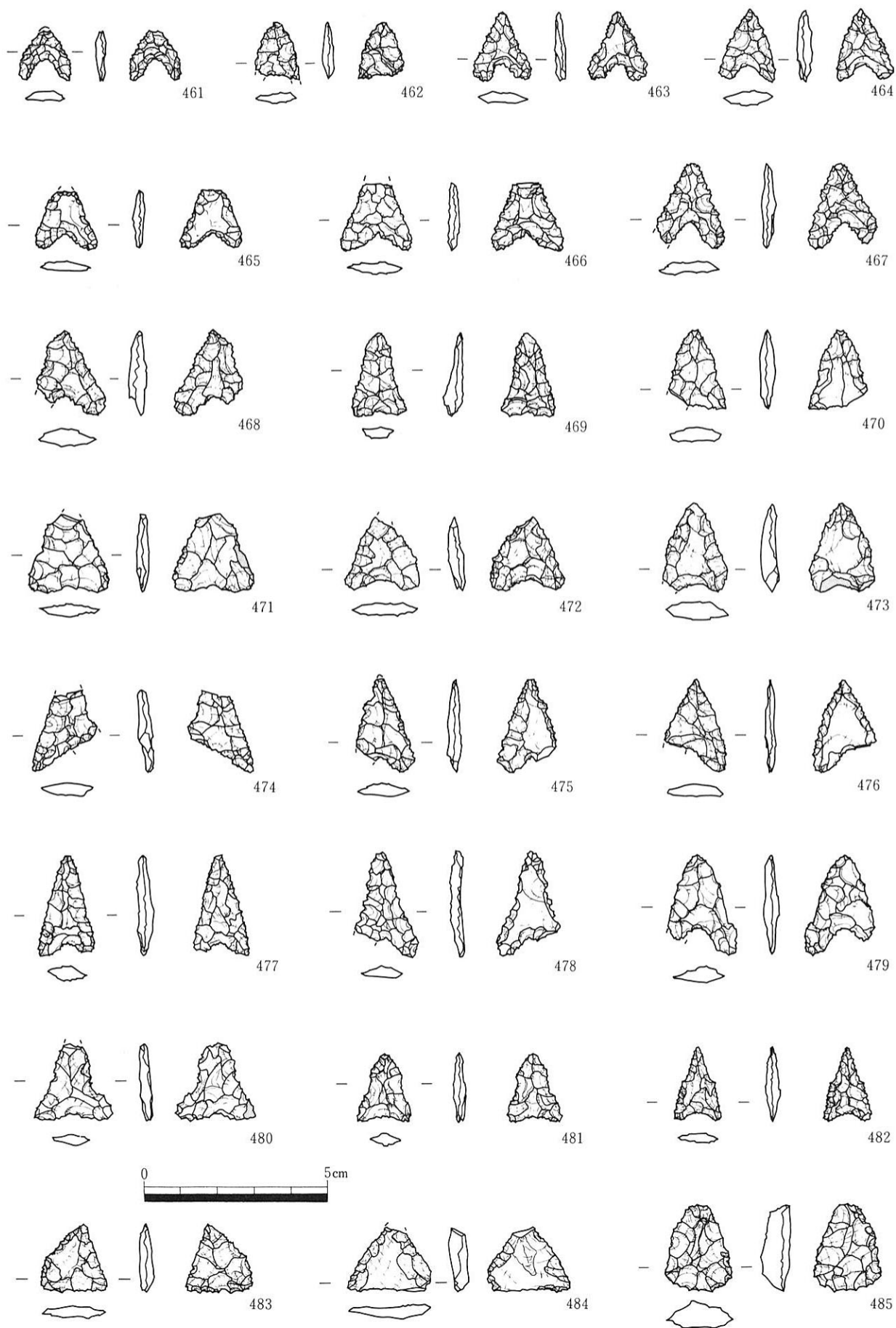


图83 出土石器(2) 石鏃

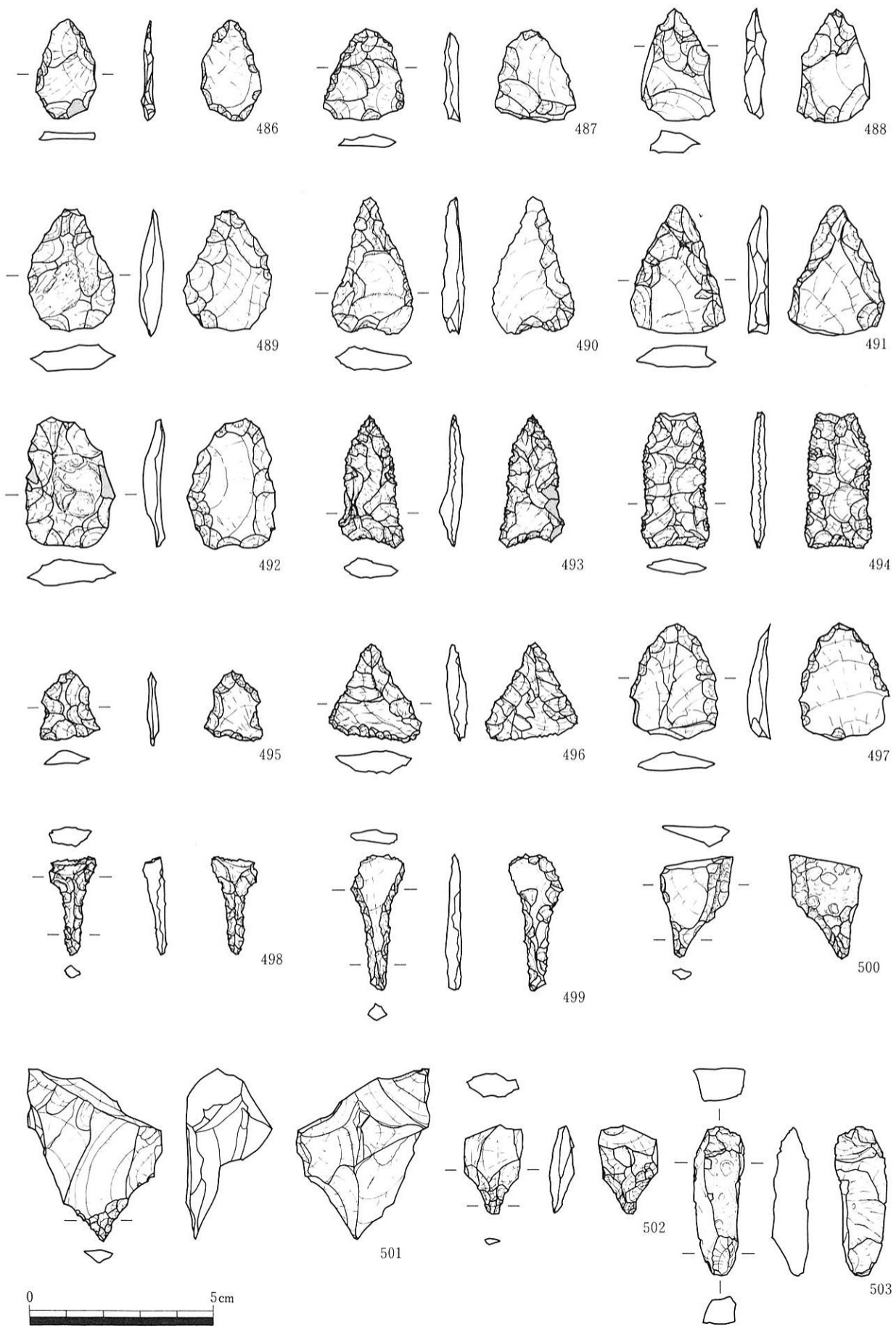


图84 出土石器（3） 石鏃、石錐、楔形石器

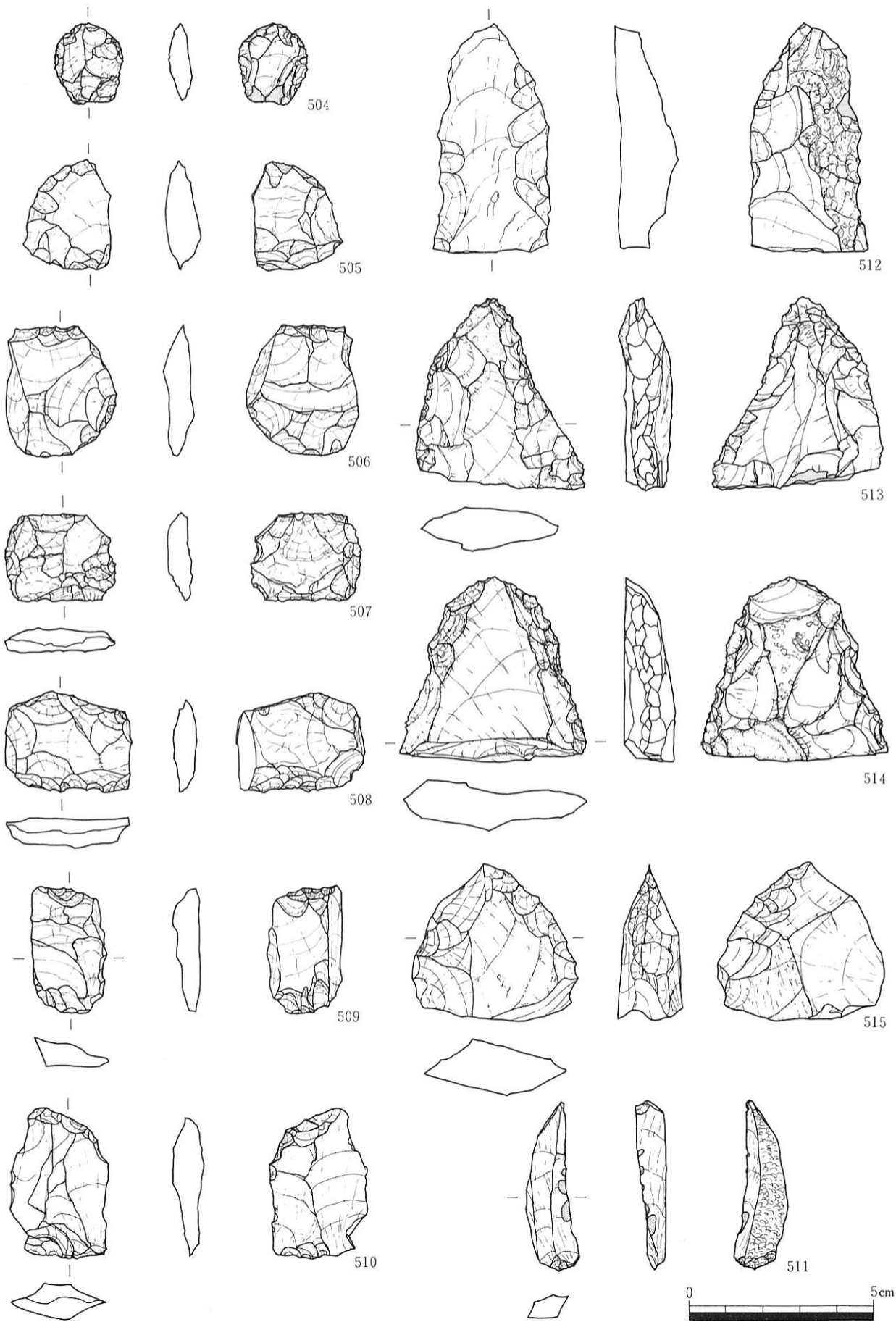


图85 出土石器(4) 楔形石器、石槍他

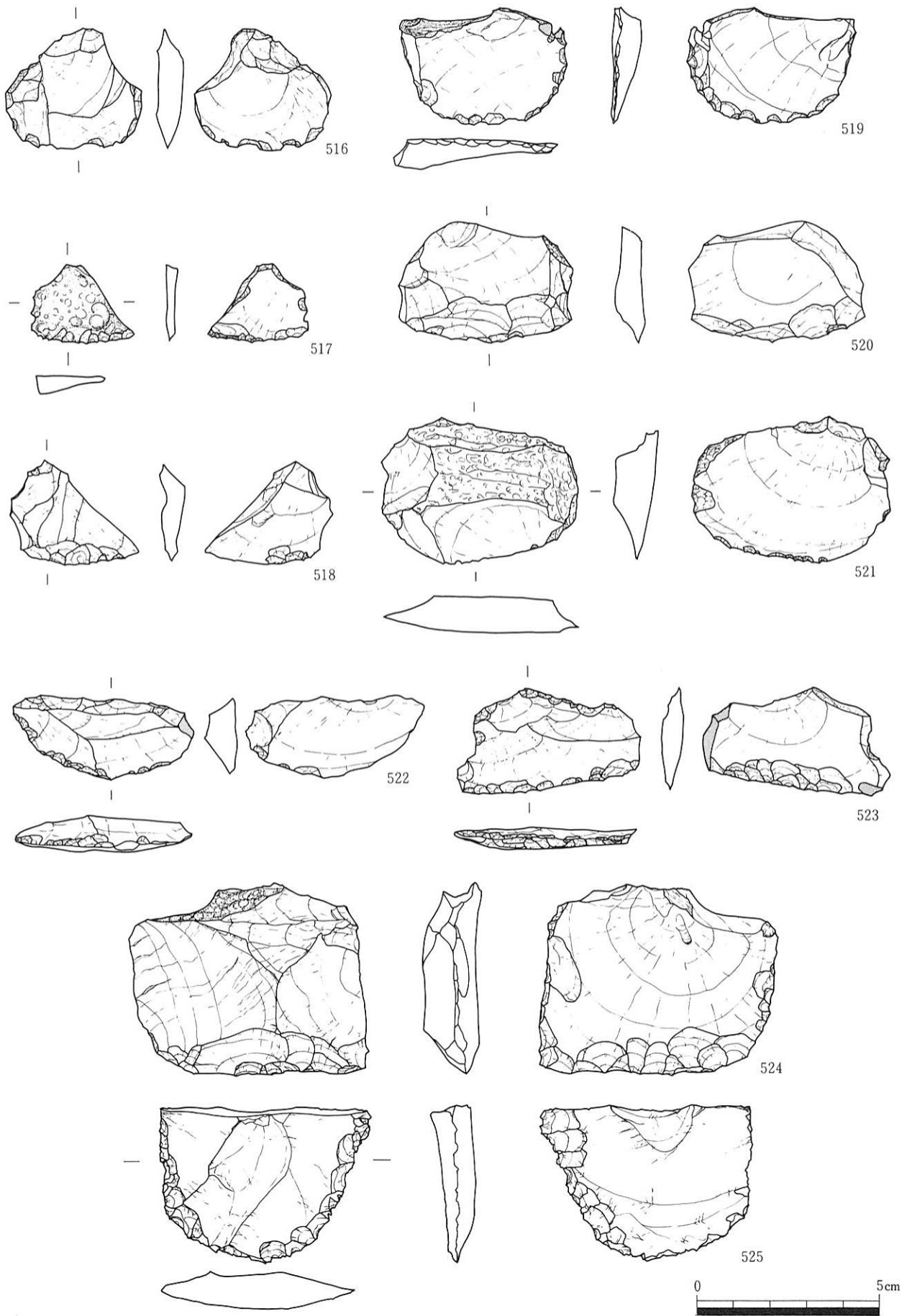


図86 出土石器（5） スクレーパー

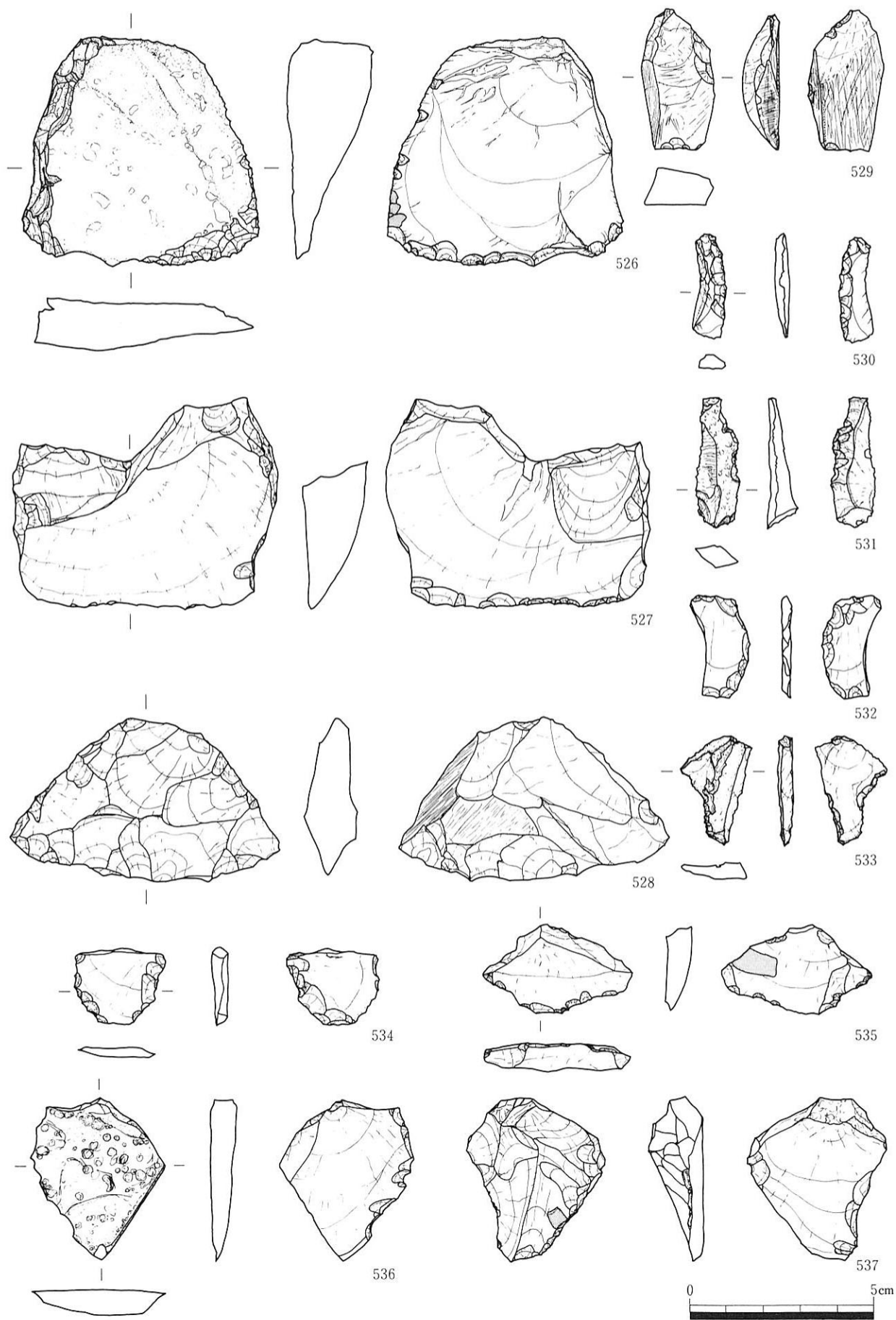


図87 出土石器（6） スクレーパー、二次加工のある剥片

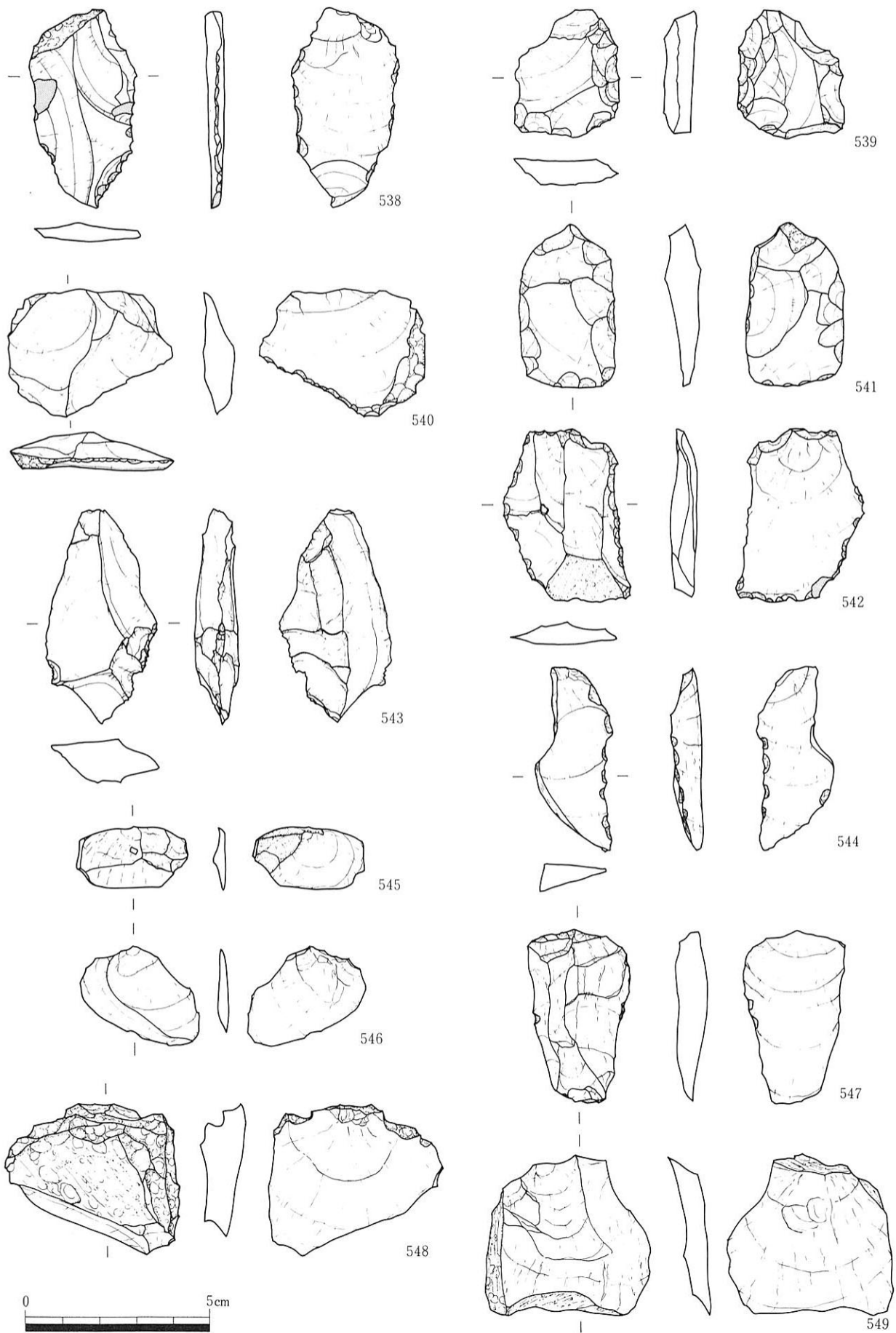


図88 出土石器（7） 二次加工のある剥片、剥片

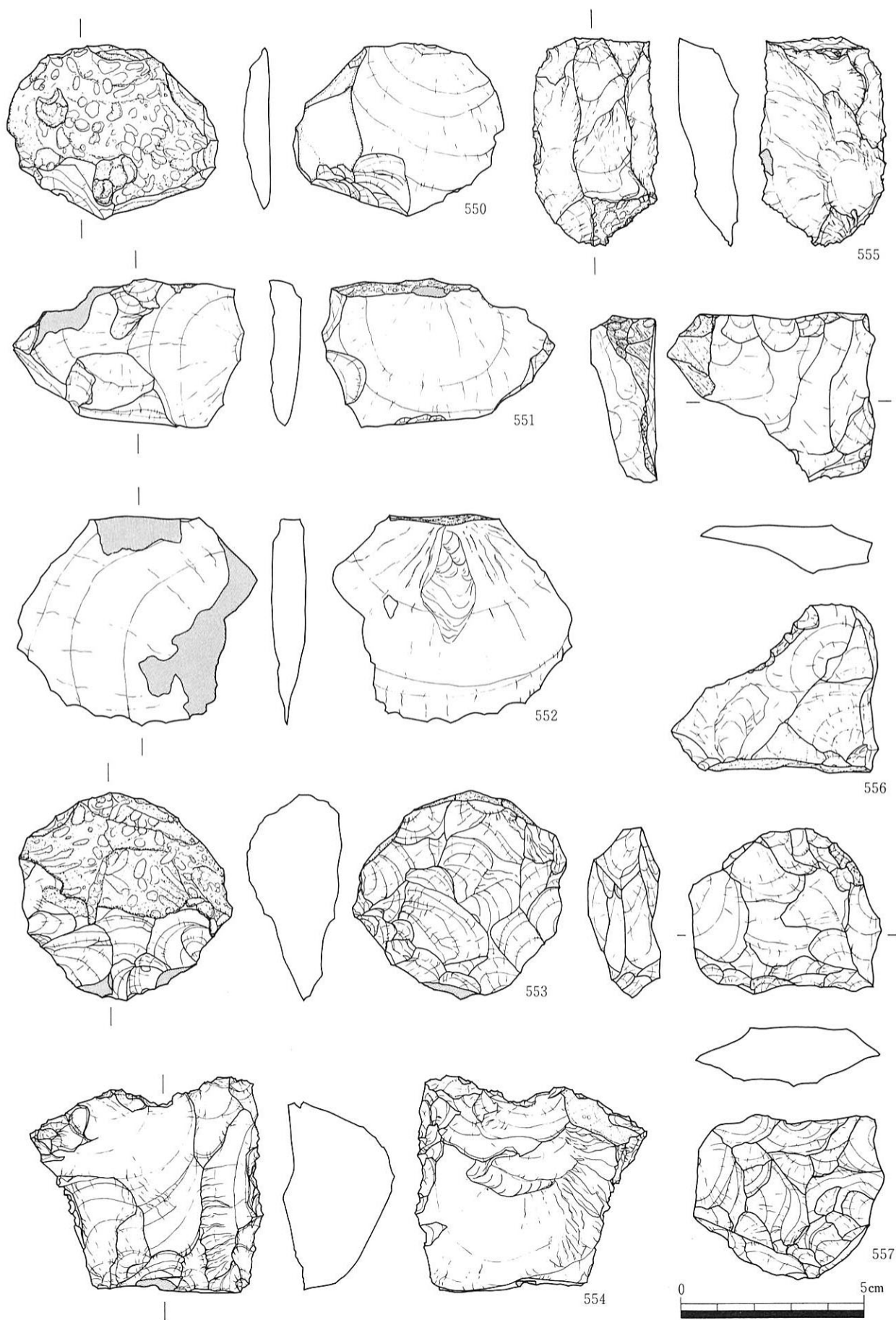


图89 出土石器(8) 剥片、石核

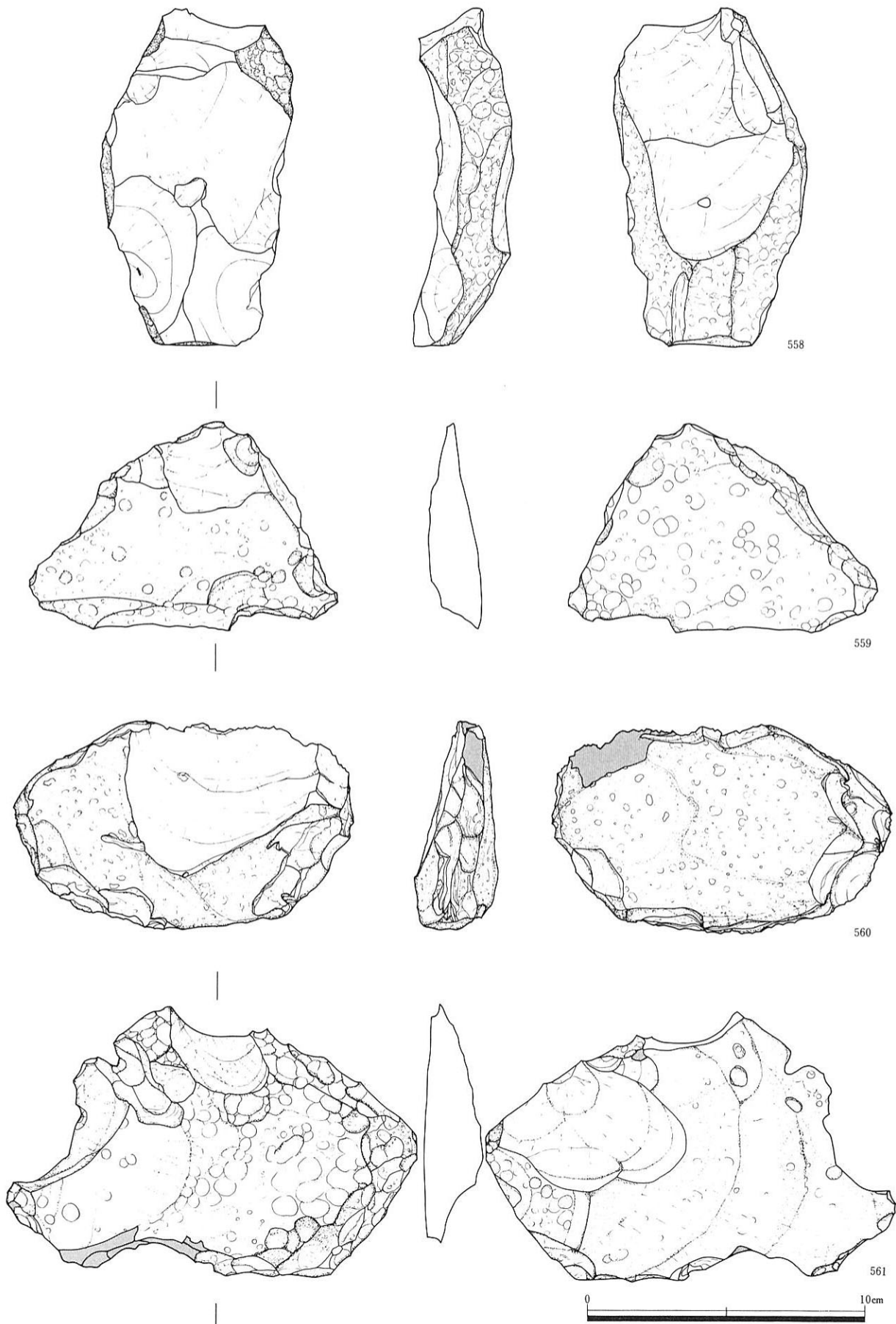


图90 出土石器(9) 石核

から剥離作業を行っており、特に打面調整は行っていない。557はあまり大きくない剥離面が多く切りあっている。558は側面は自然面からなる。表裏面に大きい剥離面が見られる。559は全面がほぼ自然面の角礫である。しかし、一面だけ剥離面がある。560も同様にほぼ自然面であり、一枚だけ大きく剥離痕を有する。561は片面及び側面は自然面であり、もう片面は風化の進んだ剥離面であり、その面から一枚だけ剥片を取っている。558～561は4区北側でまとまって出土しており、遺構の痕跡は確認できなかったが、まとめて保管していたものであろう。これらの石核を観察すると558の表面の剥離面は、559～561の剥離面に比べて風化が進んでいる。これらのことから、558、561は前段階の石核、剥片（561は風化した主要剥離面を有している剥片であり、ここでいう石核の定義には反する）を再利用したものと見える。また、559～561に見られる剥離作業は剥片を得ると言うよりは石核採取時に試し割りをしたものである可能性が高い。

以下、図化は行っていないが写真を掲載した遺物である。

562～564は楔形石器である。562は下部につぶれ状の剥離痕が見られ、上部はややつぶれている。563は上下につぶれ状の剥離痕が見られる。564は上下に階段状の剥離痕が見られる。

565～567、569はスクレーパーである。565は側縁に片面から加工を施しやや湾曲した刃部を作出している。566は側縁に両面から連続した加工を施し刃部を作出する。全体に非常に風化している。上部は欠損しているが、風化のため刃部の剥離痕は不明瞭で、どの段階に欠損したのか明らかではない。567は側縁に片面から細かい調整剥離を施している。この剥離は微細であり、むしろ二次加工のある剥片に近いといえる。569は側縁に両面から加工を施しやや湾曲した刃部を作出する。

568、570は二次加工のある剥片のうち、刃部を有するものである。568は側縁の主に片面から加工を加え刃部としている。570は下端に背面から調整剥離を行う。打面は自然面である。

571～577は剥片である。571は主要剥離面は新しい割れによって欠損しているが、打面は自然面と思われる。背面も大きく一面の剥離面を有する。側縁部は非常に鋭利であり、刃こぼれ状に微細な剥離が見られ特に加工せずにスクレーパーとして使用した可能性がある。572は打面は剥離面である。573は打面は風化面である。側面は折れ面である。574は打面は剥離面である。背面は2枚の剥離面が観察できる。575は打面、側面は自然面である。576は打点は剥離面である。577は全体に非常に風化しており、外面は風化面を呈する。打面は剥離面である。

578～592石核である。578は大きな剥離面はいずれも側面の自然面を打面としている。579は片面は自然面であり、風化の進んだ剥離面が見られる。前段階の剥片を素材としている。縁辺部に加工が見られる。580は側面に自然面が見られる。片面は一枚の剥離面からなる。581は下端につぶれ状の痕跡が見られる。側面は自然面を有する。582は側面に自然面、表面に風化面を残している。剥離の痕跡は様々な方向から小さく剥離されており、有効な剥片を採取できたとは思えない。583は側縁に自然面を有する。584はその下端が収束しており、刃こぼれ状の痕跡が見られるため、あるいは刃器として利用していたことが考えられる。585は片面及び側面に自然面が残る。586は上端がつぶれている。587は多くの剥離面が見られるが核の大きさを生かした剥離は困難であったようである。588は片面及び側面に自然面が見られる。もう片方の面は側面の自然面から順次薄片を採取しており、特に打面調整は見られない。589は円礫であり、自然面が多く残る。590は片面、側面に自然面が見られる。もう片方の面にも自然面を確認することができた。非常に大きな剥離面があり、背面が自然面の大きい剥片を剥離したと考えられる。591は自然面、風化面ともに非常にローリングを受けている。592は円礫である。

第4節 まとめ

中之社遺跡では縄文時代後期を中心に弥生時代後期から縄文時代後期にかけての遺物が出土した。調査地は南から北に向かって緩やかに傾斜しており、さらに4区北側から2区南側にかけて段丘からのびる開折谷が横断する。縄文時代後期を中心とする土器がこの谷の埋土と考える4層内から出土した。しかし、これらの土器は非常にローリングを受けた細片であり、流入したものと考えられる。遺構もその密度が低く、住居跡など確認できなかった。このような状況から集落の中心ではなく、この時期の集落の中心は東の段丘上にあると考えられる。遺構が主に検出されたのは、4区北側の谷の落ち際にあたる。土坑4-2-195は石皿、敲石を出土している。これらは組み合わせて利用する実用品であり、出土した敲石、石皿は使用された痕跡を明瞭に残している。このような実用品が土坑から出土した理由としては1つには廃棄が考えられる。しかし、特に使用できないような状況を呈しているものでもなく、廃棄、放棄したものとはとらえにくい。石皿は土坑の底部からは浮いているが、水平な状態で埋まっている。これらのことから、この石皿、敲石は埋納された可能性が強い。ではこれらの石皿、敲石にはどのような意味があるのだろうか。ここで出土した敲石は断面楕円で、棒状を呈している。これは形態的には石棒に近い。石棒は一般に男性を象徴するものととらえられており、石皿は石棒と対応させてしばしば女性の象徴のようにとらえられることがある。また、石皿、敲石という実際に組み合わせて使うということを考えあわせれば、この遺構は男女の性をそのまま象徴しているといえ、非常に祭祀的色彩の強いものといえる。その他にサヌカイトの製品、石核、剝片、チップ等多く出土しており、石器の製作が行われていたことが推定される。

また、基盤層上面では、輪郭のあまり明瞭ではないピット、土坑が検出されている。4層は微少な起伏を多く有しており、そのことは断面を観察しても明らかである。その結果、その微細な窪みに4層がたまった部分をピット、あるいは土坑としているものを含んでいる可能性がある。

その後、調査地で遺構が見られるのは11世紀に入ってからである。4区では11世紀から13世紀にかけての4棟の掘立柱建物が検出された。建物群が立地しているのは先に述べたような地形の中で一番高い平坦面といえる。建物はその主軸をほぼ北にしている。この地帯には主条里とは別に小規模な条里型地割、積川条里が復元されている。条里はN-2.5°-Wであり、建物の主軸はほぼその地割に一致する。また2区では13世紀の祭祀色の強い遺構が検出された。遺構が検出されたのは2区の中で一番高い棚田であった。その遺構も非常に削平を受けており、浅い。このようなことを考えると13世紀代の遺構はその大部分が後生の耕作等によって削平されたため、検出されなかったと考えることができる。

第5章 まとめ

遺跡について

各遺跡については第3章第4節まとめ、第4章第4節まとめにおいて述べられている。重複する部分も多いが、ここで、両遺跡について今一度まとめてみたい。

今回、宮の後遺跡2区、及び中之社遺跡4区において複数の建物跡が検出された。これらの建物群は10世紀から13世紀にかけてのものである。調査地は谷地形の奥部の狭小な部分であり、更に段丘上からのびる谷がはしる。建物跡が検出されたのはこの谷より南側の部分であり、周辺に比べても基盤層の高い部分であった。

宮の後遺跡では建物群をおもに7区分し、中之社遺跡では4区分した。これらをあわせ、大きく5期に分けることが可能である。

第1期 宮の後遺跡で建物跡1、2が建てられた時期。建物跡1、2は立て替えの関係にあると考えるが、前後関係は不明。中之社遺跡では対応する遺構は見られない。10世紀後半以前。

第2期 宮の後遺跡で建物跡7が建てられた時期。溝26に一連の溝も掘削されていた。中之社遺跡では建物跡3がみられる。建物跡7はやや柱の通りが悪いが庇、あるいは塀を伴った大型の建物である。建物跡3は全容が明らかではないがやはり大型の建物である。11世紀前半。

第3期 宮の後遺跡で建物跡3が建てられた時期。建物に平行する溝381も伴うものであろう。建物の全容は明らかではないが、3×6間以上の長大な建物が推定される。11世紀後半。

第4期 宮の後遺跡で建物跡8、9が建てられた時期。中之社遺跡では建物跡4が見られる。建物跡8、9は非常に整然と配されている。12世紀前半。

第5期 宮の後遺跡で建物跡4、5、中之社遺跡で建物跡2がみられる。中之社遺跡建物跡1の時期は明瞭ではないが12世紀以降と考えられる。建物跡2の立て替えを考えたい。建物跡4、5は非常に整然と配されており、特に建物跡4はL字状に塀が配されている。12世紀後半～13世紀初頭。

第3章まとめでも述べているように、これらの建物跡はその主軸を西に9～11度ふるものとやや東西にふるもののほぼ南北をとるものがある。前者は1期、3期に見られ、後者は2期、4期、5期で見られる。このように建物の主軸には斉一性が見られ、なんらかの規制が働いていると考えることができる。山直谷には主条里とは主軸をことにして小規模な条里型地割りが見られる（山直条里と積川条里）。積川条里は $n - 2.5^\circ - w$ であり、ほぼ南北に沿う。建物2、4、5期の主軸が南北に近いものは、この条里の施行と結び付けて良いのではないだろうか。また、2期以降、東西方向に溝26に一連の溝が繰り返し同じ場所で掘削されており、現在の水路も踏襲している。1区で検出された溝348はほぼ南北方向をはしる。また、数回にわたって掘削を繰り返している溝1も東西方向にはしる。これらの溝も地割に沿うものとする。山直条里が施行された時期は歴史的環境の中で述べたように、11世紀に入ってからと考えられている。2期の状況を考えてみると積川条里もその施行時期を11世紀前半に考えることができる。しかし、3期の建物は2期及び3期以降の建物とはその主軸を異にしている。このことは、どのように捉えられるであろうか。もう一度条里に目を向けると、山直条里は三田から山直中にかけて、21町×6

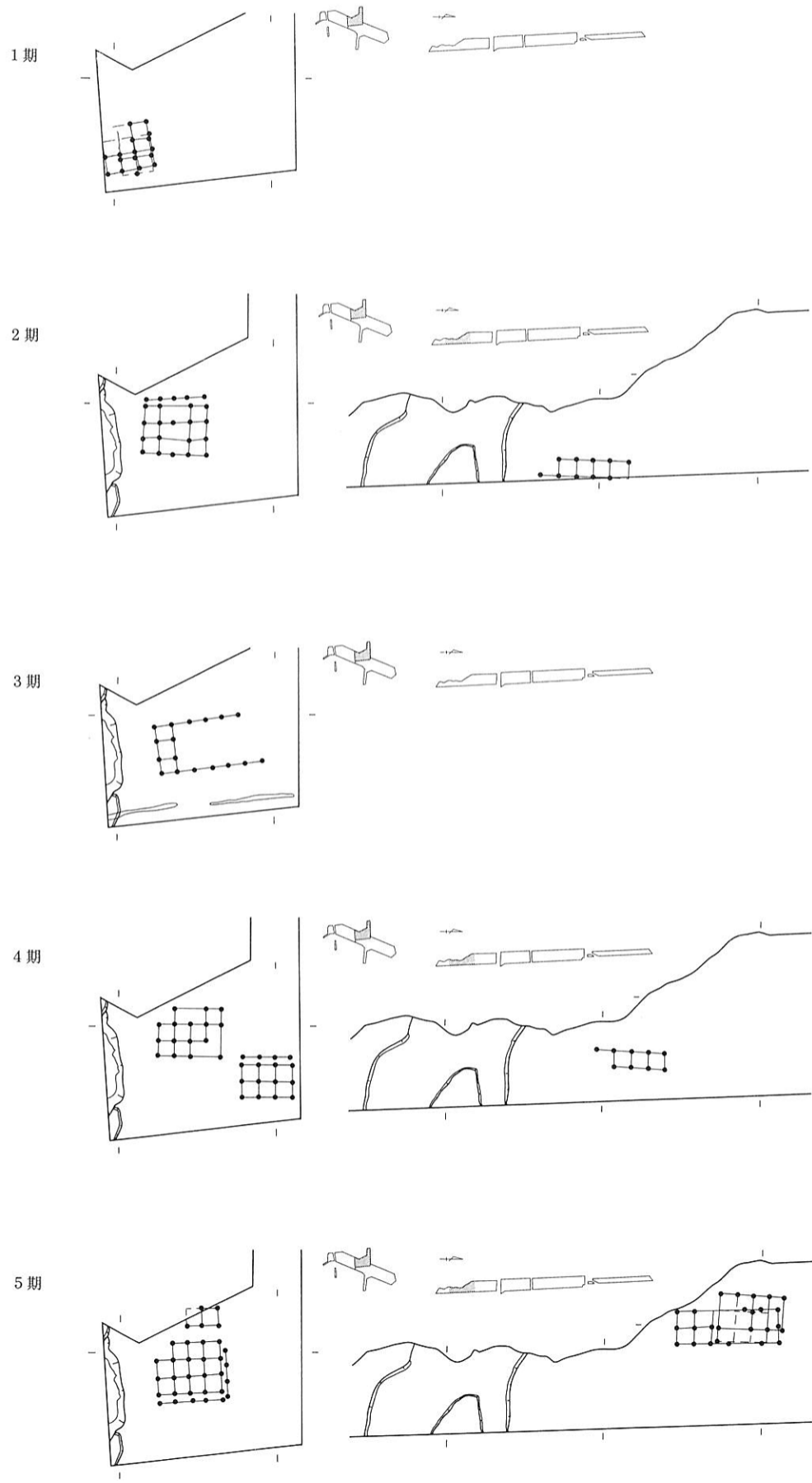


图91 变遷図

町、積川条里では積川から内畑にかけて6町×2町確認されている。しかし、その変換地点では地割が乱れており、復元することは困難である。その地は黒石遺跡から、芝ノ垣外、土井の木、中之社、宮の後遺跡の一部にあたる。黒石遺跡では12世紀後半～13世紀にかけての掘立柱建物(228-OB)、掘立柱建物(250-OB)が検出され、主軸はそれぞれN-13°-W、N-15°-Wである。^{註1}芝ノ垣外遺跡でも11世紀中頃の建物(15-OB、16-OB)は主軸をN-97°-W^{註2}、山直中遺跡L地区では12世紀後半の掘立柱建物が検出されたが、そのうち若干先行すると思われる(42-OB)は主軸N-13°-W^{註3}である。このように、建物の主軸が、2期の建物と非常に近い(あるいは直行している)。このように、地割の変換地点である地帯では11世紀から13世紀にかけて、山直条里と積川条里の中間的な方向に規制が働いていたようである。このような狭い谷においては、その地割は地形に非常に制約されており、そういった意味では、建物自体も地形に沿って建てられていると言えるかもしれない。しかし、4、5期では、主軸が地割に沿う形で整然と建物が配されており、12世紀の段階には積川町一帯にも積川条里が施行されていたと考えられる。積川条里が明瞭に残存している内畑では調査例がなく、明らかではない。また、山直中遺跡L地区において先に述べた12世紀後半の建物OB-43、OB-44、OB-53では主軸がN-20°-W前後で土井の木遺跡^{註4}では、14世紀初頭の掘立柱建物が検出されており、その主軸はN-20°-Wではほぼ山直条里に合致する。このようなことから、12世紀以降中間的な地域を残しながらもほぼ、山直条里、積川条里に2分されるような状況がみられるのではないだろうか。また、4、5期には宮の後遺跡でそれぞれ2棟の建物を復元した。この建物はその配置から並存していた可能性が高く、この集落が最も栄えた時期であったと考えられる。両遺跡の中心に位置する積川神社は12世紀初頭に、今熊野神社の末社庄園になり、国役を免除されているという記載が永万文書にみえ、この時期に更に領地を拡大していることが考えられる。

宮の後遺跡と中之社遺跡4区は川を挟んで立地しているが、先に述べたように、段丘上からのびる谷を境に南側に位置しており、積川神社を中心にした一つの集落ととらえることが可能であろう。この開析谷を利用して、コイノ池、中ノ池、アミダ池の溜め池が築造されているが、その時期を明確にする資料は現在のところない。しかし、耕作を可能にするにはこのような溜め池による灌漑が不可欠であり、当時、溜め池を築造し、灌漑用の水路を掘削していたことは十分考えられる。宮の後遺跡の溝1は、これらの谷池から水をひく幹線水路であったと考えたい。このようなことからこの開析谷は既にある程度埋没した状況が考えられるが、その名残が地割の乱れをとおして、地図上でも伺うことができ、また、そのような土地はもっぱら耕作地として利用し、基盤層が高い、比較的安定した場所に居住域を設けていたことが分かった。狭小な谷地形にあって、更にこのような土地の制約を受けて、居住域は非常に限られた部分であったと思われる。その結果として特に、宮の後遺跡では多くの建物が同じ場所に何度も建てられたのであろう。

宮の後遺跡1区ではその一段下の部分でピットが多く検出された。それらは、柱痕を持つもの、根石が残るものなど建物を構成するものである可能性が高い。また、この部分では焼土坑が数基検出されており、焼土塊や金属滓が多く見られ、溝1からは今回図示できなかったがふいごの羽口片が出土している。2区の居住域とは違う工房域の可能性も考えられるが多くは調査区外になるため明らかではない。また、宮の後遺跡3区、中之社遺跡4区の川に向かう斜面では盛土を行っており、平坦地を拡張している。その付近ではほぼ完形に復元できる遺物を含むピットがそれぞれ1基見られた。これらのピットは、周辺で他のピットが検出されなかったが、柱痕が残っており、建物を構成していた可能性もあるが、あ

るいは、建物を構成するものではなく、盛土付近の祭祀といったことも想定できるであろう。

石器について

古代末～中世以前のこの地域には弥生時代に還るまで遺構、遺物は検出されなかった。両遺跡では、弥生時代、縄文時代の土器、石器を出土した。その中で弥生時代の遺物は非常に少なく、大部分は縄文時代後期のものと考えられる。土器は主に、谷の埋土と考えられる4層内から出土した。また、遺構はその密度は低く、中之社遺跡3区、4区で土坑がわずかに見られた。このような状況からこの時期の集落の中心はさらに東側の段丘上にあると考えられる。また、多く出土した石器から、石器の制作が行われていたことが推測される。そこで、この時期のまとめにかえて、中之社遺跡1～4区で出土した石器について若干の考察を行いたい。

1、石材の獲得について

今回、中之社遺跡では102点の石核が出土している。第4章の石器で述べたように中之社遺跡では、剥片、チップ等も一定量出土していることから、石器製作が行われていたことが考えられる。ここでは、石器製作のためのどのような素材を利用していたのか考えてみたい。

(1) どのような石材を利用していたのか

当遺跡で出土した打製石器はサヌカイト製のものがすべてである。それらの石器製作に当たって、どのような母核が用いられたのであろうか。

1、原礫を利用する。

2、古い時代の広義の石器を利用する。

1については通常考えられるもので、当遺跡出土の石核には自然面を残すものが多く存在している。

2については一個体の石核、あるいは剥片等の中に風化の度合の異なる剥離面を有するものが存在していることから推定することができる。これらは、あるいは人工的ではない作用によって剥離面を有することになったものも含まれようが人間の行動の結果として起こったものが大部分を占めると考える。つまり、前段階に剥離作業が行われた石器を再利用しているものであり、その時間的経過は風化が見られる時間幅である。風化の度合はそのおかれている状況、石材の質等によってばらつきが見られるため、その時間幅はわからない。

(2) 石材の獲得

次にこれらの石材をどのように獲得したのであろうか。

1については、まず第一に原産地からの搬入が考えられる。今回肉眼観察では1から9に分類を行い、複数の産地が推定された。そこで、蛍光x線による産地同定分析を行った。その結果、二上山以外に、金山東、国分寺産のものが含まれていることが分かった。また、和歌山県梅原地区と近似する計測結果を持つ石器も含まれており、それを含めれば4箇所の産地が考えられる。遺跡はサヌカイト散布地であるこそ谷の西に位置しており、その石材を利用していることが推定されたが、今回分析を行った資料ではそれらのものは含まず、非常に興味深い結果となった^{註5}。

2については第一に遺跡付近での採集が考えられる。また、1の場合同様に産地付近でこのようなものを獲得したことも考えられる。また自然面、風化面ともに非常にローリングを受けているものがあり、川に流されたものが存在している。

表1 出土地別集計表

		2~3層	2層上面	2層	3層上面	3層	4層上面	4層	基盤層上面	流露	遺構	側溝他	総計
1	重量	47.11	0	341.69	297.63	444.77	0	0	78		39.44	143.78	1392.42
	個数	3	0	61	6	33	0	0	7		3	16	129
2	重量	0.9	0	584.92	216.39	815.4	58.89	388.9	0		70.42	181.41	2317.23
	個数	1	0	56	25	94	16	48	0		11	18	269
3	重量	0	0	21.6	0	40.5	0	63.52	0		105.31	67.11	298.04
	個数	0	0	2	0	7	0	6	0		5	4	24
3'	重量	0	0	15.42	0	137.82	30.64	451.43	0		1.41	53.12	689.84
	個数	0	0	2	0	18	4	27	0		1	4	56
4	重量	0	15.62	74.56	0	0	24.55	11.5	2.32	329.79	36.51	2.37	497.22
	個数	0	1	15	0	0	8	6	1	37	5	2	75
4-2	重量	0	0	0	0	0	9.5	1682.64	176.03		121.04	13.23	2002.44
	個数	0	0	0	0	0	2	106	6		23	6	143
不明	重量	0	0	0	0	0	0	0	0		0	8.62	8.62
	個数	0	0	0	0	0	0	0	0		0	3	3
総計	重量	48.01	15.62	1038.19	514.02	1438.49	123.58	2597.99	256.35	329.79	374.13	469.64	7205.81
	個数	4	1	136	31	152	30	193	14	37	48	53	699

※上段は
重さ (g)
下段は
個体数

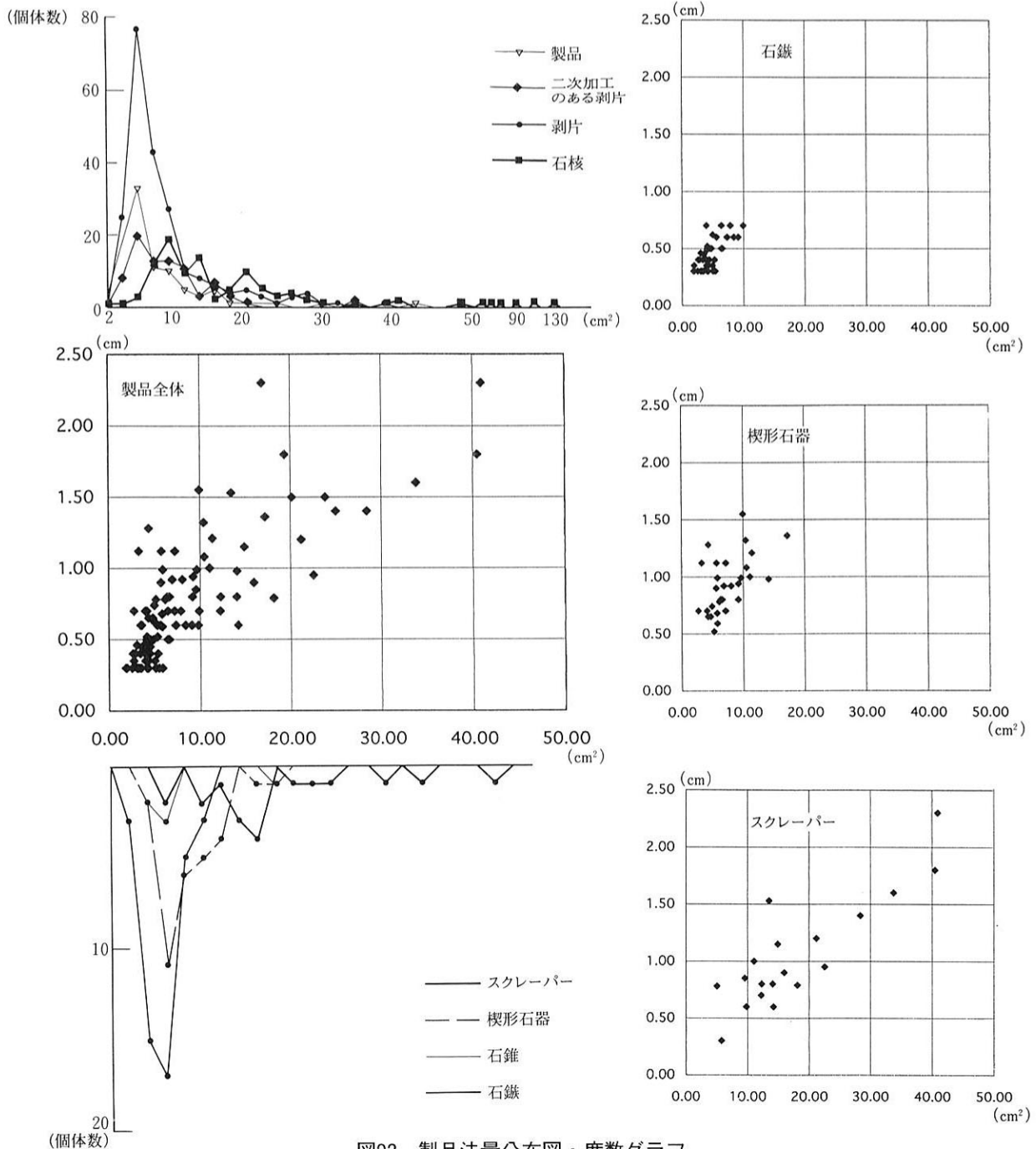


図92 製品法量分布図・度数グラフ

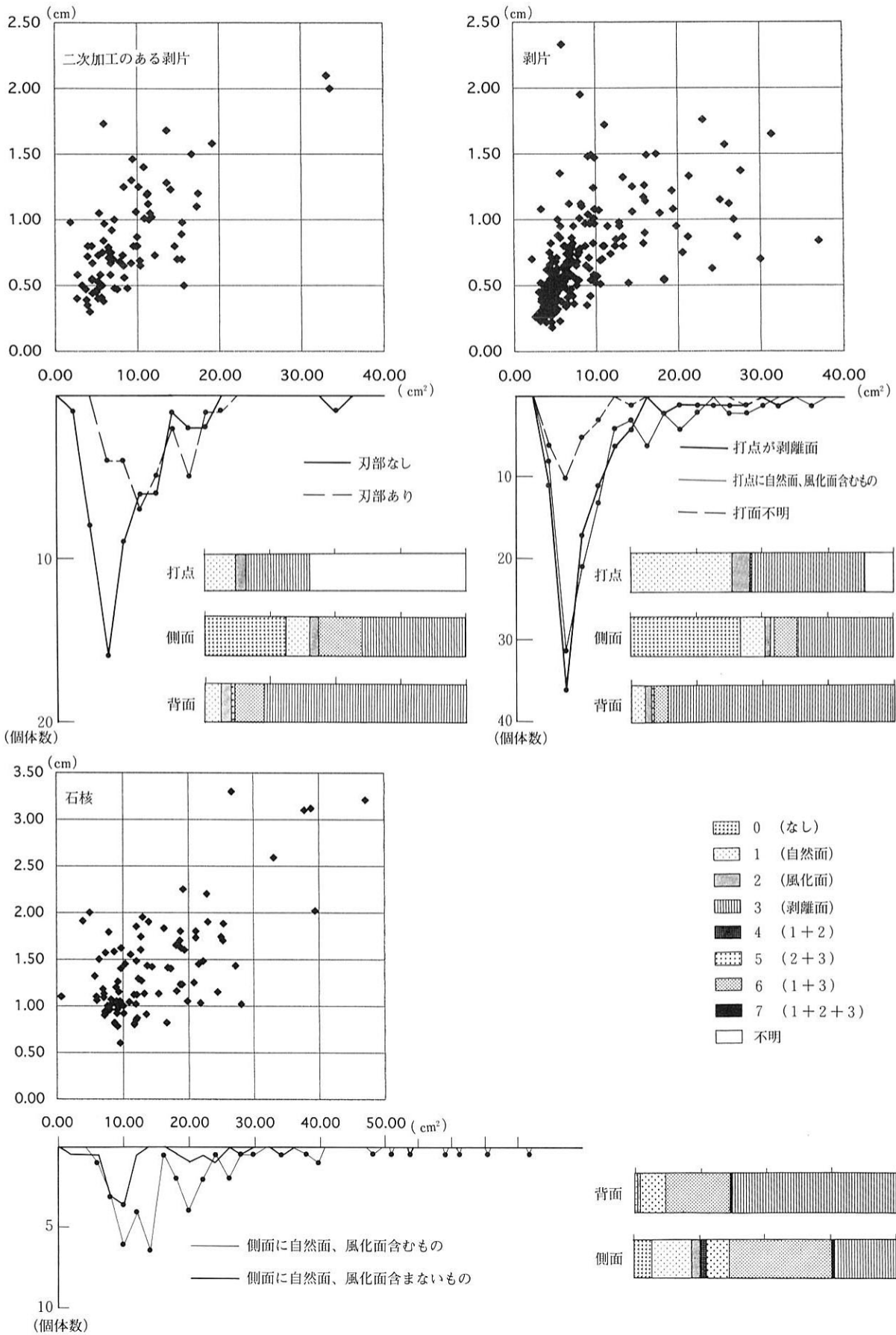


図93 剥片、二次加工のある剥片、石核法量分布図・度数グラフ

(3) 石核の基準

では次に、それらの石核には基準があったのかどうか。出土した石核、剥片のなかには、自然面、風化面を有するものが非常に多く含まれていた。このことから、母核の大きさのある程度推測することが可能であると考えた。よって、ここでは、製品、剥片、石核の大きさについて、分析を試みたい。大きさの表現の方法は最大長、最大幅、面積、最大厚、重量がある。重量は1つの項目でその大きさを表現するには1番すべてを包括しているが、石器はその厚さに制約を持つものであると考えられるので妥当ではない。最大長、最大幅、最大厚で法量を表わすのが最も妥当であろうが、製品では剥離の方向を明確にできるものは少なく、製品の方向で長さ、幅を表わしているため、剥片等との比較ができない。そこでここでは面積と最大厚で表わすこととする。(面積は2cm²単位で(以下)で表わしている。)

・製品における法量分布について

出土した製品のうち分析に耐える数量を持つものは石鏃、楔形石器、スクレーパーである。

石鏃は非常にその分布に集中を見ることができ、面積6cm²以下、厚さ0.5cm以下に集中する。それ以上のものは石鏃のなかでも、全体に加工が行われず、縁に加工を施すタイプのものがほとんどである。

楔形石器は面積6cm²にピークをもつが8~12cm²のものも多く存在し、厚さも0.5~1.5cmとややばらつきが見られる。

スクレーパーは、法量は広い領域を持つが大まかに面積18cm²より大きいもの(大)、6cm²、10cm²にピークをもつ12cm以下のもの(小)、16cm²にピークを持つその間のもの(中)に分けられる。また、面積と厚さは比例の関係が見られた。大の7点のうち打面のわかるもの4点中3点は自然面を含む打面である。スクレーパーでは刃部に調整剥離を行う以外加工はほとんど見られない傾向があり、その結果素材となる剥片のもとの大きさとほぼ同じである。

これらの結果から当遺跡で見られる製品において、その法量による縛りが大きいものは、石鏃、ついで楔形石器が挙げられる。スクレーパーは大きさには縛りはないが、面積と厚さにおいて一定の関係が見られる。

・二次加工を施す剥片における法量分布について

二次加工を施す剥片は大きく2つに分けられる。1つは、刃部を有するもので、スクレーパーとの境界が主観的ではあるが、第4章第3節石器で述べたようにいわゆる不定型刃器と分類されるものである。2つには、刃部とは考えられないがなんらかの加工が施されているものである。

1は、スクレーパーと同様に大きさに関しては特に強い縛りはなく、大まかに22cm²より大きいもの(大)、10cm²にピークをもつ14cm²以下のもの(小)、16cm²にピークをもつその間のもの(中)に分けることが可能である。また、厚さと大きさはやはり、一定の関係を持つ。ただし、スクレーパーよりも、やや薄い傾向がある。これらのものは刃部の調整剥離以外ほとんど加工が見られない。

2は、6cm²にピークをもち14cm²以下のものがほとんどである。これらのものはどのような機能を有するものか不明であり、製品の未製品や欠損品、調整剥片のようなものであろうか。

・剥片における法量分布について

打面がわかる剥片のうち約半数が自然面及び風化面である。打面が不明のものは点状あるいは線状の打点を有するものである。このことは剥片を剥離する際に特に打面調整を行っていないものが少なくとも46%存在していることになる。また、なんらかの形で自然面、風化面を有するものは全体の62%を占めている。このことから、これらのもととなる材の大きさは剥片からもある程度推測することが可能な

のではないだろうか。剥片の面積は6 cm²にピークを持つ12 cm²以下のもの（小）と24 cm²より大きいもの（大）、その間のもの（中）分類することができる。小のものが非常に多いが、先に示した製品の一番小さい石鏃、石錐の類を制作できない剥片はいわゆる製品の素材とはなりえないので面積6 cm²以下の剥片は調整剥片（チップ）といった性格を考えられるであろう。中、大は非常に少なく、面積30 cm²を超えるものはほとんどない。先に述べた6 cm²以下のものを除けば、打点に自然面、風化面を有する剥片は全体の52%を占め、なんらかの形で自然面、風化面を有するものは全体の70%とその割合は更に高くなる。

・石核における法量分布について

また、石核においても、その表面に自然面が見られるものが多く、母核の大きさがある程度まで復元することが可能であると考えられる。

石核は面積が10 cm²、14 cm²にピークをもつ16 cm²以下のもの（小）、32 cm²より大きいもの（大）、20 cm²にピークをもつその間のもの（中）に分けることができる。大に分類されるものは非常に少なく、11点である。側面及び表面の両方に自然面あるいは風化面を残す石核は25点ある。これらのものは石核のもとの大きさに近いものと考えられる。これらの石核は、小12点、中10点、大が4点である。このことから、もともとの石核の大きさは大中小いずれも存在していたことになるが、特に中大のものはその割合が高い傾向にある。中のものでは写真592に掲載したような円礫があり、もともとの石核の大きさが卵大に復元できる。また、大のうち3点は、まとまって出土した、第4章第3節で述べたもので残核と言うよりも、これから剥片をとろうとする石核である。逆に剥離面、折面のみで構成されるものは、小では17点、中では5点、大では1点のみである。小に対する割合が高いといえる。小と分類したものは、残核とみなされるものが多く含まれると考えられる。また、もともとの石核の面積が136 cm²を大きく超えるものは出土していないと思われる。

・製品、剥片、石核における法量

剥片のうち、前記の理由で6 cm²以下のものを除外するならばそのピークは8 cm²に見ることができる。それは製品におけるピーク6 cm²より一回り大きい。石核のピークは10 cm²で剥片のそれより一回り大きい。また、スクレーパー、不定型刃器はその法量において近い値を示している。小はピークを一応10 cm²（スクレーパーでは6 cm²でもピークが見られるが、出土点数が少なく、いずれもピークとはいいいにくい）にみるが、剥片では一回り大きい12 cm²のものは少なく、同じく10 cm²のものが多。これはこれらのものが刃部の調整剥離以外ほとんど加工を行っていないことに起因すると思われる。中は16 cm²にピークをみるがそれに対応するであろう剥片中はあまり多く出土していない。大（不定型刃器ではほとんど大がない）に関しては、これを作りえる剥片はほとんどない。石核では20 cm²にピークをもつ中が一定量出土しており、特にピークは持たないが、スクレーパー大を作れる石核大が出土している。このことから、このような製品は石核から剥片を剥離する段階から非常に意識して作業が行われ、製品化されたと考えることができる。また、製品としての組成の中でそれほど大きなウエートを占めていなかったと見ることもできるかもしれない。また528のように石核の残核を利用したものもある。

以上の結果をまとめると

1、剥片はその打点に自然面、風化面を有するものが一定量含まれ、打面調整を行っていない。又、打面を含めて、表面に自然面、風化面を有するものが多く石核の大きさは剥片の大きさを大きく超えるものではない。

2、剥片の大きさは石鏃等非常に定形化した製品を製作するには規制されるが、スクレーパー、不定形刃器などは逆に剥片の大きさに規制されている。

3、石核のうちもとの大きさに近いと考えられるものは小さなものでは10cm、大きなものでは136cmである。また、石核の大きさのピークは剥片のそれよりやや大きい。

3、まとめ

以上の結果を踏まえると、中之社遺跡で出土した石核は製品の素材となる有効な剥片の大きさに対して、やや大きいものが使用されているといえる。いいかえれば、必要最低限の大きさの石核を選んで採集している。また4区でまとまって出土した石核は試し割を行っていると考えられ、石核獲得の段階で選定を行っている可能性が高い。この4点の内一点(558)について分析を行った結果、二上山産との判定を得た。このようなことから、石核の獲得で述べたように、遺跡周辺ではなく、遠くから採集した結果、石核の大きさは必要最低限のものであり、さらには、試し割を行ったり、すでに石核として使われたもの(つまり、その剥離面から石材が有効であるか確認できるということ)を再利用することになったのではないだろうか。仏並遺跡は山直谷の東、横山谷に位置している^{註6}。中期末～後期前半を中心に土器が出土しており、中之社遺跡とは時期を異にするが同様に石材の蛍光x線分析を行っているが、やはり二上山、金山のものが使用されており、和泉・岸和田産のものは含まれない結果がでている。山直谷開口部では縄文後期の土器が出土している山之内遺跡^{註8}で多くの石器を出土しているが石材の分析は行っておらず、周辺の一般的な状況であるのか問題は多く残すが、石材を遠くの産地から搬入していることは注目できる。あるいはこの時期一般にこのような傾向が見られるのか、今後、産地付近の同時期の遺跡との比較検討を行いたいと思う。

(註)

- 1、『黒石遺跡発掘調査報告書』(財)大阪府埋蔵文化財協会 1990
- 2、『芝ノ垣外遺跡発掘調査報告書』(財)大阪府埋蔵文化財協会 1993
- 3、『山直中遺跡発掘調査報告書』(財)大阪府埋蔵文化財協会 1988
- 4、『土井の木遺跡発掘調査報告書』(財)大阪府文化財調査研究センター 1996
- 5、今回の産地同定分析では肉眼観察による分類とは以下のような対応がみられた。

資料番号61～65 肉眼観察2、資料番号66～72 肉眼観察3(内、67、71は3?)、資料番号73～77 肉眼観察4、資料番号78～83 肉眼観察6(内、83は6 or 7)、資料番号84～86 肉眼観察5、資料番号87～90 肉眼観察7(内、89は7 or 5、90は7?)、資料番号91～92 肉眼観察9、資料番号93～100 肉眼観察1(内、96は1 or 7、99は1?、100は1 or 6)

本来石材の分類は理化学的な根拠のもので行われるべきものではあるが、出土した石器について分析を行うことができるのは、実際には極一部である。このような現状の中で、その分析結果を遺跡全体の傾向として捉える一つの方法として、今回肉眼観察による'みため'の分類との併用を試みた。その結果今回3と分類したもののうち7点を分析した結果、5点は金山東との判定がされ、5と分類したうち3点を分析した結果、産地が不明であった。あとのものについては産地が分かったものは二上山であり、9と分類した全体に風化層の厚いものは、1点金山産であった。このような結果は3=金山、5=不明、その他=二上山の傾向が伺われるようではあるが、3の中で、国分寺、二上山が含まれている点、また、見ためでは違いが見られたが二上山との分析結果が得られた点をそれ以上に重視すべきであろう。

- 6、『仏並遺跡発掘調査報告書』(財)大阪府埋蔵文化財協会 1986
- 7、『(財)大阪府埋蔵文化財協会 研究紀要1』(財)大阪府埋蔵文化財協会 1988
- 8、『山ノ内遺跡B地区・山直北遺跡発掘調査報告書』(財)大阪府埋蔵文化財協会 1988

中之社遺跡石器計測表・集計表について

中之社遺跡で出土した石器について、以下のように計測を行った。紙面の都合上すべては掲載できないので、製品、二次加工のあるものについてはすべて掲載したが、その他のものについては報告書に、図及び、写真を掲載したものに限り計測表を付した。また、それを補うために、各種集計表を付している。

石器の種類 各種類については4章のなかでも触れているので参照されたい。

- 1、石核 ネガ面のみで構成するもの（折れ面を有するものも含む）
- 2、剥片 主要剥離面を持つもの a、 打点があるもの
c、 打点が欠損しているもの
d、 二次加工のあるもの
- 3、碎片 剥片のうち主要剥離面が判断できなかったもの
- 4、チップ 2×2 cm以下のもの（なお、今回はチップの計測は行わなかった。）
- 5、製品
- 6、未製品

これらの石器は以下のように計測を行った。

計測項目

1、出土地

トレンチ (3' は3区(中之社遺跡その3)である。4は4-1区である。)

地区

層位 遺構 (4層としているものは基本的には4 a層にあたる。)

2、法量

最大長

最大幅

最大厚

重量

製品・未製品についてはそれぞれの天地によって計測を行った。2は主要剥離面の打点を上部にして計測を行った。打面が残存していないものについては、主要剥離面の方向によった。また、3については、大きい剥離面の打面を上基本的に計測した。石核については最終剥離面の打点を上に、それが不明瞭なものは大きな剥離面の打点を上に計測を行った。また、剥離面が多く、判断がつかないものは任意に上下を決めた。（その結果石核の最大長、最大幅は非常にあいまいなものとなり、有効なデータとはいえない。）

3、打点 主要剥離面の打面の形状

4、背面の形状 石核については表裏面の形状

5、側面の形状 剥片については打面を省いての側面の形状

3～5の項目については以下の分類を行った。

1、自然面 自然の状態の原石表面が風化したとおもわれるもの。いわゆる原礫面。

2、風化面 人為的に剥離された面が風化したとおもわれるもの。ここでは、最終剥離面よりも風化の度合いが強いものをいう。

3、剥離面

4、自然面と風化面で構成するもの

5、風化面と剥離面で構成するもの

6、自然面と剥離面で構成するもの

7、自然面、風化面、剥離面で構成するもの

6、二次加工の部位

7、石材

今回出土したサヌカイトは肉眼観察の結果、以下のように分類することができる。

- 1、黒、灰色を呈するもの
- 2、白色粒子を多く含むもの
- 3、光沢のある白色粒子を多く含むもの
- 4、表面に白い縞があるもの
- 5、表面が粗く、凹凸が激しいもの
- 6、青い筋がみえるもの
- 7、表面が粗く、てかりがあるもの
- 8、非常に軽いもの
- 9、全面が風化して白色の風化層を表面に有するもの

これらの分類は非常に主観的であり、（それぞれ、肉眼観察によってサンプルをつくり比較検討した）それぞれの特徴を強く示すもの以外は1との中間的な様相であり、それらは1に分類した。また、石材についてはx線分析による産地同定を行っており、その結果は付章2を参照されたい。

表2 種類別集計表

トシ	データ	5	6	2-d	2-a	1	2-c	3	不明	総計
1	合計:重量	30.75	8.31	114.16	205.14	795.82	145.76	87.63	4.85	1392.42
	データの個数	8	5	16	33	24	22	19	2	129
2	合計:重量	421.61	35.81	306.07	573.46	664.37	186.6	119.24	10.07	2317.23
	データの個数	40	3	32	84	36	39	33	2	269
3	合計:重量	66.52	0	27.4	26.44	124.88	25.65	20.09	7.06	298.04
	データの個数	7	0	3	5	3	2	3	1	24
3'	合計:重量	138.55	0	33.96	152.59	323.65	12.51	24.33	4.25	689.84
	データの個数	6	0	4	21	12	5	7	1	56
4	合計:重量	55.19	0	83.17	133.46	170.61	19.3	35.49	0	497.22
	データの個数	12	0	15	26	8	5	9	0	75
4-2	合計:重量	121.87	1.78	99.18	223.62	1362.24	89.65	82.96	21.14	2002.44
	データの個数	18	1	12	50	19	21	19	3	143
不明	合計:重量	6.49	0	0	0	0	0	2.13	0	8.62
	データの個数	2	0	0	0	0	0	1	0	3
全体の合計:重量		840.98	45.9	663.94	1314.71	3441.57	479.47	371.87	47.37	7205.81
全体のデータの個数		93	9	82	219	102	94	91	9	699

表3 石鏝計測表

トシ	地区	層位、遺構	最大長	最大幅	えぐりの深さ	面積	最大厚	重量	二次加工の部位	石材	備考	図面番号
1	北から2段目	2層	2.05	2.10	0.1	4.31	0.30	0.97	先端欠損	2	石鏝	480
1	北から2段目	2層	2.35	1.70		4.00	0.70	2.97		1	石鏝	485
1	E13-b1	4層上面	2.70	1.50	0.25	4.05	0.40	1.16		1	石鏝	477
2		2-291	2.50	2.20	0.2	5.50	0.30	1.46	先端欠損	3	石鏝 最大長推定値	471
2	G13-e1	2層	2.70	2.00	0.7	5.40	0.40	1.21	左足欠損	6	石鏝	479
2	G12-b10	2層	3.60	1.80	0.3	6.48	0.70	2.29		1	石鏝	493
2	G13-g1	3層	2.30	2.00	0.5	4.60	0.50	1.31	左足欠損	1	石鏝 最大幅推定値	468
2	G13-d1	3層	4.30	2.30		9.89	0.70	5.10		4	石鏝 段落ち部	489
2	G13-f1	3層	3.50	2.40		8.40	0.60	6.16		4	石鏝	492
2	G12-g10	3層	3.60	1.80	0.1	6.48	0.50	3.05		1	石鏝 最大長推定値	494
2	G12-d10	4層上面	2.00	1.60	0.4	3.20	0.30	0.56		1	石鏝	463
2	G12-c10	4層上面	2.85	1.80	0.5	5.13	0.30	0.90	左足欠損	1	石鏝 最大幅推定値	478
2	G13-e1	4層上面	1.80	1.50	0.1	1.95	0.35	0.61	わずかに左足欠損	1	石鏝	481
2	G13-e1	4層上面	3.75	2.10	0.2	7.88	0.70	4.06		2	石鏝	490
2	G12-c10	カクラン	1.90	1.80		3.42	0.40	1.02		1	石鏝	483
2	G12-c9		3.50	2.60		9.10	0.60	5.85		3	石鏝	491
3	H13-c1	3-41	2.32	1.80	0.7	4.18	0.30	1.05		1	石鏝	467
3	北から2段目	3層	2.00	1.30	0.2	2.60	0.40	0.58		2	石鏝	482
3'	H12-e10	3層	1.60	1.20	0.1	1.92	0.30	0.41	左右足欠損	1	石鏝 最大長、幅推定値	462
4	H12-g9	2層	2.20	1.80	0.2	3.96	0.40	1.14	左足欠損	2	石鏝 最大幅推定値	470
4	H12-j9	4層上面	1.35	1.35	0.6	1.82	0.30	0.29		1	石鏝	461
4	I12-h9	崖際	2.00	2.00	0.7	4.00	0.35	0.95	先端右足欠損	1	石鏝 最大長、幅推定値	474
4-2		4-2-192	1.85	1.90	0.5	3.52	0.30	0.88	先端欠損	1	石鏝 最大長残存値	466
4-2		4b層	2.50	1.60	0.6	4.00	0.40	0.91	左足欠損	1	石鏝 最大幅推定値	476
4-2	H12-j9	4b層	1.90	1.50	0.35	2.85	0.40	0.85	左足欠損	1	石鏝	464
4-2	H12-j9	4b層	2.00	2.00	0.2	4.00	0.40	1.27	上端わずかに欠損	1	石鏝	472
4-2	H12-j9	4層	1.58	1.60	0.3	2.53	0.30	1.00	先端欠損	1	石鏝 最大長残存値	465
4-2	H12-j9	4層	2.30	1.50	0.1	3.45	0.30	0.49	バルブ残る	2	石鏝	469
4-2	H12-c10	4層	2.38	1.75	0.2	4.17	0.49	1.78	左足欠損	2or1	石鏝	473
4-2	H12-j9	4層	2.50	1.80	0.4	4.50	0.40	1.07	左足欠損	1	石鏝 最大幅推定値	475
4-2	H12-a9	4層	2.80	1.60		4.48	0.40	1.28		1	石鏝	486
4-2	H12-a9	4層	2.15	2.36		5.07	0.62	2.27		6	石鏝	
4-2	H12-j9	基盤層上面	1.90	2.20		4.18	0.50	1.65	先端欠損	1	石鏝 最大長推定値	484
不明	不明	不明	2.40	2.10		5.04	0.35	2.67		1	石鏝 3トレンチか?	487
不明	不明	不明	3.00	1.90		5.70	0.60	3.82		1	石鏝 3トレンチか?	488
1		2層	1.90	1.60		3.04	0.30	0.90			石鏝未製品	495
1		2層	1.46	2.09		3.05	0.46	1.32			石鏝未製品?	
1	北から2段目	2層	2.20	2.22		4.88	0.50	2.50		1	石鏝未製品?	
1	北から2段目	2層	1.61	2.25		3.62	0.45	1.41		1	石鏝未製品?	
1	F13-c1	4層上面	2.22	1.88		4.17	0.52	2.18		6	石鏝未製品?	
2		2-281	3.20	2.30		7.36	0.60	4.06		?	石鏝未製品 全体に風化	497
2	G13-e1	4層上面	2.65	2.50		6.63	0.50	2.75		1	石鏝未製品	496
4-2	H12-j9	4層	2.07	2.10		4.35	0.35	1.78		1	石鏝未製品?	

表4 石錐計測表

トシ	地区	層位、遺構	最大長	最大幅	面積	最大厚	重量	石材	備考	図面番号
1	北から2段目	2層	2.80	1.90	5.32	0.60	2.54	1	石錐	500
2		2層	2.70	1.30	3.51	0.60	1.10	1	石錐 上部欠損	498
3		3層	3.60	1.25	4.50	0.45	1.73	1	石錐 先端磨減 先端磨減 上部僅かに欠損	499
4	I12-h8	流路	2.40	1.50	3.60	0.60	2.06	1	石錐 使用痕有り	502
4-2	H12-j9	4b層	4.70	3.60	16.92	2.30	20.41	1	石錐 やや風化	501
3'		4層	2.90	1.50	4.35	0.45	1.79	2	石錐?	

表5 楔形石器計測表

トナン	地区	層位、遺構	最大長	最大幅	面積	最大厚	重量	二次加工の部位	石材	備考	図面番号
1	F13-c1	3層	3.34	2.17	7.25	1.12	6.48	上下端つぶれ	1	楔形石器	509
2	G12-f10	2層	3.20	1.68	5.38	0.52	3.28		1	楔形石器	
2	G12-f10	2層	3.92	2.66	10.43	1.32	14.17	下端つぶれ	1	楔形石器	562
2	G13-h10	2層	3.58	3.18	11.38	1.21	11.90	側縁つぶれ	1	楔形石器?	
2	G12-e9	3層	2.40	3.00	7.20	0.70	5.68	両側縁 上下端つぶれ	6	楔形石器	507
2	G13-d1	3層	4.10	2.70	11.07	1.00	9.26	上下端つぶれ	1	楔形石器 段落ち	510
2	G13-b1	3層	3.15	2.93	9.23	0.94	8.91	上下端つぶれ	6	楔形石器	563
2		3層	2.97	4.75	14.11	0.98	12.55	下端つぶれ	?	楔形石器 全体に風化	
2	G13-d1	3層	4.30	4.00	17.20	1.36	25.33	上下端つぶれ	1	楔形石器?	
2		3層	2.88	2.80	8.06	0.92	8.38	両側縁 上下端つぶれ	1	楔形石器 風化	
2	G12-e10	3層上面	2.28	2.12	4.83	0.65	3.49	下端つぶれ 上部欠損	6	楔形石器	
2		3層上面	2.70	3.40	9.18	0.80	8.74	上下端つぶれ	3	楔形石器 全体に風化 自然面	508
2		溝2-119	3.50	3.00	10.50	1.08	11.26	上下端つぶれ	1	楔形石器	506
2		側溝東	3.58	1.65	5.91	0.59	5.15	下端つぶれ	1	楔形石器?	
3'	H12-c9	4a層	2.49	4.00	9.96	1.55	6.43	上下端つぶれ	2	楔形石器	564
4	I12-g8	2層	2.67	2.20	5.87	0.68	4.22	上下端つぶれ	1	楔形石器	
4	I12-b9	4層	3.00	1.10	3.30	1.12	3.20	下端つぶれ	1	楔形石器?	
4	ベルコン	流路	3.27	2.95	9.65	0.99	10.32	上下端つぶれ	1	楔形石器	
4	H12-h8	流路	2.20	1.90	4.18	0.70	2.58		1	楔形石器?	504
4-2		4-2-195	2.25	2.58	5.805	1.12	5.26	下端つぶれ	1	楔形石器	
4-2	I12-b10	4b層	2.23	2.25	5.02	0.74	4.56	下端つぶれ	1	楔形石器?	
4-2	H12-j10	4層	2.16	2.75	5.94	0.99	4.93	下端つぶれ 上部欠損	1	楔形石器?	
2	G12-f10	2層	4.60	1.40	6.44	0.80	4.42		6	楔形石器欠損	511
2	G13-c7	3層	2.95	2.26	6.67	0.80	5.59		2	楔形石器欠損 段落ち	
3'	H12-g9	4a層	2.86	2.43	6.95	0.92	7.14	上下端つぶれ 側縁つぶれ	6	楔形石器欠損	505
1	F13-b1	3層	3.15	1.38	4.35	0.65	4.21	下端つぶれ	1	楔形石器欠損?	
4	I12-h8	流路	3.05	2.04	6.22	0.78	4.57	下端つぶれ	1	楔形石器欠損?	
2	基より南	2層	2.48	1.10	2.73	0.70	1.87	側縁両面微細な剥離 上端つぶれ	1	楔形石器欠損? 全体に風化	
2		杭山から	3.45	1.28	4.42	1.28	6.08	上下端つぶれ	1	楔形石器欠損? 全体に風化	
2	G12-e9	3層	4.10	1.40	5.74	0.90	6.47	下端磨滅	1	彫器 ローリング	503

表6 スクレーパー計測表

トナン	地区	層位、遺構	最大長	最大幅	面積	最大厚	重量	打点	背面	側面	二次加工の部位	石材	備考	図面番号
1	E13-j1	3層	2.10	2.80	5.88	0.30	2.28	欠損	3	3	側縁片面 刃	1	スクレーパー	517
1		3層	3.20	4.40	14.08	0.80	10.14	1	3	3		1	スクレーパー 全体に風化	519
2		2-291	1.88	2.75	5.17	0.78	2.93	3	3	2	下端片面 刃	6	スクレーパー	566
2	G12-c10	2層	4.25	5.30	22.53	0.95	29.03	欠損	3	3	側縁両面 刃	1	スクレーパー	525
2		2層	4.50	6.30	28.35	1.40	42.04		6	6	下端両面 刃		スクレーパー	528
2	G13-f1	2層	6.92	2.62	18.13	0.79	15.37	3	3	1	側縁両面 刃	1	スクレーパー	
2	G12-a10	3層	5.03	2.97	14.94	1.15	14.23	3	3	6	側縁片面 刃	1	スクレーパー	567
2	G12-h9	3層上面	5.70	7.10	40.47	1.80	70.50	不明	3	6	下端片面 刃	1	スクレーパー	527
2	G12-d10	4層	2.80	3.50	9.80	0.60	4.61	欠損	3	3	下端両面 刃	1	スクレーパー	518
2		埋め戻しの時	5.20	6.50	33.80	1.60	55.69	1	3	0	両側縁片面 下端両面 刃か刃つぶし	1	スクレーパー	524
3		2層	3.30	3.70	12.21	0.70	8.75	欠損	3	0	下端片面	1	石匙?スクレイパー	516
3		3層	4.70	3.40	15.98	0.90	17.81	欠損	3	3	下端両面 刃	1	スクレーパー	520
3	G13-j2	3層	2.90	4.90	14.21	0.60	9.39	1	3	3	下端両面 刃	2	スクレーパー	523
3	H12-c10		4.00	5.30	21.20	1.20	27.21	1	6	0	下端片面 微細	1	スクレーパー	521
3'	H12-g9	4層(4a層)	6.30	6.50	40.95	2.30	88.25	7	1	1	下端片面刃	1	スクレーパー	526
4	I12-h8	流路	3.68	2.60	9.57	0.85	6.42	3	3	3	側縁両面 刃	2	分析 スクレーパー	569
4		流路	2.30	4.80	11.04	1.00	10.11	3	3	0	側縁片面 刃	1	スクレーパー	522
4		流路	3.39	3.62	12.27	0.80	9.33	欠損	3	6	側縁両面 刃	9	全体に風化 スクレーパー	565
4-2	H12-j9	基盤層上面	3.55	3.80	13.49	1.53	16.67	欠損	3	3	側縁片面 刃	1	全体に風化 スクレーパー	

表7 石槍他計測表

トナン	地区	層位、遺構	最大長	最大幅	面積	最大厚	重量	二次加工の部位	石材	備考	図面番号
2	G12-f10	3層	6.30	3.20	20.16	1.50	29.00	側縁両面及び片面	1	石槍未製品	512
3'	H12-c9	4a層	5.00	5.00	25.00	1.40	34.53	側縁両刃	1		514
4-2		4b層	5.30	4.50	29.15	1.50	27.12	片面わずかに自然面のこる	1		513
4-2	H12-j10	4層	4.30	4.50	19.35	1.80	29.47	両側縁両面から大きく剥離	4		515

表8 二次加工のある剥片計測表(1)

トレンチ	地区	層位、遺構	最大長	最大幅	面積	最大厚	重量	打点	背面	側面 2	二次加工の部位	石材	備考	図面 番号
1		2層	2.63	1.44	3.79	0.39	1.47	不明	3	0	縁辺全て微細な剥離	1		
1	北から2段目	2層	2.05	4.50	9.23	0.67	9.07	不明	3	3	下端、側縁片面	2		
1	北から1段目	2層	3.30	4.40	14.52	0.80	13.20	不明	3	0	下端片面 刃	7		540
1		2層	1.98	2.98	5.90	0.84	4.16	2	3	0	側縁下端片面 刃	1		
1	北から4段目	2層	3.60	1.10	3.96	0.80	2.31	不明	3	3	側縁片面	1		531
1		2層	2.40	3.42	8.21	0.73	5.32	不明	3	3	側縁片面 刃	2		
1	北から1段目	2層	1.81	2.50	4.53	0.67	3.10	不明	3	3	側辺部	7		
1		2層	2.10	0.87	1.83	0.98	2.90	不明	3	3	片面全面	1		
1	北から2段目	2層	3.52	2.89	10.17	1.25	10.62	不明	5	3	両側縁片面	1		
1	E13-j1	3層	4.40	3.50	15.40	0.70	12.45	3	1	6	下端片面 刃	1		536
1	F13-d1	3層	2.55	3.91	9.97	0.87	7.42	不明	1	3	側縁下端片面(一部両面) 刃	1		
1	F13-f1	3層	5.40	2.90	15.66	0.50	8.79	1	3	0	両側縁片面	1		538
1		西側側溝	2.61	3.95	10.31	0.69	7.08	3	3	0	側縁片面	1		
1		西側側溝	3.57	2.90	10.35	0.65	8.71	不明	3	6	側縁片面 刃	1		
1		側溝	5.00	2.00	10.00	0.80	6.39	3	3	1	側縁両面 刃	1		544
1		表探	4.50	3.30	14.85	0.70	11.17	不明	3	6	両側縁片面 刃(微細)	1		542
2		2-116	2.85	1.56	4.45	0.80	2.78	不明	6	3	側縁片面(一部両面)	1		
2	G12-e10	2層	4.09	2.28	9.33	1.30	10.12	不明	3	3	縁辺部	4	全体に風化	
2	G13-f1	2層	2.73	2.53	6.91	0.92	7.08	不明	3	3	縁辺部	1		
2	G13-e1	2層	4.00	3.52	14.08	1.23	13.55	3	6	3	上端側縁片面 刃	1		
2	杭10より南	2層	1.62	3.24	5.25	0.73	3.15	不明	3	0	下端	1		
2	G13-f1	2層	3.43	3.29	11.28	1.20	9.12	不明	3	6	側縁片面	1		
2	G13-g1	2層	3.56	3.41	12.14	0.73	8.59	3	3	0	側縁片面 刃、側縁 刃つぶし	6		
2	G12-e10	2層	4.50	1.45	6.53	0.71	4.33	3	3	0	側縁片面 先端部磨滅	1		
2	G13-f1	2層	5.21	3.68	19.17	1.58	26.60	1	6	0	側縁片面 側縁両面 刃	1		
2		2層	2.80	1.50	4.20	0.30	1.33	不明	3	3	側縁両面下端両面	2		532
2		3層	1.98	2.28	4.51	0.44	2.00	不明	3	3	縁辺部	1		
2	G12-h10	3層	2.90	4.68	13.59	1.28	12.27	1	3	0	下端片面	9		
2	G12-e10	3層	2.66	1.69	4.50	0.54	2.56	不明	3	0	下端片面 刃	6		
2	G12-c9	3層	3.67	3.71	13.62	1.68	12.98	不明	6	0	下端片面刃上部欠損	1		
2	G12-e9	3層	3.10	3.05	9.46	1.46	12.42	3	3	3	側縁縁辺部	1		
2	G13-b1	3層	2.83	2.41	6.82	0.75	5.62	3	3	1	側縁下端片面 刃	1		
2	G13-c7	3層	2.12	2.53	5.36	1.05	4.13	不明	3	3	側縁片面	1	段落ち	
2	G12-b10	3層	2.82	2.56	7.22	0.48	3.92	3	6	0	側縁片面	1		
2	G12-c10	3層	3.38	2.46	8.31	0.65	3.83	不明	3	3	側縁片面 刃?	2	全体に風化	
2	G13-c9	3層	4.40	2.60	11.44	1.00	10.40	不明	3	0	両側縁下端両面 刃(微細)	1	石匙?	541
2	G12-j10	3層上面	3.10	2.28	7.07	0.70	6.19	不明	1	3	上端片面	1	全体に非常に風化	
2	G12-f9	3層上面	4.68	2.42	11.33	1.12	7.27	2	3	2	側辺部	1		
2	G12-j10	4b層	2.70	4.00	10.80	1.40	12.82	不明	3	6	片面下端一部 刃	1		
2	G12-d10	4層	4.50	3.70	16.65	1.50	19.45	1	3	0	下端つぶれ 側縁微細	1		537
2	G12-a10	4層	4.80	6.90	33.12	2.10	54.03	3	6	3	下端片面	6		
2	G12-a10	4層	3.13	2.07	6.48	0.79	4.45	3	3	1	側縁下片面 刃	1		
2	G12-j10	4層	1.80	2.85	5.13	0.47	2.14	3	3	0	側縁片面	1		
2	G12-d10	4層	2.80	2.70	7.56	0.47	3.79	不明	3	0	側縁片面	6		
2	G12-j10	4層	2.88	2.73	7.86	0.68	4.77	不明	3	6	側縁片面 刃	1		
2		側溝西	3.78	1.45	5.48	0.58	3.35	不明	3	3	下端両面	2		
2		側溝東	3.00	5.75	17.25	1.10	16.75	不明	3	0	下端片面 刃	1		
2			3.54	3.08	10.90	1.01	14.28	3	6	0	縁辺部	7		
3	北から2段目	3層	3.00	1.90	5.70	0.50	1.75	1	1	6	側縁微細な剥離	1		533
3		4層	2.82	4.18	11.79	1.02	12.30	1	3	6	側縁下端片面 刃	1		570
3		側溝	2.79	3.00	8.37	1.25	13.35	1	6	0	下端両面	1		
3'	H12-g9	3層	2.82	0.95	2.68	0.58	1.74	3	3	1	先端磨滅	1		
3'		4層	2.79	4.15	11.58	1.05	9.90	不明	3	3	側縁両面 刃?	1		568
3'	H12-d9	4層上面	3.40	2.90	9.86	1.06	5.96	不明	2	6	側縁片面 刃	1		
3'	H12-e9	4層上面	3.00	5.80	17.40	1.20	16.36	不明	3	0	両面全体	6		543
4	I12-g8	2層	2.19	2.73	5.98	0.97	4.79	3	2	1	縁辺部	1		
4	I12-g8	2層	2.73	1.90	5.19	0.53	3.93	不明	6	3	下端両面	1		
4	I12-h9	2層	2.73	2.06	5.62	0.41	2.62	不明	3	3	上端つぶれ	1		
4		2層	3.64	2.41	8.77	0.48	5.40	不明	3	2	側縁片面	?		
4		4-1-73	3.33	2.00	6.66	0.75	5.12	不明	3	6	側縁片面 刃	9	全体に非常に風化	
4	I12-b9	4層	2.90	0.90	2.61	0.40	0.98	不明	3	0	側縁両面	3	製品欠損か	530
4	I12-f9	流路	3.42	2.45	8.38	0.56	5.68	3	3	0	縁辺部主に片面 つぶれ	1	全体にやや風化	
4	I12-g9	流路	2.10	1.85	3.89	0.35	1.41	不明	3	0	縁辺部片面	2		
4	I12-f8	流路	2.40	4.10	9.84	0.80	6.06	3	3	3	下端片面 刃	1		535
4		流路	3.71	4.17	15.47	0.98	14.01	不明	3	1	下端片面 刃	6		
4	I12-f8	流路	3.80	1.90	7.22	1.00	8.93	不明	1	2	下端片面 微細な剥離	1	部分磨滅、擦痕	529
4		流路	3.80	1.57	5.97	1.73	6.13	3	3	3	側縁片面	1	全体に風化	
4	ベルコン	流路	2.77	1.42	3.93	0.72	3.36	不明	3	3	側縁両面	1		
4	I12-h8	流路	3.40	2.80	9.52	0.80	9.52	不明	3	3	側縁両面 刃 鋭利ではない	1		539
4	I12-g9	流路	1.87	3.07	5.74	0.75	5.23	不明	3	0	側縁両面 微細な剥離	1	ローリング	

表9 二次加工のある剥片計測表(2)

トシ	地区	層位、遺構	最大長	最大幅	面積	最大厚	重量	打点	背面	側面	二次加工の部位	石材	備考	図面番号
4-2		4-2-101	2.17	3.12	6.77	0.67	3.61	不明	3	3	縁辺部	1	全体にやや風化	
4-2		4-2-192	1.47	2.54	3.73	0.47	1.54	不明	3	3	側縁片面	1		
4-2	H12-j 10	4b層	5.50	6.10	33.55	2.00	52.54	1	3	3	下端片面 刃	2		
4-2	H12-b 10	4b層	1.67	2.67	4.46	0.55	2.41	3	3	1	側縁片面	3		
4-2	H12-j 9	4b層	2.28	2.27	5.18	0.40	1.83	1	3	3	側縁上端片面	1		
4-2	H12-b 10	4b層	2.72	2.47	6.72	0.58	2.30	3	3	3	側縁辺部	1		
4-2	H12-j 9	4b層	1.69	1.92	3.24	0.50	1.95	不明	2	0	両側縁両面	1		
4-2	H12-b 10	4b層	2.00	2.50	5.00	0.45	2.57	不明	3	0	両側縁両面、下端片面 刃?	1		534
4-2	H12-a 9	4層	4.16	3.70	15.39	0.89	11.85	不明	3	6	縁辺部	1		
4-2	H12-i 9	4層	3.93	2.85	11.20	1.19	11.64	不明	3	6	縁辺部	1		
4-2	H12-j 9	4層	2.72	2.39	6.50	0.76	4.76	2	3	6	縁辺部片面	1		
4-2	H12-i 10	4層及び4b層	2.07	2.83	5.86	0.38	2.18	1	3	0	側縁片面 刃?	3		

表10 剥片計測表

トシ	地区	層位、遺構	最大長	最大幅	面積	最大厚	重量	打点	背面	側面	石材	備考	図面番号
1	F13-c 1	3層	4.00	2.47	9.88	1.47	11.64	1	3	1	1		575
1		側溝東	4.00	6.80	27.20	0.87	22.59	1	3	0	1		551
1	E13-j 1	表探	4.62	2.69	12.43	0.85	10.41	2	2	0	1	微細な剥離有り	547
2		2-120	5.91	4.25	25.12	1.15	17.10	1	3	0	1		571
2	G12-f 10	3層	1.70	2.98	5.07	0.50	2.11	2	3	0	1		545
2	G12-j 10	4b層	3.38	3.92	13.25	0.87	8.61	3	5	0	1		574
2	G13-d 1	4層	4.50	3.50	15.75	0.82	9.74	1	3	3	1		573
2	G12-j 10	4層	5.70	6.50	37.05	0.84	28.50	1	3	0	1		552
3		カクラン	3.92	4.95	19.40	1.08	17.69	3	3	3	1	下端微細な剥離有り	572
3'	H12-d 9	3層	4.60	5.70	26.22	1.12	31.30	3	1	0	3		577
3'	杭A21	4層	2.70	3.30	8.91	0.35	2.45	3	3	0	1		546
3'	H12-e 10	側溝	4.40	4.50	19.80	0.95	16.71	1	3	1	1		549
4		流路	4.70	5.70	26.79	1.00	27.57	1	1	2	1	自然面 風化面	550
4-2		4-2-345	3.12	5.57	17.38	1.50	27.56	1	3	6	1		578
4-2	H12-j 10	4層	4.10	4.70	19.27	1.22	23.03	1	1	6	6		548

表11 石核計測表

トシ	地区	層位、遺構	最大長	最大幅	面積	最大厚	重量	背面	側面	石材	備考	図面番号
1		2~3層	4.50	3.10	13.95	1.90	27.91	3	3	1		584
1	北から1段目	2層	4.60	5.50	25.30	1.70	35.09	3	6	4		556
1	F13-b 1	3層	9.39	5.72	53.71	2.34	135.08	5	5	1		590
1	F13-d 1	3層	3.78	5.59	21.13	1.80	43.92	5	5	1	ローリング	591
1	F13-d 1, c 1	3層上面	8.32	5.67	47.17	3.21	160.71	6	6	1		588
1	F13-e 1	4層上面	5.54	4.58	25.37	1.88	51.72	3	1	6		589
2	G13-e 1	2層	6.50	4.10	26.65	3.30	89.54	6	1			592
2	G12-h 10	3層	3.81	5.21	19.85	1.05	18.86	6	6	1	片面風化面	579
2	G12-b 10	3層	4.82	3.98	19.18	2.25	48.87	3	6	1	下端つぶれ有り	581
2	G12-h 10	3層	4.10	5.57	22.84	2.20	42.59	5	6	1		582
2	G12-c 10	3層	4.68	3.48	16.29	1.83	39.03	6	6	1		585
2	G12-j 10	4層	5.68	3.01	17.10	26.28	26.28	3	1	6	下端つぶれ	583
3		3-214	5.70	5.80	33.06	2.59	82.45	6	3	1	下端両面加工か	553
3'	H12-c 9	4b層	6.00	6.30	37.80	3.10	112.70	3	6	1		554
3'	H12-c 10	4b層	5.70	3.40	19.38	1.60	33.49	3	6	1		555
3'	H12-e 9	側溝	3.90	5.60	21.84	1.03	30.95	3	6	4	下端 刃、あるいはつぶれ	586
4-2	H12-j 9	4b層	4.60	5.00	23.00	1.90	42.24	3	0	1		557
4-2	H12-j 9	4b層	12.20	6.90	84.18	3.60	280.23	3	6	1	全体に風化	558
4-2	H12-j 9	4b層	7.50	14.70	110.25	1.90	163.03	6	4	1	全体に風化	559
4-2	H12-j 9	4b層	7.70	12.20	93.94	3.00	251.93	6	6	1	全体に風化	560
4-2	H12-j 9	4b層	9.20	14.70	135.24	2.10	294.57	7	1	1	全体に風化	561
4-2	H12-j 9	4b層	4.15	4.17	17.31	1.40	31.19	3	1	1		580
4-2	H12-j 9	基盤層上面	5.61	11.19	62.78	2.42	128.55	3	3	1	全体に風化	587

付章 1 積川神社出土の遺物について

はじめに

今回調査を行った中之社遺跡と宮の後遺跡の間の牛滝川と掛田川（深山川）合流地点に積川神社がある。その地は牛滝街道の東側に位置する。1957年、積川神社本殿解体修理の際、多量の古瓦、土師皿、瓦器碗、瓦器皿等が出土した。今回、その際に出土した遺物を、積川神社宮司、積川延雄氏のご厚意によって実見する機会を得た。そこで、この資料を紹介することとしたい。

1、積川神社について

積川神社は、大正3年、本殿が特別保護建造物に指定された。祭神は生井（いくい）神、栄井（さくい）神、綱長井（つながい）神、阿須波（あすは）神、波比岐（はひき）神、の5神。五社大明神とも称した。明治6年に郷社に列し、明治40年、八幡神社、菅原神社、白髪神社を合祀した。文化2年11月、宝庫、社務所共に火災にあい古記を失ったため、沿革は明らかではない。現在の本殿には慶長8年12月9日の墨書が框にされている。また、「延喜式」神名帳に「積川神社五座 歟」とみえ、その他にも積川神社に関する記述は様々な史料にみることができる。以下、しめす。

弘仁14年 大鳥神社とともに祈雨の奉幣（「日本紀略」七月四日条）

承和9年 従5位下（「続日本後紀」十月九日条）

貞観6年 従4位下（「三代実録」三月二十三日条）

貞観15年 従4位上（「三代実録」四月五日条）

永万元年 和泉国 責川社 （櫛少々）（「永万文書」神祇官諸社年貢注文 永万元年六月日）

養和元年 和泉国 積川社 （「神熊野神社文書」後白河院庁下文案）

正応2年 正一位積川神社前 （「和泉国神名帳」正応二年書写）

また、熊野詣の参詣路に配された王子として積川王子が文献の中に見られる。白河院熊野御幸のとき、院が八木郷額原で当社を遙拝し、傍らの鳥居の「正一位積川大明神」という額を自ら書き換えたと伝えるので積川王子は積川神社の遙拝所に設けられた王子社ではないかと考えられる。（大阪府地名大辞典）

2、出土遺物について

今回、実見することができた遺物は、瓦、瓦器、土師皿である。修理報告書に掲載されている土器類は、「陶器 三一、六、六日発掘」と鉛筆で表書きされた段ボール箱にまとめて保管されていた。その他に多数の土器片があった。瓦類は、報告書掲載の遺物以外にも、まとめて保管されていた。その中には瓦当裏面に出土地が墨書きされている物があり、周辺で採集された瓦も混入していることが分かる。

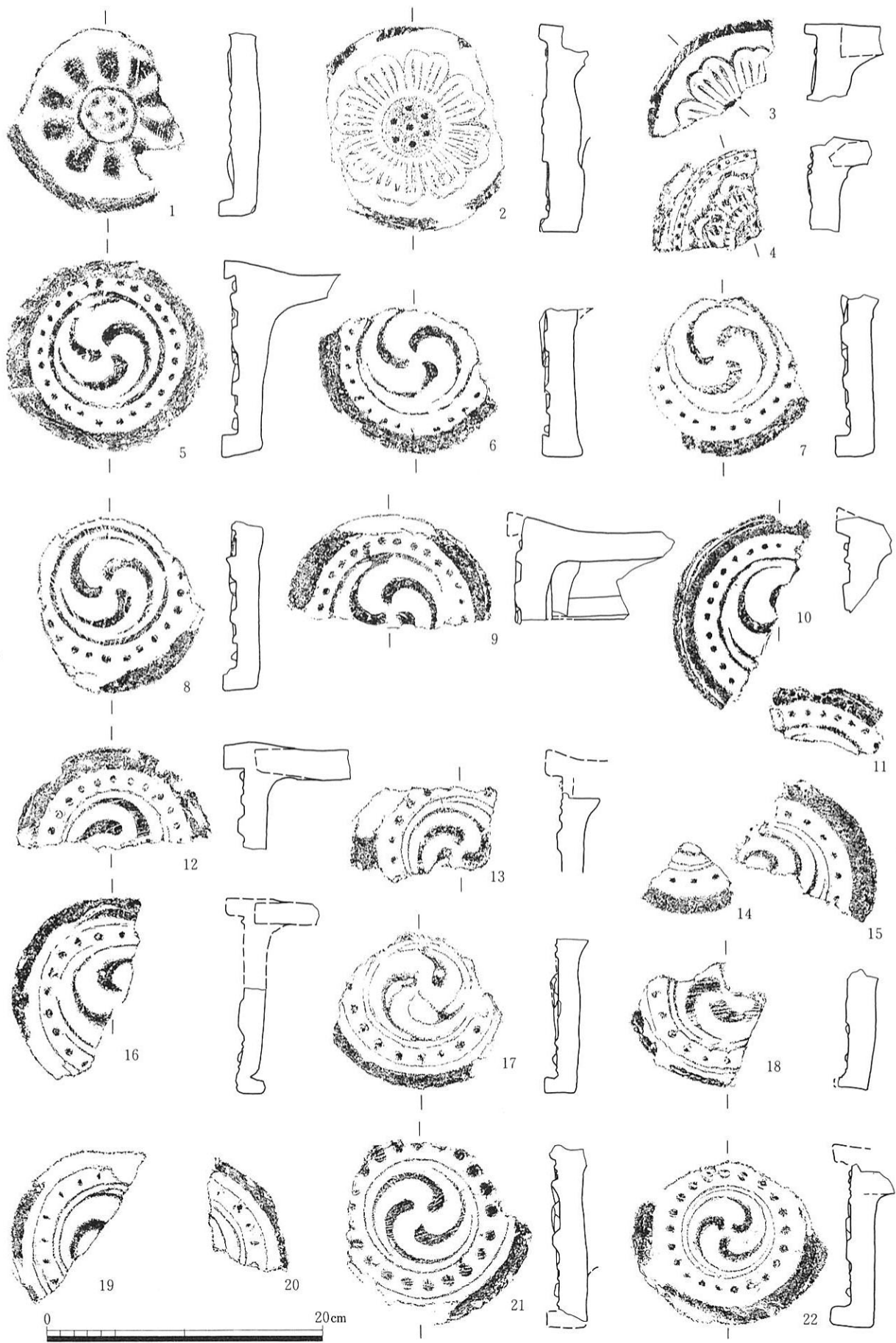


图1 積川神社出土軒丸瓦 (1)

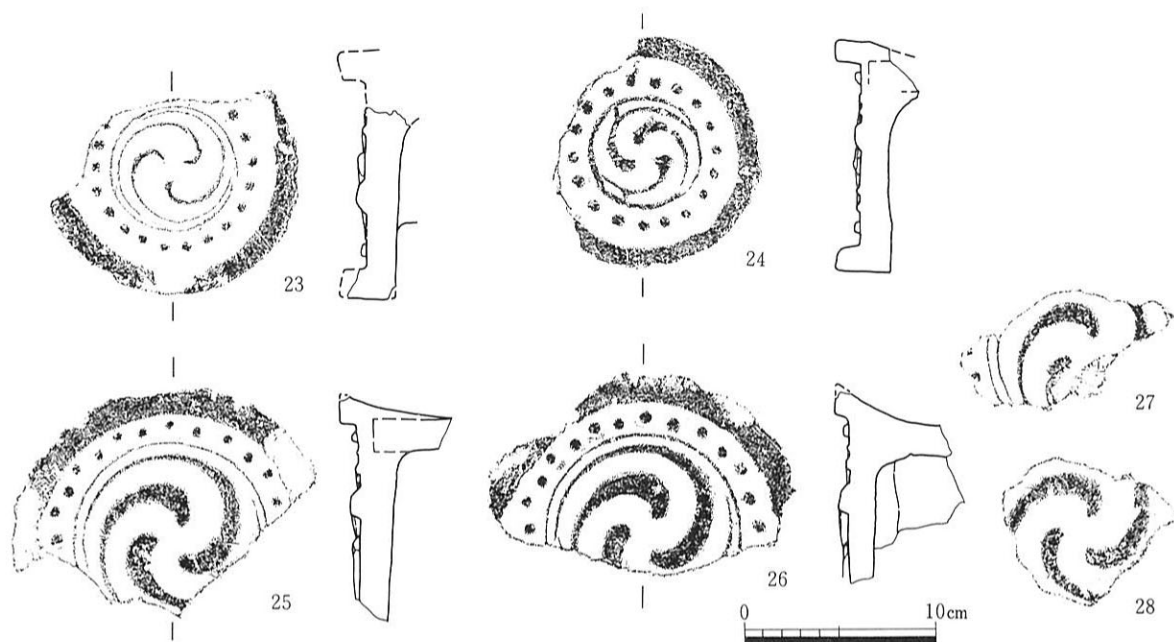


図2 積川神社出土軒丸瓦(2)

(1) 瓦類

・軒丸瓦(図1、2)

1類(1)

素弁10葉蓮華紋軒丸瓦である。連弁は短く先端は丸い。中房には圈線がめぐり、連子は1+7である。紋様はかなり磨滅している。瓦当面には離れ砂が付着。瓦当裏面は上部は指頭圧痕が残り、下部はナデを施す。丸瓦部は剥離しているが、その接合位置は高く、凹面側にもほとんど補充粘土の痕跡が見られない。焼成は軟質で、淡黄色を呈する。瓦当裏面に積川神社本殿境内出土昭和三二年の墨書きがある。

2類(2、3)

復弁8葉蓮華紋軒丸瓦である。中房は1+5の連子を持つが、連子は非常に磨滅している。瓦当面の離れ砂は非常に少ない。2は瓦当裏面中程から丸瓦部凹面に向かって掻き上げ、中央部分には指頭圧痕が残る。下半分は周縁に沿ってナデを施す。側面はケズリを施す。丸瓦接合位置は高く、凸面側はほとんど補充粘土はない。4は丸瓦部凸面を縦方向に工具を使用してナデを施す。胎土は非常に精緻。

3類(4)

復弁8葉蓮華紋軒丸瓦である。中房には雄心体がめぐる。外区は非常に細かい珠紋を配し、内外側に圈線をめぐらす。瓦当面には離れ砂が付着。瓦当裏面はナデ、丸瓦部凸面は縦方向のナデを施す。丸瓦接合位置は高く、丸瓦部凸面側の端部を斜めに切り落としている。

4類から類は巴紋である。(巴は瓦当面に向かって)

4類(5~11)

巴は右まわり。内区と外区太い圈線で画する。巴はほとんどくびれがなく、巴頭の先端はとがり、断面長方形を呈する。珠紋は26個を数える。瓦当面には非常に細かい離れ砂が付着。瓦当裏面は横方向にナデ、下部は周縁に沿ってナデ、側面は横方向にナデを施す。丸瓦部凸面は縦方向に工具によるナデを施す。凹面は糸切り痕と細かい布目が残る。10、11には周縁に範のあたり痕がある。

5類(12)

巴は左まわり。瓦当面には糸切り痕があり、離れ砂が付着。巴頭の先端は丸く、断面長方形を呈し、

明瞭なくびれを持たずに細くなる。尾は長く他の巴に接して圏線状をなす。中央にコンパス痕残る。丸瓦部凸面は縦方向に工具を使用したナデ、瓦当側は横方向にナデを施す。凹面は接合部分は横方向にナデを施し、布目が残る。丸瓦との接合位置は高く丸瓦を差し込む。

6類 (13~15)

巴は左まわり。内区と外区は圏線で画する。巴頭はやや丸みをもつがくびれは少なく断面台形を呈する。中央にコンパス痕がある。瓦当面は離れ砂が付着。瓦当裏面、側面はナデを施す。丸瓦部凸面は縦方向にナデを施す。丸瓦の接合位置は高く、丸瓦をさし込み凸面側にも粘土を補充している。

7類 (16)

巴は右まわり。巴頭の先端はとがり、断面台形を呈し、わずかにくびれを持ち尾に移行する。尾は長く約1周し、他の巴に接して圏線状を呈する。瓦当面には離れ砂が付着。瓦当裏面はナデ、下部に波状の圧痕がある。側面は横方向にナデを施す。凹面はわずかに布目が残る。

8類 (17~20)

巴は左まわり。珠紋の内外側に圏線をめぐらす。巴頭から尾にかけてわずかにくびれを持つ。尾は長く他の巴に接する。瓦当面には離れ砂が付着。瓦当裏面、側面はナデを施す。丸瓦部凸面は縦方向にナデを施す。接合部は丸瓦をさし込み、凹凸面ともに粘土を補充する。18は瓦当面に糸切り痕が残る。

9類 (21)

巴は左まわり。珠紋の内外側に圏線をめぐらす。巴頭の先端は丸く、わずかにくびれを持ち尾に移行する。尾は長く約半周する。圏線は太い。珠紋は21個を数える。瓦当面には離れ砂が付着。瓦当裏面はナデ、側面は横方向にナデを施す。接合部は丸瓦を差し込む。

10類 (22、23)

巴は左まわり。内区と外区を圏線で画する。巴はくびれが見られ、巴頭と尾の境が明瞭である。巴頭の先端は丸く、断面台形を呈する。尾は約半周する。珠紋は21個を数える。瓦当面には離れ砂が付着。瓦当裏面は工具によるナデで平滑に仕上げる。側面は削り気味にナデを施す。接合部は丸瓦を差し込む。

11類 (24)

巴は右まわり。内区と外区を圏線で画する。巴はくびれが見られ、巴頭と尾の境が明瞭である。圏線は太く、尾が約半周して接する。珠紋は18個を数える。文様はシャープさにかげ範傷が多い。瓦当面は細かい離れ砂が付着。瓦当裏面はナデ、側面は横方向に工具を使用したナデを施す。丸瓦部凸面は縦方向に工具を使ったナデを施す。接合部は丸瓦を深く差し込み、凸凹両面に粘土を補充する。

12類 (25~28)

巴は左まわり。内区と外区を圏線で画する。巴頭は大きく、断面は半球状にちかい。巴の尾は長く3分の2周する。珠紋はジグザグ状を呈する。瓦当面は細かい離れ砂がわずかに付着。中央にコンパス痕あり。瓦当裏面はナデで非常に平滑に仕上げる。丸瓦部凸面は縦方向に工具によるナデ。丸瓦接合位置はやや低く、瓦当面から丸瓦へのラインは曲線を描く。また、丸瓦端面にはキザミをいれている。

・軒平瓦 (図3)

1類 (29)

均整唐草紋軒丸瓦である。中心飾りは不明。曲線顎。瓦当面にはわずかに離れ砂が確認できる。顎下部は横方向に工具によるナデ。平瓦部凸面は縦方向に工具によるナデ、側面側はケズリを施す。平瓦部

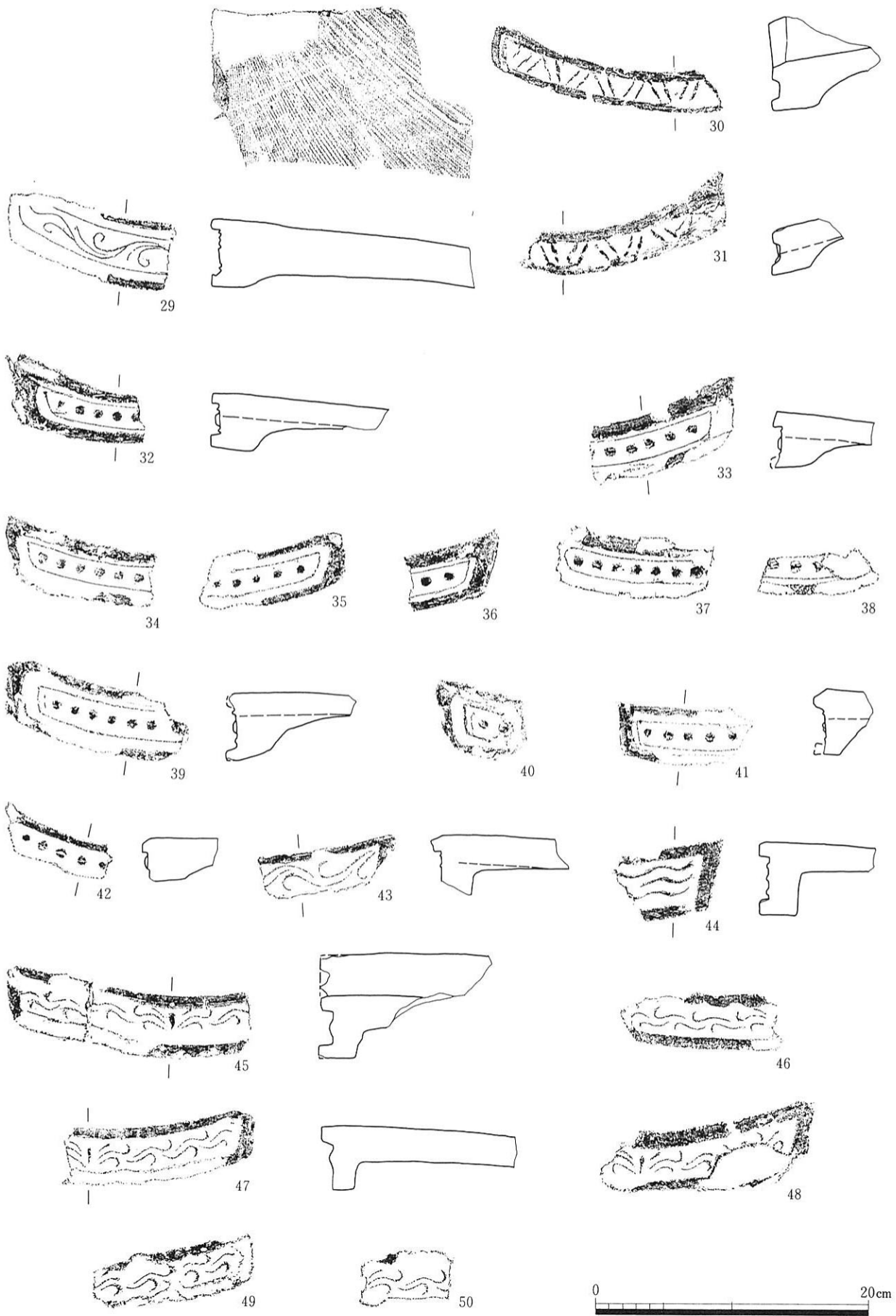


图3 積川神社出土軒平瓦

凹面は糸切り痕、布目が残る。瓦当面側に面取りあり。側面は丁寧にナデを施す。胎土は非常に精緻。

2類 (30、31)

鋸歯紋軒平瓦である。平瓦の凸面に粘土を張り付け、瓦当を成形している。顎下部は横方向に工具を使用したナデ。平瓦部凸面は瓦当裏面にかけて縦方向にケズリ。平瓦部凹面は離れ砂が付着し、瓦当面側に面取りを行う。側面はナデ。凹面側にわずかに面取りあり。焼成は不良。30は平瓦部凸面に積川神社本殿 背面南〇ノ四柱真 断面に昭和三一、九、二八出土と墨書きがある。

3類～5類は連珠紋軒平瓦である。

3類 (32～38)

連珠紋の周囲には間線がめぐる。平瓦の凸面に粘土を張り付け、瓦当を成形している。顎の下部は横方向にナデ。平瓦部凹面は、33、34、37は縦方向に工具を使用したナデを施し、非常に細かい布目がわずかに残る。36には糸切り痕あり。平瓦部凸面は縦方向に工具によるナデ。32、36は離れ砂が付着している。瓦当裏面は横方向にナデ。平瓦部凸面は不定方向にナデを施す。35は磨滅が著しく調整不明瞭。38は平瓦が剥離している。焼成は全体に良好。

4類 (39～41)

3類と同じ紋様構成を持つが、界線の間隔が広い。39、40は向かって左端に範傷がある。平瓦の凸面に粘土を張り付け、瓦当を成形している。瓦当裏面、顎下部は横方向にナデを施す。平瓦部凸面は縦方向に工具を使用したナデ、平瓦部凹面はナデを施す。41は顎下部が非常に狭く、断面台形を呈する。

5類 (42)

界線はない。凸面の粘土の張り付けは少なく、瓦当も狭い。顎下部は横方向のナデ、凸面は縦方向のナデを施す。平瓦部凹面は離れ砂が付着している。瓦当側に面取りあり。焼成はやや軟質。

6類 (43)

均整唐草紋軒平瓦である。段顎を呈する。平瓦の凸面に粘土を張り付け、瓦当を成形している。瓦当面は離れ砂付着。瓦当裏面、平瓦部凸面は横方向にナデを施す。平瓦部凹面は離れ砂付着。糸切り痕が確認できる。瓦当側に面取りあり。側面はナデを施す。

7類 (43)

水波紋軒平瓦である。段顎を呈する。平瓦凸面に粘土を張り付け、瓦当を成形している。瓦当面は離れ砂付着。顎下部、瓦当裏面、平瓦部凸面は横方向にナデを施す。平瓦部凹面は離れ砂付着。糸切り痕、布目わずかに残る。側面はナデを施す。

8類 (45～50)

均整唐草紋軒平瓦である。瓦当面には離れ砂付着。顎下部、瓦当裏面は、横方向にナデ。平瓦部凸面は離れ砂が付着し、瓦当に近い部分は横方向のナデを施す。平瓦部凹面は縦方向にナデ、瓦当面側にわずかに面取りあり。離れ砂が付着。側面はナデを施す。胎土はやや荒い。二次焼成を受けたものがある。

・その他の瓦 (図4)

・平瓦 51は凸面は縄目叩き、離れ砂が付着。凹面は荒い布目痕が残る。糸切り痕もわずかに残る。側面、端面は丁寧にナデで仕上げる。側面の凹面側にわずかに面取りを行う。52は凸面は縄目叩き、離れ砂が付着。糸切り痕も見られる。凹面はわずかに布目が残るが、棒状の圧痕によって消されている。離れ砂わずかに付着。端面は丁寧にケズリ、側面は未調整。側面凹面側は面取りあり。53は凸面は格子叩

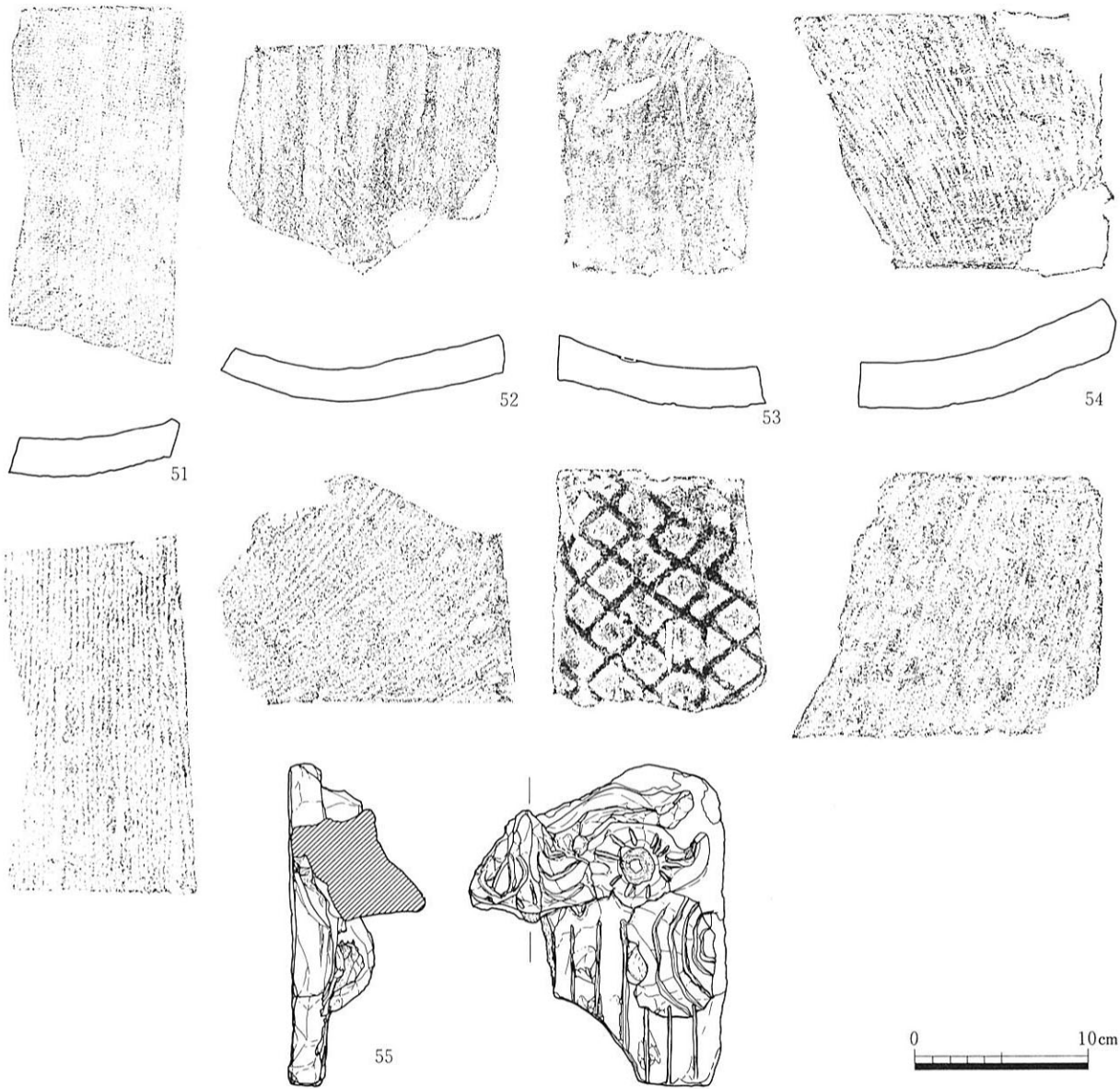


図4 積川神社出土平・鬼瓦

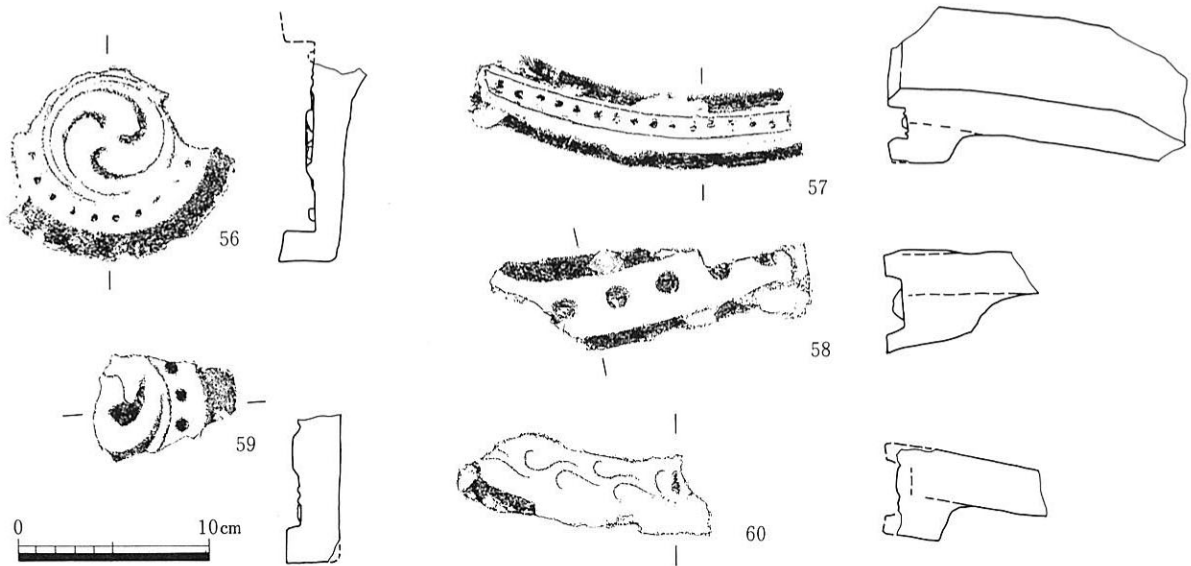


図5 その他の軒瓦

き、離れ砂はわずかに付着。凹面はわずかに布目が確認できるが、ほとんどがなで消されている。側面はナデ、端面は未調整。54は凸面は糸切り痕が残る。多量の離れ砂が付着。凹面は糸切り痕が残る。わずかに布目が確認できる。側面は面取り。

・鬼瓦 55は鬼板瓦である。眉、目、鼻、頬を粘土を張り付けて表現し、更に細部はヘラで描いている。特に目にはまつげを表しており、細かい。鼻は穴が貫通しており、他に目、頬にも釘穴をあけている。裏面は軽くナデ調整。側面は削って整える。焼成良好。

・積川神社以外の瓦（図5）

56～58は橋室寺出土の注記がなされている。橋室は積川神社の東側にある字名である。しかし、文化財分布図では橋室寺の名はなく、堂ヶ峰廃寺の名が見られる。同一の寺院と思われる。56は巴紋軒丸瓦である。巴はくびれがあり、尾は長く約3分の2周する。圏線がめぐる。周縁は高い。瓦当裏面はナデ、側面は横方向にナデを施す。丸瓦は剝離しているが、凹面側の補充粘土は指で押さえて波状になる。57、58は連珠紋軒丸瓦である。57は珠紋が細かく、界線がめぐる。幅の広い段顎。瓦当面は離れ砂がわずかに付着。瓦当裏面は縦方向、顎下部は横方向にナデを施す。平瓦部凸面、凹面は糸切り痕が残る、離れ砂が付着。平瓦部凹面の瓦当面に近い部分は縦方向にナデ、瓦当面側は面取り。側面ナデを施す。58は珠紋が大きく、界線はない。平瓦部凸面に粘土を張り付け瓦当を成形する。曲線顎。瓦当裏面は縦方向に、顎下部は横方向にナデを施す。凹面は離れ砂が付着しており瓦当面側は面取り。側面はナデを施す。59、60は山直神社出土の注記がある。山直神社は積川神社と同じく式内社である。59は巴紋軒丸瓦である。巴はくびれあり、圏線がめぐる。珠紋は大きく扁平である。瓦当面には離れ砂が付着。瓦当裏面はナデを施し非常に平滑である。60は均整唐草紋軒丸瓦である。顎は段顎。瓦当裏面、顎下部は横方向になで。凸面は離れ砂が付着。凹面は縦方向にナデを施す。二次焼成を受けている可能性がある。

・土器（図6、7）

61～64は瓦器碗である。61は口径12.6cm、底径4.4cm、器高5cmを測る。体部内面はヘラミガキ、外面は指頭圧痕が残る。口縁部は外面に強いヨコナデを施し外反し端部内面には面を持つ。高台は断面三角形を呈する。62は口径13cm、底径6cm、器高5.2cmを測る。体部内面はヘラミガキ、外面は荒くヘラミガキを施す。口縁部外面はヨコナデ、端部内面には面を持つ。高台は端部にわずかに面を持ち外反する。63は口径14.2cm、底径5cm、器高5.3cmを測る。体部内面はヘラミガキを施し、外面は指頭圧痕を残す。口縁部の内側を強くヨコナデし、口縁部は内湾する。口縁部外面は2段にナデを施す。高台は断面三角形を呈する。61～63は見込みの暗紋はシャープな斜格子である。64は口径12cmを測る。体部内面はヘラミガキ、外面は体部から口縁にかけて強いナデを施し段をつける。口縁部は大きく内側に屈曲させ端部は丸く収める。段の凸部にはヘラミガキを施す。他にも内側に大きく屈曲する瓦器碗が数点確認できた。

65は瓦器皿である。口径9.8cm、器高2.1cmを測る。表面の磨滅が著しいが内外面にヘラミガキを施す。

66～81は高台付き瓦器皿である。66は口径9cm、底径4.4cm、器高3.2cmを測る。小型の碗といった様相を呈する。体部内面は分割性を持ったヘラミガキ、外面は荒くヘラミガキを施す。見込みの暗紋はシャープな斜格子。口縁部外面はヨコナデを施し外反して端部内面に面を持つ。高台はしっかりしている。

67～69は口縁が大きく開く。口径8.5～9.4cm、底径3.3～3.9cm、器高1.9cm前後を呈する。内面はヘ

ラミガキ、外面は指頭圧痕が残る。口縁部は内外面ともにヨコナデ。高台は断面端部にわずかに面を持つ。

70は白色を呈する。口径7.6cm、底径5.3cm、器高2.3cmを測る。内外面共にナデを施す。

71~77は、見込みに平行で幅の広いヘラミガキを施す。ただし、71はほとんどヘラミガキは確認できなかった。口径7.4~8.3cm、底径3.4~4.5cm、器高2~2.4cmを測る。72以外は底部から体部にかけて大きく屈曲する。体部外面はヨコナデ。焼成はやや甘く灰黄褐色を呈する。

78~81は見込みの連結状の暗紋を施す。直径7.5~9.2cm、底径2.8~4.0cm、器高1.7~2.6cmを測る。胎土は密で焼成は良く暗青灰色を呈する。このタイプの瓦器皿は破片でも非常に多く出土している。

71~81は内面はヘラミガキ、外面は荒いヘラミガキを施す。

82~84は耳皿である。71~77のタイプの瓦器皿の端を折り曲げた物である。ただし内外面ともヘラミガキを施さない。84には高台がつかない。焼成は全体に甘く、白色を呈する。耳皿の破片も多く出土しているが、やはり焼成の甘い物が多い。

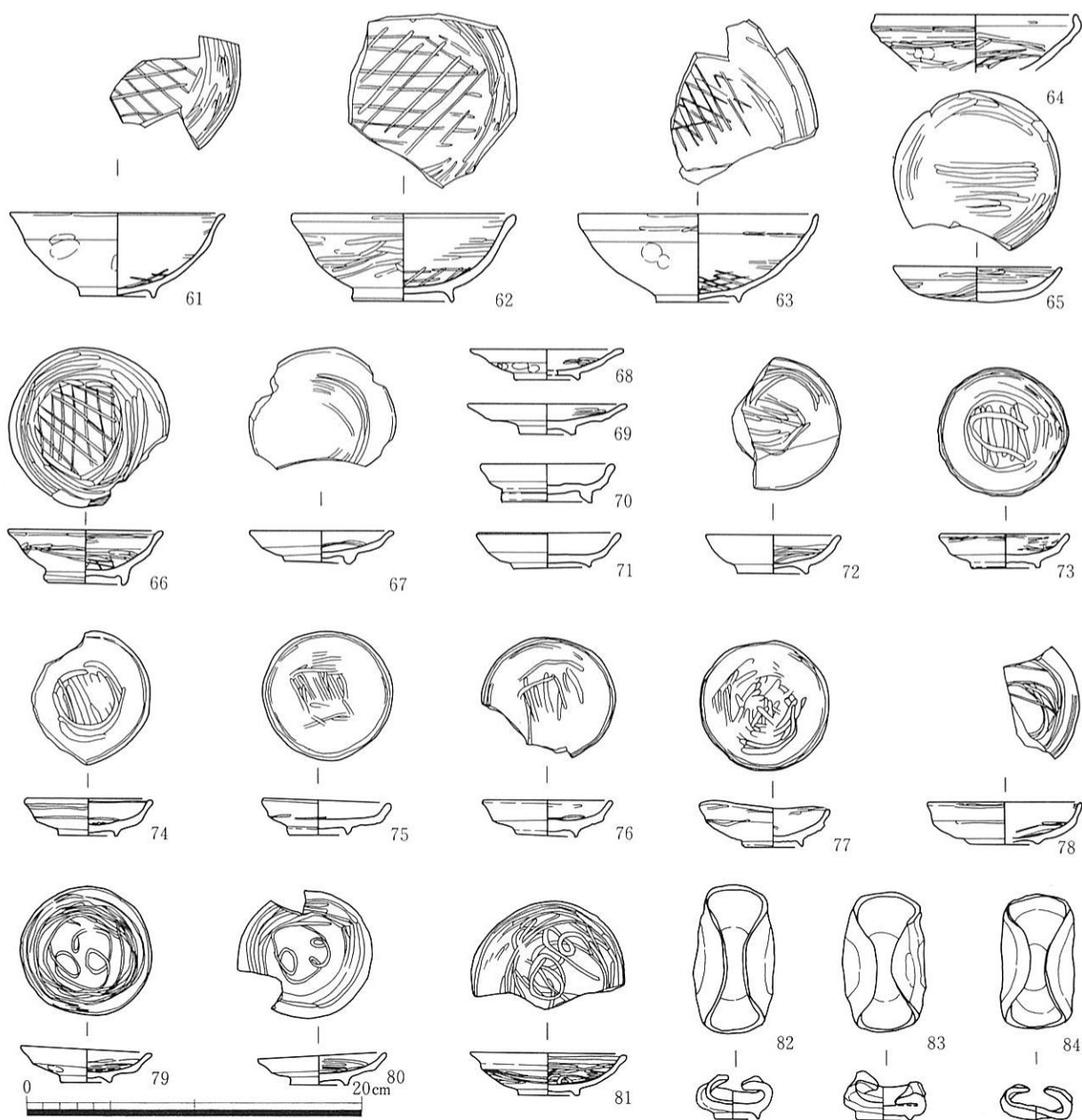


図6 積川神社出土土器(1)

85～87は土師皿である。85は口径7.8cm、器高1.3cmを測る。白色を呈する。86は口径7.4cm器高1.2cmを測る。底部と体部の境は稜を持つ。85、86は底部外面は未調整、他はナデを施す。87は口径8.3cm、底径5cm、器高1.4cmを測る。口縁部内外面はヨコナデ、底部外面は回転糸切りの痕跡が明瞭に残る。

88～109は瓦器皿である。88～98は口径6.6cm～6.8cm、器高1.0cm、厚さ0.3～0.4cmを前後を測る。ほぼ、完形に近い。体部と口縁部の境に稜を持ち、口縁端部は丸く収まる。体部外面及び内面はナデ、底部外面は糸切り痕がわずかに確認できる。96～98は糸切りを行わず、指頭圧痕が残る。97は底部外面を軽く削る。色調はやや鈍い橙色を呈する。96、98はやや明るい。

99～109は口径8.4cm～8.8cm、器高1.2cm前後を測る。内面はハケメをなで消している。口縁部はヨコナデを施す。底部は未調整。口縁部はやや内湾ぎみで端部は丸みを帯びるもの、やや先細りになるものがある。色調は口縁部内外面は黒色、他は淡灰褐色を呈する。

次にこれらの遺物について若干の考察を行いたい。

61～63の瓦器碗は、見込みにシャープな斜格子の暗文が見られる。外面には粗いがヘラミガキを残しており、12世紀後半の年代が与えられる。これらの瓦器碗は破片も含めて、全体量は少ない。また、63、64のように口縁部に独特の特徴を持つものがあるが、宮の後、中之社両遺跡では出土していない。

高台付瓦器皿は、わずかではあるが外面にヘラミガキが確認でき、12世紀後半～13世紀初頭の時期を考えたい。66は内面に分割性のあるヘラミガキを施しており、上記のものより時期がかえる可能性が高い。また、71～77の見込みに太いヘラミガキを施すものと、78～81の見込みに連結状の暗文を施すもの

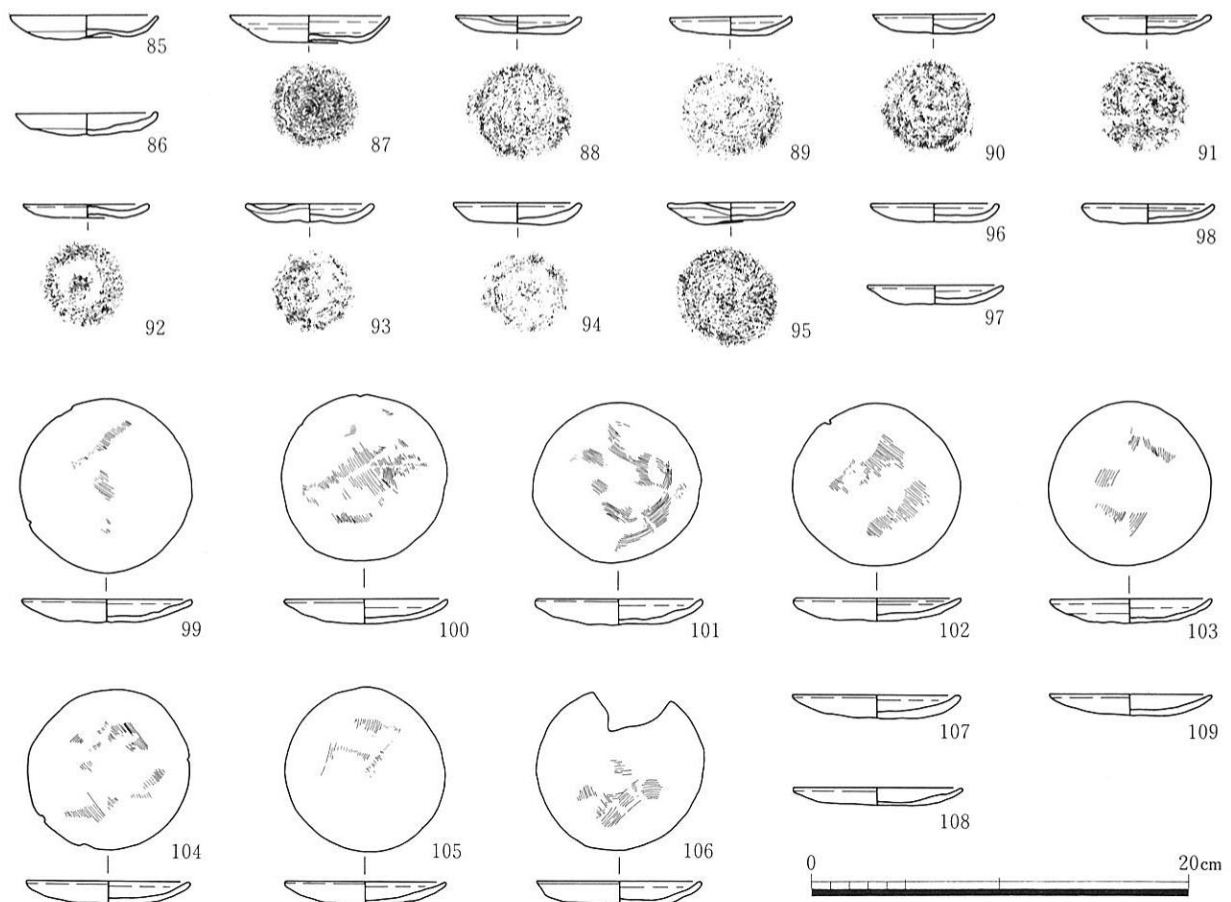


図7 積川神社出土土器(2)

は、前述のように胎土に違いをみせる。産地の違いが考えられるが、78～81の瓦器皿は高台が口径に比して小さく、あるいはさらに後出のものの可能性が考えられる。

99～109の瓦器皿の類例としては、天野山金剛寺、及び烏帽子形八幡神社の本殿外陣床下からで羽釜に埋納され出土した物がある。これらの遺物について、天野山金剛寺の報告書の中で検討が加えられている。瓦器皿をその口径、器高によって10類に分類し、さらに実年代についての検討を行っている。今回紹介した遺物はその分類にしたがえば烏帽子形八幡神社出土の9類にあたる。烏帽子形八幡神社出土の遺物は本殿の解体修理の際に文明12年（1480年）の棟札が見つかり、15世紀後半の時期が与えられる。88～98は更に口径の縮小化が行われており、堺環濠都市遺跡で類例が出土しており、16世紀後半の年代が与えられる。

修理報告書によると、土器類は、基礎全体に層をなして混入しているものと、ほぼ完形に近い形で一カ所からまともに出て出土しているものがあり、基礎は少なくとも1回は掘り返して築き直された可能性を指摘している。その出土状況を追認することは不可能ではあるが、報告書によるようにここでは図示しなかったが、高台付き瓦器皿、特に78～81のタイプの破片が非常に多く出土している。それに対して瓦器皿はほぼ完形であり、ここで図示したものですべてである。

また、高台付きの瓦器碗、耳皿などは日常的なものとは考えにくく、地鎮等の祭祀が考えられる。また、14世紀以降、瓦器碗、皿は一般では見られなくなり、堺環濠都市遺跡とその周辺の他は富田林市龍泉寺、河内長野市天野山金剛寺、同市烏帽子形八幡神社遺跡で地鎮具として埋納されたものがあるだけであり、実用品とは考えにくい。今回の資料も地鎮具として埋納されたものであろう。

瓦については、出土点数が限られており、組み合わせ等明確にしがたいが、軒丸瓦の1～3類、軒平瓦1類は平安時代末、軒丸瓦4類から9類、軒平瓦2類～5類は鎌倉時代初等の年代があたえられる。なお、4類は顎の形態からやや新しい。軒丸瓦10類～12類、軒平瓦6類～8類で室町時代以降と考える。

まとめ

今回紹介した資料は、大きく3つの時期に分かれる。1つは、12世紀後半～13世紀初頭、2つは15世紀後半、3つは16世紀後半である。

1期 耳皿や高台付皿といった日常的な物ではなく、地鎮等の祭祀に伴うものが見られる。またこれらの土器は非常に多くの細片が見られ、このことから現在の本殿の前身となる建物の存在が考えられる。二章でふれた文献によれば12世紀の積川神社は中央の神祇官に年貢として櫛を納めており、後白河院が京都に設立した新熊野社の末社として勅院事国役等を免除されるなど中央との結び付きを強化している。また、中之社遺跡、宮の後遺跡で掘立柱建物が見られ、集落の中心的な時期である。多く出土している軒瓦から神宮寺時代があったと考えられ、平安末から鎌倉初頭にかけての時期に造られたと考えられる。また、室町時代の瓦も数点出土しているが、これらのものは補修瓦と考えられる。

2期 遺物はほとんど完形であった。類例に見るように地鎮に使用されたとおもわれる。

3期 2期同様ほとんどが完形であった。棟札の墨書には慶長八年と記されており、これは慶長七年豊臣秀頼が片桐且元に命じて社殿を修築したとされる。この遺物は若干の時期差を持つがその際のものであろうか。

今回の中之社、宮の後両遺跡では、10世紀よりかえる遺構は検出されず、遺物もほとんど見られなかった。また、積川神社の遺物からも紹介したものの以前の遺物は見つからない。そのため、神社の創建

が文献に見られるように遡るかは検証できなかったが、少なくとも鎌倉時代初等には現在の神社の前身の建物や神宮寺がたてられ周辺に集落が広がっている景観が復元できる。

また、同範、同紋瓦が複数の寺院に見られ、^{註4)}瓦の供給、流通など、中世における寺院の性格を考える上でわずかながらその背景を考えられるのではないだろうか。

(註)

註1) 『天野山金剛寺遺跡』河内長野市遺跡調査会報8 河内長野市遺跡調査会 1994

註2) 『河内長野市史』第1巻(上)河内長野市史編修委員会 平成6年

註3) 土山健史 「堺環濠都市遺跡における15・16世紀の在出土器」『中世土器の基礎研究5』日本中世土器研究会 1989年

註4) 以下の同紋、同範瓦がみられる。実際の遺物を比較検討し、同範と確認できたもののみ同範とした。

軒丸瓦1類 畠中遺跡 同範 『畠中遺跡』(財)大阪府埋蔵文化財協会 1986

軒丸瓦2類 日置荘遺跡 同紋 『日置荘遺跡』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1995

金剛寺遺跡 同紋 『金剛寺遺跡発掘調査報告書』(財)大阪府埋蔵文化財協会 1987

宮町遺跡 同紋 『財団法人 八尾市文化財調査研究会報告45』(財)八尾市文化財調査研究会 1995

塩穴寺跡 同紋 石田茂作 『飛鳥時代寺院址の研究』1936 第一書房

軒丸瓦3類 万町北遺跡 同紋 『和泉丘陵遺跡発掘調査概要』5 和泉丘陵内遺跡調査会 1989、
『和泉丘陵内遺跡発掘調査報告書5 万町北遺跡1』和泉丘陵内遺跡調査会 1993

坂本寺跡 同紋 石田茂作 『飛鳥時代寺院址の研究』1936 第一書房

軒平瓦2類 犬飼堂廃寺 同範 『岸和田の文化財 写真集(市内出土瓦)』岸和田市教育委員会 1981

信太寺跡 同紋 『信太寺跡発掘調査概要』和泉市教育委員会 1979

(参考文献)

『重要文化財 積川神社本殿修理工事報告書』大阪府教育委員会 1957

『大阪府地名大辞典』27 大阪府 「角川日本地名大事典」編纂委員会 竹内里三編 角川書店 1983

『大阪府の地名』日本歴史地名大系28 平凡社 1986

『和泉名所図会』

竹内理三編 『平安遺文』古文書編 第七巻

井上正雄 『大阪府全志』巻之五 1985

志賀 剛 『式内社の研究』第三巻 雄山閣 1977

『岸和田市史』第2巻 岸和田市史編纂委員会 1987

『岸和田の文化財 写真集(市内出土瓦)』岸和田市教育委員会 1981

付章2 中之社遺跡出土のサヌカイト製遺物の石材産地分析

藁科 哲男

(京都大学原子炉実験所)

はじめに

自然科学的な手法を用いて、石器石材の産地を客観的に、かつ定量的に推定し、古代の交流、交易および文化圏、交易圏を探ると言う目的で、蛍光X線分析法により研究を行っている。当初は手近に入手できるサヌカイトを中心に、分析方法と定量的な産地の判定法との確立を目標として研究したが、サヌカイトで一応の成果を得た後に、同じ方法を黒曜石にも拡張し、本格的に産地推定を行なっている(1、2、3)。サヌカイト、黒曜石などの主成分組成は、原産地ごとに大きな差はみられないが、不純物として含有される微量成分組成には異同があると考えられるため、微量成分を中心に元素分析を行ない、これを産地を特定する指標とした。

蛍光X線分析法は試料を破壊せずに分析することができて、かつ、試料調整が単純、測定の手続きも簡単である。石器のような古代人の日用品で多数の試料を分析しなければ遺跡の正しい性格が分からないという場合にはことさら有利な分析法である。分類の指標とする元素組成を遺物について求め、あらかじめ、各原産地ごとに数十個の原石を分析して求めておいた各原石群の元素組成の平均値、分散などと、遺物のそれを対比して産地を推定する。この際多変量解析の手法を用いて、各産地に帰属される確率を求めて産地を同定する。

大阪府岸和田市に位置する中之社遺跡から出土したサヌカイト製遺物44個について産地分析の結果が得られたので報告する。

サヌカイト原石の分析

サヌカイト両原石の風化面を打ち欠き、新鮮面を出し、塊状の試料を作り、エネルギー分散型蛍光X線分析装置によって元素分析を行なう。分析元素はAl、Si、K、Ca、Ti、Mn、Fe、Rb、Sr、Y、Zr、Nbの12元素をそれぞれ分析した。

塊試料の形状差による分析値への影響を打ち消すために元素量の比を取り、それでもって産地を特定する指標とした。サヌカイトでは、K/Ca、Ti/Ca、Mn/Sr、Fe/Sr、Rb/Sr、Y/Sr、Zr/Sr、Nb/Srをそれぞれ用いる。

サヌカイトの原産地は、西日本に集中してみられ、石材として良質な原石の産地および質は良くないが考古学者の間で使用されたのではないかと話題に上る産地、および玄武岩、ガラス質安山岩など、合わせて32ヶ所の調査を終えている。図1にサヌカイトの原産地の地点を示す。このうち、金山・五色台地域では、その中の多く地点からは良質のサヌカイトおよびガラス質安山岩が多量に産出し、かつそれらは数ヶの群に分かれる。近年、丸亀市の双子山の南嶺から産出するサヌカイト原石で双子山群を確立し、またガラス質安山岩は細石器時代に使用された原材で善通寺市の大麻山南からも産出している。こ

これらの原石を良質の原石を産出する産地および原石産地不明の遺物を元素組成で分類すると69個の原石群に分類でき、その結果を表1に示した。香川県内の石器原材の産地では金山・五色台地域のサヌカイト原石を分類すると、金山西群、金山東群、国分寺群、蓮光寺群、白峰群、法印谷群の6個の群、城山群および双子山群に、またガラス質安山岩は金山奥池・五色台地区産は五色台群の単群に、大麻山南産は大麻山南第一、二群の2群にそれぞれ分類され区別が可能であることを明らかにした。金山・五色台地域産のサヌカイト原石の諸群にほとんど一致する元素組成を示すサヌカイト原石が淡路島の岩屋原産地の堆積層から円礫状で採取される。これら岩屋のものを分類すると、全体の約2/3が表2に示す割合で金山・五色台地域の諸群に一致し、これらが金山・五色台地域から流れ着いたことがわかる。淡路島中部地域の原産地である西路山地区および大崩地区からは、岩屋第一群に一致する原石がそれぞれ92%および88%と群を作らない数個の原石とがみられ、金山・五色台地域の諸群に一致するものはみられなかった。表3に示す和泉・岸和田原産地からも全体の約1%であるが金山東群に一致する原石が採取される。表4に示す和歌山市梅原原産地からは、金山原産地の原石に一致する原石はみられない。仮に、遺物が岩屋、和泉・岸和田原産地などの原石で作られている場合には、産地分析の手続きは複雑になる。その遺跡から10個以上の遺物を分析し、表2、3のそれぞれの群に帰属される頻度分布を求め、確率論による期待値と比較して確認しなければならない。二上山群を作った原石は奈良県北葛城郡当麻町に位置する二上山を中心にした広い地域から採取された。この二上山群と組成の類似する原石は和泉・岸和田の原産地から6%の割合で採取されることから、一遺跡10個以上の遺物を分析し、表3のそれぞれの群に帰属される頻度分布をもとめて、和泉・岸和田原産地の原石が使用されたかどうか判断しなければならない。

結果と考察

遺跡から出土した石器、石片は、風化のためサヌカイト製は表面が白っぽく変色し、新鮮な部分と異なった元素組成になっている可能性が考えられる。このため遺物の測定面の風化した部分に、圧縮空気によってアルミナ粉末を吹きつけ風化層を取り除き新鮮面を出して測定を行なった。一方黒曜石製のものには風化に対して安定で、表面に薄い水和層が形成されているにすぎないため、表面の泥を水洗するだけで完全な非破壊分析が可能であると考えられる。今回分析した遺物の結果を表5に示した。石器の分析結果から石材産地を同定するためには数理統計の手法を用いて原石群との比較をする。説明を簡単にするためK/Caの一変量だけを考えると、分析番号60164番の遺物はK/Caの値が0.280で、二上山群の[平均値]±[標準偏差値]は、 0.288 ± 0.010 であるから、遺物と原石群の差を標準偏差値(σ)を基準にして考えると遺物は原石群から 0.8σ 離れている。ところで二上山原産地から100ヶの原石を採ってきて分析すると、平均値から $\pm 0.8\sigma$ のずれより大きいものが42ヶある。すなわち、この遺物が、二上山群の原石から作られていたと仮定しても、 0.8σ 以上離れる確率は42%であると言える。だから、二上山群の平均値から 0.8σ しか離れていないときには、この遺物が二上山群の原石から作られたものではないとは、到底言い切れない。ところがこの遺物を金山東群と比較すると、金山東群の平均値からの隔たりは、約 17σ である。これを確率の言葉で表現すると、金山東群の原石を採ってきて分析したとき、平均値から 17σ 以上離れている確率は、百兆の千倍分の一であると言える。このように、百兆の千倍個に一個しかないような原石をたまたま採取して、この遺物が作られたとは考えられないから、この遺物

は、金山東群の原石から作られたものではないと断定できる。これらのことを簡単にまとめて言うと、「この遺物は二上山群に42%の確率で帰属され、信頼限界の0.1%を満たしていることから二上山産原石が使用されいると同定され、さらに金山東群に対しては一兆分の1%の低い確率で帰属され、信頼限界の0.1%を満たさないことから金山産原石でないと同定される」。遺物が一ヶ所の産地（二上山産地）と一致したからと言って、例え二上山群と金山東群の原石は成分が異なっている、分析している試料は原石でなく遺物でさらに分析誤差が大きくなる不定形（非破壊分析）であることから、他の産地に一致しないとは言えない、同種岩石の中での分類である以上、他の産地にも一致する可能性は推測される。即ちある産地（二上山群）に一致したと言っても一致した産地の原石とは限らないために、帰属確率による判断を表1の69個すべての原石群について行ない、低い確率で帰属された原石群を消していくことにより、はじめて二上山産地の石材のみが使用されていると判定される。実際はK/Caといった唯一ヶの変量だけでなく、前述した8ヶの変量で取り扱うので変量間の相関を考慮しなければならぬ。例えばA産地のA群で、Ca元素とRb元素との間に相関があり、Caの量を計ればRbの量は分析しなくても分かるようなときは、A群の石材で作られた遺物であれば、A群と比較したとき、Ca量が一致すれば当然Rb量も一致するはずである。したがって、もしRb量が少しずれている場合には、この試料はA群に属していないと言わなければならない。このことを数量的に導き出せるようにしたのが相関を考慮した多変量統計の手法であるマハラノビスの距離を求めて行なうホテリングのT₂検定である。これによって、それぞれの群に帰属する確率を求めて、産地を同定する(4、5)。産地の同定結果は1個の遺物に対して、サヌカイト製では45個の推定確率結果が得られている。今回産地分析を行った遺物の産地推定結果については低い確率で帰属された原産地の推定確率は紙面の都合上『記入』を省略しているのみで、実際に計算しているため、省略産地の可能性が非常に低いことを確認したという重要な意味を含んでいる、すなわち、二上山産原石と判定された遺物について、香川県金山原石とか佐賀県多久産、北海道旭山の原石の可能性を考える必要がない結果で、高い確率で同定された産地のみの結果を表6に記入した。原石群を作った原石試料は直径3 cm以上であるが、多数の試料を処理するために、小さな遺物試料の分析に多くの時間をかけられない事情があり、短時間で測定を打ち切る。このため、得られた遺物の測定値には、大きな誤差範囲が含まれ、ときには、原石群の元素組成のバラツキの範囲を越えて大きくなる。したがって、小さな遺物の産地推定を行なったときに、判定の信頼限界としている0.1%に達しない確率を示す場合が比較的多くみられる。原石産地（確率）の欄にマハラノビスの距離D₂の値で記した遺物については、判定の信頼限界としている0.1%の確率に達しなかった遺物でこのD₂の値が原石群の中で最も小さなD₂値である。この値が小さい程、遺物の元素組成はその原石群の組成と似ているといえるため、推定確率は低いが、そこの原石産地と考えてほぼ間違いないと判断されたものである。中之社遺跡出土の44個のサヌカイト製遺物の各産地別出現頻度は二上山群に28（64%）個、金山東群に7（16%）個で、国分寺群に1（2%）個がそれぞれ同定され、不明が8（18%）個であった。中之社遺跡は和泉・岸和田産地の中にあり、当然地元産の原石の使用が予測される。分析した遺物の中には地元の和泉・岸和田産地で産出する原石がみられるが、遺物の原石産地を特定する作業は複雑になる。和泉・岸和田産地からの原石が使用されると、各産地の原石の出現頻度は表3の様になると推測される。中之社遺跡の遺物の二上山、金山東、法印谷、不明の出現頻度は前述のようになり全く異なった頻度になり、和泉群に一致する遺物が1個も見られないなど和泉・岸和田産の原石は使用されなかった可能性が、使用されても非常に低い確率と推測できる。仮に、金山東群に同定された7個が全て和泉・

岸和田産地から採取される確率は、0.01を7回掛け算を行った約十兆分の一、十兆回に一回の非常に低い確率になり、岩屋産地からでも0.05を7回掛け算を行った約十億分の一の確率である。二上山産に同定された遺物も非常に低い確率となる。不明の5個の遺物で遺物群(表1)を作り、和泉・岸和田産地と梅原産地の原石と一致する原石を探したところ、分析番号60192番(N o. 89)の遺物は、海南市在住の中原正光氏提供原石を加えて総数130個になった梅原地区の原石の中の一個と一致した。物が見あたらなかった。N o. 89が梅原産原石が使用されたと決定すべきであるが、現在、和泉・岸和田産原石の分析個数の倍増を計画しているためより正確な結果が得られるまで決定は保留する。ここで考古学的考察を加えて推測すると、国分寺産原石が原産地の地元遺跡で使用されていないければ、岩屋産地からの可能性が高くなるが、実際には香川県の縄文時代の地元原産地遺跡では、原石採取遺跡の金山原産地の原石が一番頻度高く使用され、次に規模は金山に及ばないが赤子谷ゴロー(剝片集積地)原産地の法印谷、また国分寺、白峰などの原石が使用されている。これら原産地付近の遺跡で使用された各産地原石の頻度と向出遺跡で使用された頻度が定性的に同じようであることから、全て香川県の金山・五色台原産地から伝播したと推測しても産地分析の結果と矛盾しない。遺跡で使用される各産地の使用頻度が高い原産地との交流が活発であったと推測すると、中之社遺跡では奈良県二上山産地との交流が活発で、香川県金山・五色台産地との交流は二上山産地の約四分の一の交流で、香川県坂出地方の文化、生活情報を入手していたと推測しても産地分析の結果と矛盾しない。今回、産地分析の結果が遺跡報告書に出土遺物についての正確な記録として残されることは、考古学上の交流、交易、文化圏などを考察する場合に貴重な資料を提供することになる。

参考文献

- 1) 藁科哲男・東村武信(1975)、蛍光X線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定(II)。考古学と自然科学、8:61-69
- 2) 藁科哲男・東村武信・鎌木義昌(1977)、(1978)、蛍光X線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定③(III)。(IV)。考古学と自然科学、10、11:53-81:33-47
- 3) 藁科哲男・東村武信(1983)、石器原材の産地分析。考古学と自然科学、16:59-89
- 4) 東村武信(1976)、産地推定における統計的手法。考古学と自然科学、9:77-90
- 5) 東村武信(1980)、考古学と物理化学。学生社



図8 サヌカイト及びサヌカイト様岩石の原産地

表1-1 各サヌカイトの原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値

原 原 石 群 名	分 析 個 数	元 素 比									
		K/Ca	Ti/Ca	Mn/Sr	Fe/Sr	Rb/Sr	Y/Sr	Zr/Sr	Nb/Sr	Al/Ca	Si/Ca
北海道	46	0.359±0.020	0.430±0.014	0.081±0.006	5.884±0.223	0.166±0.011	0.120±0.013	0.883±0.030	0.015±0.013	0.013±0.001	0.137±0.007
	80	0.351±0.011	0.288±0.010	0.089±0.005	5.064±0.140	0.174±0.011	0.096±0.009	0.903±0.029	0.015±0.012	0.015±0.001	0.141±0.005
群馬県	43	0.194±0.070	0.360±0.028	0.129±0.014	9.205±1.153	0.080±0.034	0.085±0.014	0.458±0.082	0.009±0.010	0.013±0.021	0.123±0.032
長野県	46	0.274±0.028	0.324±0.010	0.090±0.008	4.905±0.505	0.104±0.009	0.100±0.009	0.581±0.033	0.012±0.009	0.018±0.002	0.168±0.014
神奈川県	40	0.092±0.005	0.285±0.009	0.166±0.009	12.406±0.332	0.023±0.006	0.111±0.008	0.483±0.023	0.005±0.007	0.012±0.001	0.012±0.001
岐阜県	93	1.576±0.055	0.227±0.011	0.038±0.004	0.766±0.025	0.277±0.020	0.031±0.013	0.504±0.024	0.035±0.009	0.052±0.003	0.660±0.025
奈良県	51	0.288±0.010	0.215±0.006	0.071±0.006	4.629±0.270	0.202±0.012	0.066±0.009	0.620±0.022	0.024±0.010	0.019±0.001	0.144±0.005
大阪府	26	0.494±0.023	0.325±0.025	0.056±0.004	4.060±0.148	0.296±0.021	0.065±0.010	0.706±0.025	0.038±0.010	0.023±0.001	0.194±0.009
兵庫県	28	0.616±0.021	0.254±0.012	0.057±0.005	3.610±0.189	0.365±0.019	0.056±0.012	0.846±0.026	0.027±0.017	0.018±0.001	0.186±0.007
	24	0.535±0.020	0.263±0.005	0.053±0.005	3.438±0.103	0.340±0.015	0.042±0.012	1.069±0.030	0.026±0.014	0.017±0.001	0.173±0.008
	22	0.300±0.017	0.154±0.005	0.056±0.007	3.350±0.261	0.130±0.012	0.061±0.033	0.574±0.021	0.012±0.007	0.018±0.001	0.159±0.008
香川県	28	0.457±0.011	0.251±0.007	0.053±0.005	3.574±0.122	0.311±0.019	0.043±0.016	0.970±0.033	0.038±0.015	0.015±0.001	0.149±0.005
	18	0.459±0.012	0.249±0.008	0.053±0.005	3.518±0.129	0.308±0.019	0.043±0.015	0.972±0.037	0.034±0.009	0.016±0.001	0.150±0.004
	51	0.534±0.015	0.262±0.005	0.053±0.005	3.376±0.108	0.340±0.014	0.040±0.016	1.071±0.051	0.032±0.011	0.017±0.001	0.173±0.007
	25	0.397±0.009	0.239±0.004	0.069±0.005	4.619±0.127	0.277±0.012	0.059±0.011	1.145±0.029	0.031±0.013	0.015±0.001	0.130±0.004
	24	0.488±0.012	0.222±0.004	0.079±0.005	4.617±0.126	0.316±0.017	0.057±0.011	1.186±0.033	0.020±0.015	0.017±0.001	0.155±0.005
鳥取県	19	0.406±0.009	0.216±0.005	0.082±0.005	4.808±0.125	0.292±0.017	0.064±0.011	1.059±0.025	0.020±0.011	0.015±0.001	0.133±0.006
	63	0.402±0.011	0.216±0.006	0.079±0.006	4.741±0.138	0.289±0.014	0.068±0.016	1.065±0.026	0.021±0.014	0.013±0.001	0.116±0.003
	54	0.350±0.007	0.233±0.005	0.074±0.006	4.898±0.169	0.261±0.012	0.061±0.014	1.093±0.035	0.023±0.016	0.011±0.002	0.105±0.004
	63	0.869±0.048	0.120±0.006	0.023±0.005	2.294±0.114	0.484±0.026	0.006±0.011	0.705±0.044	0.043±0.011	0.039±0.003	0.459±0.028
	39	0.705±0.069	0.146±0.008	0.040±0.008	2.837±0.189	0.473±0.050	0.023±0.015	0.941±0.052	0.028±0.021	0.020±0.002	0.251±0.024
広島県	29	0.323±0.019	0.363±0.031	0.019±0.001	1.607±0.060	0.059±0.009	0.003±0.005	0.399±0.043	0.025±0.009	0.021±0.001	0.171±0.006
	25	1.116±0.061	0.472±0.022	0.037±0.005	2.228±0.080	0.245±0.011	0.023±0.009	0.524±0.014	0.246±0.013	0.038±0.003	0.391±0.021

表 1-2 各ヌヌカイトの原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値

原 産 地	産 石 群 名	分析 個数	K/Ca	Ti/Ca	Mn/Sr	元 Fe/Sr	素 Rb/Sr	比 Y/Sr	Zr/Sr	Nb/Sr	Al/Ca	Si/Ca	
福岡県	昭和池第一	50	1.825±0.041	0.644±0.024	0.053±0.007	2.125±0.063	0.453±0.019	0.107±0.017	1.477±0.049	0.044±0.022	0.050±0.003	0.500±0.012	
	" 第二	50	1.592±0.066	0.609±0.020	0.061±0.005	3.075±0.123	0.534±0.039	0.111±0.020	1.671±0.134	0.049±0.012	0.042±0.003	0.419±0.014	
	" 第三	50	3.144±0.069	0.724±0.036	0.073±0.009	2.919±0.099	0.925±0.048	0.181±0.026	2.820±0.114	0.072±0.020	0.074±0.026	0.817±0.040	
	" 第四	50	1.922±0.108	0.681±0.050	0.064±0.005	3.023±0.103	0.607±0.033	0.122±0.017	1.887±0.098	0.050±0.015	0.050±0.004	0.499±0.018	
佐賀県	多 久第一	53	0.831±0.047	0.404±0.013	0.056±0.007	4.718±0.225	0.510±0.037	0.062±0.019	0.850±0.033	0.222±0.018	0.016±0.003	0.201±0.011	
	" 第二	23	0.834±0.055	0.396±0.016	0.065±0.010	5.342±0.317	0.566±0.047	0.081±0.028	0.866±0.046	0.242±0.023	0.016±0.005	0.202±0.014	
	" 第三	8	1.097±0.232	0.350±0.028	0.065±0.014	4.498±0.903	0.701±0.084	0.084±0.025	0.828±0.052	0.239±0.019	0.021±0.003	0.263±0.046	
	梅 老 野	42	1.287±0.051	0.340±0.013	0.058±0.010	3.643±0.225	0.784±0.030	0.081±0.022	0.824±0.033	0.265±0.032	0.038±0.009	0.458±0.050	
	寺 山 山	62	0.705±0.034	0.314±0.011	0.067±0.009	5.323±0.244	0.543±0.036	0.075±0.021	0.691±0.034	0.208±0.023	0.014±0.002	0.174±0.007	
	西 有 田	30	0.629±0.043	0.310±0.010	0.070±0.008	5.600±0.323	0.489±0.029	0.066±0.017	0.644±0.032	0.192±0.018	0.013±0.001	0.157±0.010	
	松 尾 尾	17	0.453±0.019	0.331±0.005	0.098±0.010	7.489±0.249	0.307±0.024	0.081±0.015	0.568±0.023	0.106±0.010	0.023±0.002	0.237±0.016	
	松 尾 尾	47	0.717±0.036	0.410±0.012	0.081±0.006	5.312±0.241	0.431±0.021	0.077±0.016	0.810±0.039	0.095±0.023	0.028±0.027	0.291±0.014	
	椎 葉 第一	40	0.970±0.032	0.330±0.009	0.066±0.007	3.683±0.122	0.383±0.024	0.094±0.013	0.810±0.039	0.110±0.021	0.034±0.003	0.377±0.012	
	" 第二	42	0.822±0.027	0.369±0.010	0.065±0.007	3.888±0.236	0.392±0.021	0.076±0.018	0.540±0.049	0.089±0.020	0.027±0.009	0.330±0.013	
	" 第三	41	0.675±0.016	0.390±0.010	0.073±0.007	4.666±0.218	0.346±0.021	0.078±0.012	0.582±0.065	0.087±0.013	0.024±0.007	0.280±0.011	
	" 第四	12	0.538±0.011	0.401±0.007	0.076±0.010	5.271±0.189	0.296±0.019	0.075±0.015	0.587±0.024	0.075±0.009	0.022±0.002	0.227±0.009	
	"	37	0.744±0.014	0.409±0.010	0.080±0.010	5.176±0.202	0.399±0.020	0.092±0.015	0.807±0.027	0.096±0.023	0.029±0.003	0.302±0.010	
	長崎県	大 申	28	1.111±0.118	0.140±0.009	0.055±0.020	1.650±0.236	0.236±0.043	0.041±0.027	0.486±0.038	0.082±0.022	0.050±0.006	0.607±0.059
		亀 岳	19	1.072±0.042	0.144±0.008	0.041±0.006	1.776±0.152	0.233±0.014	0.015±0.013	0.497±0.018	0.065±0.015	0.049±0.003	0.587±0.018
		牟 田 第一	30	0.784±0.092	0.345±0.026	0.069±0.008	4.561±0.236	0.875±0.132	0.220±0.028	0.727±0.053	0.299±0.039	0.015±0.003	0.188±0.021
		" 第二	13	0.594±0.048	0.328±0.013	0.088±0.010	7.759±0.411	1.114±0.104	0.348±0.031	0.989±0.071	0.496±0.041	0.012±0.001	0.144±0.010
川 棚 第一		59	0.498±0.030	0.302±0.011	0.067±0.005	4.225±0.181	0.220±0.018	0.076±0.010	0.814±0.048	0.035±0.012	0.012±0.002	0.133±0.008	
" 第二		9	0.406±0.048	0.265±0.027	0.071±0.004	4.854±0.374	0.203±0.029	0.081±0.012	0.714±0.048	0.034±0.017	0.011±0.001	0.109±0.011	
福 井 第一		15	0.630±0.012	0.329±0.005	0.090±0.011	7.531±0.315	1.211±0.040	0.365±0.035	1.028±0.047	0.534±0.033	0.013±0.001	0.154±0.003	
" 第二		25	0.512±0.014	0.317±0.008	0.084±0.011	7.157±0.312	0.941±0.037	0.301±0.027	0.874±0.043	0.431±0.033	0.011±0.002	0.126±0.004	
崎 針 尾 第一		68	0.382±0.026	0.252±0.023	0.052±0.006	4.106±0.227	0.160±0.018	0.057±0.009	0.434±0.039	0.056±0.011	0.010±0.001	0.107±0.007	
" 第二		14	0.599±0.115	0.373±0.045	0.073±0.014	5.167±0.749	0.320±0.058	0.077±0.016	0.650±0.084	0.086±0.027	0.015±0.002	0.163±0.031	
駒 崎 鼻		42	0.642±0.071	0.310±0.010	0.070±0.008	5.529±0.354	0.498±0.051	0.081±0.015	0.656±0.039	0.200±0.028	0.022±0.006	0.246±0.023	
熊本県		阿 蘇 第一	15	2.006±0.258	0.646±0.052	0.064±0.011	2.085±0.320	0.481±0.068	0.106±0.028	1.647±0.197	0.063±0.012	0.057±0.010	0.597±0.099
		" 第二	14	0.993±0.198	0.514±0.070	0.061±0.008	3.087±0.441	0.299±0.066	0.064±0.013	1.043±0.182	0.038±0.013	0.032±0.005	0.293±0.041
		菊 池	42	0.678±0.057	0.458±0.020	0.062±0.005	3.457±0.206	0.194±0.018	0.072±0.009	0.728±0.054	0.025±0.010	0.019±0.002	0.185±0.015
		JG-1 ^{a)}	56	1.327±0.021	0.266±0.006	0.058±0.006	2.817±0.074	0.756±0.015	0.183±0.024	0.762±0.033	0.078±0.014	0.036±0.003	0.448±0.011

平均値±標準偏差値、* : ガラス質安山岩 a) : Ando, A., Kurasawa, H., Ohmori, T. & Takeda, E. (1974). 1974 compilation of data on the GSI geochemical reference samples JG-1 granodiorite and JB-1 basalt. Geochemical Journal Vol. 8 175-192.

表 1 - 3 原石産地不明の組成のいた遺物で作られた遺物群の元素比の平均値と標準偏差値

遺跡名	遺物群名	分析個数	元素比										
			K/Ca	Ti/Ca	Mn/Sr	Fe/Sr	Rb/Sr	Y/Sr	Zr/Sr	Nb/Sr	Al/Ca	Si/Ca	
北海道	頭無川遺物群	35	0.352±0.029	0.291±0.021	0.094±0.012	5.376±0.721	0.170±0.015	0.103±0.016	0.874±0.101	0.018±0.011	0.017±0.021	0.156±0.090	
石川県	酒見遺物群	39	0.476±0.016	0.596±0.012	0.097±0.053	5.229±0.168	0.160±0.010	0.110±0.015	1.282±0.033	0.031±0.008	0.025±0.017	0.228±0.075	
大阪府	向出No. 6群	30	0.236±0.003	0.189±0.003	0.075±0.005	4.966±0.089	0.194±0.010	0.063±0.011	0.588±0.019	0.010±0.011	0.015±0.001	0.127±0.002	
	向出No. 49群	30	0.310±0.003	0.203±0.003	0.052±0.004	3.734±0.074	0.228±0.016	0.059±0.010	0.610±0.021	0.011±0.012	0.017±0.001	0.147±0.002	
	中社No. 62群	30	0.333±0.003	0.229±0.003	0.066±0.004	4.363±0.080	0.212±0.014	0.066±0.011	0.618±0.019	0.010±0.011	0.017±0.001	0.142±0.002	
	中社No. 82群	30	0.340±0.003	0.226±0.003	0.065±0.005	4.305±0.085	0.208±0.010	0.069±0.009	0.628±0.015	0.010±0.010	0.016±0.001	0.136±0.002	
	中社No. 86群	30	2.638±0.057	0.949±0.026	0.025±0.008	4.536±0.105	0.624±0.019	0.139±0.027	1.425±0.050	0.059±0.019	0.097±0.033	1.903±0.055	
	中社No. 89群	30	0.600±0.005	0.287±0.004	0.046±0.004	3.077±0.060	0.363±0.014	0.048±0.012	1.088±0.022	0.022±0.016	0.028±0.002	0.256±0.004	
香川県	中社No. 104群	30	0.133±0.002	0.117±0.002	0.095±0.006	6.365±0.098	0.112±0.007	0.044±0.010	0.328±0.020	0.009±0.009	0.011±0.001	0.102±0.002	
	六ツ目遺物群	30	0.307±0.004	0.258±0.005	0.067±0.005	4.736±0.096	0.235±0.010	0.058±0.014	0.840±0.023	0.030±0.013	0.016±0.005	0.133±0.004	

注：向出遺跡、中ノ社遺跡、六ツ目遺跡の遺物群は1個を30回測定した結果。

表2 岩屋原産地からのサヌカイト原石66個の分類結果

原石群名	個数	百分率	他原産地および他原石群との関係
岩屋第一群	20個	30%	淡路島、岸和田、和歌山に出現
第二群	22	33	白峰群に一致
第三群	6	9	法印谷群に一致
〃	5	8	国分寺群に一致
〃	4	6	蓮光寺群に一致
〃	3	5	金山東群に一致
〃	2	3	和泉群に一致
〃	4	6	不明（どこの原石群にも属さない）

表3 和泉・岸和田原産地からのサヌカイト原石72個の分類結果

原石群名	個数	百分率	他原産地および他原石群との関係
岩屋第一群	12個	17%	淡路島、岸和田、和歌山に出現
和泉群	9	13	〃、〃、〃
岩屋第二群	6	8	白峰群に一致
	4	6	二上山群に一致
	1	1	法印谷群に一致
	1	1	金山東群に一致
	39	54	不明（どこの原石群にも属さない）

表4 和歌山市梅原原産地からのサヌカイト原石21個の分類結果

原石群名	個数	百分率	他原産地および他原石群との関係
和泉群	10個	48%	淡路島、岸和田、和歌山に出現
岩屋第一群	1	5	〃、〃、〃
岩屋第二群	10	48	不明（どこの原石群にも属さない）

表5 中之社遺跡出土サヌカイト製遺物の元素比分析結果

分析 番号	元 素 比									
	K/Ca	Ti/Ca	Mn/Sr	Fe/Sr	Rb/Sr	Y/Sr	Zr/Sr	Nb/Sr	Al/Ca	Si/Ca
60164	0.280	0.225	0.078	4.508	0.206	0.054	0.605	0.041	0.019	0.149
60165	0.346	0.230	0.061	4.321	0.199	0.079	0.636	0.000	0.015	0.132
60166	0.276	0.222	0.065	4.387	0.204	0.045	0.600	0.015	0.013	0.127
60167	0.282	0.232	0.061	4.361	0.191	0.063	0.622	0.039	0.016	0.141
60168	0.283	0.228	0.068	4.175	0.210	0.077	0.599	0.000	0.017	0.141
60169	0.443	0.223	0.082	4.787	0.321	0.078	1.168	0.034	0.022	0.197
60170	0.284	0.231	0.063	4.339	0.197	0.061	0.625	0.030	0.014	0.145
60171	0.436	0.216	0.084	4.592	0.323	0.067	1.173	0.000	0.023	0.190
60172	0.449	0.231	0.079	4.665	0.315	0.056	1.192	0.015	0.023	0.196
60173	0.458	0.222	0.081	4.559	0.322	0.080	1.175	0.000	0.027	0.198
60174	0.435	0.253	0.053	3.637	0.305	0.056	0.969	0.025	0.021	0.194
60175	0.449	0.227	0.078	4.519	0.313	0.058	1.154	0.029	0.026	0.193
60176	0.269	0.230	0.054	4.431	0.212	0.054	0.628	0.009	0.015	0.138
60177	0.275	0.229	0.066	4.296	0.202	0.061	0.625	0.000	0.014	0.132
60178	0.279	0.229	0.059	4.538	0.208	0.054	0.644	0.025	0.016	0.145
60179	0.283	0.239	0.064	4.264	0.203	0.069	0.596	0.016	0.014	0.127
60180	0.275	0.233	0.077	4.520	0.214	0.085	0.601	0.000	0.017	0.140
60181	0.277	0.224	0.071	4.513	0.215	0.062	0.643	0.000	0.017	0.141
60182	0.282	0.224	0.061	4.422	0.204	0.057	0.627	0.000	0.018	0.145
60183	0.277	0.224	0.070	4.154	0.230	0.054	0.592	0.000	0.018	0.140
60184	0.278	0.228	0.070	4.314	0.202	0.075	0.667	0.000	0.017	0.144
60185	0.342	0.226	0.068	4.333	0.203	0.067	0.646	0.000	0.015	0.141
60186	0.277	0.231	0.062	4.508	0.198	0.073	0.650	0.000	0.018	0.145
60187	0.129	0.110	0.089	6.445	0.110	0.047	0.335	0.000	0.009	0.097
60188	5.787	2.375	0.015	5.037	0.527	0.150	1.634	0.046	0.306	5.453
60189	2.667	0.959	0.018	4.568	0.626	0.137	1.401	0.035	0.115	1.906
60190	0.284	0.231	0.062	4.330	0.203	0.081	0.609	0.040	0.018	0.144
60191	0.279	0.234	0.070	4.225	0.201	0.077	0.579	0.018	0.000	0.128
60192	0.590	0.279	0.049	3.117	0.367	0.073	1.129	0.000	0.028	0.254
60193	0.284	0.231	0.061	4.388	0.212	0.064	0.651	0.000	0.018	0.137
60194	0.287	0.229	0.066	4.083	0.200	0.039	0.620	0.022	0.020	0.143
60195	0.432	0.217	0.089	4.677	0.319	0.040	1.153	0.024	0.021	0.173
60196	0.278	0.232	0.069	4.312	0.199	0.082	0.627	0.014	0.015	0.139
60197	0.283	0.232	0.065	4.488	0.207	0.073	0.606	0.018	0.017	0.141
60198	0.278	0.228	0.065	4.519	0.207	0.089	0.589	0.038	0.019	0.146
60199	0.277	0.231	0.070	4.349	0.211	0.065	0.633	0.000	0.017	0.142
60200	0.278	0.229	0.060	4.293	0.209	0.064	0.608	0.022	0.015	0.139
60201	0.299	0.230	0.069	4.547	0.215	0.064	0.617	0.027	0.017	0.145
60202	0.281	0.233	0.066	4.377	0.201	0.073	0.636	0.000	0.018	0.137
60203	0.279	0.223	0.068	4.473	0.204	0.070	0.657	0.000	0.018	0.134
60205	0.445	0.222	0.088	4.542	0.328	0.070	1.164	0.000	0.027	0.195
60206	0.138	0.117	0.086	6.440	0.107	0.047	0.307	0.021	0.011	0.104
60207	0.132	0.116	0.098	6.565	0.118	0.042	0.333	0.015	0.010	0.104
60208	0.285	0.230	0.063	4.184	0.198	0.074	0.587	0.000	0.017	0.141
JG-1	1.340	0.300	0.054	2.637	0.750	0.187	0.716	0.053	0.041	0.463

JG-1 : 標準試料-Ando, A., Kurasawa, H., Ohmori, T. & Takeda, E. 1974 compilation of data on the GJS geochemical reference samples JG-1 granodiorite and JB-1 basalt. *Geochemical Journal*, Vol.8 175-192 (1974)

写 真 图 版

図版1 宮の後遺跡 全景





1区 全景 (東から)



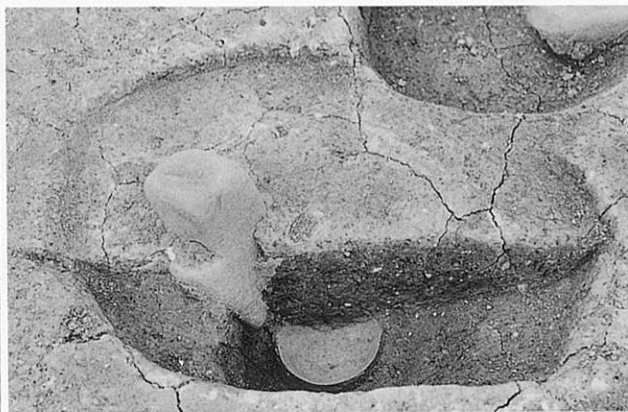
溝1 遺物出土状況



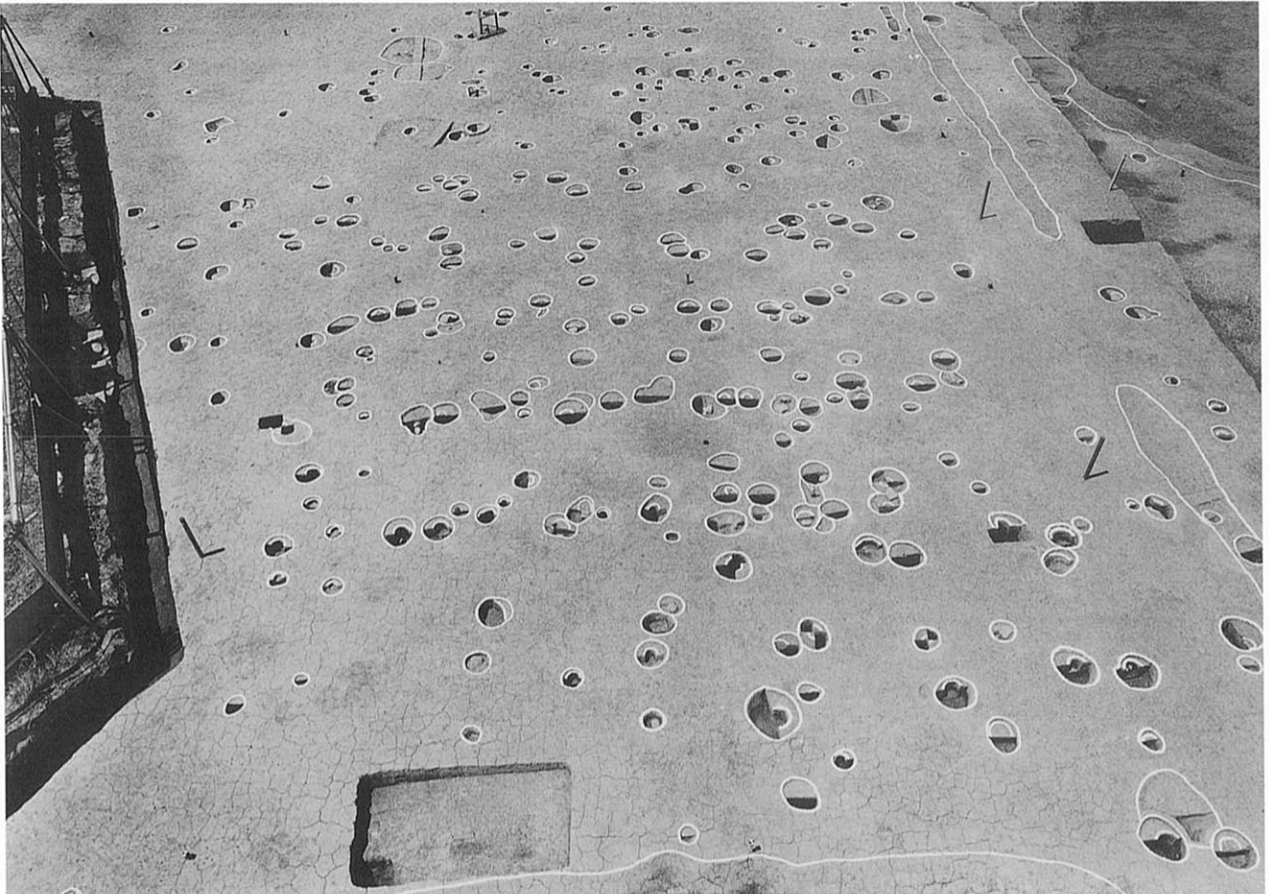
溝1 断面 (西から)



2区 ピット176 遺物出土状況



2区 ピット72 遺物出土状況



2区 全景 (東から)



ピット 120 遺物出土状況



ピット 414 遺物出土状況



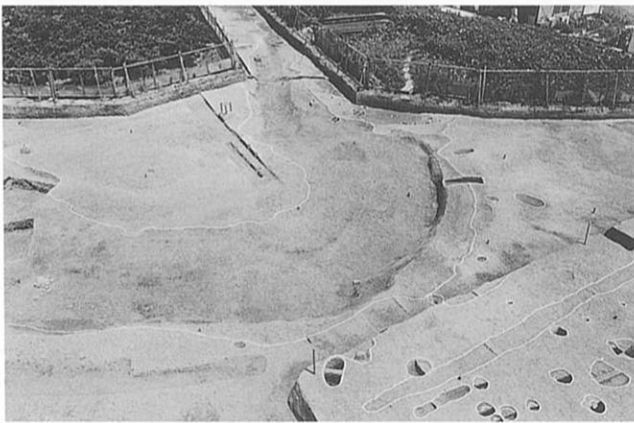
ピット 189 遺物出土状況



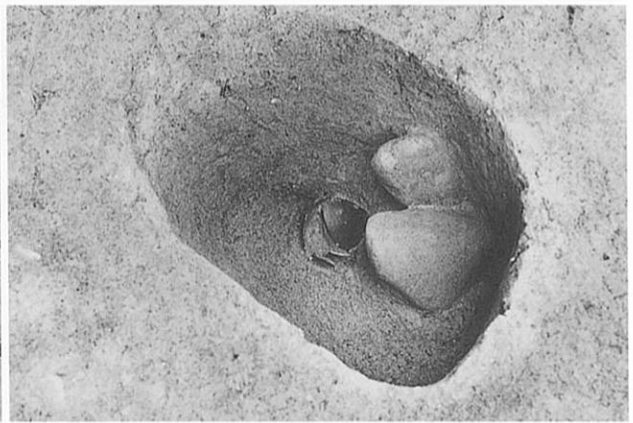
ピット 189 遺物出土状況



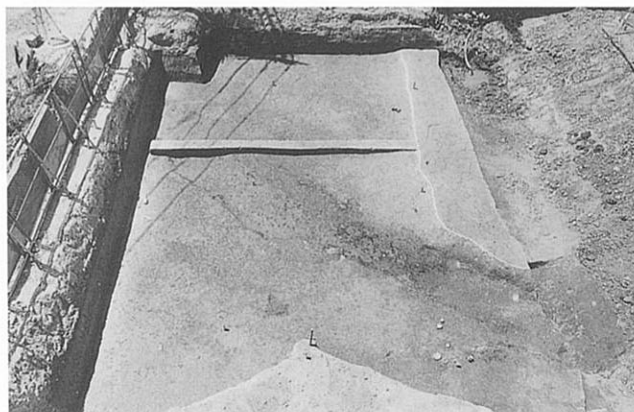
3区 全景 (北から)



3区 中央部 (西から)



3区 ビット 377 遺物出土状況



5区 全景 (東から)



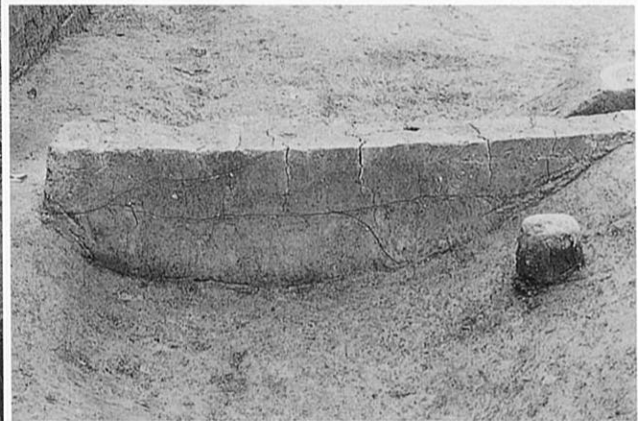
5区 溝 1 遺物出土状況



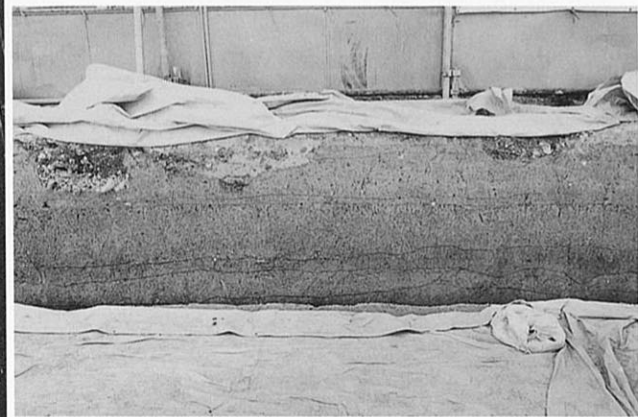
1区 基盤層上面



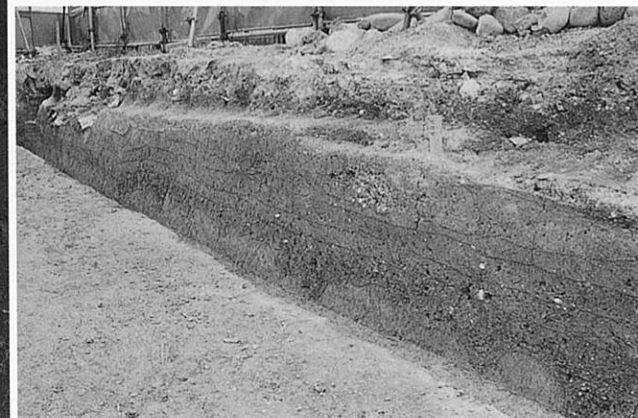
1区 南北断面（東から）



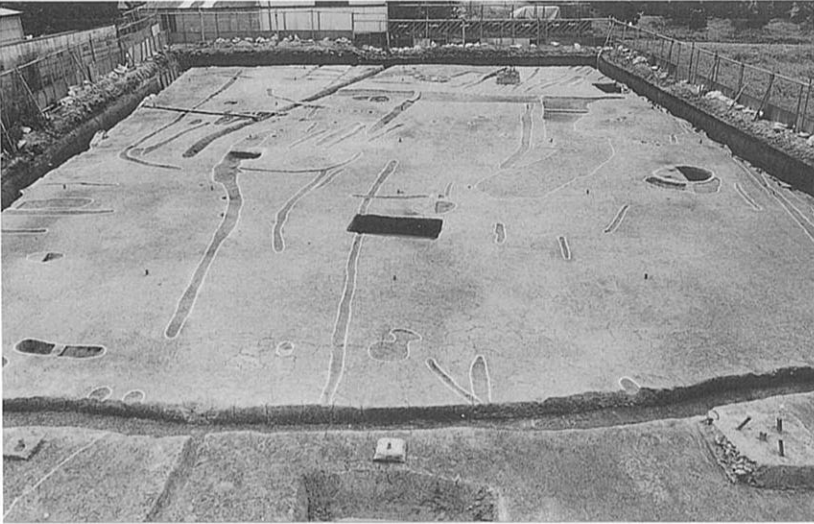
3区 土抗3-262断面（南から）



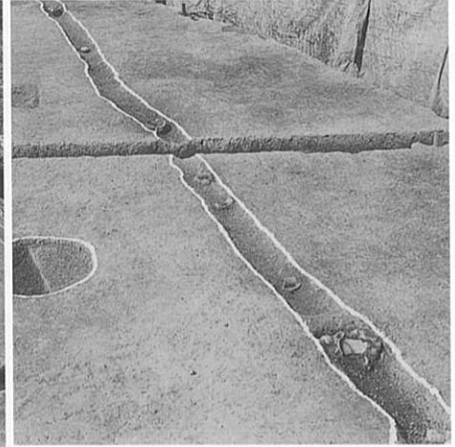
3区 南北断面（南から）



3区 東西断面（北から）



2区 3層上面(北から)



溝2-1 遺物出土状況



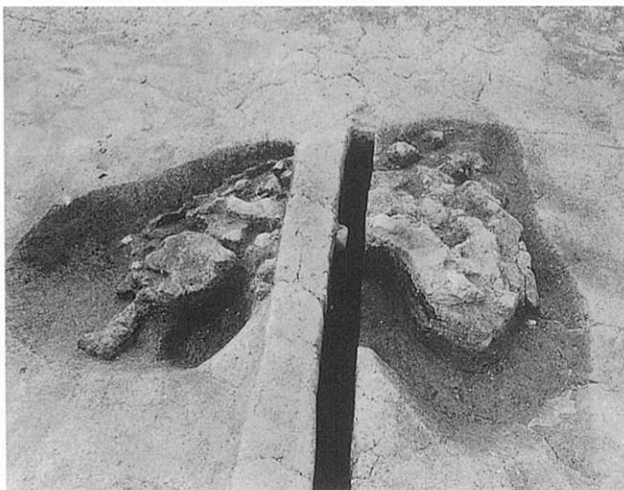
土抗2-310, 2-50 遺物出土状況



土抗2-34 遺物出土状況



土抗2-55 遺物出土状況



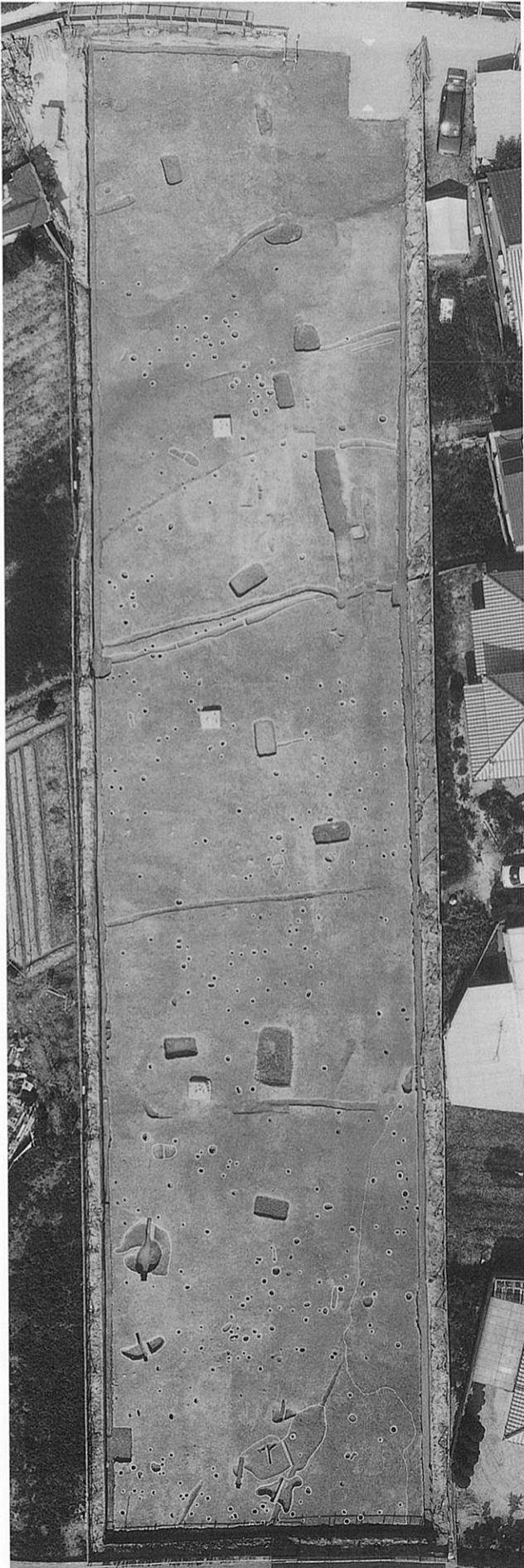
土抗2-55 検出状況



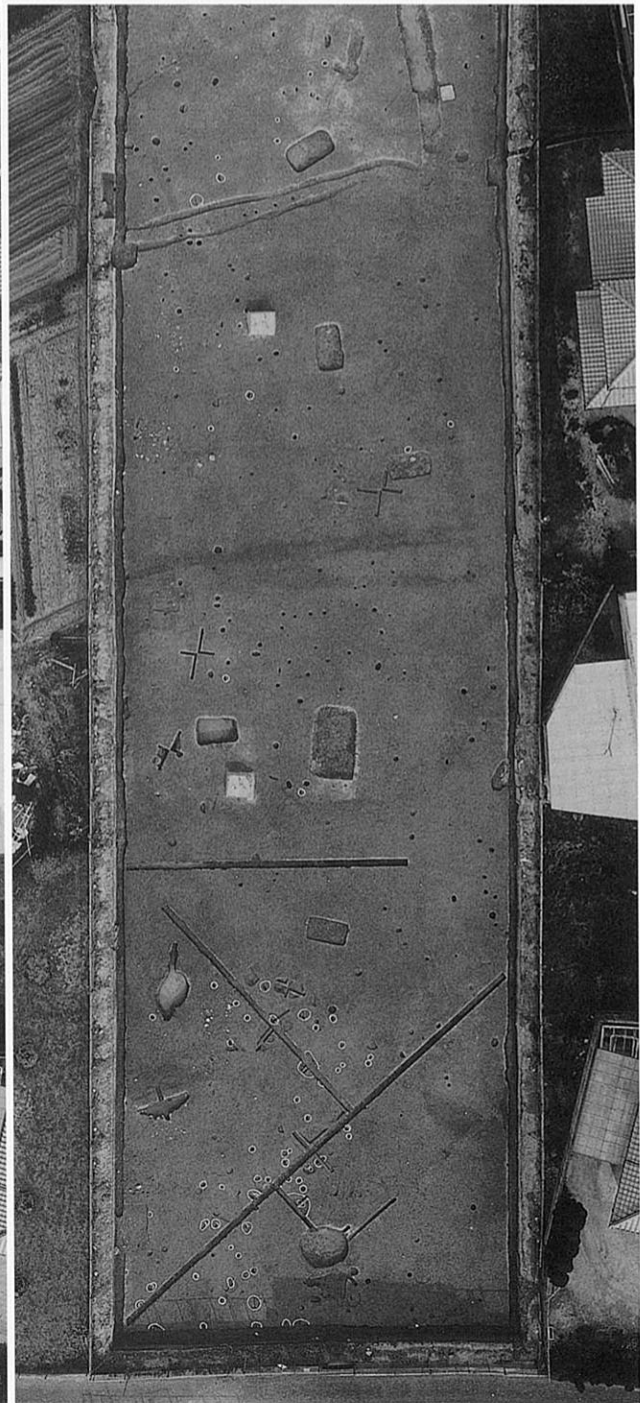
土抗2-55 断面(西から)



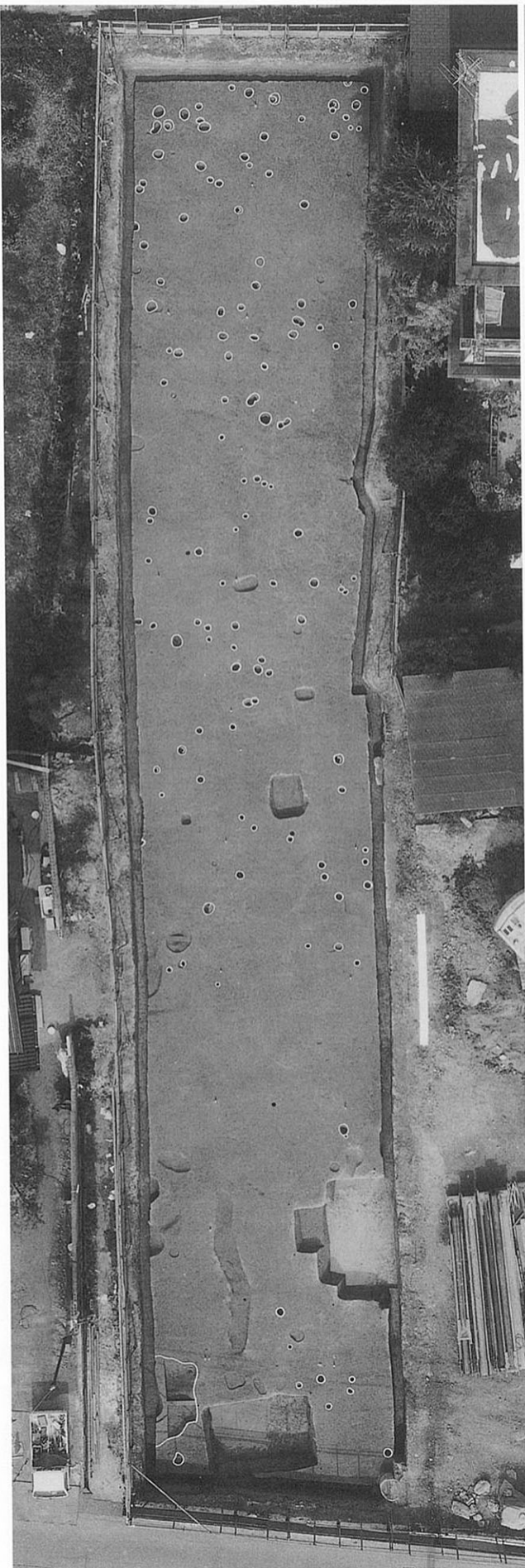
土抗 2-224 遺物出土状況



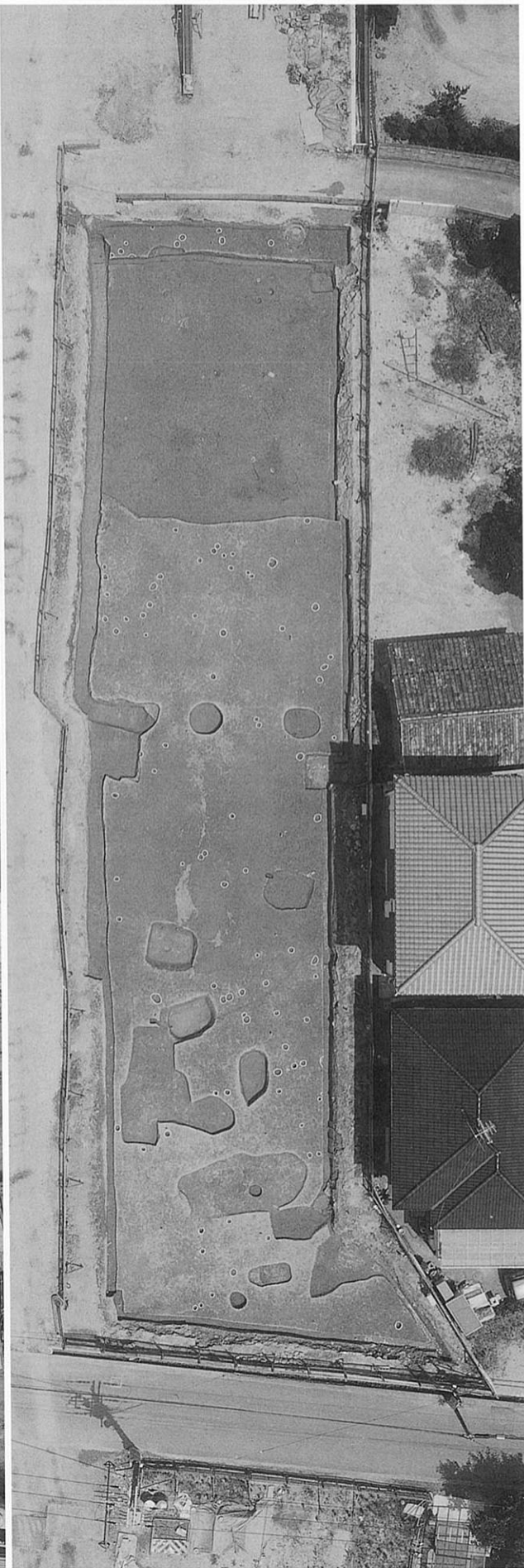
4層 上面



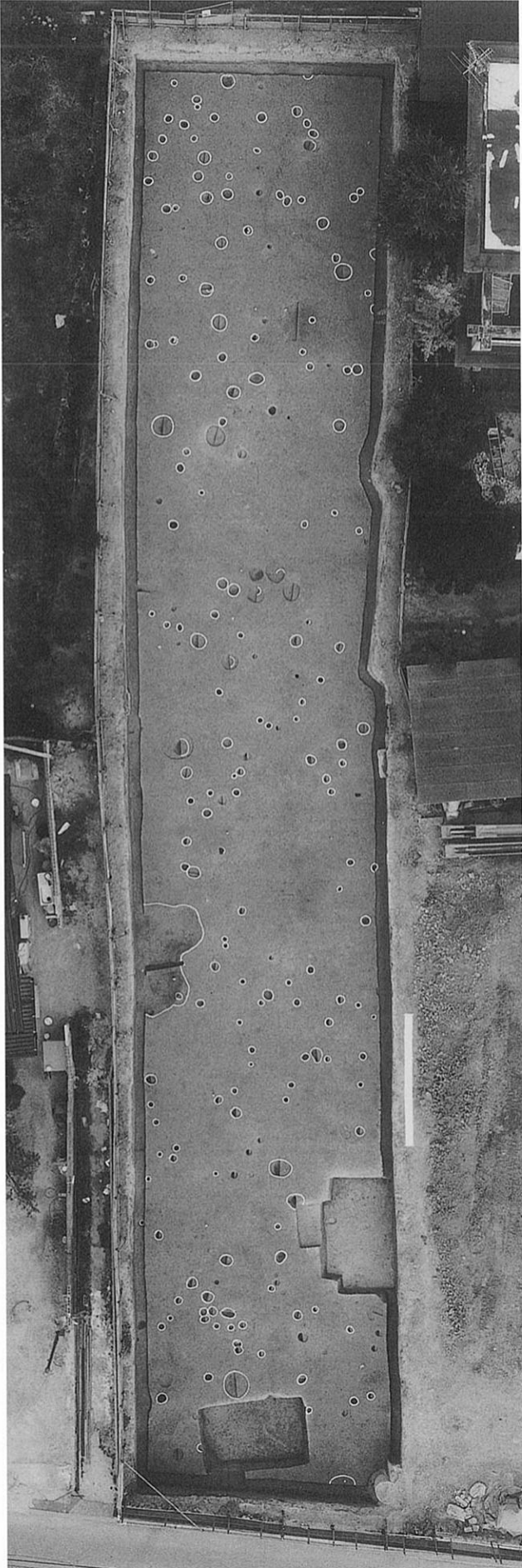
基盤層上面



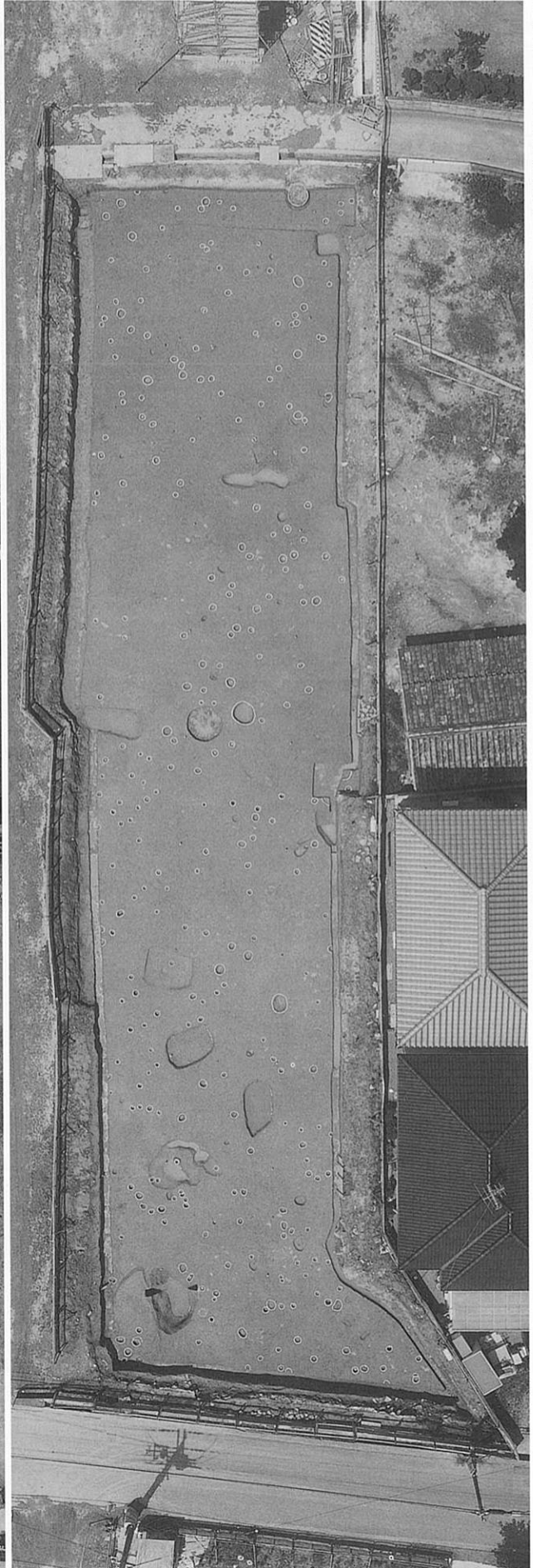
3区 4層上面



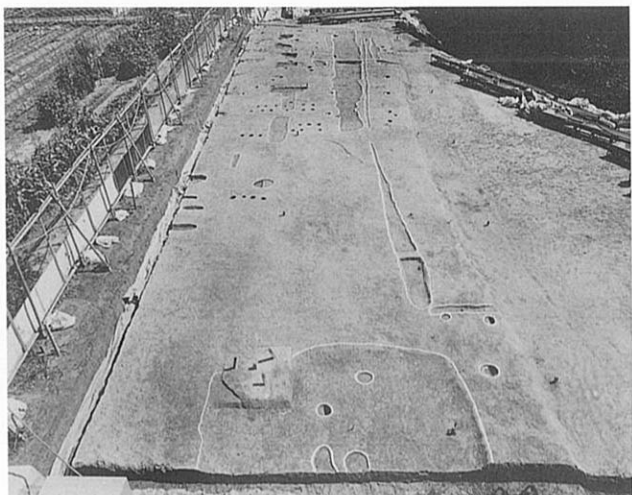
3区(3-2) 4層上面



3区 基盤層上面



3区(3-2) 基盤層上面



4-1区 4層上面



ピット4-1-116 遺物出土状況



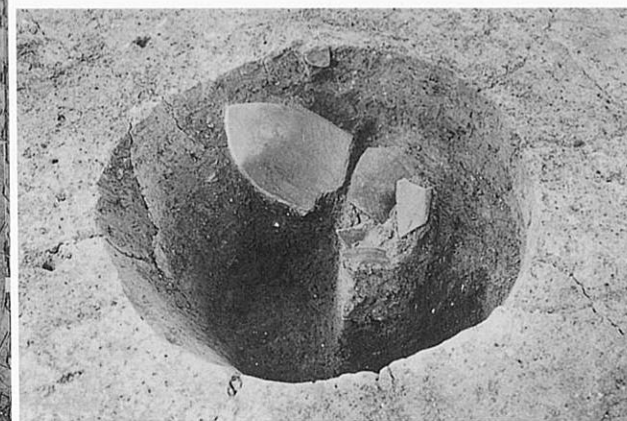
4層上面



ピット4-1-13 遺物出土状況



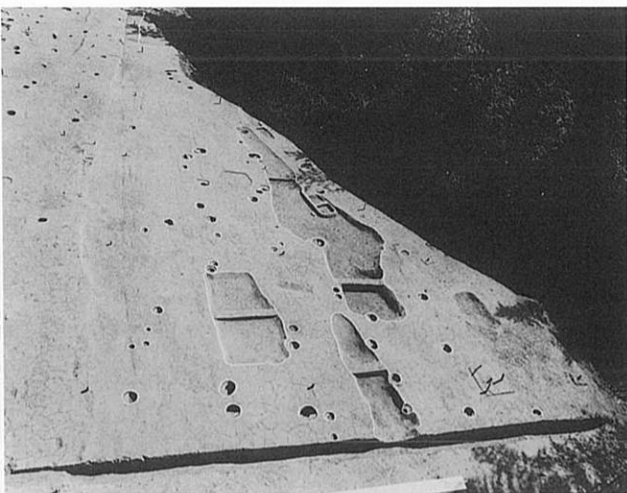
4-2区 4層上面



ピット4-2-27 遺物出土状況



4、基盤層上面



4-1区 4、基盤層上面



ピット 4-1-120

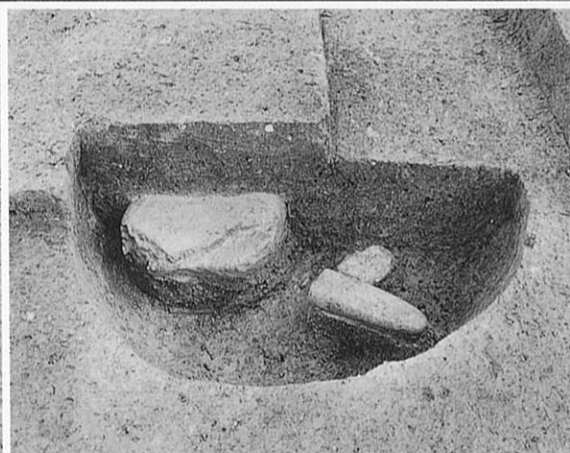
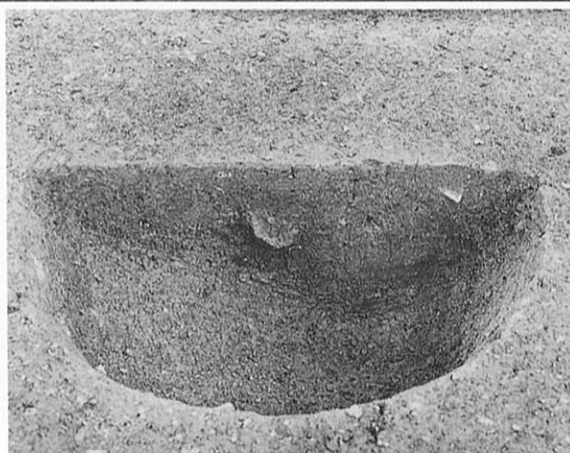
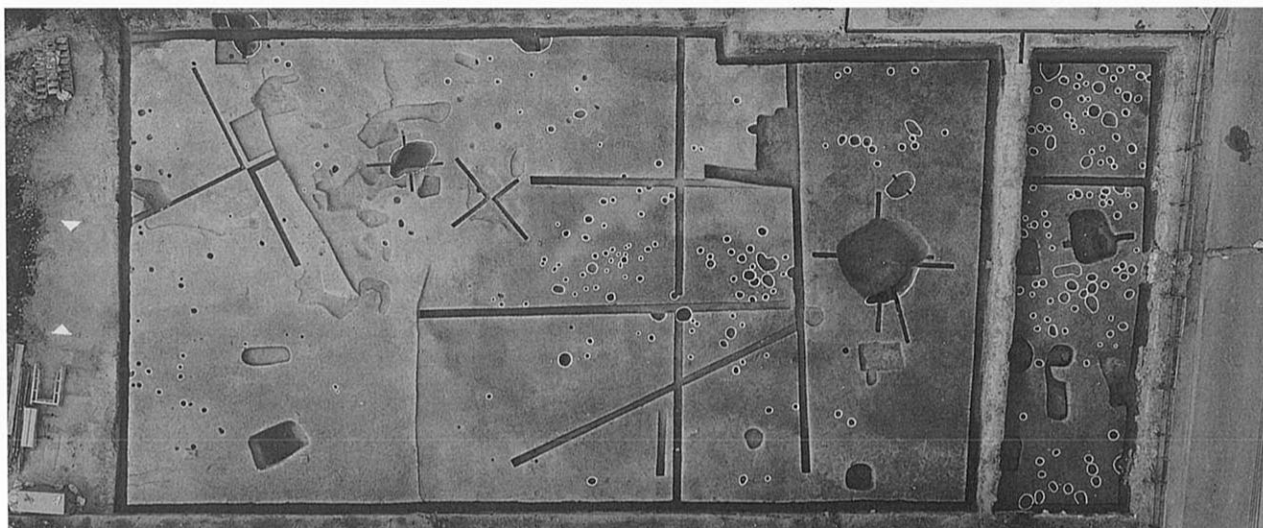


ピット 4-1-100

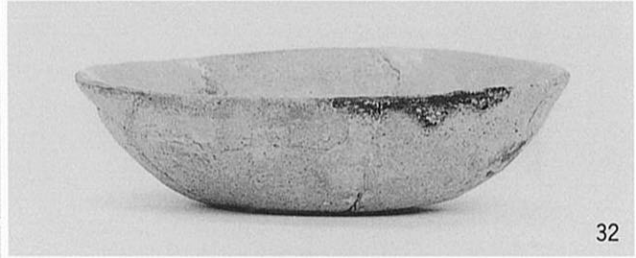
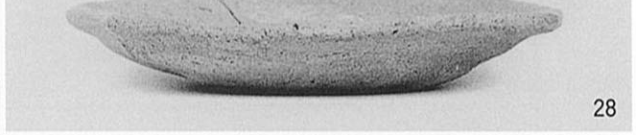
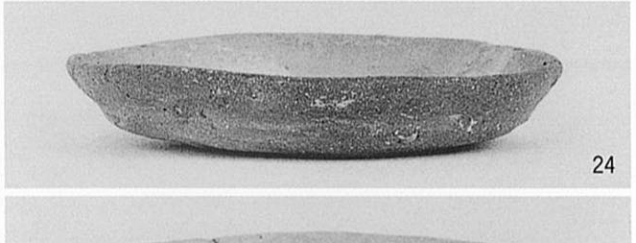
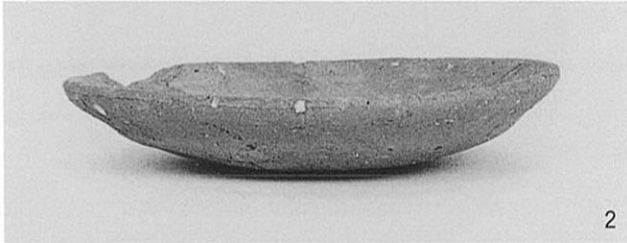
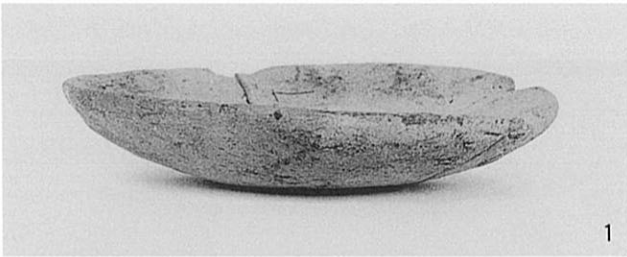


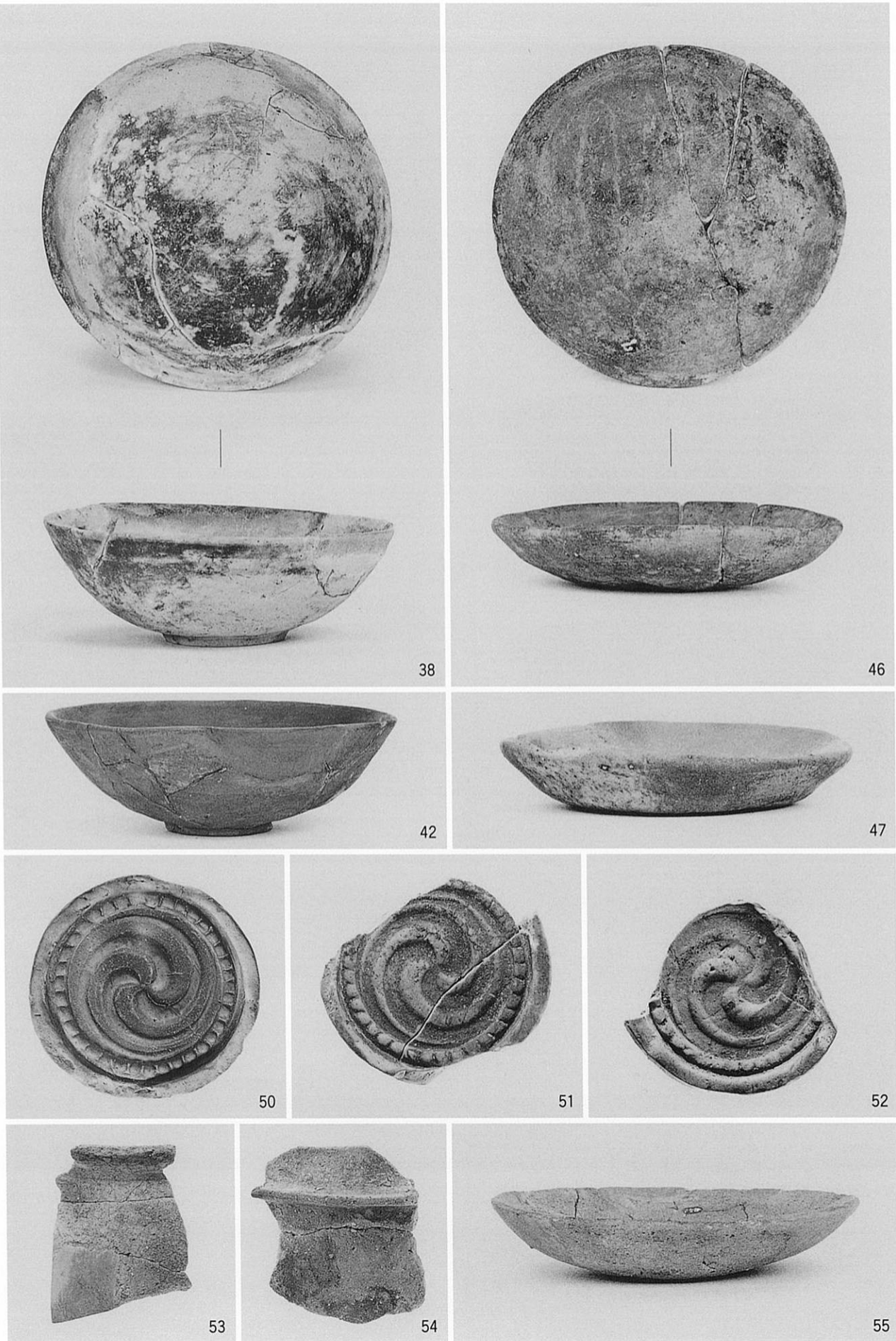
流路 断面 (西から)

図版12 中之社遺跡 4区遺構(2)

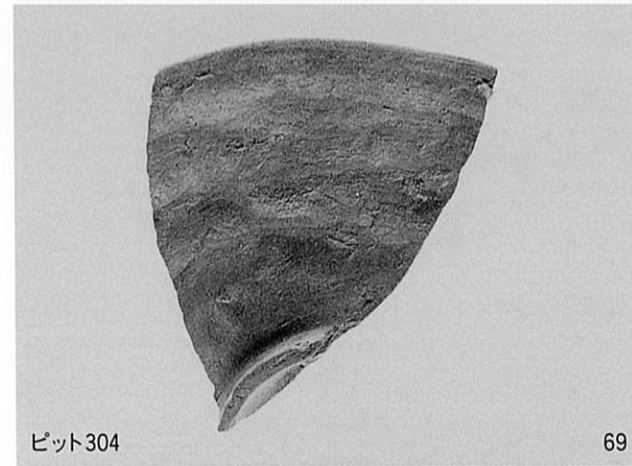
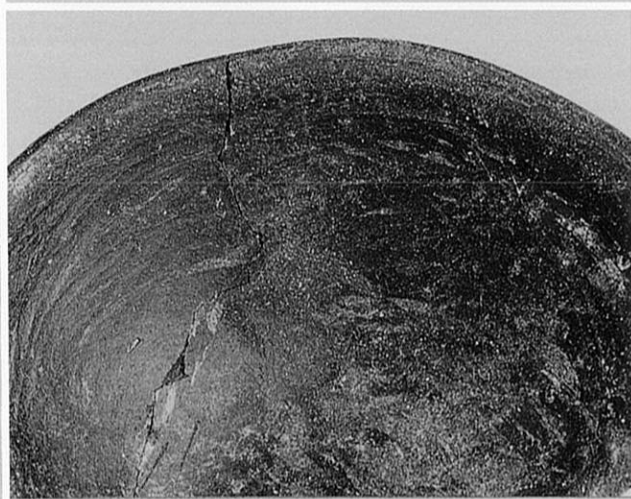
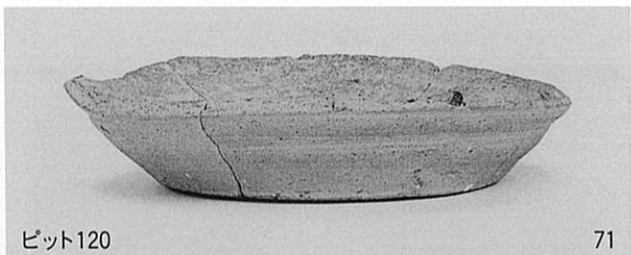
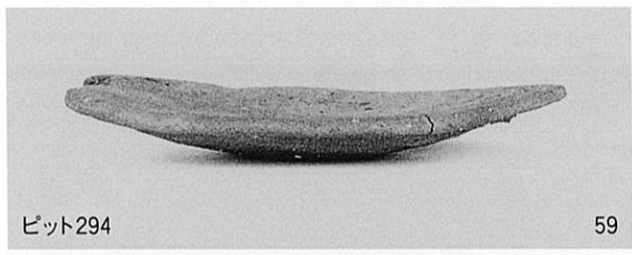


上：4-2区基盤層上面，中左：土抗4-2-196，中右，下：土抗4-2-195

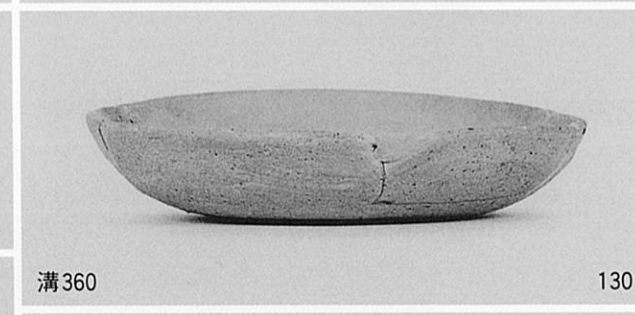
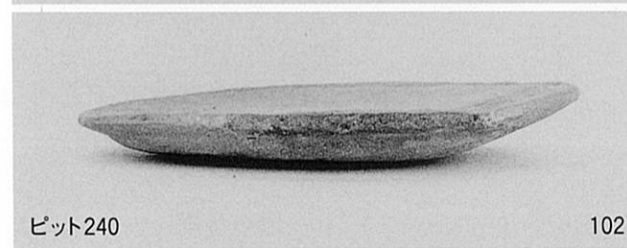
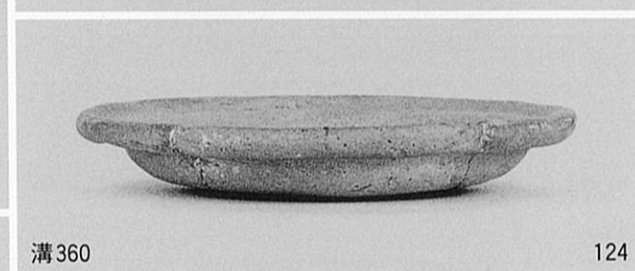
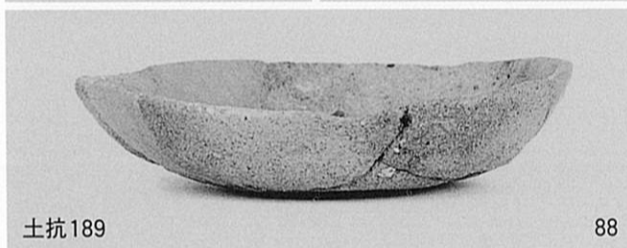
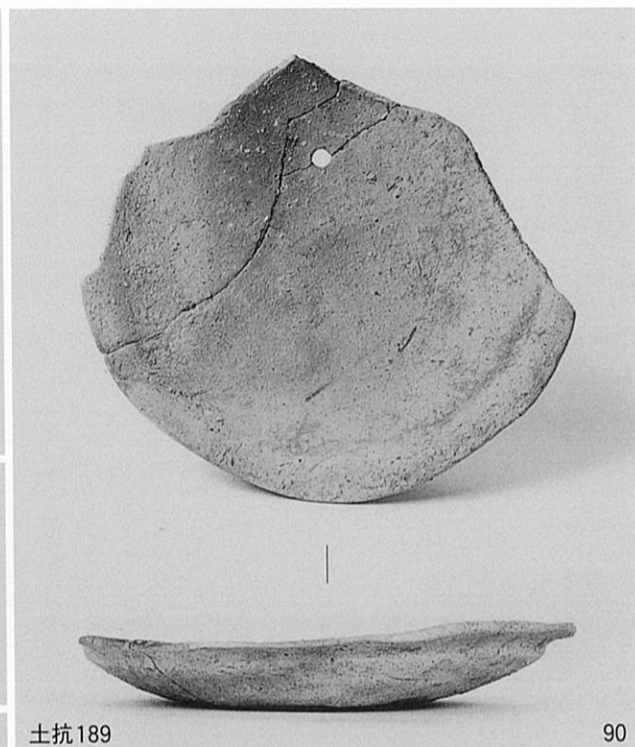
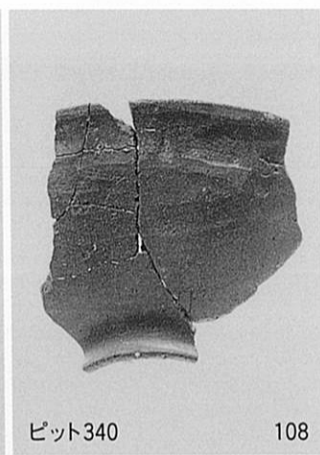
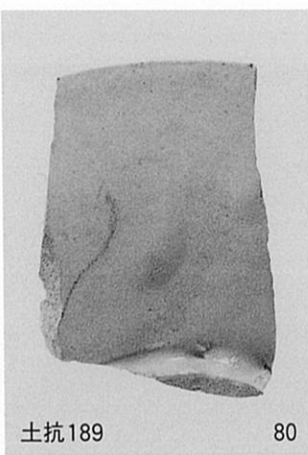


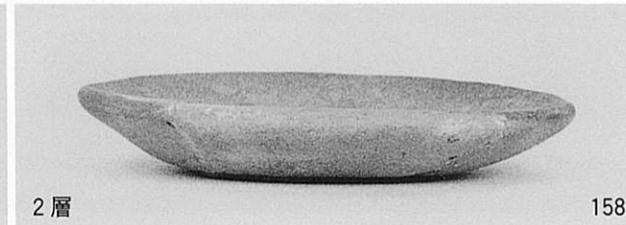
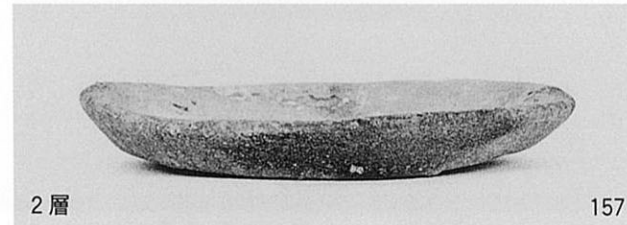
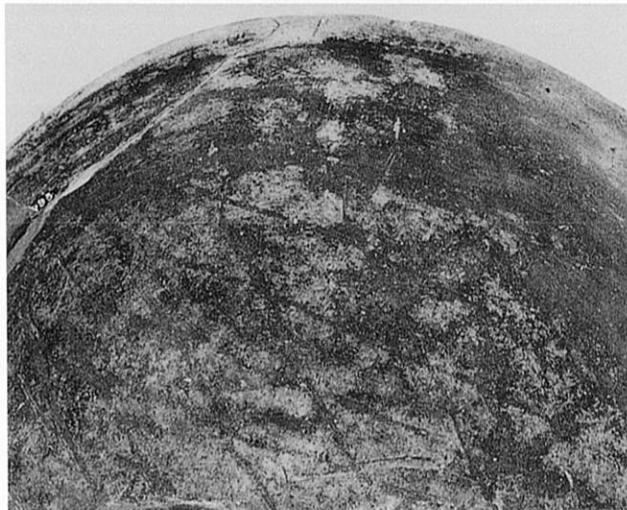


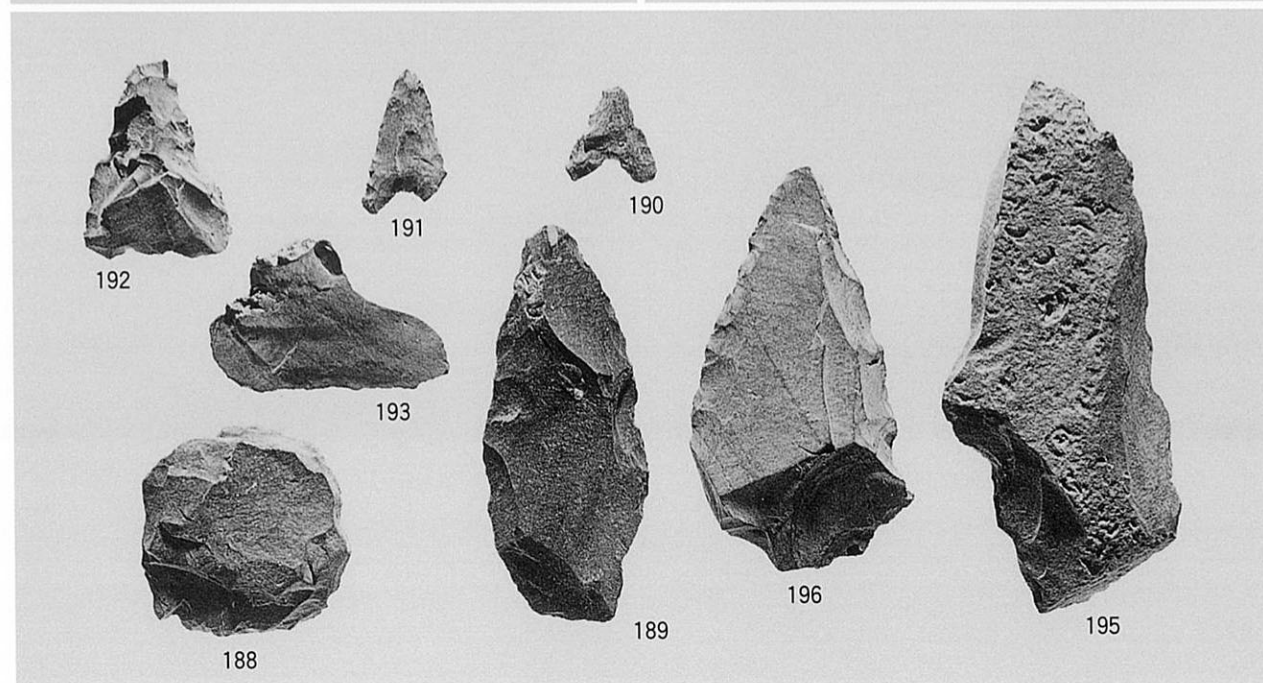
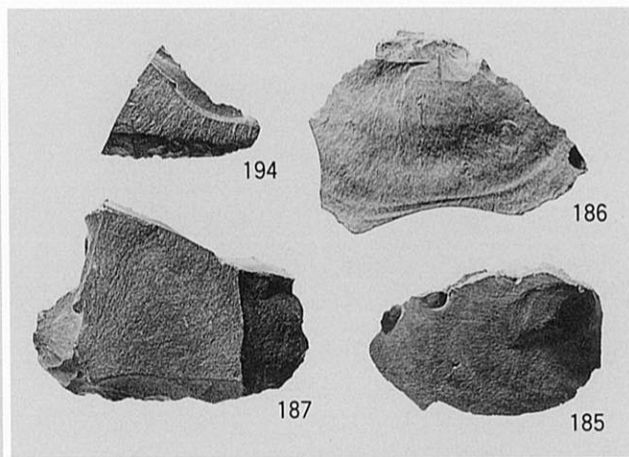
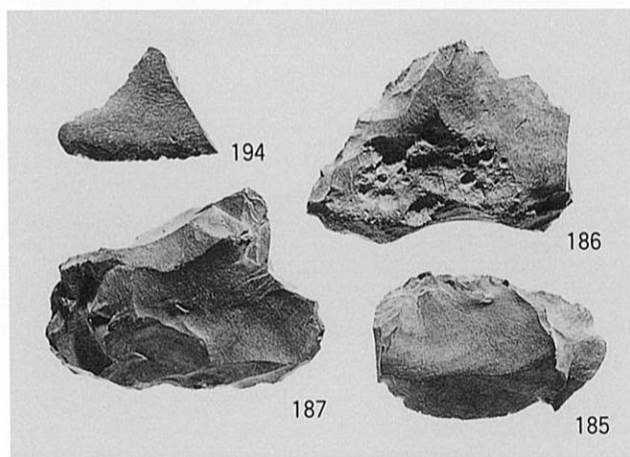
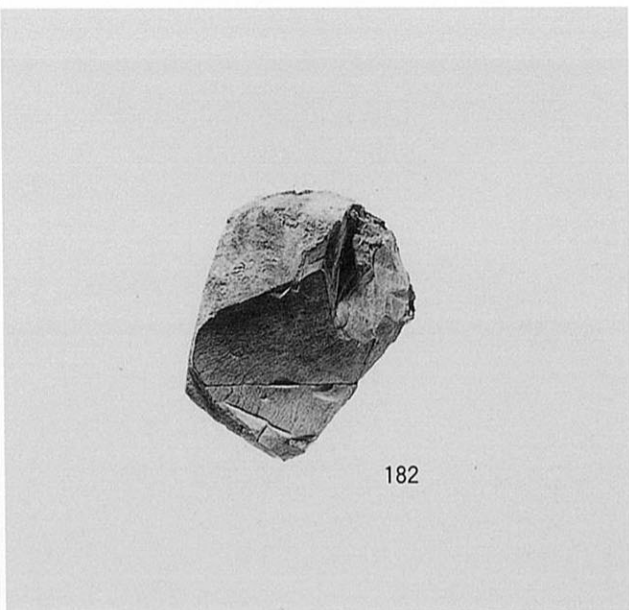
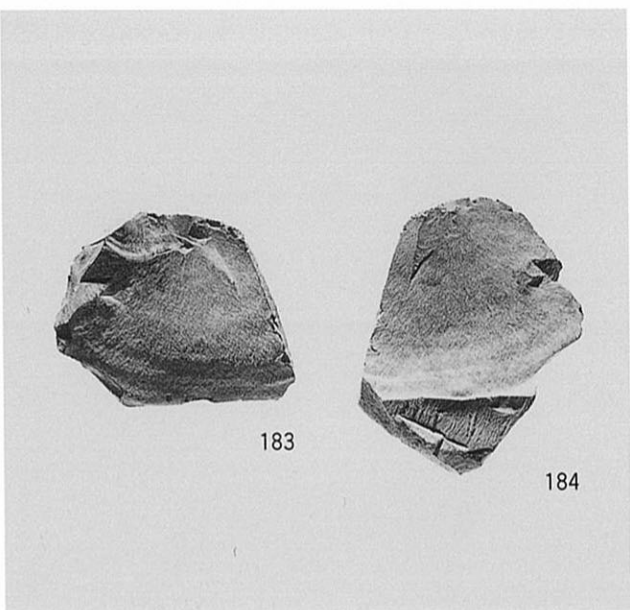
38, 42, 46, 47, 50~52 : 溝 1, 53~55 : 溝 361



溝2 高杯出土状況(南から)









2-1-E

198



2-1-E

199



2-1-A

203



2-1-B

202



2-1-F

197



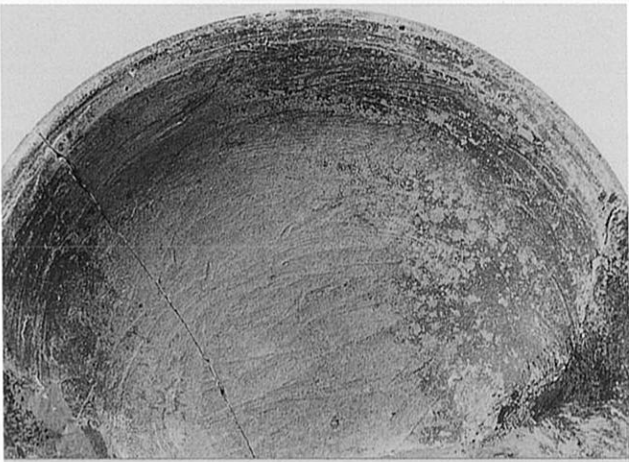
2-1-I

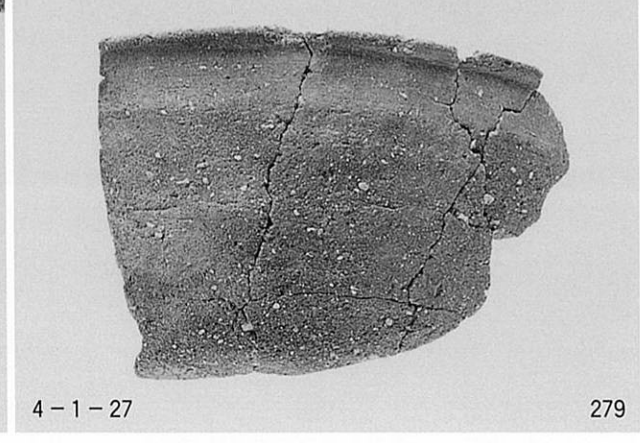
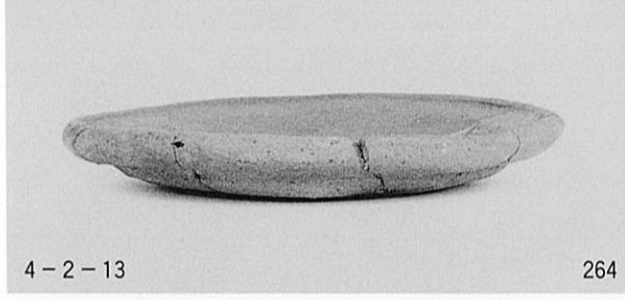
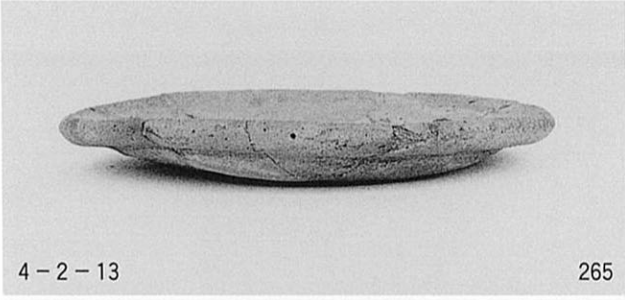
206



2-310

210~221

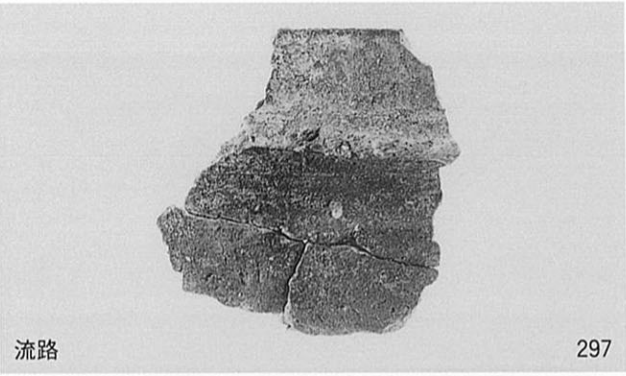
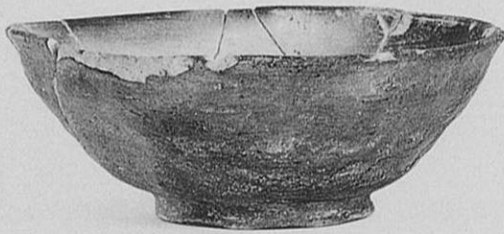






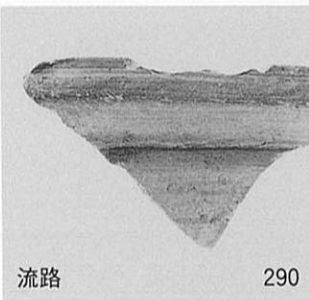
流路

101



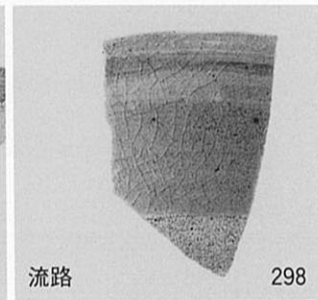
流路

297



流路

290



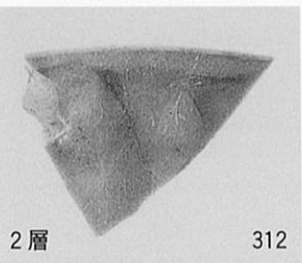
流路

298



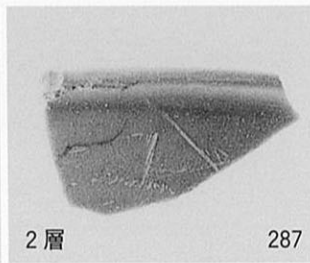
流路

303



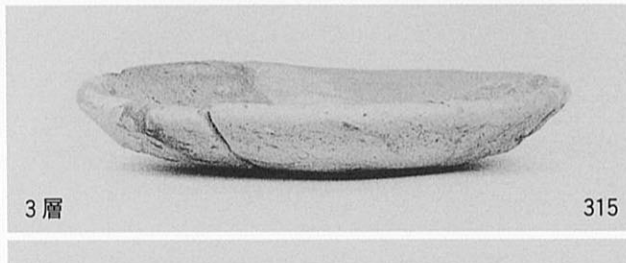
2層

312



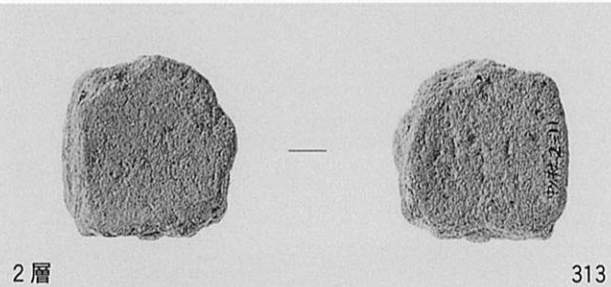
2層

287



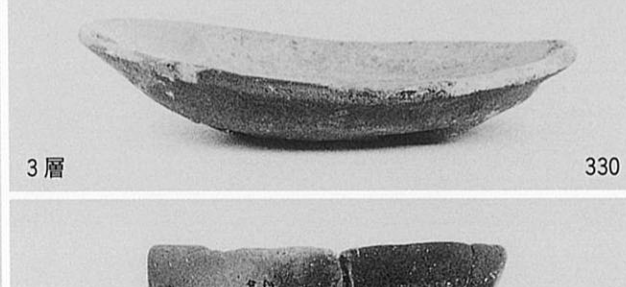
3層

315



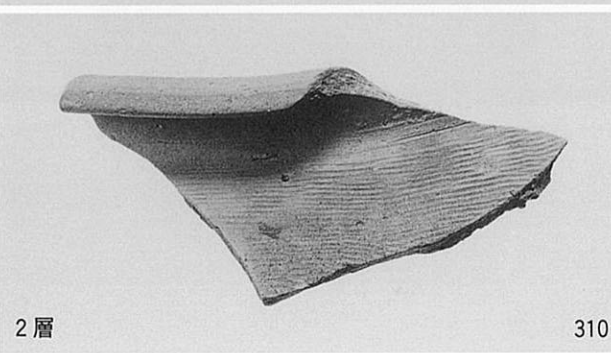
2層

313



3層

330



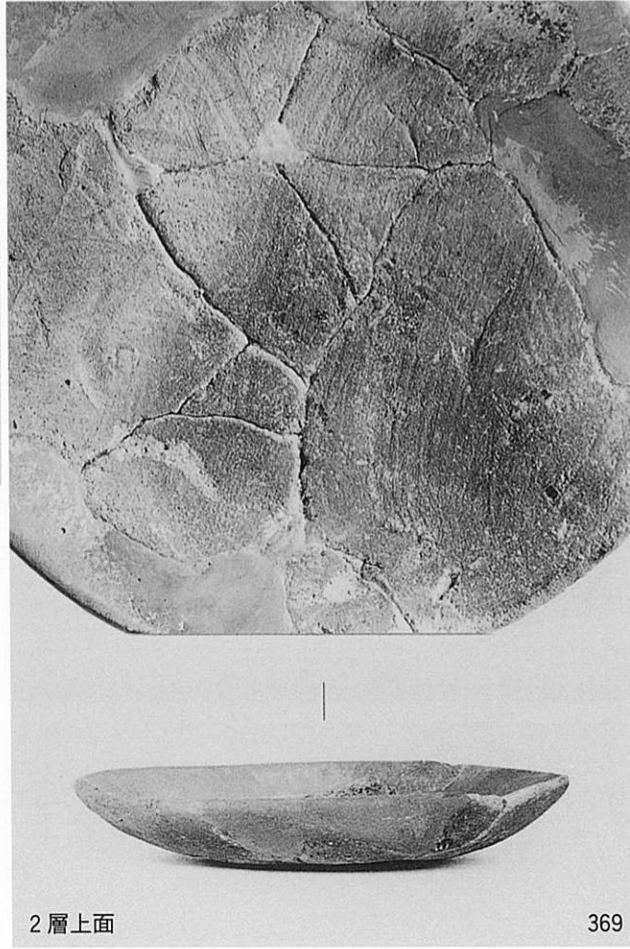
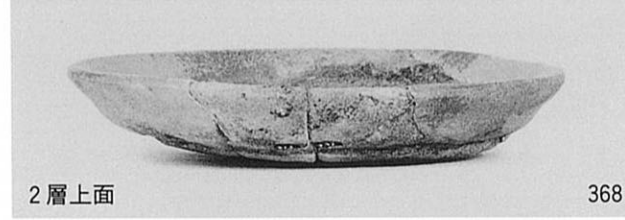
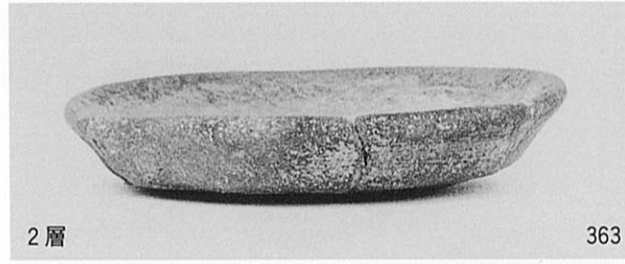
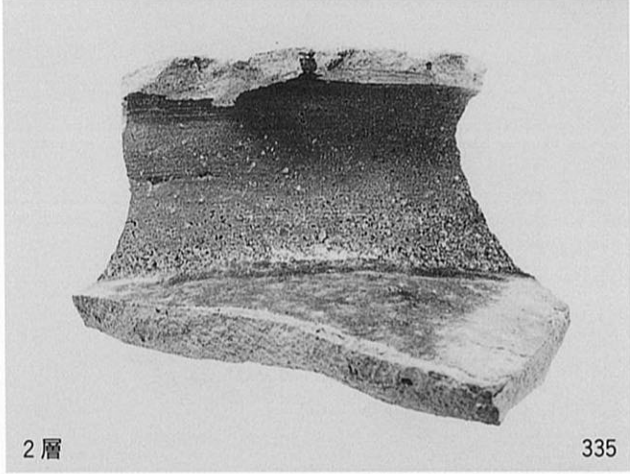
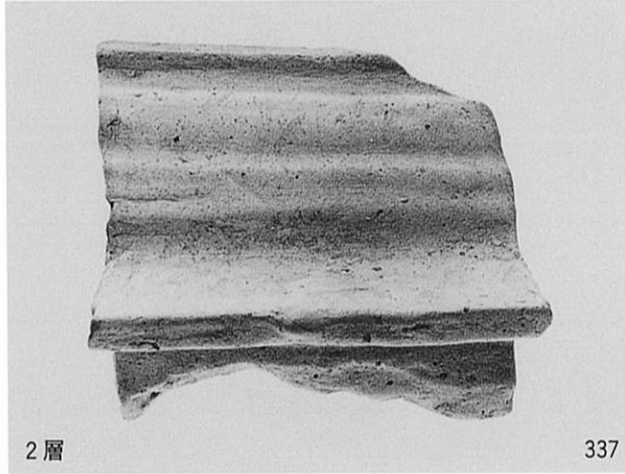
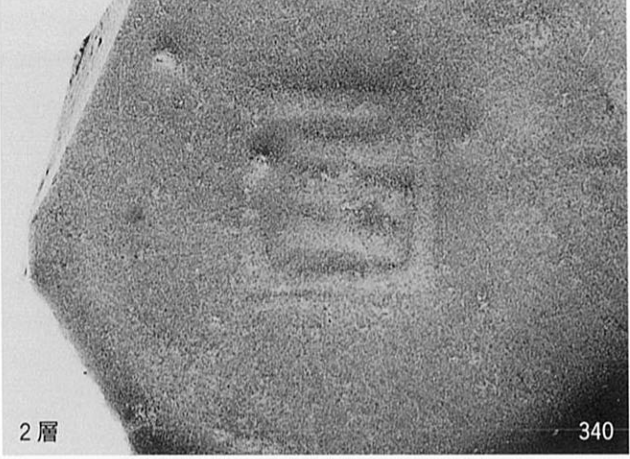
2層

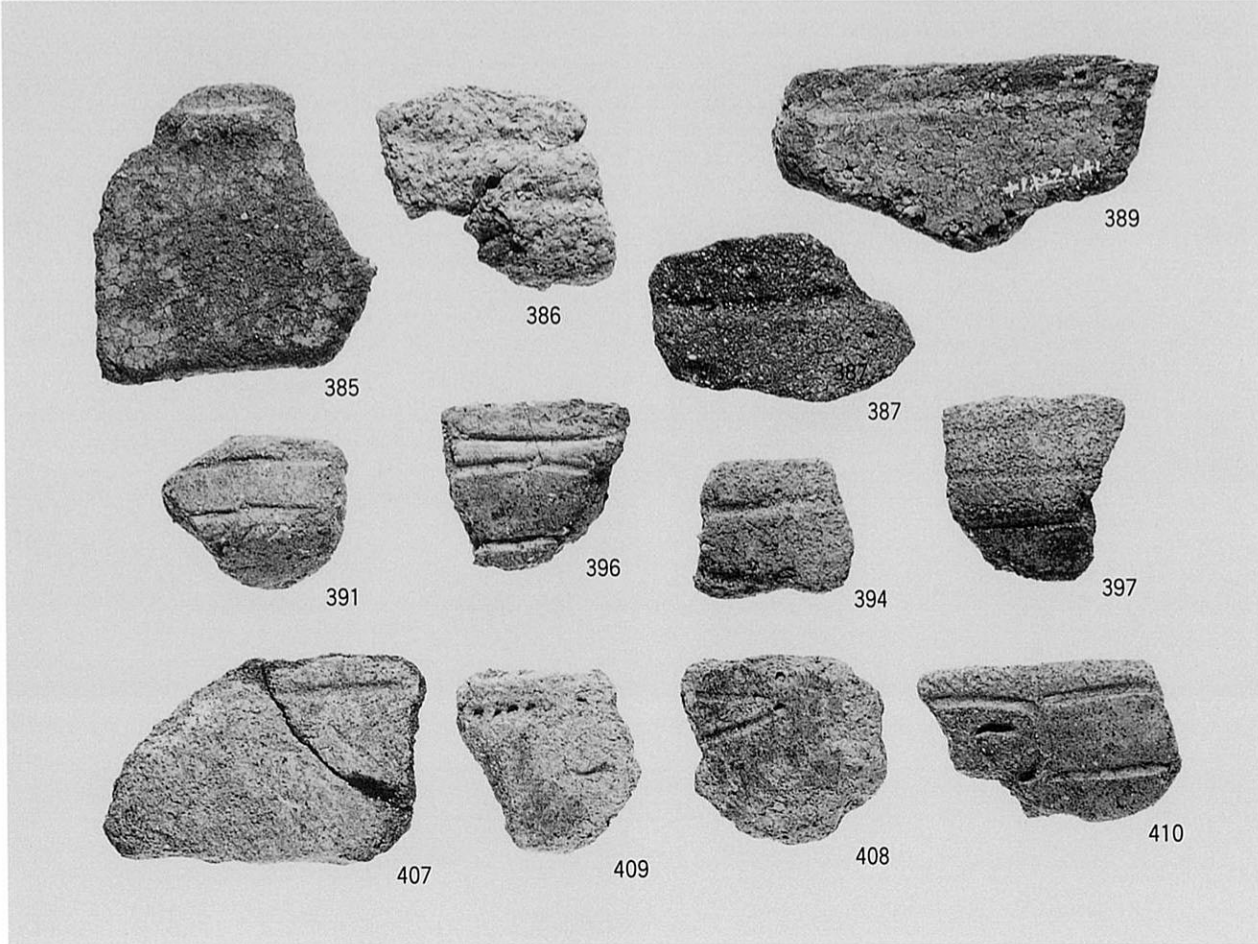
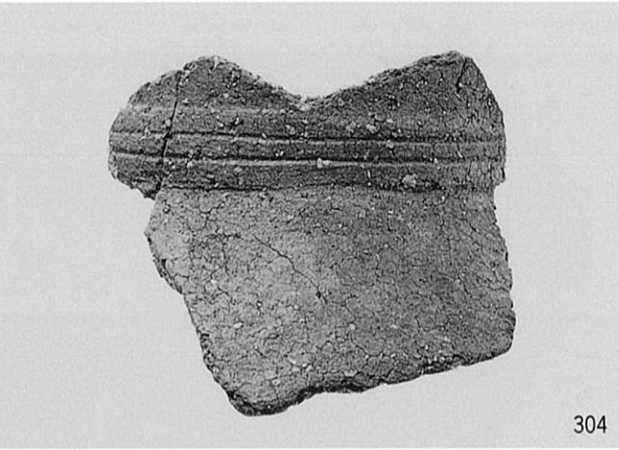
310

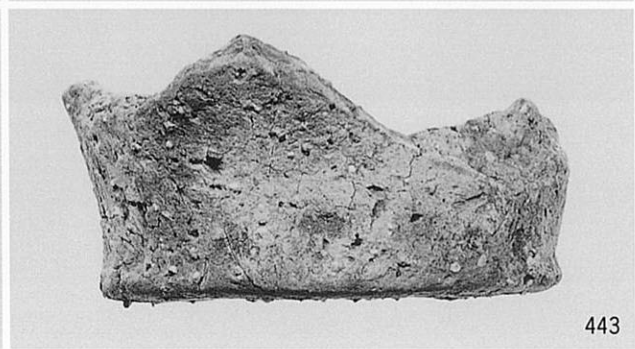
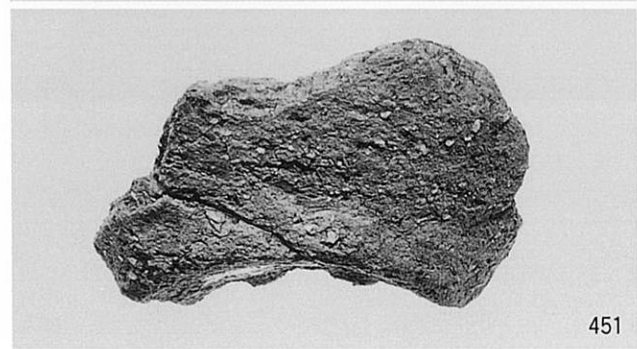
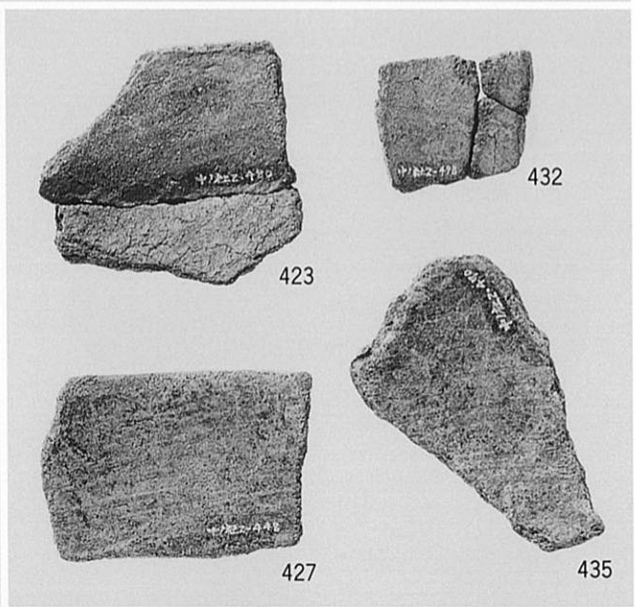
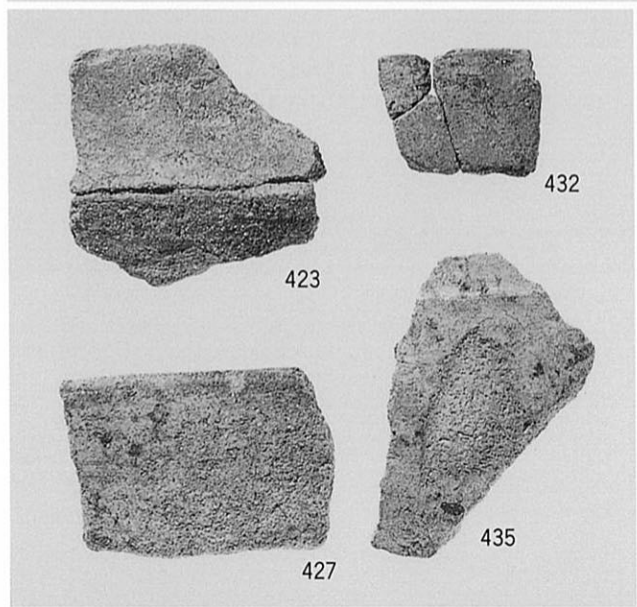
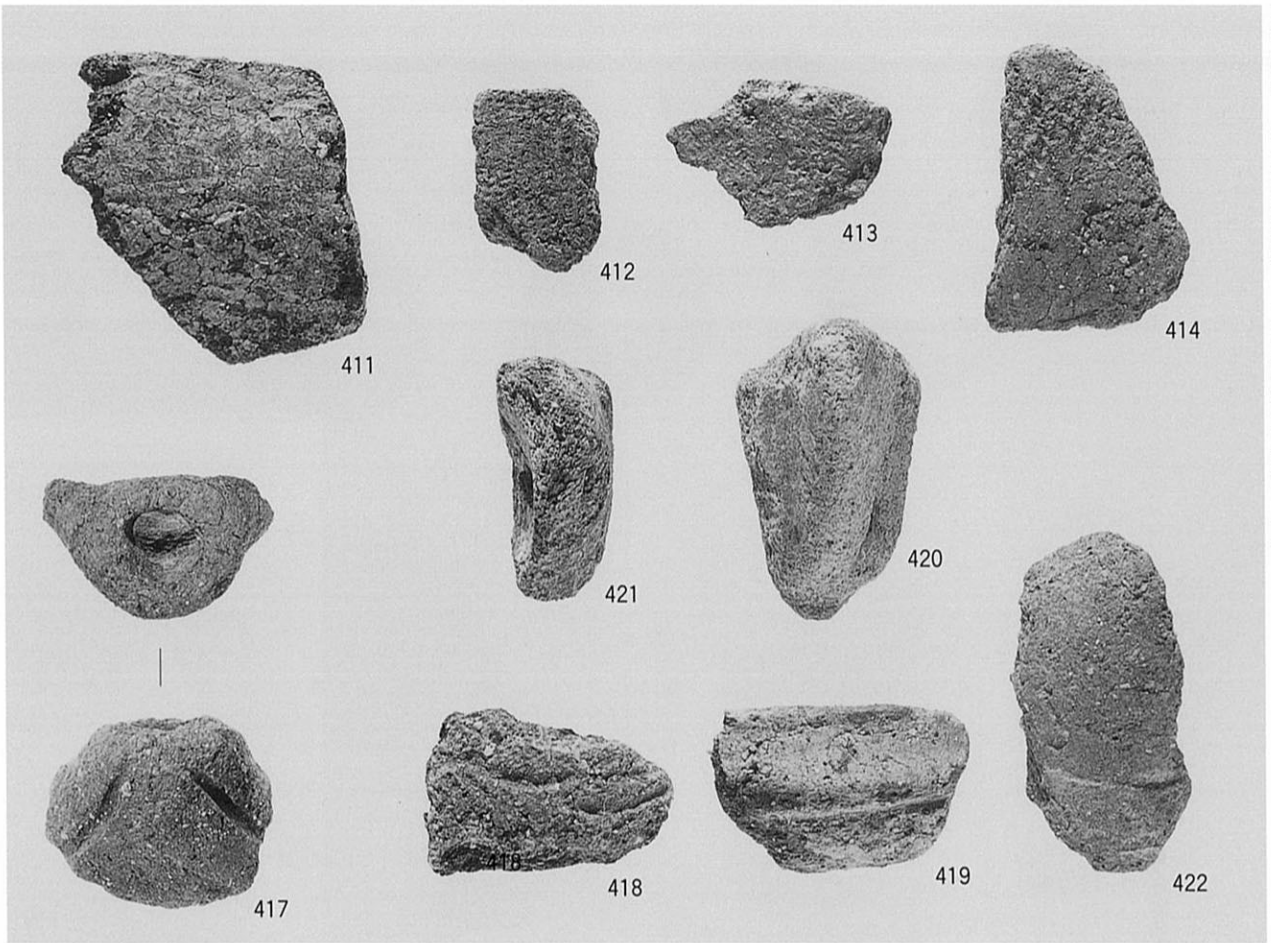


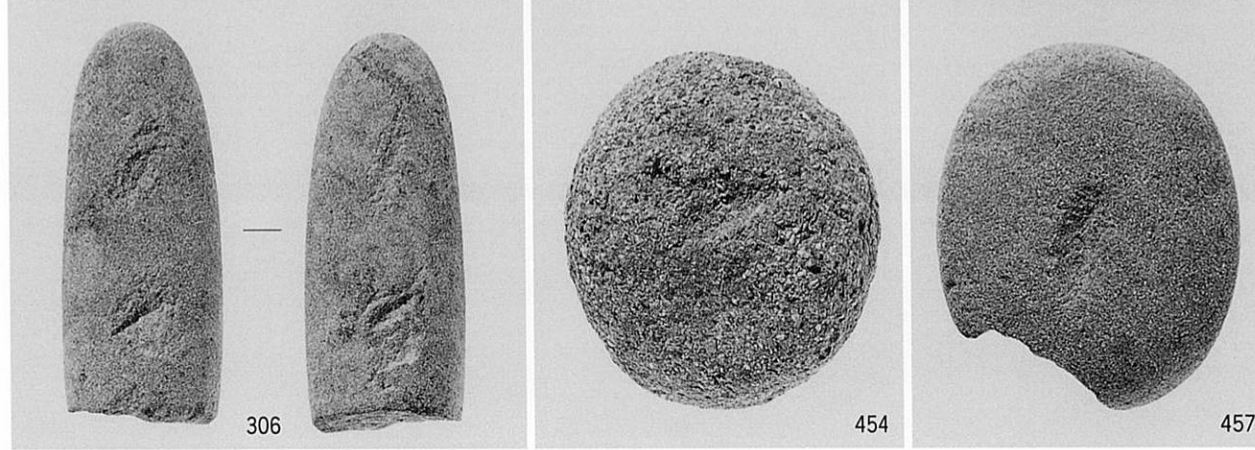
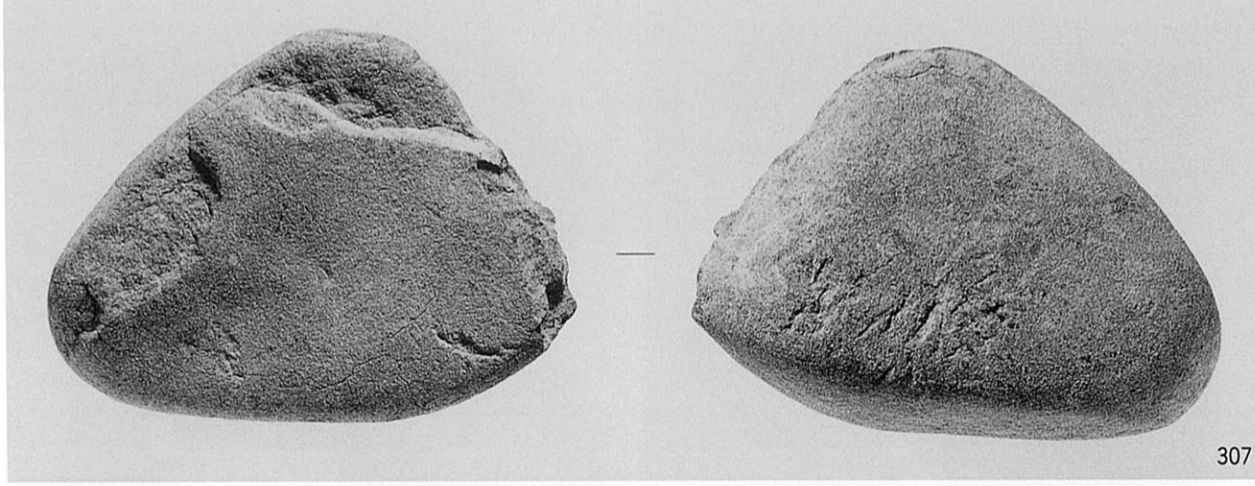
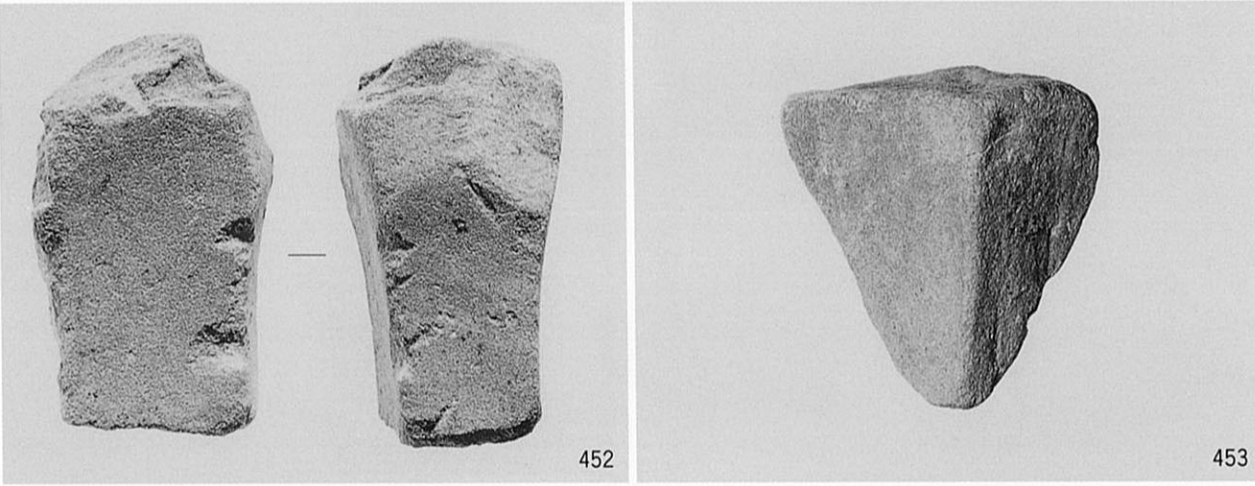
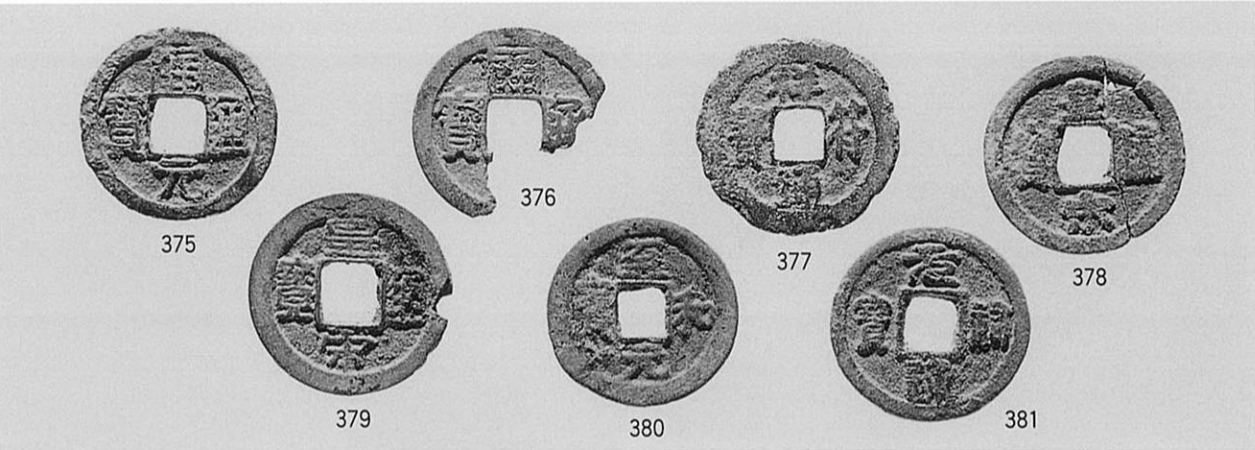
側溝

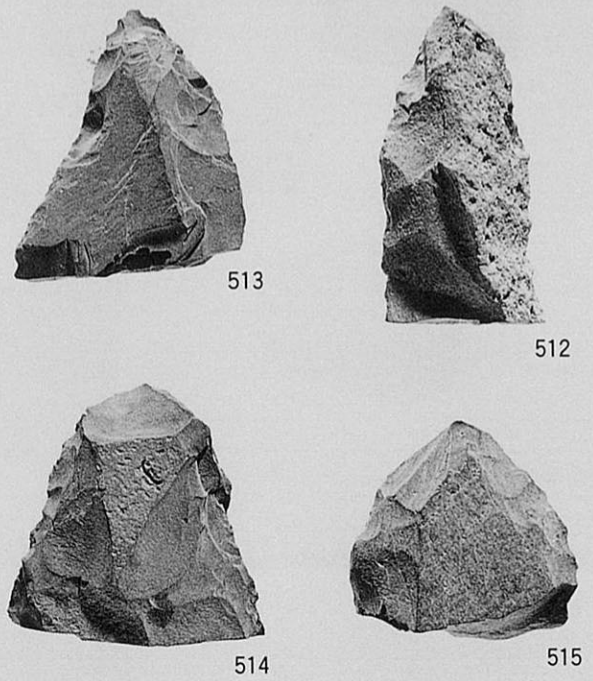
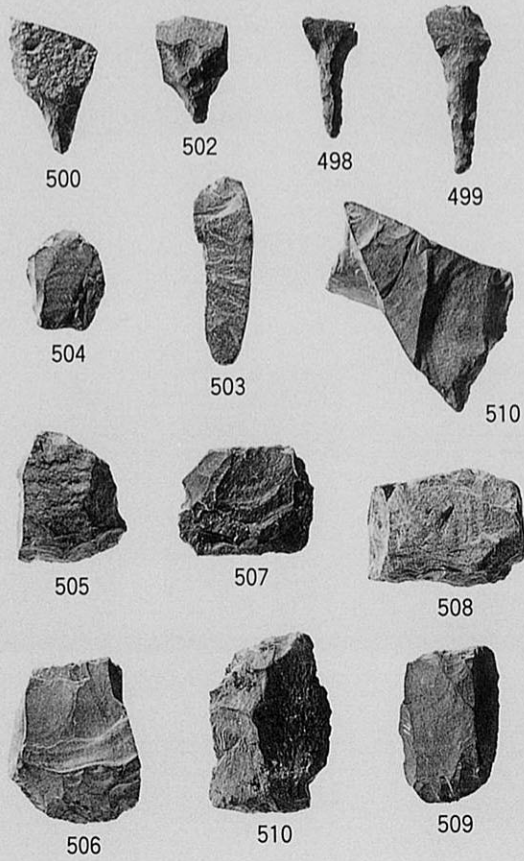
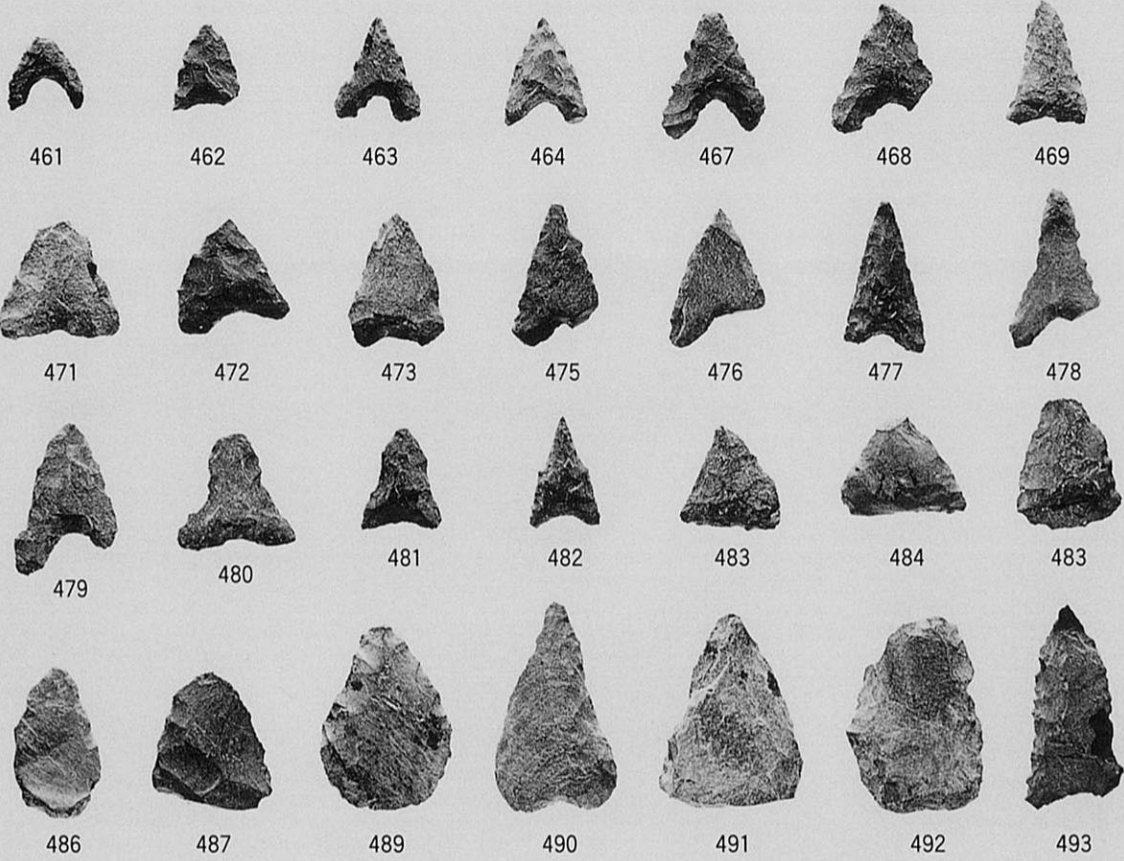
330

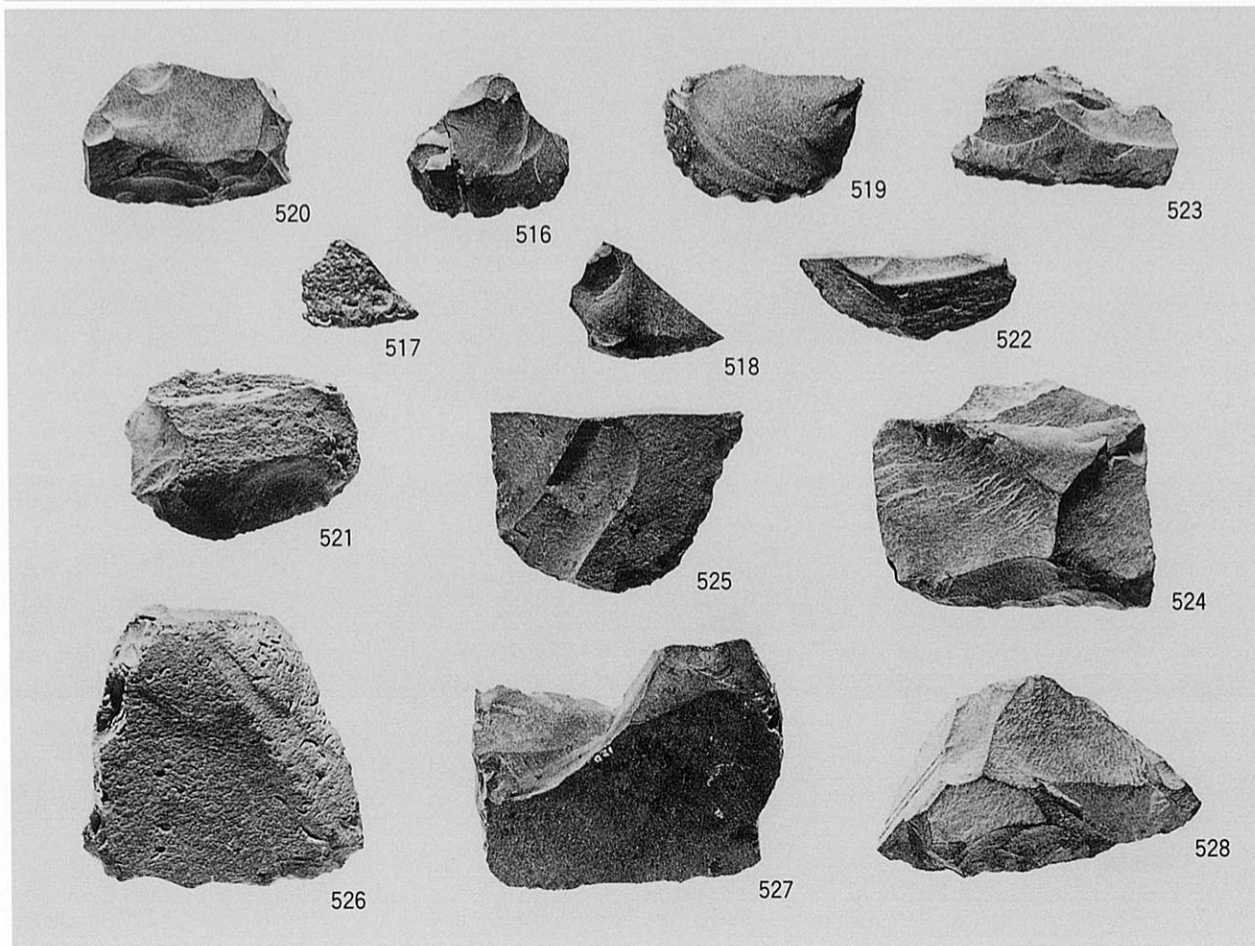
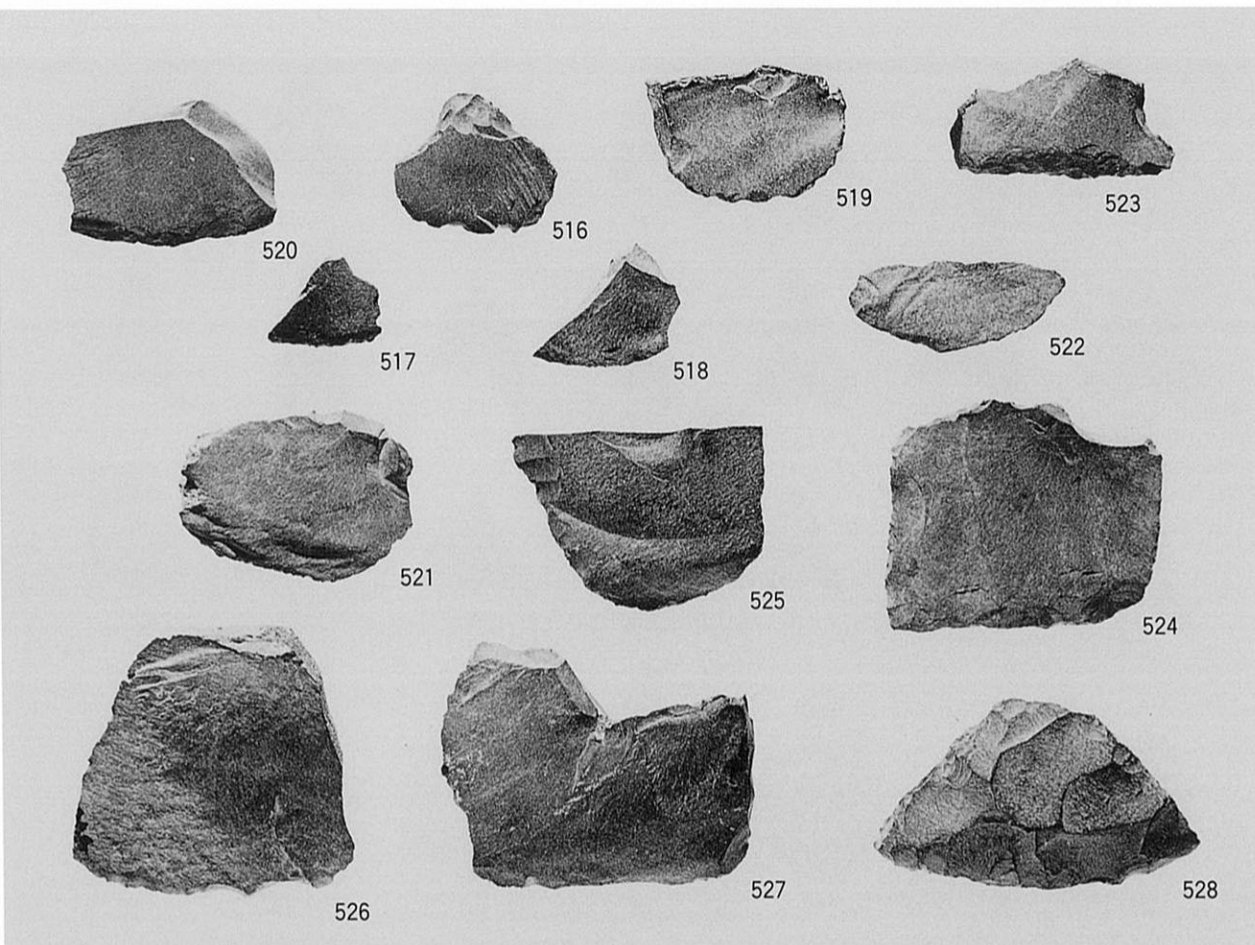


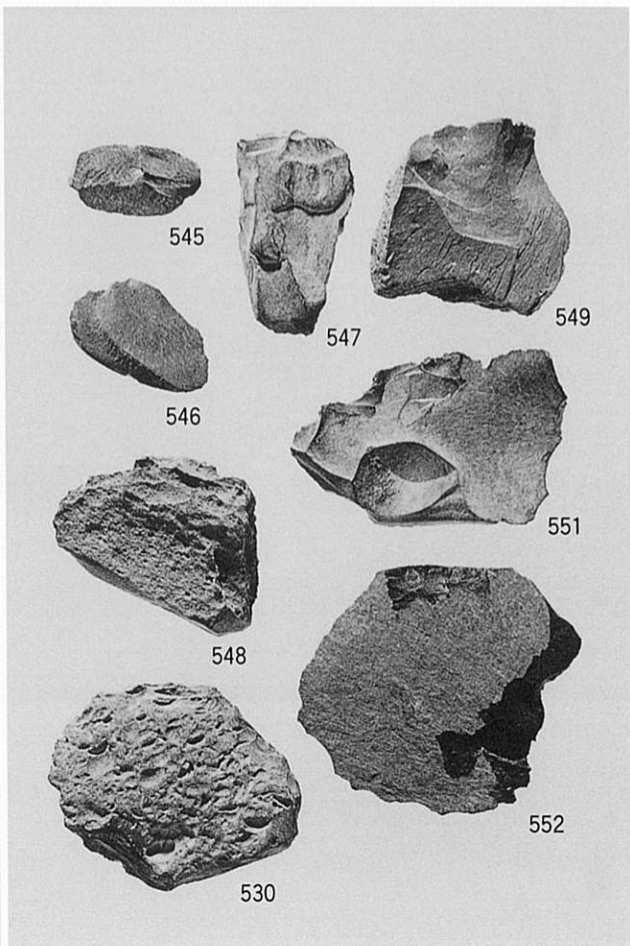
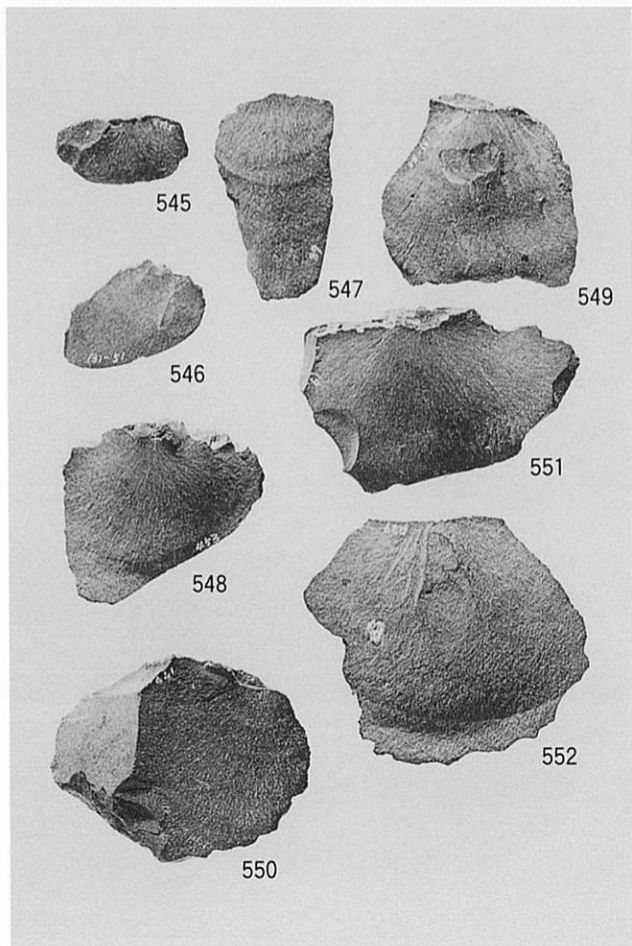
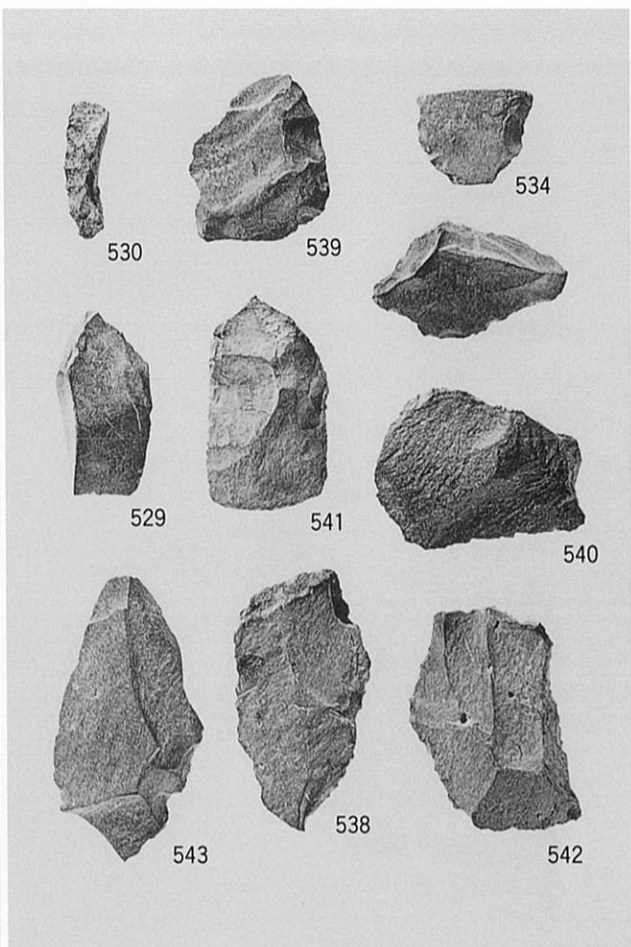
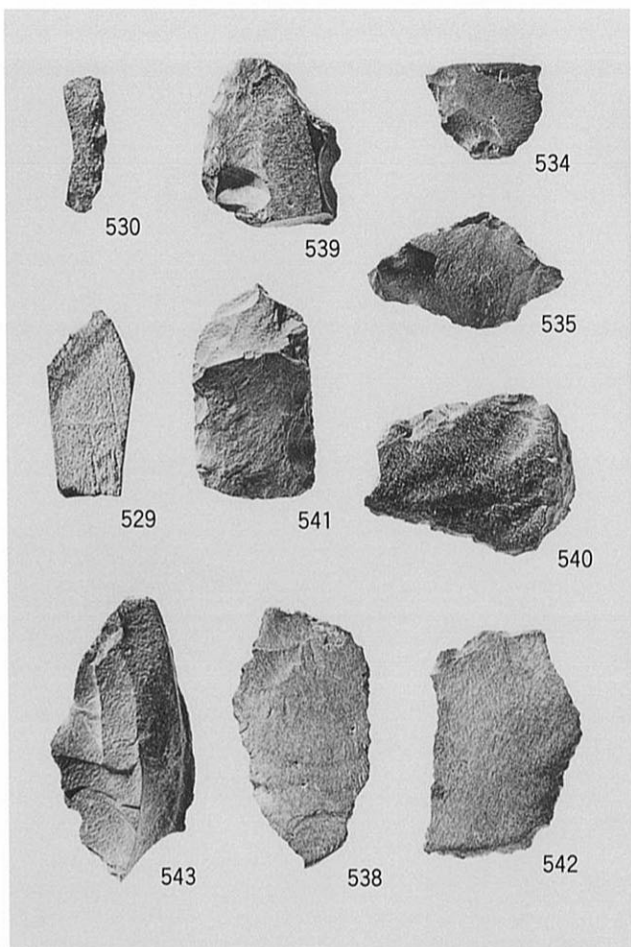


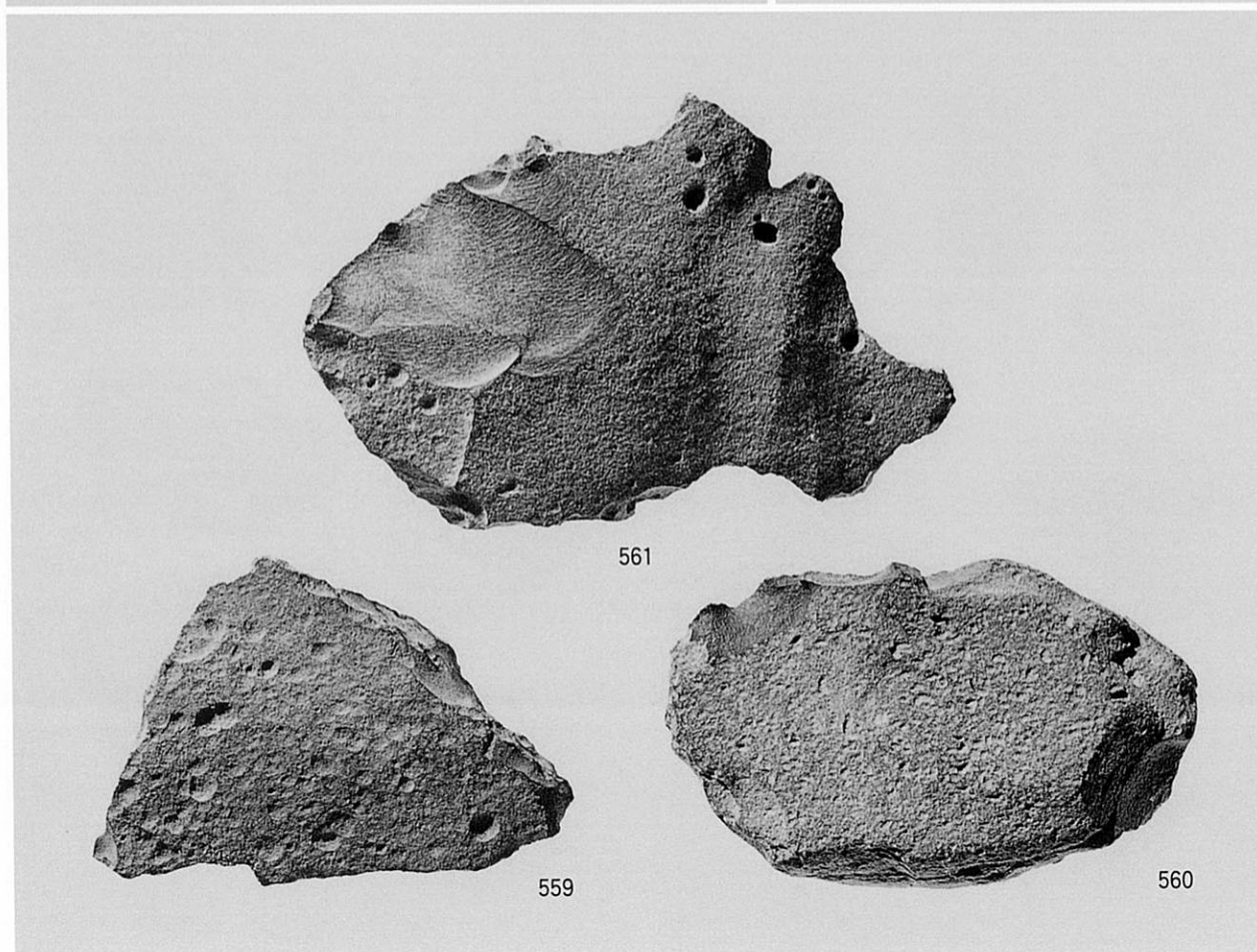
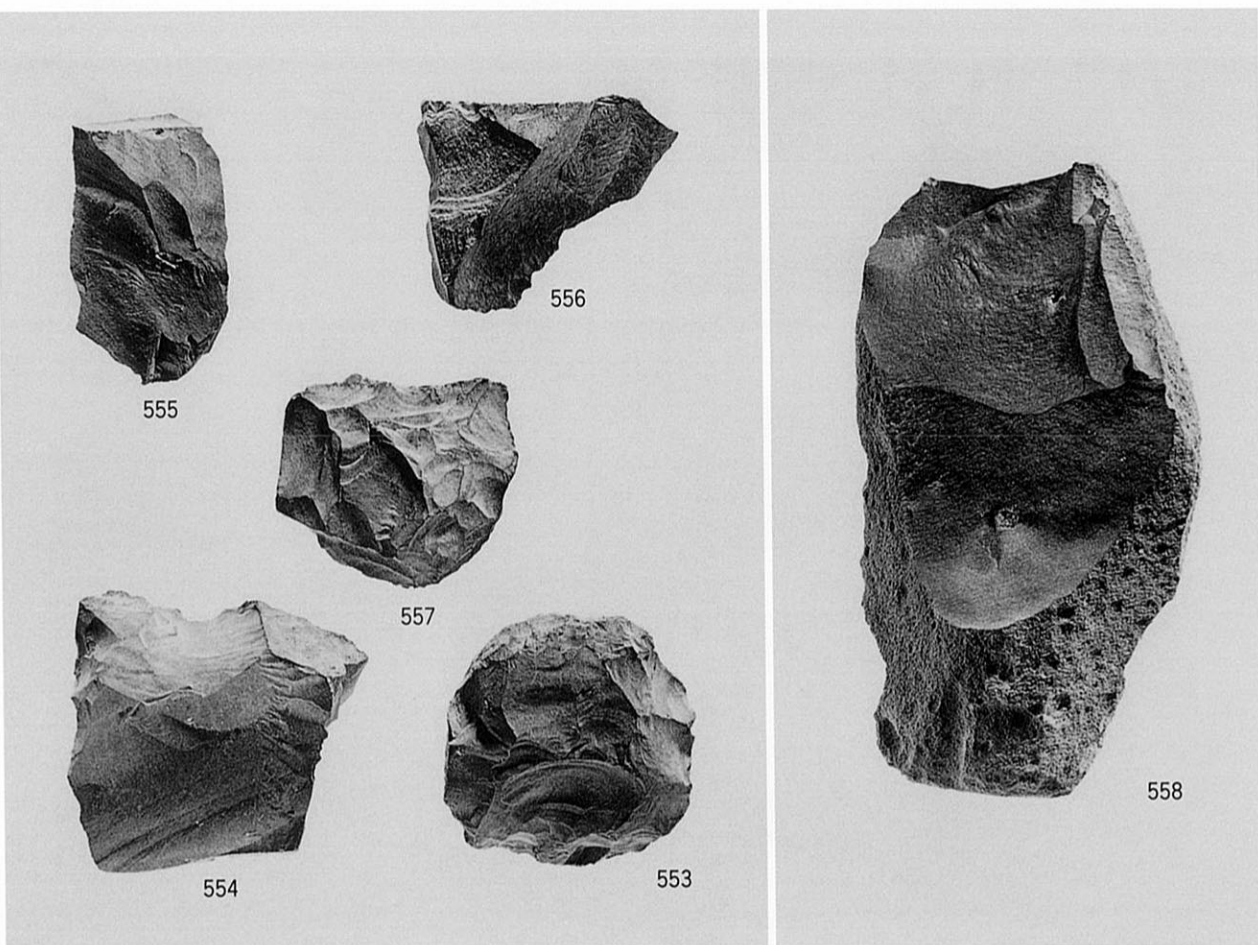


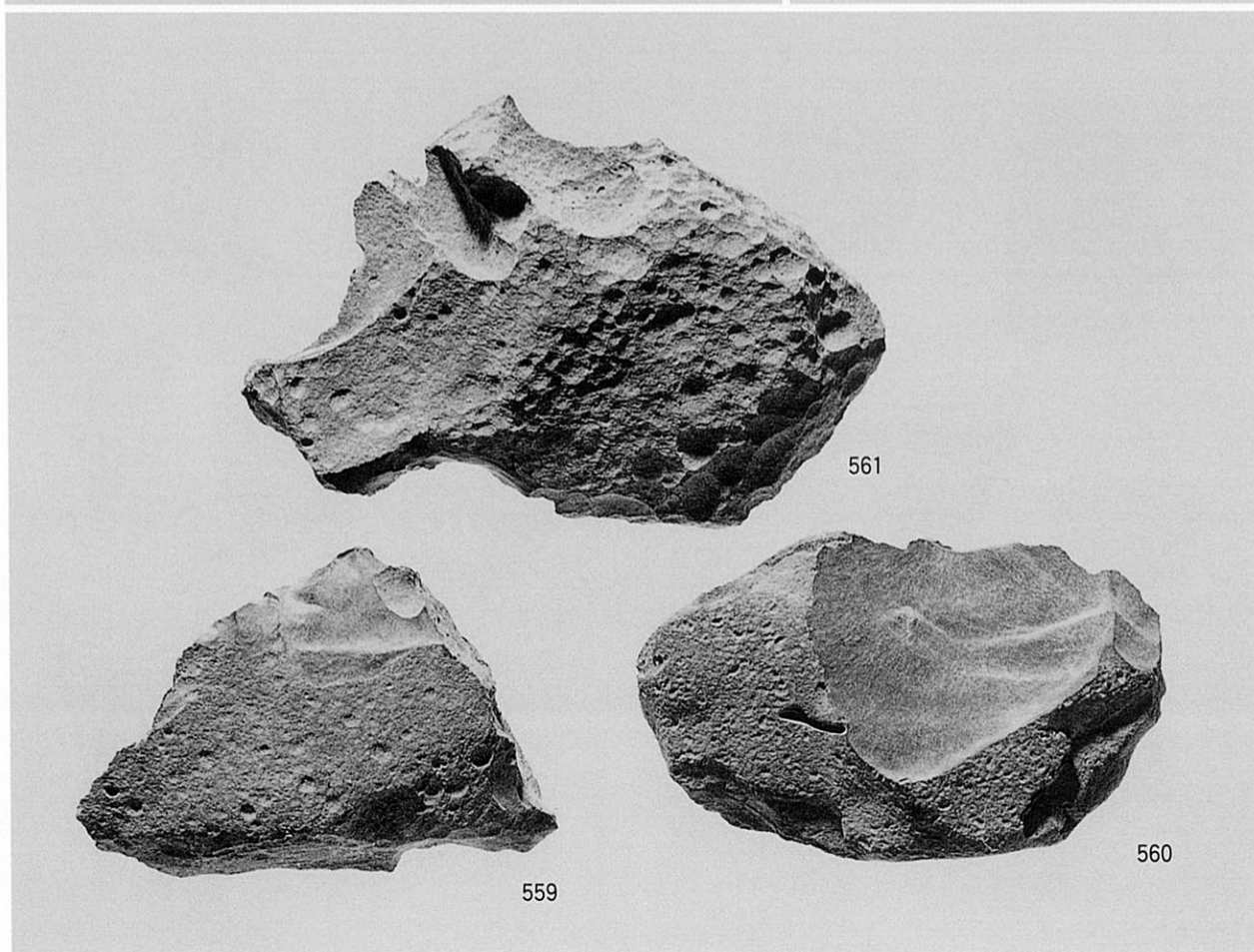
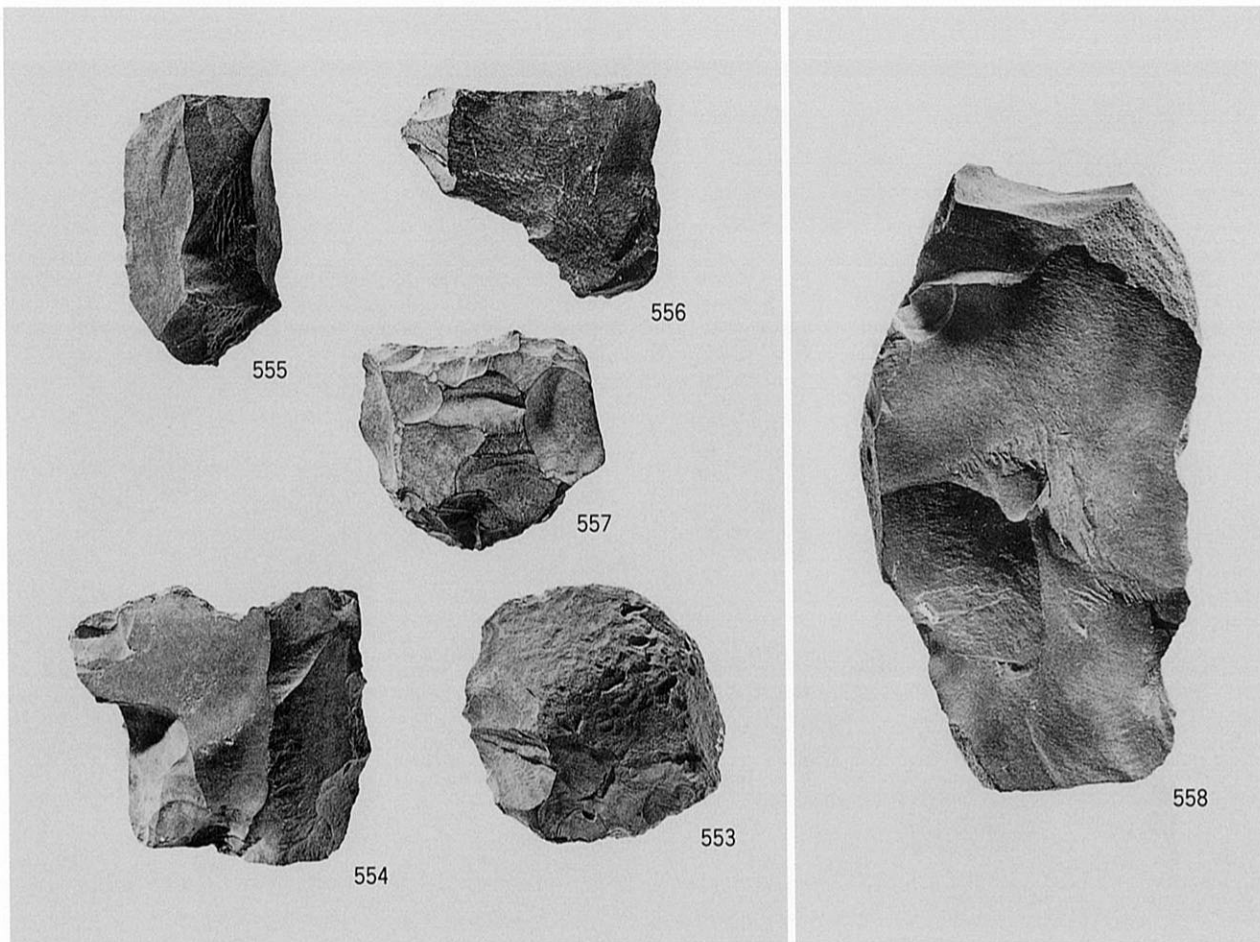


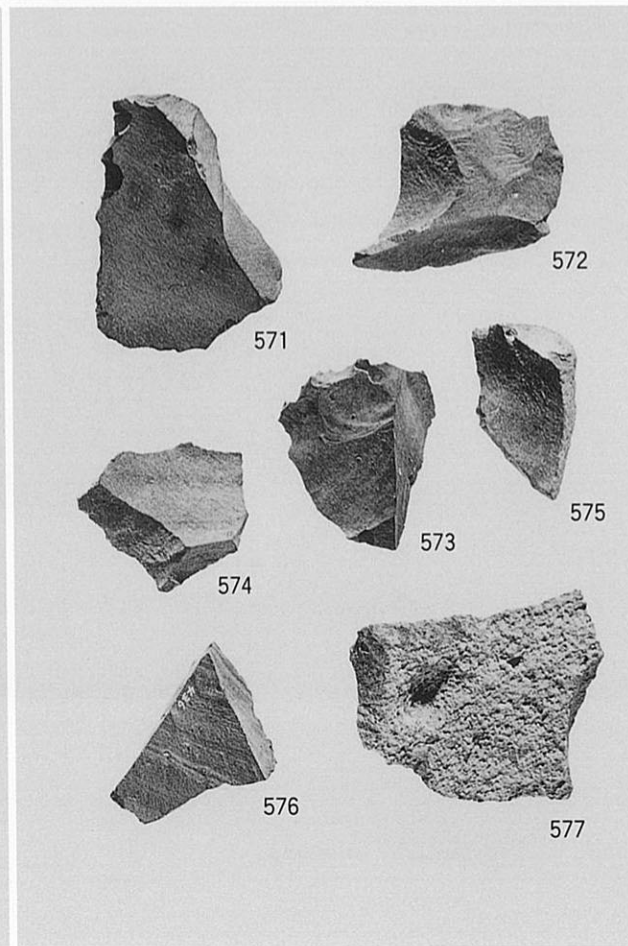
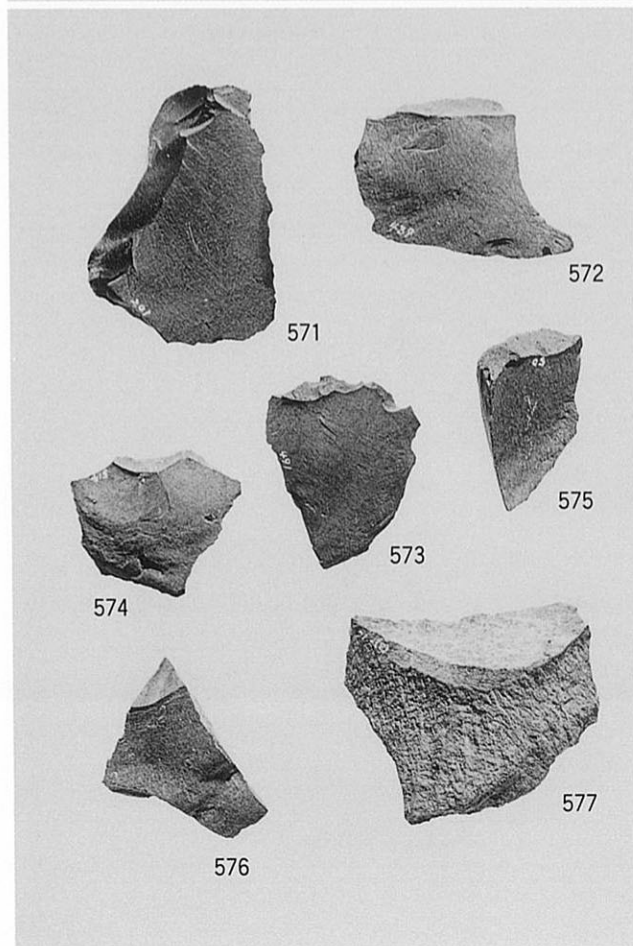
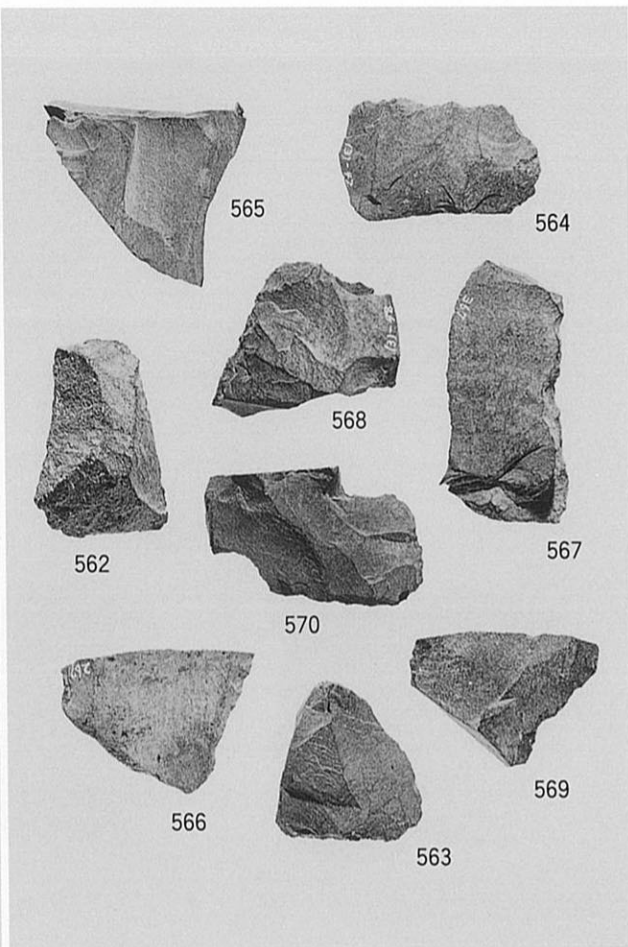
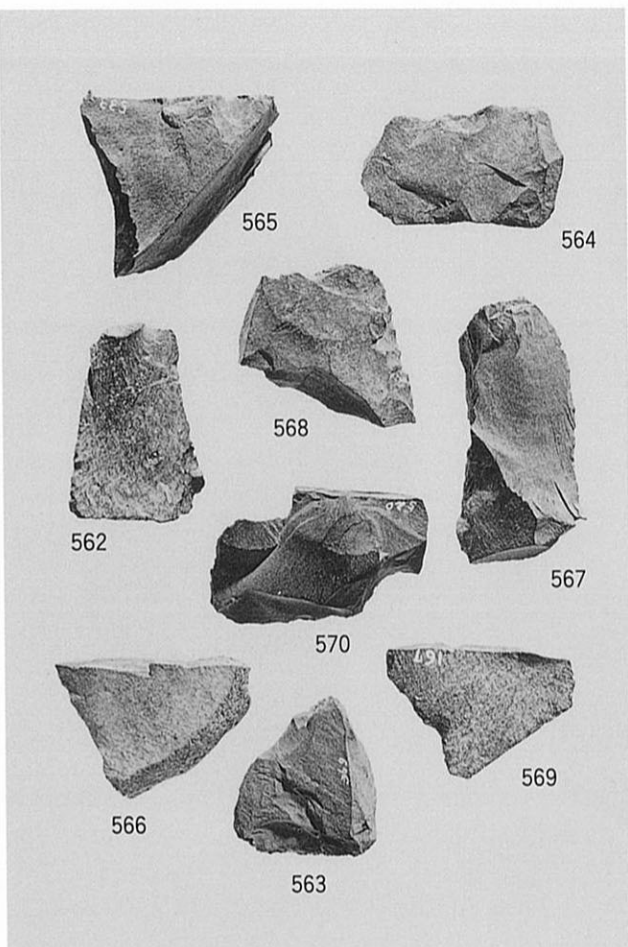






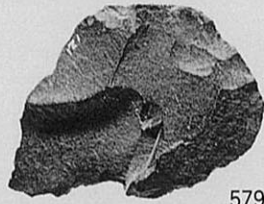








578



579



580



581



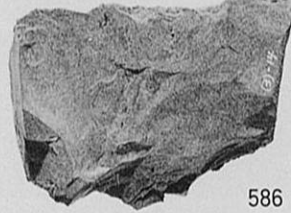
582



585



584



586



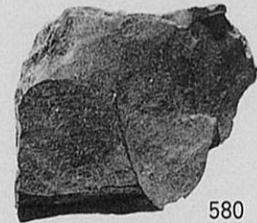
583



578



579



580



581



582



585



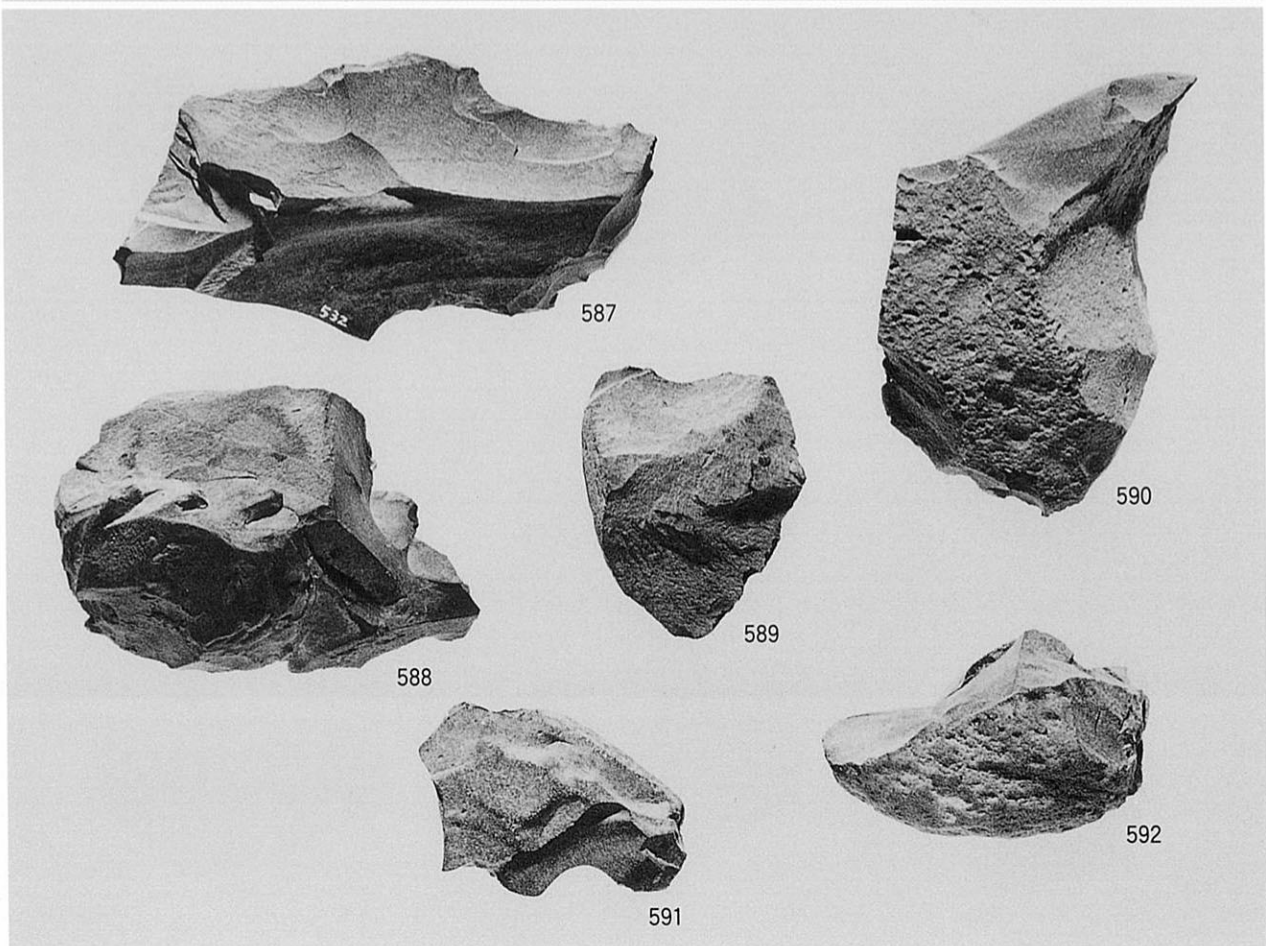
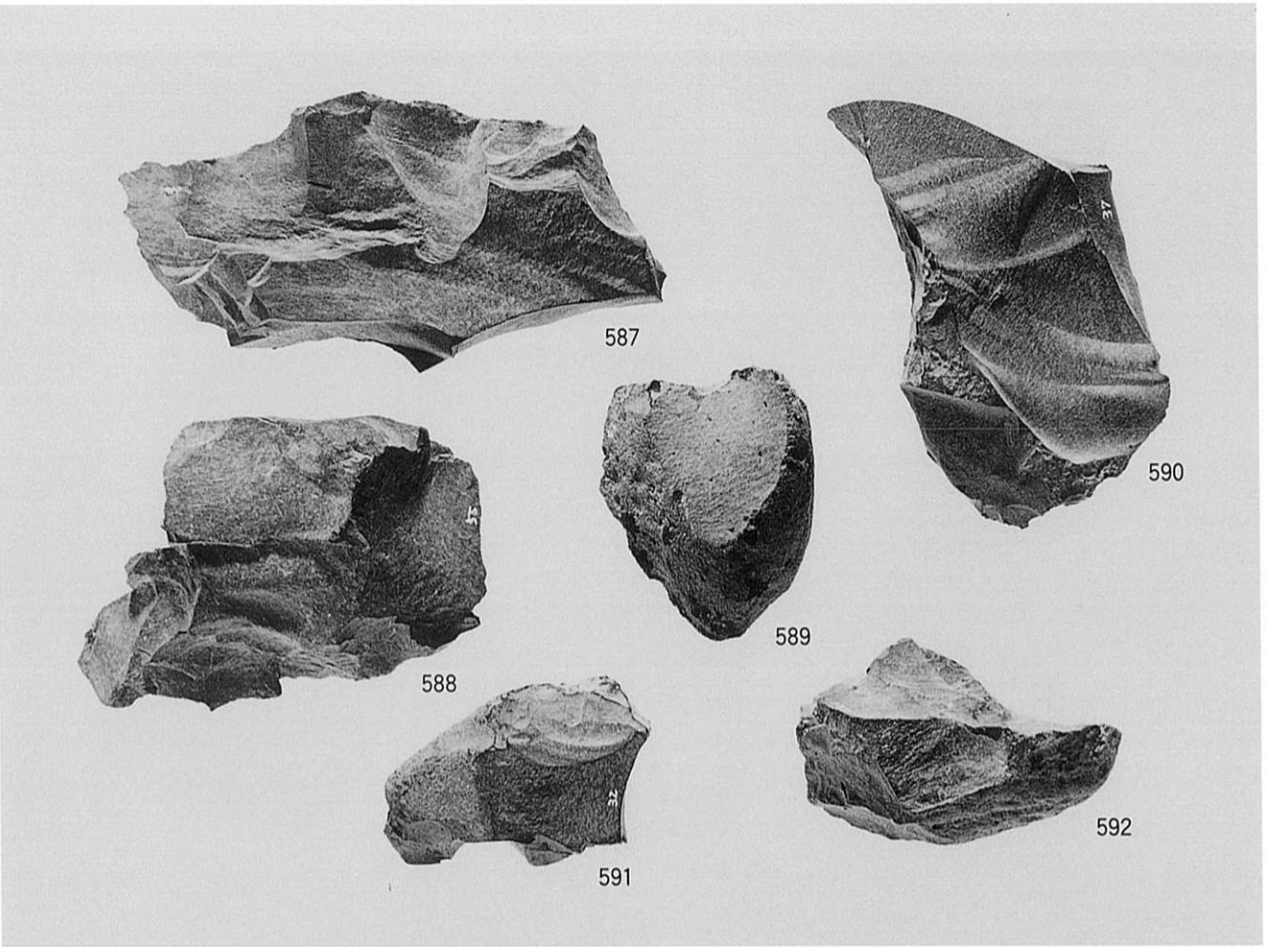
584



586



583





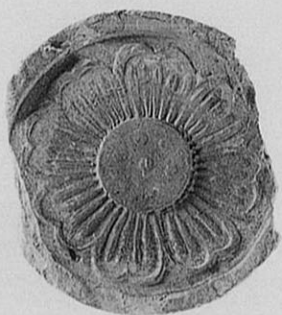
1



5



21



2



10



22



12



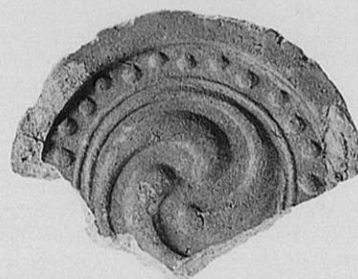
24



3



13



25



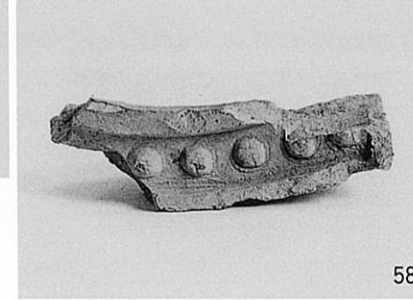
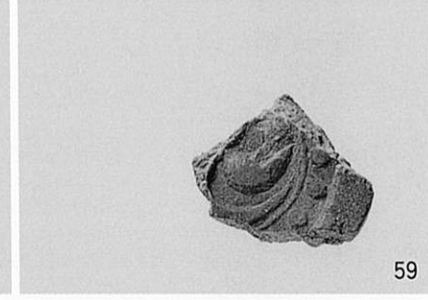
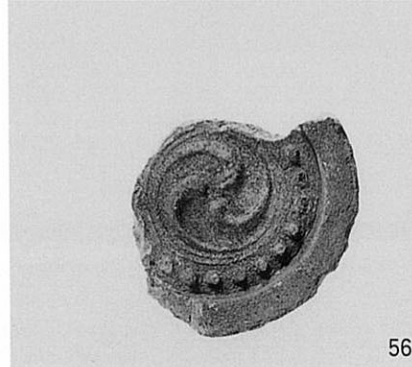
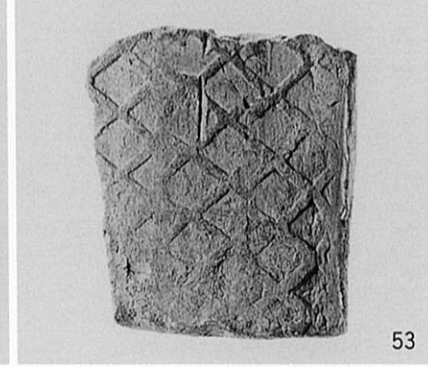
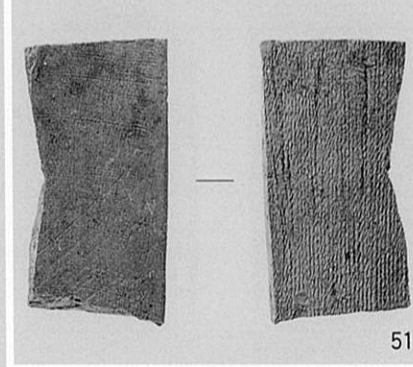
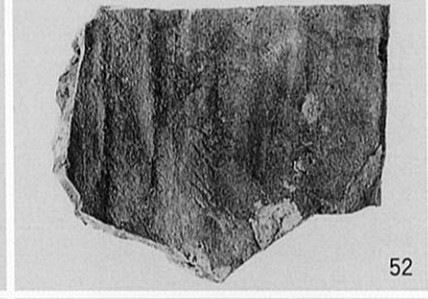
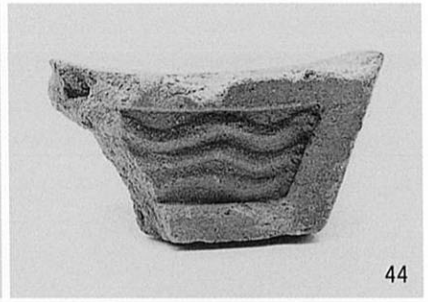
4

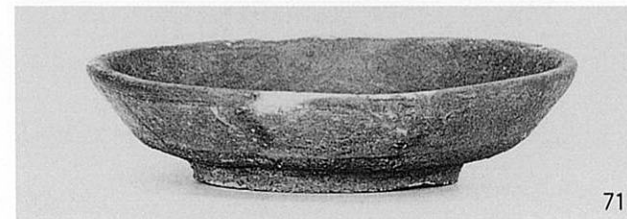
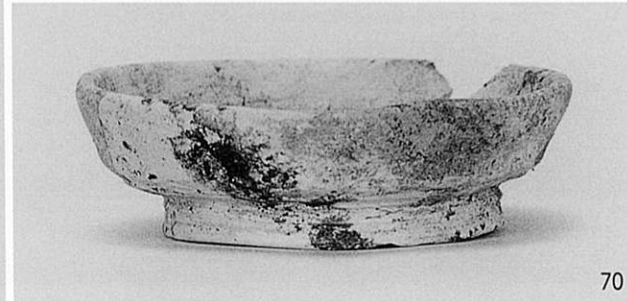
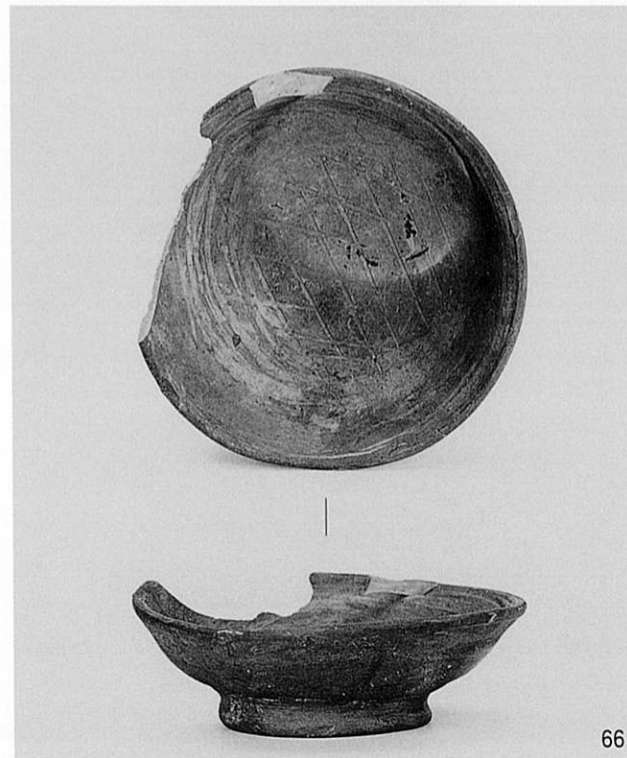
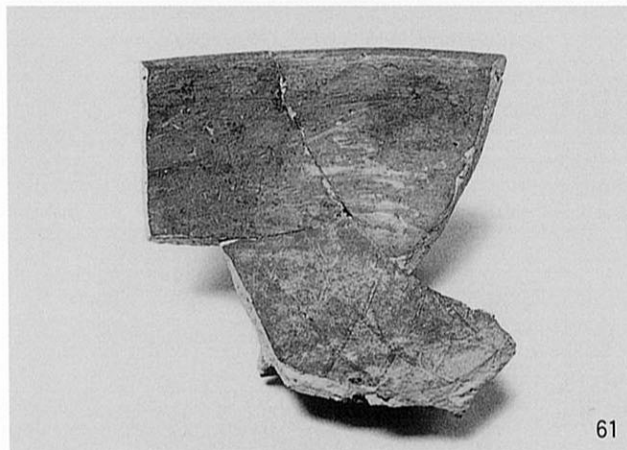
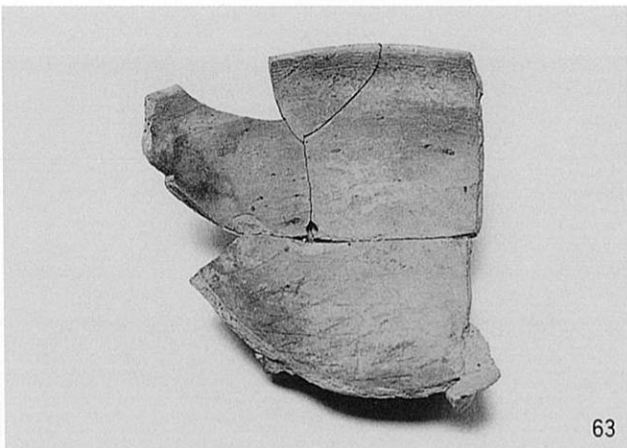
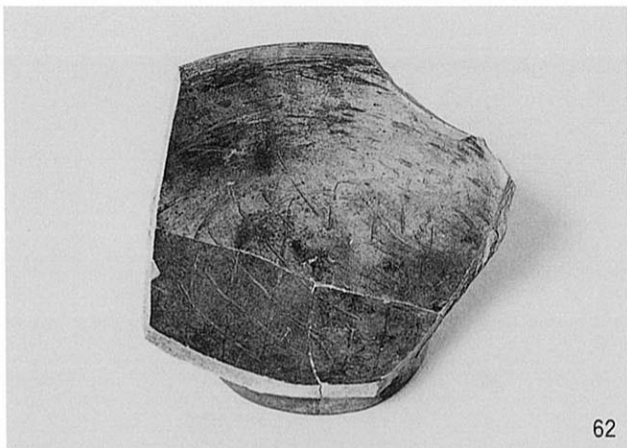


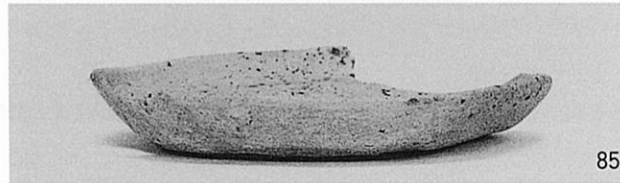
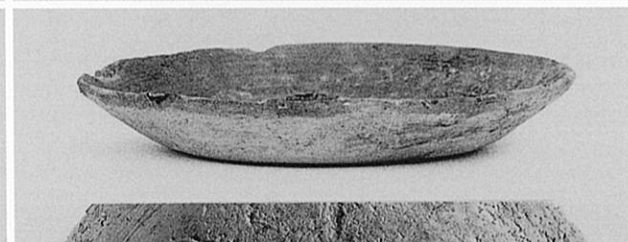
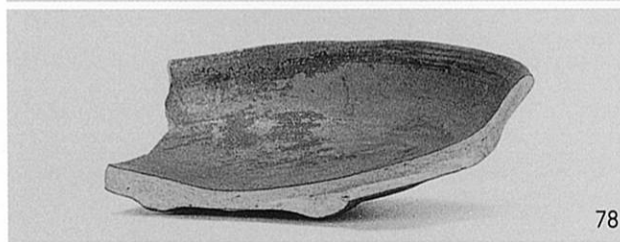
16

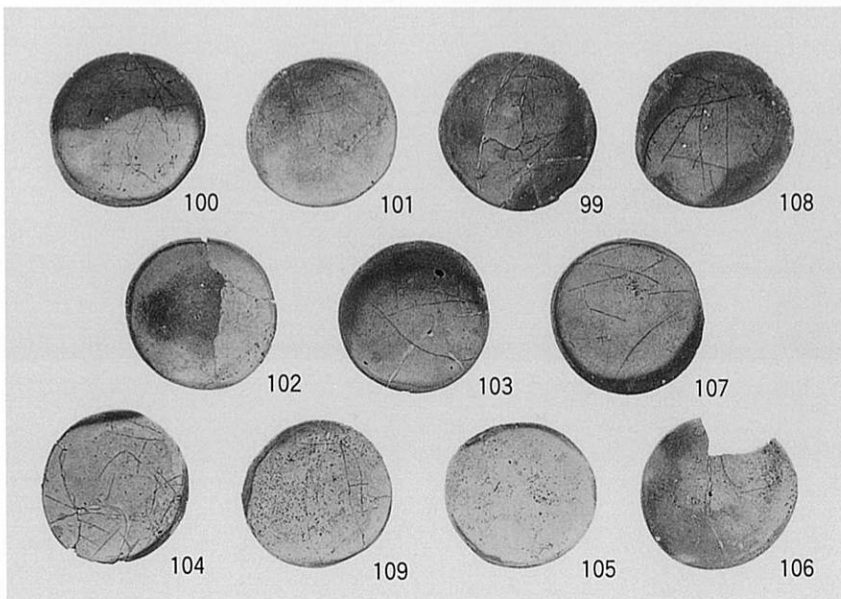
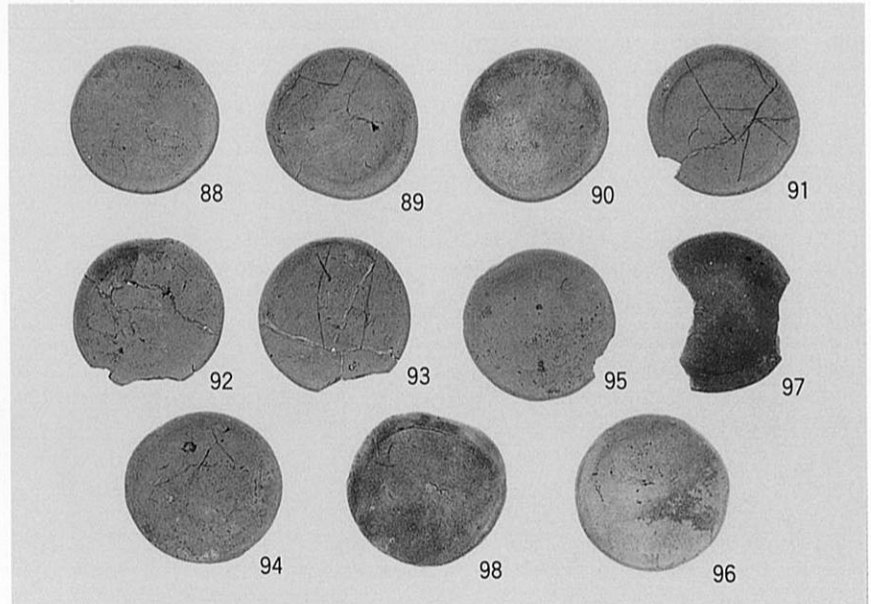
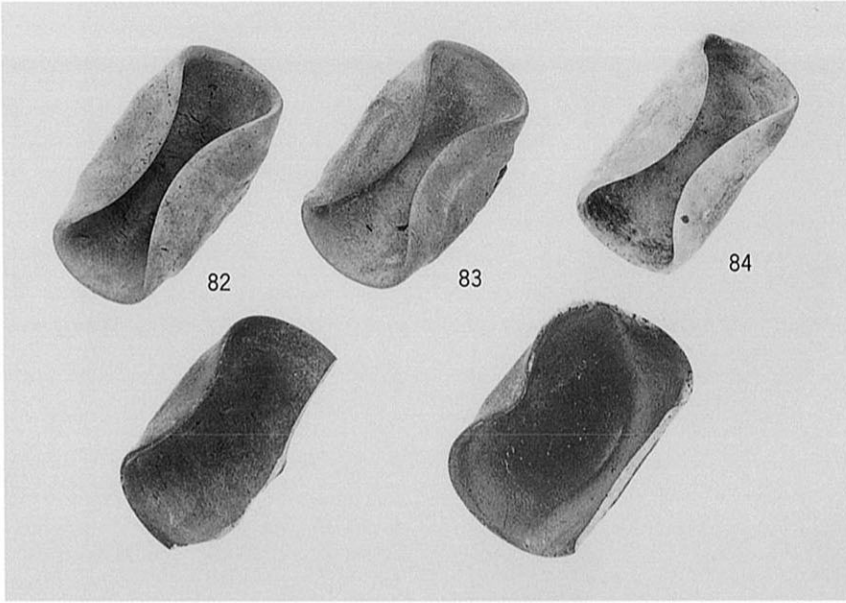


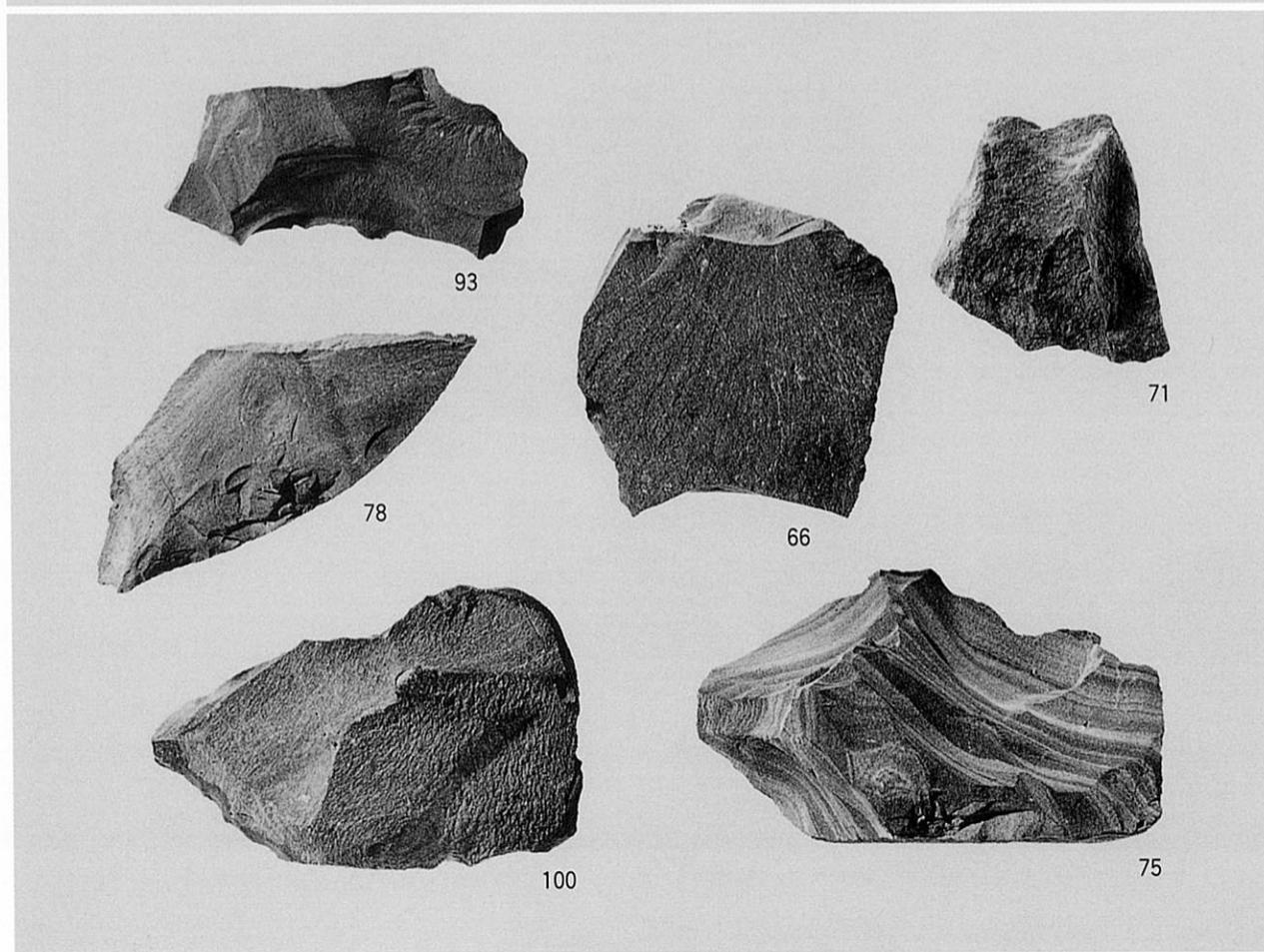
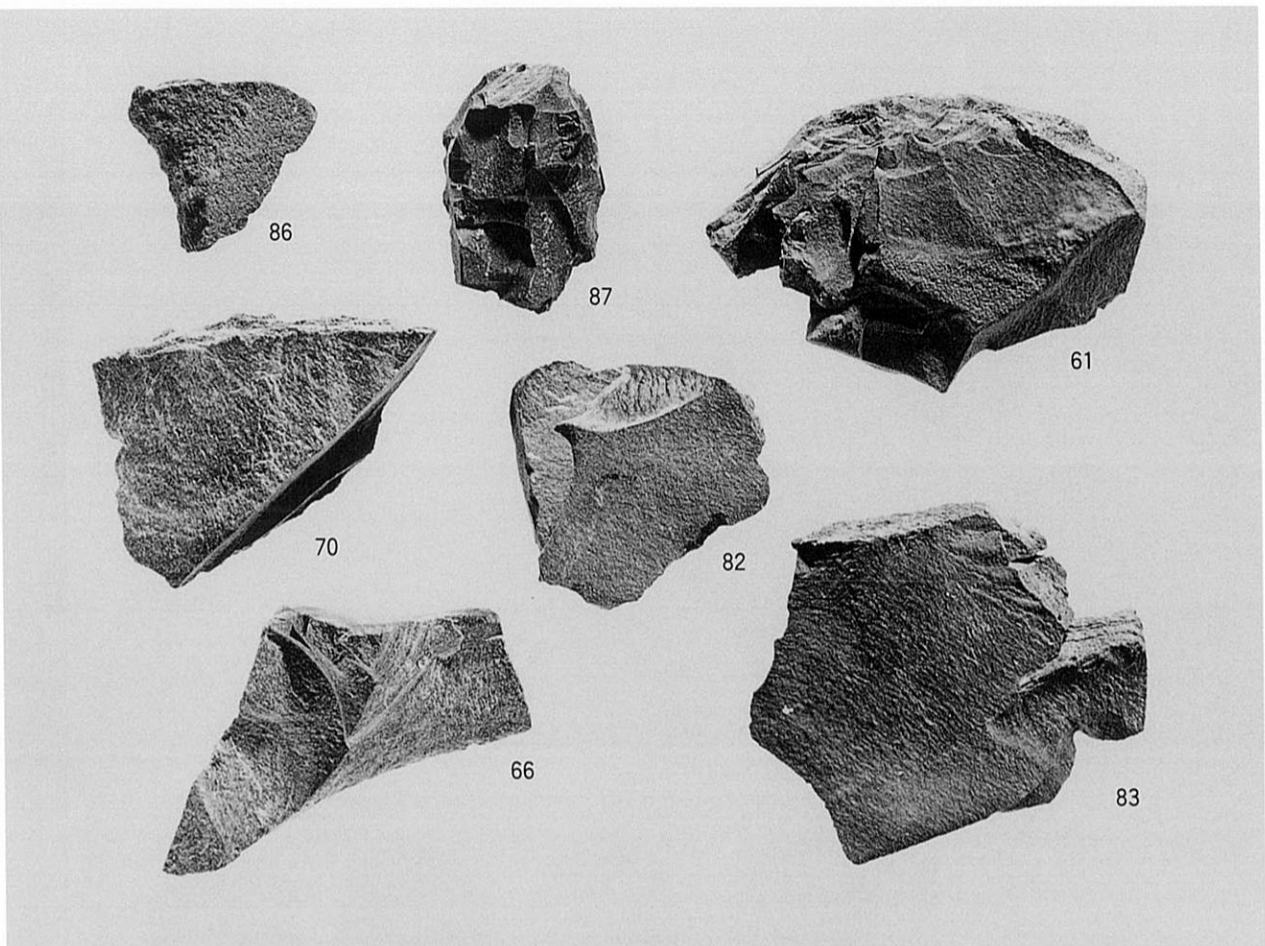
17











No. は分析番号

報 告 書 抄 録

ふりがな	なかのやしろ
書名	中之社遺跡他発掘調査報告書
副書名	主要地方道岸和田・牛滝山・貝塚線建設に伴う発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	財団法人 大阪府文化財調査研究センター調査報告書
シリーズ番号	第39集
編著者名	
編集機関	財団法人 大阪府文化財調査研究センター
所在地	〒536-0016 大阪市城東区蒲生2-11-3 小森ビル4F 06-66934-6651
発行年月日	平成11年(1999)2月26日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
みやのあと 宮の後遺跡	おおさか 府 岸和田市 つがわちょう 積川町	272027		34°	135°	その1 1997年4月8日 ～6月30日	3100m ²	道路 (府道磯之上 山直線)建設 に伴う調査
なかのやしろ 中之社遺跡				34°	135°			
	25' 26"	26' 34"	590m ²					

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
宮の後遺跡	集落	平安～鎌倉 縄文・弥生	掘立柱建物 溝・土坑	土師器・黒色土器・須恵器・瓦器・陶磁器・ 瓦 石器
中之社遺跡	集落	平安～鎌倉 縄文・弥生	掘立柱建物 溝・土坑・流路 土坑	土師器・黒色土器・須恵器・瓦器・陶磁器・ 銭貨 石器・縄文土器・弥生土器

(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第39集

中之社遺跡他発掘調査報告書

主要地方道路岸和田・牛滝山・貝塚線建設に伴う発掘調査報告書

平成11年2月26日

(1999年)

編集・発行 (財)大阪府文化財調査研究センター

〒536-0016 大阪市城東区蒲生2丁目11番3号

小森ビル4F

TEL 06-6934-6651 FAX 06-6934-7029

印刷 株式会社 中島弘文堂印刷所